
ドレッドノートへようこそ

司書

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドレッドノートへようこそ

【Nコード】

N0199I

【作者名】

司書

【あらすじ】

魔法学園の気弱な生徒エルナは研修生として弱小艦ドレッドノートに配属されてしまう。

剣と魔法と愉快な仲間たちが繰り広げる熱血バトルファンタジーの世界へ、ようこそ！

1:ドレッドノートへようこそ(前書き)

この物語はフィクションであり、実在の人物、場所、建造物及び団体とは一切関係ありません。

この作品の執筆においてはいかなる動物も傷つけていません。

The story, all names, characters and incidents portrayed in this production are fictitious. No identification with actual people, places, buildings and products is intended or should be inferred.

No animal was harmed during the writing of this novel.

1：ドレッドノートへようこそ

階上にひしめく黒い皮膚の狂犬。魔獣と呼ばれる存在は円環状の宇宙の中心にある昏き深淵から来たとされているが、正確な事は誰にもわかっていない。確かなのは、その魔法生物が体内に核と呼ばれる機関を持ち、それを破壊された魔獣の体が溶けて跡形も無く消え去るという事だけ。

ギルドと呼ばれる組織の発足は、その魔獣の掃討が一つの目的として挙げられる。魔法学校で訓練・教育を受けた生徒は長期休暇を利用して、研修生としてギルドへ赴く。

ぱっちりした目で階下から人ならざる者達を見上げるエルナも、その研修生の一人だった。十六歳にしては小柄な体躯で、白く華奢な腕も背負った身の丈ほどもある大剣とは不釣り合い。髪は肩より上までの長さでまっすぐサラサラ、保護欲をかきたてる丸めの顔とおよそ美少女と言って差し支えない容姿だ。

魔法学校の古めかしいコンクリートの階段を駆け上がりながら、背中の大剣の柄を掴んで引き抜き、そのまま先頭にいる相手めがけて抜刀した勢いに任せて振り下ろす。

「はあッ！」

斬り伏せられた黒い皮膚の狂犬が、断末魔を上げる間もなくその場に溶けて消える。

「ちよつと数が多いなあ……」

古い造りの校舎の二階の廊下を埋め尽くさんとひしめく黒い獣の群れを前にして、エルナは気持ちを落ち着けるように深く息をつく。すぐ後から階段を上がってきた、ベージュ色の大きな三角襟のついたセーラー服姿の少女が、長い棒の先端に球体の駆動部がくっついた機械仕掛けの魔法使いの杖——LP——ルーニック・プロセスを構えて不敵に笑った。

「吹き飛ばすよ」

「詠唱の時間が稼げれば良いよね」

「二十秒もあれば十分!」

短いやり取りのすぐ後、上段に振り上げた剣を集団の先頭にいた狂犬の頭に向かって振り下ろす。強烈な衝撃で床が抉れる。重量のある大剣の振り下ろしをもろに食らった狂犬は溶けて消え、それに逆上した他の連中が集まって来る。

そのタイミングも予測済みだ。刃が黒い肉を切り裂く。エルナが大きく横薙ぎに振るった剣は狂犬四匹分のアゴを上下に分断した。

「はあああああッ!」

大剣の切っ先をまっすぐ前に向けて、まだ生き残っている狂犬の集団に突っ込む。黒い肉塊を串刺しにしながら、気合の声を上げて突き進む。

集団で狩りをする狂犬達も、その高い声に過敏に反応してしまう。こうして注意をひきつけているうちに、杖を構えた少女の詠唱が完了した。

「終わったよ!」

その声を合図に横へ跳び、素早く教室のドアを開けてその中に入る。追いかけてきた黒い狂犬を蹴飛ばして廊下へ追いやり、来るべき衝撃に備えて後退。

機械仕掛けの魔導杖の駆動部が高速回転して、金属がこすれるような耳鳴りが音程を上げていく。掲げた杖の先端を取り巻くように円形の淡い緑の光がルーン文字を刻み、魔法陣を組み上げる。

その駆動音が臨界を超えたと同時に、杖を持った少女が発動する魔法の名を叫んだ。

「ルーニック・バーストオ!」

轟音。魔法学校の廊下を、淡い緑の光の粒子が蹂躞する。

エルナは持っていた大剣を取り落して、尻餅をついた。予想していた以上に派手な魔法だった。

光の粒子は圧倒的な量と質で黒い狂犬達を吹き飛ばしていく。それと、ついでに教室のドアやら窓ガラスも片っ端から粉々に砕いていつてしまう。

「や、やりすぎだよ……」

エルナが机の下にもぐって小さくなりながらそうつぶやく涙声さえもかき消すように、光の粒子熱線は収まらない。

勿論、エルナも校舎を多少傷つけることくらいは覚悟していた。だが、ここまで徹底的にやってしまうとは予想していなかった。

ジュウ、という穏やかでない音と共に煙を吐きながら、二階の廊下を焼きつくした光線が収まった。恐る恐る、廊下に顔を出してみる。焦げ付いた廊下には、黒い狂犬は一匹どころか、指一本さえも残らずに消え去っていた。

「あはは、ちよつとやりすぎちゃった」

お気楽に笑う魔法少女。彼女はミーティアという名前で、エルナとは十年ぶりに再開を果たした幼馴染……なのだが、

「うわあ……」

ちよつとどころではなかった。光の粒子熱線が通った道の先を見ると、その先に存在したであろう壁が綺麗さっぱり消えてなくなっている。

幼い頃には勿論、魔法なんて使えなかったのだが、この十年の間に彼女にいったい何があったというのだろう。

「よつし、あとは親玉だけだね」

「これ、いいのかなあ……」

フロア一つを丸ごと壊滅状態にさせた幼馴染と一緒に、エルナは屋上を目指した。

屋上に先ほどの黒い狂犬達の親玉がいる。つい先ほど、クレレが探查系の魔法で調べてくれたため、この情報は信頼できるらしい。

らしい、と曖昧な表現なのは、エルナとミーティアがギルドに配属されたばかりの研修生で、探查系の魔法を見るのが初めてだったからである。

連邦領第四区画、中央魔法学校の校舎に入り込んだ魔獣の掃討が今回の任務だ。エルナ、ミーティアを含めたギルド『ドレッドノート』のメンバー七人全員が参加しており、しかし屋上へ向かうのは

ここにいる研修生二人だけだった。

「はあ、不安だなあ」

「大丈夫大丈夫。私がついてるよ」

「それが不安なの」

エルナは任務の成否を特に心配してはいなかった。先ほどミーティアが放ったおかしな威力の魔法やそれによって生じた惨状を見せられれば、敵の親玉だって一発で降伏してくれるに違いない。

それよりも、初等部の頃から通ったこの学校の校舎が無事なまま任務を終えられるかが心配だった。単純に思い出の詰まった建物が無残な姿になっていくのは悲しいし、何より依頼主である学校側から文句をつけられたりしないかどうかも不安だ。

研修の取り消しや退学なんて話になりでもしたら、ここまでの努力が水泡に帰してしまふ。あまり深く考えてしまいたくなくて、エルナは自然と早足になった。

屋上のドアを開ける。ギイ、と甲高い音で悲鳴を挙げながら両開きの扉が開いて、二人は青空の下に出た。緑のフェンスに囲まれた穏やかな空間に似つかわしくない、黒い獣が獲物に向かってまさに飛びかからんとしていた。

エルナの目つきが変わった。再び大剣を振り抜いて疾駆、黒いたてがみを持つ巨大な獅子の頭めがけて、振り下ろす。その一撃は獅子の目を潰すにとどまったが、痛みに悶え苦しみながら獅子は後退。エルナは巻き込まれた民間人と思われる白い服の女性の前に立った。

「大丈夫ですか？」

「心配、ない……」

白い服の脇腹が赤く染まっており、彼女が危険な状態である事を示している。

「ボクがあいつを押さえておくから、その間にミーティアはその人を安全なところに！」

「おっけー」

黒い獅子の動きが止まったのはほんの一時的なものだった。すぐに立ち上がり、自分の片目を潰した敵を睨みつける。これまでのヘルハウンドとはワケが違う。もっと巨大で、危険な匂いがした。

巨大な口から覗く鋭い牙と、大樹の幹ほどもある太い腕。口から滴る唾液は校舎の屋上のタイルを少しずつ溶かして、白煙を上げている。この黒い獅子は見た目だけでも、足をすくませるのに十分な威圧感を持っていた。

だが、ここで怯んでしまうわけにはいかない。ミーティアは強烈な破壊系の魔法を放つ事ができるが、先ほどのようにある程度の詠唱が必要となる。今、この場であの怪物を抑えていられるのはエルナだけだ。

幸い、先ほどのヘルハウンド達のように集団で襲いかかって来る相手ではない。たったの一匹。それさえ足止めできれば、勝機はある。エルナは大剣を肩に担ぐようにして構えた。

エルナ自身の身の丈程もあるこの大剣の強みは、振り下ろしの威力と迫力にある。直撃すれば肉を叩きつぶし、骨まで砕く程の破壊力を持ったため、相手を威圧する迫力も相当なものだ。

その威圧は、敵にエルナを危険な存在だと認識させる。つまり、狙いを後衛から反らす事ができるのだ。

「はあッ！」

黒い獅子と小柄な大剣の使い手、動いたのは同時だった。

獅子は巨体に似合わぬ俊敏さで体をしならせ、目の前に立ちふさがる敵に跳びかかる。

エルナが剣を振り下ろしたタイミングは、獅子が飛び上がったすぐだった。刃は空を切って足元にある屋上のタイルに激突し、破片を打ち上げる。目くらましにもならないほどの打ち上げだが、それでも良い。エルナの狙いはこの音だ。

重たい剣がタイルを砕く轟音は、猛獣を刺激するには十分すぎた。一瞬、獅子の筋肉が硬直したのを、エルナは見逃さない。斜め前方に転がって跳びかかる爪の一撃を回避し、獅子の腕と足の間を潜り

抜ける。

すり抜けざまに一閃。軽く撫でる程度の弱い衝撃だが、それでも獅子がエルナを標的として認識したのは間違いない。敵を眼前にとらえるため、獅子の巨体が振り向こうとする。

その隙にエルナはポケットのの中に入れてあった小さな円形のチップを取り出し、大剣の柄にある窪みにセットする。LP独特の駆動音と同時に、青いルーンの文字が刃を取り巻くように走り、身体と武具の性能を強化するための魔法陣を形成する。

増幅回路。魔術の力を封じ込めたそのチップをLPの駆動部にセットする事で、魔力を持たない人間でも簡単な魔術を扱う事ができたり、魔術の威力を強化する事ができる。

詠唱が必要で無く発動までのタイムラグも無いが、持続時間も長くは無い。獅子が完全に振り向く頃には、エルナはすでに相手の巨体に跳びかかるように跳躍し、剣を振り上げていた。

再び炸裂する強烈な振り下ろし。振り向きざまに腕を一本斬り落とされた獅子が、激痛と怒りに激しく咆哮し、残された腕をエルナに向かって振り下ろす。だが、遅い。

エルナはもう一度前に跳んで、獅子の背後に回る。エルナが剣を斜めに振り上げて、金属同士が激突するような甲高い音が響いた。

「う、ああ……ッ！」

肩に走る激痛。怒りと痛みによって全身の感覚が鋭くなってしまうているのか、恐るべき速さで旋回した獅子はその鋭利な牙でエルナの振り上げを受け止めた。

重力というものに反して行われる振り上げでは、振り下ろしに比べて威力が落ちてしまう。獅子が剣ごとエルナを砕かんと体重をかけ、加えて、先ほど使用した身体強化の魔法の反動がエルナの細い肩を攻め立てた。

想像以上の重さに、全身が悲鳴を上げる。踏みしめた足が、タイルを砕いてめり込んでいく。

けれど、ここで負けたくはない。歯を食いしばって、必死で耐え

る。

普段は弱気なエルナがここまで諦めないのは、剣に刻まれた名前のおかげだった。

自分に名前をつけてくれた人であり、剣を託してくれた人でもあるその相手に対する憧憬が、エルナを駆り立てた。

こんなところで負けてしまったら、その人を探す夢が潰えてしまう。いつか会って話をするという、それだけの願いを胸にここまで頑張ってきたのだ。そして、これからも夢を追い続ける。そうするだけの決意が、剣を握る手に力を与えてくれた。

渾身の力を込めて、押し返す。肩にかかっていた重圧から解き放たれ、喜んだのもつかの間、

「がっ……！」

次の瞬間、エルナは宙を舞った。牙による攻撃に気を取られすぎて、獅子に片腕が残されていた事を忘れてしまっていた。

その腕に薙がれて、エルナは背中からフェンスに激突し、ずるずると落ちて座り込む形になってしまう。

肩には負荷がかかりすぎて限界が来ている。足だって、もう一回跳ぶのが精一杯。肘から先は痙攣してしまっていて、うまく剣を握れない。

じりじりと、黒いたてがみの獅子が迫ってきた。先ほど腕を失い、そしてエルナを吹き飛ばした事で体力が限界に達しているのだろう。のろのろと体を引きずりながら、しかし自分の腕を奪った仇に確実にトドメを刺すために歩いてくる。

やがてエルナが影に覆われ、獅子が大きな口を開いた。

振り下ろされる頭。噛みつきというよりは頭突きにも近いその一撃が、屋上のタイルを砕いて打ち上げた。

「あ、がっ……」

最後の力を振り絞って跳躍したエルナは、ボロボロになった屋上を転がった。

剣を杖にして立ち上がろうとするが、足が震えてしまつてうまく

立てなかった。

振り向いた獅子の片目に見据えられ、最悪の結末を覚悟しかけた瞬間だった。

「ルーニック・バーストオ！」

先ほど、二階の廊下を焼きつくしたものと同じ光の激流が黒いたてがみの獅子の全身を飲み込んだ。相変わらず少しやりすぎな威力で、その光の通り道だけ綺麗に屋上の床が抜けて下の階が見えるようになってしまったのだが。

「た、助かったあ……」

駆け付けてくれたミーティアのおかげで任務は終了した。それを理解して、エルナは背中から屋上のタイルに倒れ込んだ。とても鈍い音がした。

「い、痛い」

倒れる時に勢いあまって頭を打ってしまったのだ。

ギルド『ドレッドノート』の研修生としての初仕事は、こうして終わりを迎えた。

ここはどこだろう。エルナはまずそう思った。気がつくと、見慣れない部屋にいた。

廊下に出てから、すぐにここが宇宙航行艦ドレッドノートの艦内なのだとわかった。淡い青の床や壁が綺麗に磨かれている。

全身の痛みはすでになく、いたって快調だった。試しに肩を回してみるも、まったく問題はない。

校舎の屋上で、ミーティアから仕事が終わった旨の話を聞いた後、エルナは気を失った。結構な無茶をやったのかもしれない。短時間とは言え、あんな大きな化け物を一人で相手にしていたのだ。

自分が無事であることに感謝して、とりあえずブリッチを目指すことにした。疲労していたとは言え、勝手に気絶してしまったのは

迷惑だったに違いない。

（はあ、怒られるのかなあ……）

憂鬱になりながらブリッジへ向かう途中、奇妙な少女が立っていた。

（やっぱりこの子、ちょっと何とかしないとイケないかも……）

「迷っちゃったねー。どっちだと思う？ 右？ 左？」

エルナと同じ学校のセーラー服を着た、ドレッドノートの研修生ミーティア。彼女が話しかけている先に、人はいない。手に持った杖に向かって話しかけている。

杖は先端が丸くなっていて、魔術師が使う術式構成用のルーニック・プロセッサ、通称LPであることがすぐにわかった。わかったのだが、LPは普通、話さない。

「うーん、どうしたのかな？ お腹すいて喋れない？」

エルナは心の底から不安になった。ぐらぐらと杖を揺さぶるこの子は本当に大丈夫だろうか。

「よし、決めた。君が倒れたほうに行こう！」

「もしもーし……」

声をかけても、ちっとも聞こえていないらしい。杖を分かれ道の真ん中に立てて、彼女はゆっくりと手を離れた。

杖は倒れない。絶妙なバランスで立っている。

「倒れるよー！」

ミーティアは頭を抱えて叫んだ。エルナもできることならそうしたかった。

十年前も確かに変な子だった気はするのだが、ここまで来ると少々エキセントリックすぎる。

ミーティアはがっくりと肩を落として、「ねえ答えてよー。右と左どっちー？」とか言いながら杖を揺さぶり始めた。

（どうしよう。出来る限り早いうちに何とかしてあげないとこの子まずいかも）

「ん？ 何？ 右でも左でもなくて後ろ？」

髪の毛を肩のあたりで切り揃えた少女が振り向いた。ようやく、後ろに誰がいる事に気がついたらしい。

「あれ？ エルナじゃん」

ミーティアは十年前、六歳の時にエンシスハイム卿に引き取られてから、まったく音沙汰のなかった幼馴染だ。

当時は二人とも同じくらいの背丈だったのに、今ではミーティアのほうが幾分か背が高い。エルナは十六歳としてはかなり小柄な部類に入る。また、顔もやや幼さが残るため、エルナは年相応に見られないこともある。

「エルナ。右と左、どっちだと思う？」

「わからないよ」

任務前に十年ぶりの再会を果たした時もこんな感じだった気がする。

杖に話しかけていたところを見ていたというのは、言わないでいたほうがよさそうだった。

とりあえず分かれ道の右と左の通路の奥をよく見てみる。どちらも全く変わらない景色だった。誰がこの船をデザインしたのだろう。きつと、迷宮が好きな人に違いないと、エルナは思った。

ブリッヂまでたどり着くにはどうしたらいいのかわからない。船も見かけよりずいぶんと内装が広々としている。下手に適当な道へ進むと、もう迷ったまま永遠に抜け出せなくなるかもしれない。

でも、こんなところでじっとしているわけにはいかない。意を決してどちらか適当な方向に進むことを提案しようとした時、左側の通路の奥のドアが開いた。

「あつ、人だ……！」

まるで無人島で漂流生活を続けたような気分だった。時間にすれば八分と四十三秒ほどしか経っていないのに、それが何週間にも感じられた。

とにかく、人がこちらに向かって歩いてくることに安堵した。背の高い痩せた青年で、白いシャツにジーンズと言うラフな格好だ。

「あのっ」

「あー？」

ずいぶんと気の抜けた、しかし低く威圧するような声に、エルナは怯んでしまった。このドレッドノートという船の評判は、確かに年配の先生からはあまり良くなかったということをお願い出した。つまり、船の中の治安があまりよろしくないのかもしれない。

「ブリッヂに行きたいんですけど、どっち行ったらいいですか？」

物怖じしない性格のミーティアがいてくれて助かったと思った。青年は声すら出さずに右手の人差し指だけ立てて前方を指差した。彼がこれから向かう方向と同じ。

「あ、ありがとうございます……」

エルナがお礼を言っていると、青年はそのままゆっくりと歩き始めた。ついてこいという事だろうか。

研修期間は二ヶ月。休みの期間をいっぱい使ったの研修だが、あの青年とうまくやっていけるものだろうか。

（怖いなあ。艦長とかもあいう人なのかなあ）

エルナは弱気だ。今回に限ったことではない。とにかく、このエルナという生き物は身体だけでなく度胸も小さい。

普段の生活だと犬に吼えられるだけでも飛び上がってしまうし、先生に頼まれた雑用なんかは断ることができない。

仲の良い友人いわく、「パシリにされないのが不思議な性格」らしいのだが、そういった類のイジメを全くと言っていいほど受けなかったのは確かに幸運だと思った。

その理由が、背中に背負った大剣型のＬＰを使った豪快な戦闘スタイルが原因であることを、エルナ自身は知らないのだが。

横にスライドして開くそのドアの奥には、ドレッドノートの乗組員が全員揃っていた。

「お、エルナちゃん起きた？ おはよう」

入口のまっすぐ前、艦長席から艦長の声が飛んでくる。艦長の声

で、その全員が入口に立っているエルナに目を向けた。

ブリッヂの奥から一人目は、先ほどの青年よりも背の高い青年。すらりと伸びた体系は共通しているが、こちらのほうが線が細く、目も切れ長に見える。

袖に金の線状の刺繍が入った紺色のダブルジャケットを着こなして長い足を組んでいる。コーヒーの香りと味を楽しむ姿はなんだかとても優雅に見えた。

その少し手前には、特徴的な服装の少女が静かに座っていた。袖が広く、腰より上でキュツと締められた長いスカート。和装とか、和服と呼ばれる服だ。首の後ろで結わえられた長い黒髪と凜とした佇まいが、彼女の清潔感を印象付ける。

隣では白い制服と白いゆったりした帽子の背の低い少女が、会議用の長テーブルの上にスケッチブックを広げて何か描いていた。彼女が探查系魔術の使い手、クレレだ。エルナは十六歳としては小柄なほうだから、それよりも小さいとなると相当小柄な部類に入る。彼女らと対角線上に、エルナ達の前を歩いていたジーンズの青年が座った。

艦長が立ち上がって、エルナに向かって言った。

「それじゃあ改めて、ドレッドノートへようこそ。女の子が二人も増えるのは嬉しいわ」

それから自己紹介が始まる流れになるはずだったが、エルナはそれを遮った。遮らなければならなかった。

「あ、あの……すみません。ボク、こんなでも、男です……！」

確かに、平均よりも声は高いし、背も低い。体つきは華奢で性格は女々しいし、度胸だつてない。男らしさというものがまるで欠け

た顔であることも自覚している。

そして、艦長に勘違いされている決定的理由は、おそらくミーティアが「エルナ」という呼び方を教えてしまったからだろう。昔はあれほど女の子っぽいから嫌だと抗議したのに、しつこいのでミーティアに限ってその呼び名を認めてしまっていたのが仇になった。しかった。

「えっ？」

「えっ？」

「えっ？」

「えっ？」

「えっ？」

「えっ？」

最初から順に、艦長、コーヒー青年、和服少女、クレレ、ジーンズ青年、ミーティアの声である。

「…………えっ？」

逆にエルナが聞き返してしまうくらいに、全員の反応が同じだった。

「と、というか、ミーティアまで何で否定してくれないのさ」

「いや、ほら、ノリで」

自己紹介で、エルレナード・フィンブルツールは一つ大きな誤解を解かなければならなくなった。

2：知られたくない傷痕

宇宙は連邦政府によって、第一区画から第四区画までの四つに分割統治されている。

第一区画は最も古い場所で、人類が生まれた星「地球」を含んでいる。その中でも開発が進んでいない区域も存在し、人口密度が最も高いこと、また、政治的、経済的に権力を持つ者が集まりやすいことなどから、犯罪が起こる確率も高い。

逆に、第四区画は最も新しい区画であり、テラ・フォーミングを終えていない未開惑星が多いこと、権力を持つ者はおろか、一般人でさえここに移住したいとは思わないことなどから、犯罪の起こる件数は非常に少ない。

連邦政府も十分な広さを持つ第一区画から第三区画までの領地の治安を維持するのに手一杯で、第四区画には公認のギルドをあまり駐在させたがらないし、ギルド側も報酬の高い第一区画、第二区画に行ってしまうため、結果として第四区画にはギルドがほとんど残らない。

この時期になれば魔法学校の優秀な生徒を引き抜くためにわざわざ外部からこの区画までやってくるギルドもあるのだが、それにしただって研修生としてギルドに招き入れてそのまま元の区画にとんぼ返りしてしまう。

第四区画中央魔法学園（中央と言っても、第四区画に学園は一つしか存在しない）の校舎が、いまだに古い様式で作られていたのはそれが原因でもある。

そんなわけで、連邦領第四区画は実はとても平和な場所だ。平和な場所に、ギルドの仕事はほとんどない。

せいぜいが境界区画の中の更に境界の惑星への物資の配達くらいのもので、それ以外は暇を持て余すことになる。

旧式の弱小艦ドレッドノートは、第四区画から出ることができない。したがって、彼らは今、とても暇だ。

エルレナード・フィンブルツールはブリッジを見渡した。ドレッドノートの乗組員は、研修生として派遣された彼とミーティアを含めて七名。そのうち、今ブリッジに居るのは四名だ。

会議用の長テーブルの端で、金髪碧眼の白い制服の小さい少女、クレレがスケッチブックに何か描いている。隣に座ってそれを覗き込んで居るのは、肩まで髪を伸ばした、エルナと同じ学園の制服を着た少女、研修生のミーティアだ。

クレレは見たところ、ミーティアよりも年下である。ギルドで正式に働くことができるのは十三歳からで、普通、高等魔法教育を終えるまで——つまり、十八歳になるまで——ギルドに所属することはない。

それでも、稀に例外というものが存在する。魔術や武術に関して特別な家柄で訓練を受けていた者だったり、その他特別な事情がある場合には十三歳からギルドに所属することができる。

クレレもその類だった。本人に聞いたところ、まだ彼女は十四歳だという。義務教育を受けている年齢だが、本人の希望で通信教育で済ませ、このギルドの仕事と両立させているらしい。

エルナ、ミーティア、クレレと、あと一人、この部屋には人がいる。元々操縦用であった席に座って、長い足を組みながらおいしそうにコーヒ―を飲む長身の青年だ。

ドレッドノート副艦長ノクス・アージエンタイム。色白で切れ長の目をしていて、紺を基調とした制服をしっかりと着こなしている。同性のエルナが見とれてしまうくらいの美青年。

「あ、あのっ……」

ミーティアとクレレはスケッチブックの世界に没頭しているようだし、何より女の子同士の世界に入り込んでしまうのは、誤解を解いた後とは言え、何だか抵抗があった。

したがって、エルナが話す相手は必然的にノクス副艦長になる。

柔らかな物腰で、ノクスは答えた。

「何かな？」

「えっと、この船って、いつもこんな感じなんですか？」

エルナの言うこんな感じ、とは、仕事がなくて各々が好き勝手に行動している現状を指す。こんな疑問が生まれたのは、ギルドというものがもつと忙しくあちこち飛び回って仕事をするものだという先入観があったからだ。

エルナの気が短いわけではない。最初の仕事からかれこれ一週間は何もない日々が続いているのだ。

「そうだね。この前みたいな仕事が入るのは珍しいよ。月に一つか二つくらいだ。学校じゃ暇のつぶし方は教わらないだろうから、戸惑うのも無理はないと思うけどね」

答えてから、ノクスはまたおいしそうにコーヒーを飲み始めた。

ブリッジのドアが開いて、ノクスと同じ制服を着た女性が入ってきた。独特の形状をした、艦長の帽子をかぶっている。

「お仕事お疲れ様です！ 資料運んでおきますね」

そう言ってすっと立ち上がったのはクレレだ。

「あー、あとで良いよー」

「いいえ！ 玲菜れいなさんのお部屋は後回しにすると大変なことになっちゃうのです」

本川 玲菜もとかわ。ドレッドノートの艦長であり、司令塔だ。今時、漢字を使う名前は珍しい。

艦長は資料整理を終えて戻ってきたところで、窮屈な仕事から解放されたことを実感するように大きく伸びをした。整理後の資料は誰が運んでも良いのだが、クレレが進んでその雑用を引き受けてしまっている状況のようだった。

クレレは長い金髪と白いマントをはためかせながら、パタパタと走っていく。資料を運ぶ、という仕事がどんなものかはわからないが、エルナは立ち上がった。そうしなひとなんだかまずいことになるような気がしていた。

「ボクも手伝うよ」

この間運んでいた資料の量を考えると、クレレ一人に任せておいたのではまた同じ惨劇を繰り返しかねないからだ。視界が埋まるまで積み上げた紙束を一人で運ぼうとするのは流石に無茶だと、誰か止めないものなのだろうか。

今回も、「お部屋が大変なことになっちゃう」レベルの量なのだろうから、一人よりは二人のほうがずっと良いだろう。

「す、すけだちむようなのです！」

「こらこら、男の娘の優しさには甘えておきなさい」

艦長に諭されると、クレレは大人しくそれに従った。

（なんだろう、なんでもない発言のはずなのに、何か引かかる…）

艦長の言葉に少しだけ違和感を感じたエルナだったが、すぐにクレレと一緒に艦長室へ向かうことになった。

資料は紙媒体である。しかし、再利用可能な特殊素材で作られており、魔術によるコーティングが施されている。

白紙という状態は、ただの紙に一枚のコーティングが施された状態で、そのコーティング膜を削ることによって字や図を描く。

書いた上から再び別の種類のコーティングを施すことで、書かれた内容が正しく保存される仕組みになっている。

勿論、紙というものは無制限に存在するわけではないから、当然再利用しなければならぬ。役所などに設置されたデリーターと呼ばれる機械を通すことで、コーティング状態が元の白紙状態に戻され、その紙が再利用できるようになる。

デリーターの使い方は極めて簡単。白紙に戻したい紙の束を四角柱のボックスに入れて、スイッチを一つ押すだけだ。

このように簡単に再利用可能なため、再利用されずに燃やされる

のは機密性の極めて高い文書くらいである。

クレレとエルナは、二人とも紙の山を抱えて役所に来ていた。下から抱え込むように持ちあげ、上からはアゴで押さえるなりしないと簡単に崩れてしまいそうな量だ。

二人で分割してもこれなのだから、クレレはいつたいどうやって運ぶつもりだったのだろう。重量はある程度魔術で軽減できるとは言え、一人で持っていたら前方が全く見えない。手伝いに来て正解だと思った。

二人が運んでいる資料は、艦長が目を通した依頼書だ。これだけ依頼があれば暇ということもないような気もするのだが、その疑問にはクレレが答えてくれた。

「平和な第四区画ですから、まっとうなお仕事はほとんどありません。民間からの依頼は「うちのポチ知りませんか」とか、「幻の内音源 YMF700 系を探してくれ」とか言う無茶な注文ばかりなのです」

探し物の依頼というものは非常に多い。依頼の大部分を占めると言っても過言ではない。

ただし、ポチなどと言うありふれた名前の犬を一意的に見つけるだとか、幻の音源を手に入れるのは、実質的に不可能だ。存在するかもわからないもののために、ギルドは仕事をしない。

そんな依頼も、書類として艦長が処理することになる。勿論、全てに対して返事をするのはギルドの仕事ではないが、可能であるかどうか判断して分別し、デリーターに突っ込むところまではギルドの仕事になる。

エルナがデリーターの戸を開けて、クレレと一緒に山のような書類をすべて入れる。一つボタンを押せば、全ての依頼書が処理される。

「ギルドのお仕事って、結構地味なんだね」

「そうですね。派手なお仕事は第四区画ではほとんどありませんから」

エルナは少し寂しくなったが、それを顔に出してはいけなくもわかっていた。この仕事だって、誰かの助けになるものだし、クレレはこの仕事に誇りを持っているはずだ。自分よりも年下の子が頑張っている仕事を、地味だからと言って否定することは許されない。帰りに、クレレは役所に備付のデスクトップ端末を覗き込んだ。新しい依頼がないかどうか確かめるための習慣づけられた行為らしい。

民間の項目では先ほども言ったように実現可能性の低い依頼ばかりなので、政府関連機関からの依頼をチェックする。

「い、依頼です！」

「本当！？」

こんな具合に二人が驚いてしまうくらいに、第四区画内で政府関連機関からの依頼が飛び込んでくることは珍しい。

簡潔で必要最低限のことだけが書かれた依頼書をプリントアウトして、二人は駆け足でドレッドノートに戻ることにした。

依頼書 惑星カリダ第三遺跡内部および近辺の安全確保

依頼者：連邦政府特殊調査部

概要

惑星カリダ第三遺跡内部、近辺に生息する魔獣の掃討及び召喚核の除去

詳細情報

惑星カリダ（宇宙座標 4 - 0 A F B - 6 6 B C - D 8 A A）

第三遺跡（カリダ内座標 N 5 9 W 1 0）

まるでサウナのように、蒸すような室温。汗で張り付く着物が鬱陶しくもなるが、今はこれで良い。

戦闘においては、あらゆる状況に対応しなければならない。どんなに劣悪な状況下でも、冷静な思考と俊敏な動作を失ってはいけないのだ。

人工召喚核と呼ばれる丸い紫色の宝石のついた装置を操作して、訓練室内に魔獣を召喚する。

呼び出した魔獣と対峙する少女は、袖が広く、腰より上でキュツと締められた長いスカートをはいている。和装と呼ばれる、ある種の古流武術を嗜む者の正装だ。

腰の鞘に収まったカタナ型のLPの柄についている窪み、駆動装置に、小さく薄いチップをはめ込んだ。

腕が鋭利な刃になった人型の疑似生命体が向かってくる。少女は目を閉じて、構えを深くした。距離は視界からの情報がなくてわかる。むしろ、光という処理すべき情報が増えてしまったため、目は閉じていたほうが都合がいい。

無音。世界のすべてが切り離され、自らの剣と斬り捨てるべき敵以外のあらゆる存在を知覚しなくなる。

手に取るように、ゆっくりと向かってくる。実際の時間は二秒に満たないが、訓練された感覚ではその時間は十倍以上に感じる事ができる。

走りながらそれが刃となった腕を振り上げたことさえも、気配から読み取ることができる。残り三步、二歩、一歩。

（来たッ！）

刹那。甲高い金属音とともに振り下ろされた刃は高く弾かれ、振り抜かれたカタナの衝撃で向かってきた疑似生命体はよろめく。

よろめいたことにそいつが気付く前に、無数の斬撃が飛んだ。一秒に十を超える閃光の如きカタナの軌跡が、文字通り敵を微塵に刻む。

最後に袈裟掛けに斬り下ろしながら、その脇をすり抜けて背後に回る。振り返らずに、少女は納刀した。

斬り捨てた人工の魔獣は煙になって消え、少女は深く息をついた。長いこと息を止めていたような気がした。白柳しろやなぎ 千香ちかは額に浮き出た玉の汗を腕でぬぐった。

白柳は風戸かざとを源流とする剣の名家であり、千香はその技を受け継いでいる。十七歳と言う若さでほとんどすべての技を会得してしまったことは一族の中でも異例だが、彼女はその現状に満足してはいなかった。

まだ、足りない。追いかけているあの人の背中には、まだ届かない。ただ単に剣を極めるだけではないけないことにも、気付いているけれど、否、だからこそ、最低限の必要条件として、白柳の剣は奥義の裏までも極めなければならない。

とはいえ、先ほど放った奥義は体力を大きく消耗する。増幅回路チップも使って、自身が出せる最速の斬撃を放ったのだから、もう全身が熱くてこれ以上訓練を続けることはできない。

部屋に戻って、すぐにお風呂に入ろう。張り付く汗が鬱陶しくて仕方ない。千香は人工召喚核の電源を落として、訓練室を後にした。ドレッドノートには様々な施設が用意されている。各乗組員の部屋は勿論、千香がいるこの訓練室のほかに、魔導植物の栽培室、台所、洗濯・乾燥機室、さらには大浴場まで完備されている。宇宙航行艦でありながら、移動する住宅のようなものでもある。

千香は部屋から桶やタオル、替えの服などの入浴道具を持って大浴場に向かった。男女で入浴時間を分けてはいるが、昼間から大浴場を利用しようという人間は、ドレッドノートの乗組員には彼女を除いて他にいない。

訓練の疲れもあって、彼女はすぐに上下の着物を脱いで浴場の戸を開けた。

「どういうことなの」

「ボクが聞きたいよ……」

新たな依頼を艦長に伝えるべく、ブリッジに戻ってきたエルレナード・フィンブルツールは、ずぶぬれになった。

正確に言えば、クレレが置いて行ったスケッチブックを覗きこんで何かしているミーティアの近くに行った瞬間に、全身がずぶぬれになった。

近くにいたミーティアも全く同じで、頭から水をかぶって髪が肌に張り付いていた。

「ごめんなさいごめんなさい！」

必死で頭を下げて謝っているのは、原因の一つであるスケッチブックの持ち主クレレ。

どうも、スケッチブックに描かれていた内容はただの落書きではなかったらしく、水の属性を持つある種の魔法陣であつたらしい。

錬金・生成系の陣で、ある量の水を生成する術式で、その生成量は術者任せになっている。興味本位でミーティアがその魔法陣を發動させてしまったのだ。

結果として、ミーティアとエルナは頭から大量の水を被ってしまった。ミーティアは初日の仕事でもそうだったように、魔法の出力の加減を知らないようだった。

「クレレが謝ることないよ」

そう言つて、興味本位で自分をずぶぬれにした少女に抗議の目線を送る。当のミーティアはと言うと、

「あはは、やっちゃった」

あんまり反省の色が見えていなかった。

エルナはため息をついて、憂鬱な同僚から意識を反らすべく、話題を変える。

「でも、どうして水の生成陣なんか描いてたの？ これって、すごく制御が難しいと思うんだけど」

鍊金・生成系の術式は、総じて扱いが難しい。LPを用いて術式の構成を補助したとしても、物質の編成を組み替えるには他の術式の比にならない精密さが要求される。

単純な破壊系術式では力を流し込むだけで特に複雑な構成は必要ないのだが、それでさえも出力の加減ができないミーティアがこんな難しい術式を行使したのだから、先ほどの結果はある意味では当然とも言える。

「栽培室の皆さんのお水を交換する時期だったのです」

ドレッドノートには栽培室がある。そこでは果実が増幅回路の材料となりうる魔導植物の栽培を行っているのだ。

船を一通り案内してもらった時に、栽培の担当がクレレだという説明を受けたことを思い出した。

扱いの難しい鍊金・生成系の魔法陣をどうやって使うつもりだったのかは、クレレの代わりにその場にいた艦長が説明してくれた。

「クレレちゃんのペンタイプLPなら、術式構成の細かい制御は手の物だもんね」

クレレは照れくさそうに下を向いた。

ペンの形状をしたLPは、直接魔導文字や魔法陣を描くのに適している。したがって、魔法の細かな制御を行うにはうってつけの処理装置だ。

勿論、その特殊な形状のLPを操るためにはそれなりの技術が必要になる。艦長の先ほどの言葉は、言外にクレレの才能を評価しているものなのだ。

「それはそうと、シャワー浴びてきたら？ そのままじゃ風邪引くよ」

「あ、はい。ミーティア先に行ってきたよ」

「じゃあそうするね」

「覗くなよ」というお約束のジョークを置いて、ミーティアは浴場へ向かった。

白柳 千香は驚いていた。こんな時間に大浴場を利用している人間がいたことにもそうだが、それ以上に、その相手が素っ頓狂な声を上げて石鹸を踏み、そのまま後ろにスライドして湯船の中に背中から倒れ込んだことに驚いていた。

一糸まとわぬ姿を見られたからと言って、どうと言うことはない。相手は同性だ。いずれ一緒に風呂に入る機会があったらうし、この一週間なかったことのほうがむしろ不思議だ。

突然、戸を開けたことに驚かれたのはわかるが、どうして同性のミーティアがここまで驚いたのかわからない。それに、本来なら前を隠してしゃがみ込むくらいの恥じらいを見せるところを、ミーティアは逆に戸が開かれてすぐに振り向いた。

年の近い研修生の不可解な行動に疑問を抱きつつ、湯船の中でぶくぶくやっているミーティアを抱き起こす。

「大丈夫ですか？」

そう声をかける前に、ミーティアの背中に妙な凹凸があるのがわかった。自分より一つ年下なのに出るところが自分よりも出ているというところにはとりあえず目をつぶって、意識のないミーティアの背中を覗き込む。

「これを、隠してたんですか」

ミーティアの不可解な行動を全て説明するだけの材料が、そこにはあった。左の肩から右の肩にかけて、まっすぐに伸びる赤い傷痕。首のすぐ下から、腰の辺りまで、左右の肩をつなぐ傷と垂直に交わるもう一本の傷痕。

この背中に刻まれた十字傷が、全ての答えだ。よほど深い傷だったのだろう。これだけ大きな痕が残ってしまうのだから。

この傷は、耐えがたい苦痛をミーティアに与えてきたに違いない。この一週間、一緒に風呂に入る機会がなかったのは偶然ではない。ミーティアが避けていたのだ。

「う……」

目を覚ましたミーティアは、千香に抱きかかえられている状況を見て焦ったような悲しい顔をした。

「ひよっとして、見られた……？」

確認するように尋ねるミーティアに、千香はただ一言「はい」と答えた。

こういう場合、下手に誤魔化すより傷を知ってしまったことを正直に白状するほうが、お互いにとっては良い選択だ。

知ってしまったという事実と知られてしまったという事実。この二つが素直に受け入れられれば、互いの関係はめったなことがない限り悪化したりしない。

ミーティアが傷に関して悩みを抱えているのは確かだ。千香の返事を聞いた後の、今にも泣き出してしまいそうな表情を見ればわかった。

千香は静かに、穏やかな表情で待った。知られてしまったという事実に対して、答えを出すのはミーティア自身でなければならない。

「一つだけ、お願いなだけど」

ミーティアは、無理やりに笑顔を作って口を開いた。

「この傷のことは、誰にも言わないで欲しいの」

触れたら壊れそうな瞳で笑うミーティアに、千香はただ「わかりました」と答えた。

「さ、そろそろ上がらないと。エルナが待ちくたびれて入ってきてきやう」

「……何かあったんですか？」

こんな時間に浴場を利用するのは、これまで千香だけだった。この一週間もそうだったから、エルナもミーティアも昼間に風呂を使うことはないのだと思っていた。

「色々あって、びしょぬれになっちゃって」

同性のミーティアならともかく、エルナにまで裸を見られてしま

うわけにはいかない。二人は急いで汗を流して、浴場を後にした。

エルナが風呂から戻ると、ブリッジですぐに作戦会議が始まった。すでに船は元いた星を離れて、惑星カリダへ進路をとっている。

自動航行モードなので、目的地の座標を入力すればそれだけで後は着陸まで何もなくて良い。

会議用の長テーブルには乗組員が全員揃っていた。

議長席には当然、艦長である本川 玲菜が、その両隣では副艦長ノクス・アージエンタイムとクレレ・ヴェリタスが艦長の補佐をする。

新人研修生二人は、その更に隣だ。そのまた隣には、千香、ジーンズの青年と続いている。

「では、今回の目的地である惑星カリダの第三遺跡について説明するのです」

クレレが手元の資料を読みながら、説明を始めた。

惑星カリダは連邦領第四区画移住計画の際にテラ・フォーミングされ、しかし計画の凍結とともに忘れ去られた惑星である。

第四区画で三つ目の人工太陽の周りを二年周期で公転しており、気候は穏やかで昼夜の寒暖の差は激しくない。

カリダの第三遺跡は、連邦の特殊調査部によって三つ目に発見されたというだけで、まだ正式な命名ではない。自然の岩を風がくりぬいて作った非人工遺跡で、内部には自然召喚核の元となる魔王石という鉱石が大量に存在するという。

「今回の任務は遺跡内部及び近辺の安全確保。魔獣の原因は遺跡内部の召喚核だから、まずはそこから片付けないとね。

作戦メンバーは研修生のエルナちゃん、ミーティアちゃん、それから遺跡内部構造の探査のためにクレレちゃん。召喚核の無力化のために天ちゃん。戦闘員として千香ちゃん。

私とノッ君は何かあった時の為に待機。何か問題は？」

艦長は手早く作戦の概要を説明した。その決定に異を唱える者は誰もおらず、艦長は満足げにうなずいた。

エルレナードは、すでにエルナという呼び名を訂正することを諦めてしまっていた。

遺跡は草原の真ん中で、コケを生やして大きな口を開けていた。エルナと千香が先頭になって、警戒しながらエルナ、ミーティア、クレレ、天、千香の五人はその中に入っていく。

「あっ……」

クレレが声を上げる前に、後ろの入口が閉ざされた。五人を閉じ込めるように、遺跡の入口は外からの光を完全に遮断してしまった。「非人工遺跡じゃなかったのか？」

Ｔシャツジーンズの青年、天がそう言ったのを最後に、クレレには他の誰の声も聞こえなくなった。真っ暗な遺跡の中で、確かに見えたのは薄く光る魔法陣。地面に描かれた、転移系の陣だ。

ぺたん。クレレは座り込んだ。ペンを取り出して周囲を照らしてみるのだが、自分以外には誰もいなくなっていた。

転移陣は、別の座標に物体を転送する力を持つ。自分以外の四人は、全てどこかに飛ばされてしまったのだ。

今回の依頼内容に魔獣の掃討が含まれていたことを思い出して、クレレは身震いした。

クレレは探査系術師としては優秀な実力を持っている。これは艦長のお墨付きだ。

だが、戦闘能力ははっきり言って皆無。LPによる魔術の精密操作は可能だが、戦闘用の陣は迅速な対応力と火力が求められるものであって、精密さは必要ない。

瞬間的に扱える魔力の容量が少ないペンタイプのLPは、戦闘には不向き。しかも、クレレは高等魔法学校を卒業していないので、戦闘訓練をほとんど受けていない。

一週間前の仕事でもそうだったように、クレレが戦闘の予想される任務に参加する場合、必ず戦闘員の傍を離れないことになっている。

しかし、今、クレレの周りには誰もいない。背中には先ほど閉ざされた入口の壁が冷たく存在して、暗闇を照らすのはペンから発せられる頼りない白色魔力光のみ。

こんな状況で魔獣に遭遇してしまったら、為す術がない。早く誰かが戻って来てくれることを祈って、クレレは小さな明かりを抱きしめた。

暗闇の中で光る赤い双眸と、低く唸る魔獣の声に気付いた時、戦術を知らない少女は死と言うものを今まで生きてきた中で最も強く感じた。

3：人工遺物

「今回の依頼、どう思う？」

ブリッチでコーヒーを飲みながら、ドレッドノートの副艦長ノクス・アージエンタイムは艦長に聞いた。

宇宙航行艦ドレッドノートは現在、連邦領第四区画の三つ目の人工太陽の周りを公転する惑星カリダにいる。連邦政府の特殊調査部からの依頼で、この惑星の第三遺跡付近の安全を確保するためだ。

この船の乗組員でその依頼を達成するために遺跡に向かったのは五名。艦長、本川 玲菜と副艦長を除く全員だ。

艦長はガンタイプのLPをいじりながら、ノクスの質問に答えた。「特殊調査部、つてところがまず怪しいわね。テラ・フォーミングしただけで未開の惑星なのに、どうして開発部より先に調査部が来るのかしら」

「目的が開発じゃないんだろうね。調査部か……。人工遺物でも探してるのかな？」
アイティファクト

テラ・フォーミングした惑星にはほとんどの場合、魔王石が存在する。魔王石は自然召喚核を形成する可能性を秘めていて、それが形成されれば、その惑星には魔獣が自然に召喚されてしまう。

そのため、人が住めるような状況にするためにはまずその召喚核を取り除かなければならない。連邦政府が未開惑星の魔獣掃討を依頼するのはごく自然な話だ。

だが、それはたいいてい、開発部からの依頼になる。今回の依頼は、『特殊調査部』という聞いたこともない部署からの依頼だ。

「なるほどね。自己逃走機能持ちの人工遺物にとって、未開の星なら隠れ家には最適、か」

人工遺物。通称AFと呼ばれるそれは、古代に作られたと言われるマジックアイテムで、まだ現代ルーン言語が成立する以前のものだ。

古代ルーン言語は現代ルーンのように一律的な体系化はされておらず、したがって現代ルーンにある魔術的な制約が存在しない。

広く利用されることを目的として作られた現代ルーン言語とは違って、古代ルーンは暗黙的危険性が排されていない。

今となつてはその言語を操ることのできる人間も一握りだ。その言語を用いたLPをはじめとするマジックアイテムは、連邦政府によって製造が制限されている。

だが、古代に作られたAFは異なる。連邦政府が成立する前から存在するその道具は、名目上は政府が管理することになっているが、いまだに発見されていないものも多い。

作られた時代がわかつているなら、その時代までに開発が終わっている場所を探せば見つかるはずだが、AFの場合はそう簡単な話ではないのだ。

自己逃走機能。その道具が悪用されることを恐れた作者が付加したものの、あるいはAFそのものが意志を持ってその機能を学習したのか、それは個々によって異なるが、発見されていないAFにはたいてい、不規則に自らの存在する座標を変更する機能が備わっている。

テラ・フォーミングされたとはいえ未開の惑星ならば、AFが存在する可能性は十分にあり得る。

「でも、それにしちゃ回りくどいやり方よね」

「ああ、まったくだ。連邦騎士団をこんな辺境によこしたくないのはわかるけど、それにしたってこれは政府とつながりの強いところに任せる任務だよ」

ドレッドノートは政府に公認されたギルドだ。しかしながら、政府とつながりが強いと言われると一概にそうとも言えない。

依頼側と請負側の関係だ。政府が出す要求に応える代わりに、相応の報酬を受け取る、という形でギルドは存続する。

つまり、ギルドが依頼の外側で何をしようと、それが犯罪行為として認識されなければ、政府は何もできない。

A Fはその物珍しさと強力な魔術的潜在能力から、界限によって高値で取引される。政府も買い取りに躍起になっているが、取引の価格だけを見れば誰も政府に売ろうとはしない。

A Fを探すのが目的なら、たとえその準備の魔獣の掃討任務であっても、政府直属の部隊に任せるのが自然だ。少なくともこんな辺境のギルドに任せたりはしない。

「政府内の強欲な金の亡者の仕業、ってのはどうかな？」

艦内で最も勘の鋭い男、ノクスの言葉に、艦長は少し考えて答える。

「政府の名義で依頼を出して魔獣を掃討させ、安全になったところでA F探し、か。あまり賢いやり方じゃないけど、あり得ない話じゃないわね。

下手に政府直属の部隊を動かしたら政府内部から怪しまれるのは当然だし、戦闘部隊を集めるための資金がだいぶ浮くのだから、うちに依頼が来たのも納得がいく」

もっとも、彼女たちの依頼者推理は単なる暇つぶしだ。

依頼者の全貌が明らかになったとして、ギルドは依頼をこなすのが仕事。それで彼女たちが警戒する事はあっても、仕事に対する態度を変えることはない。

「ああ、コーヒーというものは良いね。心が安らぐよ」

ノクスはいつもの感想を述べながら、コーヒーをすすった。

暗闇の遺跡の中で、白柳 千香は低く構えた。転移系の陣で飛ばされ、ドレッドノートの作戦メンバーは散り散りになってしまった。この場にいるのは千香と天、それから正体不明の部外者が一人。

「よせ。敵意はあるが殺意じゃない」

そんなことはわかっている。冷静で的確で非の打ちどころのない天の言葉に、深く息を吐いてから構えを解く。

天の持つLPで辺りが照らされて、先ほどの暗闇の中にいた部外者の姿が映し出された。

杖型のLPは先端に球体の駆動部が存在し、それに回路部となる細長い円柱の棒がくっついていてような形になっている。剣型のように武器としての直接打撃を意識して形を変えなくてはならないものではなく、ペン型などの小型なもののように極端に精密な動作を要求されるものでもないため、単純に魔術を使用する場合、実行効率において杖型に勝るLPはない。先端の駆動部は術式処理の結果としての出力を行う箇所でもあり、光はそこから出ている。

その光に照らされたのは、白い装束を着て腰にレイピアを提げた背の高い女性だ。戦いに必要な筋肉のみを鍛え上げ、細身でありながら凄みを感じさせる腕だった。

「大した回復力じゃねえか。酷い出血だったが、あれはすぐに収まったのか？」

「鍛え方が違うのでな」

天が言った言葉で、千香は理解した。今日の前にいるのは、一週間前の事件で助け出された民間人——少なくとも、表向きはそういうことになっている人物——だ。

脇腹からの出血がひどかったはずだが、一週間経った今は何ごともしなかったかのようにまっすぐに立っている。伸びた背筋と、攻め入る隙のない佇まいが、彼女がただの民間人ではないことを証明していた。

「全身白装束……。連邦騎士団でしうか」

「賞金稼ぎか盗掘屋の類だろ。連邦の犬がこんな辺境に一人で来たりしねえよ。だいたい、こいつには魔術的資質が……ん？」

天の言葉が止まった。天は杖型のLPを操る魔術の使い手で、特化型のクレレほどではないにしても探査・解析の術式を自在に使いこなす。

見ただけである程度相手の魔術的素養を見抜く事ができるのは、蓄積された彼の知識と経験による。

「お前、ただの人間じゃないな」

「それが何だというのだ」

天の目が鋭くなった。目の前にいる女性は、千香が見た武術的観点からしても、天が見た魔術的観点からしても、只者ではないらしい。

「こんなところにいるってことは、人工遺物でも探してんのか？」

「お前の知るところではない」

天は質問を変えたが、女性は答えるつもりなど微塵もないようだった。

踵を返して、背を向けてしまう。

「最後に一つだけ聞いておきたい。お前、この遺跡に来たのは初めてか？」

「ああ」

短く答えて、白装束の女性は暗闇の中に姿を消した。

震える呼吸と荒々しい魔獣の吐息だけが聞こえる静寂の暗闇。動くことを忘れたかのように、クレレはただじっとしていた。

四本の脚で体を引きずるようにして蠢く巨大な魔獣は、赤い瞳をギョロギョロと動かしながら遺跡の中を歩いていた。

その目線と、動きが止まる。大人一人くらい丸のみにしてしまえるような大きな顎から、グルグルと唸りが洩れる。

「あつ……」

小さな声が喉を揺らした。魔獣が大きな口を開いて、空気を吸い込み始めた。長い金髪がその吸引力に引っ張られて暴れるくらいに激しい風が起きた。

絶望的な状況の中で白い帽子を押さえて、クレレはその場から動くことができなかった。

生きた魔導砲の異名を持つ、地を這う巨竜アースワーム。大気中

に存在する魔力素を吸引して体内で特定の術式を構成して吐き出す、という機構は魔獣ならば下級のヘルハウンドにもある能力だが、アースワームのそれは吸引力と火力が段違いだ。

クレレの持っていたペンの白い光が、徐々に暗くなっていく。魔力素を吐き出すことで明かりを灯していたのだが、吐き出すそばからあの巨大なアースワームに飲み込まれていくのだ。

やがて、暗黒の中で光る赤い瞳以外の光が、全て消える。充分に大気中の魔力素を吸い込んだアースワームが、口を閉じてもう一度開いた。

開いたことを認識するかし終わらないうちに、眩しすぎる光の線がクレレの頭上をかすめた。高エネルギーの魔力素を圧縮し、直線上に発射する兵器、魔導砲。その一撃は砲の性能によって異なるものの、人が食らえばまず無事ではいられない。それは遺跡の壁をえぐって、耳を塞ぎなくなるような轟音を響かせた。

光の線の残り滓が、暗闇の世界を淡く照らした。世界がスローモーションで動いているようだった。

えぐり取られた遺跡の壁の破片。それは破片というには大きすぎる塊で、重力に従って下方向に運動を開始していた。ゆっくりと加速しながら、闇の中でおびえる小さな少女を叩き潰そうとしていた。

少女が声を上げる前に、崩れた岩石が地面に叩きつけられる音が響いた。

宙に浮くような感覚。轟音の後、心地良く暖かい感覚に包まれて、緊張が少しほぐれたような気がした。

「間に合ったあ……」

聞こえたのは安堵の溜息。半分涙声になっていた。肩で息をしているようで、その息遣いが力強く心地良い。何が起こったのかはわ

からないが、この感覚にしばらく身を任せていたいと思った。

「もう大丈夫だよ」

「……ッ！」

降ってきた優しい言葉。クレレはゆっくりを目を開けて、やわらかくほほ笑むエルナを見つけた。自分が助かったことを実感したと同時に、ジワリと目に熱いものが浮かんた。エルナが次の言葉をかける前に、彼の胸に顔をうずめ、声を上げて泣いた。

何も考えられなかった。ただ恐ろしい危機から救われたことへの安心から、張りつめていたものが切れて、あふれ出す涙は止まらなかった。

「え、えつと、クレレ……」

「うあつ、ご、ごめんなさい！」

困惑したような声に慌てて、クレレはエルナから離れた。

「うん、それは、良いんだけどさ……」

その言葉の続きをエルナが言う前に、クレレは理解した。風に吹かれて髪が激しく暴れたからだ。

遺跡洞窟の内部に、外の風は入り込まない。なら、風を発生させる原因は何か。気圧の変化。圧倒的な低気圧空間の存在。吸引が再び始まったことの証。

「ま、まあ、大丈夫とか言っちゃったけど、実はこういうことなんだ」

「は、はい……」

アースワームはまだ健在だ。あれを何とかしない限り、ここは安全な空間だとは言えない。むしろ入口が閉ざされた遺跡という閉塞した空間であり視認性も良くないから、相当危険な場所であると言える。

「まさか実際にあれを見ることになるとは思わなかったけど、確か動きは鈍いんだよね」

「はい。通常、アースワームの弱点は鈍い動きだとされています。その他は種によってまちまちなので探査しなければ何とも言えない

のですが……」

それだけわかれば十分だと剣を構える新人研修生の背中はとても頼もしく見えた。

疾駆から肩に担いだ大剣を振り下ろすまでの間は秒を数えるか否か。鈍い金属音が響いて、刃がアースワームの鱗に直撃した。

「か、たい……！」

巨大な黒獅子の腕さえ斬り落とした大剣は、しかし地を這う巨竜に傷一つつけることができなかった。痛くも痒くもないのか、アースワームはぴくりとも動かない。そのまま魔力の吸引を続けて、体内で術式を組み上げるために巨大な口を閉じる。

その口の先にいるのはクレレ。だが、クレレはもう恐れなかった。瞳を濡らしていた涙はとつくにぬぐった後だ。ペンの先端を地面に滑らせて、白い光を放つ魔法陣、探查術式を描く。

探查は、空間を把握するためのものとは限らない。対象の魔力素含有量や魔術的資質、身体の構造や弱点まで見抜いてしまう。それゆえ、あらゆる魔術の中で最も精密な術式の制御が必要となり、術者は極度の緊張を強いられる。

他の世界が見えなくなるのだ。自分と対象、それから描く術式の構成以外のものはすべて視界から消えてしまう。

「伏せて！」

エルナの声ではなかったが、クレレが咄嗟にその声に反応できたのは幸運だった。頭上を光の線が駆け抜けた。

「ルーニック・バースト！」

高エネルギーの波を押し返すように、真っ向からぶつかる光の粒子の塊が直撃した。並ではない衝撃で、飛ばされそうになる帽子を押さえる。

クレレが後ろを向くとそこには杖型のLPから大火力の光粒子熱線を吐き出すミィティアの姿があった。考えられない火力だった。LPの補助を受けているとは言え、一人の人間の魔力で魔導砲と正面からやり合うなんて、正気ならまずしようとも思わない芸当だか

らだ。

新人研修生二人の頼もしさはクレレを奮い立たせた。その場で探查を続ける。地を這う巨竜の弱点はどこか。全身を覆う硬い鱗の防御を突き破る方法はないか。

やがて光の激突が終わって、また暗闇の世界が訪れる。見えた。

「ミーティアさん。もう一度できますか？」

「おっけー。ちょっとしんどいけどやってみる」

解析の結果から、最良と思われる作戦を鋭い声で告げる。

「アースワームの弱点は全身です。どこを叩いても大きな打撃を与えられます。」

吸い込んだ魔力素をため置く場所であり、核を持つ腹部が狙い目でしょう」

「全身？ あんな硬いのにな？」

エルナの疑問にクレレはすぐに答えた。

「魔導砲を打ち終えた直後にだけ、反動で鱗を覆うシールドが消えます。シールドの復帰に必要なインターバルは最短で五秒。魔導砲の火力を上げさせることによって引き延ばすことができますが、それでも目測で最大十秒程度にしかありません。一撃で終わらせることを意識してください」

「わかった！」

普段の気弱さからは想像もつかないほど力強く答えて、エルナは赤い視線の外に出た。今回は彼が敵を引きつけて、その隙に魔術の詠唱を完了させて勝利したが、今回は全く逆だ。

アースワームは動きが鈍い。したがって、ミーティアの詠唱のために時間を稼ぐ必要はない。

地を這う巨竜が思い切り魔力素を吸い込み始めたのを合図に、ミーティアも詠唱を開始した。

やがて、再び光の粒子熱線の激突が起こる。魔導砲の火力を上げさせるには、同等かそれ以上の威力を持つ魔法攻撃をぶつけなければ良い。ミーティアの特大火力だからこそできる芸当だ。

吐き出し切った魔導砲とミーティアのルーニック・バーストが推進力を失って収束していく。

「今です！」

クレレが叫ぶ前に、エルナは増幅回路を二つ、LPの駆動部に装着して駆け出していた。刃が青い魔法陣をまとい、使用者の身体能力と武具そのものの性能を強化する術式を構成する。刃はその大きさを増すように、青い光をまとった。

地面を強く蹴って跳び上がり、刃渡りが飛躍的に伸びた剣を振り下ろす。先ほど弾かれたときとは比べ物にならないほどあっさりと、鱗を突き抜けて肉を切り裂いた。

閉塞した遺跡の内部に魔獣の断末魔が響き渡る。大きな体へのけぞって、苦しみに悶えながら地面に叩きつけられ、地を這う巨竜は息絶えた。

「やった……！」

魔獣は核をつぶすと溶けてなくなる。アースワームも例外ではなかった。二つも増幅回路を使った反動でもうともに動けないエルナの下に、クレレが駆け寄った。

エルナはいつもの気弱そうな笑顔を浮かべていた。クレレはやわらかく微笑んで、手を差し出した。

「右だろ」

「左です」

一方そのころ、千香と天は遺跡内部の分かれ道に差し掛かっていった。

右へ行くべきか左へ行くべきか。この二人には決断力がある。あるからこそ生じてしまう問題もある。

一度決断すると、他の決断を受け入れられなくなるのだ。

「いいや右だね」

「ひ・だ・り・で・す！ さっき右に行って同じところを回って戻ってきたんじゃないですか！」

普段から落ち着いている千香がここまで声を荒げることは珍しい。ついでに言えば、普段からやる気のない天がここまでムキになるのも珍しい。

しばらく睨みあっていた二人だが、やがて「そっか」と言って天が落ち着きを取り戻した。

「じゃあ右だな」

「どうしてそうなるんですか！ その頭、脳みその代わりにヨーグルトでも入ってるんじゃないですか！？」

千香が次の罵声を浴びせる前に、地面が揺れて大きな音がした。左側からだ。

「ほら、左じゃないですか」

「ちっ、空気読めよな。こういう時は右から音がするもんだろーが……」

二人が左側へ走ると、やはり来た道は正しかったようだった。増幅回路を使って疲れ切っているエルナと、彼にもたれかかるようにして気を失っているミーティア、それから、ミーティアを泣きそうになりながら見ているクレレがいた。

すぐに事情を聞いて、先ほどの大きな音がアースワームの体が倒れる音だったとわかった。

遺跡の扉は魔術的な施錠がされていたが、天が手早く解除して、全員で遺跡の外に出た。入口前に置かれていた転移陣は、アースワームの体が倒れた時に崩れてしまっていた。

「で、その新入りはどうしたんだよ」

「ボクは増幅回路を二つ使っただけなんですけど、ミーティアはさつきいきなり倒れてしまっ……」

「アースワームと正面から魔導砲の撃ち合いをしていたので、そのせいで負荷がかかっちゃってるのかもしれないです」

クレレが申し訳なさそうにしていた。アースワームと正面から撃

ち合うとはまた無茶をしたものだが、その作戦がクレレによる案だったというから、そのせいで負い目を感じているのだろう。

「単純な魔力枯渴か加減を間違つて炎症起こしてるかのどっちかな。艦長に見てもらわないことには何とも言えないが、心配するほどのものでもないだろ」

世話の焼ける新人どもだとか言いながら、天はエルナに肩を貸した。ミーティアのほうは千香に任せている。召喚核を形成していた魔王石はすでに天が回収済みで、仕事は終わったのだということも告げた。

船に戻ろうとした五人の前に、白装束の女性が立ちはだかった。明るい場所で見ると先ほどの印象よりもずっと人間離れた印象を受けた。

白装束は真に純白であり、一欠片の汚れも寄せ付けない崇高さを表している。腰に下げたレイピアの刃の鋭い銀光沢が、彼女の瞳にも宿っていた。

「ステイグマ。ようやく見つけたぞ」

刃のような鋭利な声で、突如現れた女性はミーティアを睨みつけた。

「ところで玲菜ちゃん。そろそろ彼女の正体について、教えてくれないんじゃないかな？」

何杯目になるかわからないコーヒーをすすり終えてから、ノクスが言った。ドレッドノートのブリッジの艦長席では座ったまま、艦長たる玲菜がガンタイプのLPを飽きもせずにいじっていた。

ガンタイプのLPはウィンドミル社が開発・販売するモードチェンジャー内蔵型のLPの一つで、操作によっていくつかの形態を取ることができる。

ニュートラルな状態はハンドガンの形状をしていて、そこから複

数の種類に変化する。ライフル、ショットガン、サブマシンガン、更にはバズーカと言った形状に派生変化し、状況によってそれらを使い分ける必要があるために、使用者には狙撃の腕のみならず、かなりの状況判断能力が求められる。

攻撃するたびに消費するため、通常のものよりも安価な専用の増幅回路を用いるなど、オーソドックスな剣型や杖型のLPとは異なる点が多い。それだけ、いじり甲斐があるということなのだろう。

「彼女って？」

「ミーティア・エンシスハイムのことだよ」

とぼける艦長に、副艦長は大した苛立ちも感じていないようだった。プレスの中にもうコーヒーがないことには不満を感じていたが、大事な話を始めてしまった手前、補充しに行くわけにもいかない。おとなしく諦めて玲菜のほうを向いた。

ミーティア・エンシスハイムはエルレナード・フィンブルツールとともにドレッドノートに研修生として派遣された学生だ。最初の任務を終えた後、天から聞いた情報によれば、魔術的才能が並の人間のそれではないという。

天はやや特殊な傾向はあるもののドレッドノート内で随一の魔術の使い手であり、ミーティアほど優秀な人材がこの弱小艦に派遣されるのは不自然なのではないかと疑問を抱いていた。

この船の乗組員達は全員、並の部隊に所属する連中に比べれば優秀であるという事実は揺るがないし、エルレナードだって戦力としては十二分に役に立つということで天は納得していたようだ。それにしてもミーティアの魔術的資質が普通の人間とは異なるということ。それを彼は見抜いていた。

「やれやれ、天ちゃんと良いノっ君と言い、どうしてこうこの船の男連中は鋭いのやら」

わざとらしく肩をすくめて見せて、玲菜はLPをいじる片手間に艦長席にあるキーボードを操作し始めた。ブリッジの前方スクリーンに資料が映し出される。ミーティアが所持していた杖型のLPだ。

通常の杖型LPと形は同じで、細長い円柱の回路部の先端に球体の駆動部が取り付けられている。形状だけならば天の持つLPとほとんど変わらない。

しかし、製造番号が明記されていない。本来ならば政府の登録を受けて販売されるLPには長つたらしい製造番号が割り振られ、それで個々のLPを識別することができるようになっていた。

更に驚くべきは、その名称だった。

「ステイグマだって？ それじゃあこいつはアーティファクトなのかい？」

「そ。人工遺物の中でも特に危険性の高いインテリジェンス・ウェポン。三十一あるうちの最も厄介な奴よ」

インテリジェンス・ウェポンとは、古代に作られた人工遺物の中でも危険性の高いものを指す。宇宙連邦政府が成立する以前からその存在は確認されていて、いくつもの古典文献に登場している。

その中ではたいてい、インテリジェンス・ウェポンは全部で三十一あると書かれていて、そのすべてに名前が付いている。その能力については非常にあいまいで、文献によって記述が異なる。長い年月がその存在を伝説に仕立て上げたのだ。

伝説には尾ひれがつく。やがては本来の姿とかけ離れた存在として扱われるようになってしまう。今、彼女たちにわかっているのはそれが三十一の武具の中で最も厄介な代物だということだけだった。「へえ。彼女がそれを持つてるとはね。ということは、玲菜ちゃん彼女を迎え入れたのは、彼女の保護のためかい？」

「ま、そういうことになるわね。エンシスハイム卿からの内密な依頼でもあるんだけど」

玲菜はLPの引き金に指を引っ掛けてくると回し、腰より少し下に固定したローライドのホルスターに収めた。どうやらLPいじりは終わったらしい。

「研修期間が終わったらどうするつもりだい？ 依頼の期間もそれまでなんだろう？」

「まあね。そこから先は学園に任せるわよ。あの学園長なら正義感に関しては問題ないだろうし」

「その正義感が捻じ曲げられるような事態にならないことを心の底から祈ってるよ」

一通り話を終えて、ノクスはコーヒープレスを持って立ち上がった。

「ステイグマだあ？」

疑うような声を出して、天は千香に背負われているミーティアを見た。彼女は気を失いながらも、その手にしっかりと杖型のLPを握っている。

ステイグマが人工遺物であるという知識くらいは、他の面々も持っている。だが、人工遺物という存在自体、生きている間にお目にかかれるかどうかわからない貴重な存在だ。エルナも千香も、信じられないという表情をしていた。クレレは千香の影に隠れて怯えた視線を白装束の女性に向けていた。

白装束の背の高い女性は日の光に照らされて銀の輝きを放つレイピアに手をかけた。

「おっ始めようってのか？」

天が聞いたこともないくらい低い声で威嚇した。膨れ上がる敵意を感じて、天の肩を借りていたエルナは身震いした。

女性は小さく息を吐いて、構えを解いた。

「覚えておけ。それがある限り、その娘に安息はない」

それだけ短く告げて、女性はその場から去った。

4：ステイグマ

エルナとクレレはブリッツの艦長席の前に来ていた。ミーティアは医務室で眠っている。艦長曰く、眠っているだけで心配はいらないとのことだった。

千香はミーティアの傍についている。天は自室で回収した魔王石を解析にかけているとのことだった。エルナとクレレの二人は、仕事に関する報告を任されたのだ。

「それで、召喚核は無力化。魔王石は無事に回収。いくつかのイレギュラーはあったけど、仕事は無事に終わったのね？」

「はい。それで、その……」

「問題はその白装束と、彼女が言ったステイグマの話ね」

エルナはうなずいた。どう説明して良いか迷ったのだが、遺跡から脱出した後のことはすべて細大漏らさず艦長に報告した。白装束の女性が立ちはだかったこと、ミーティアの持つLPを指してステイグマだと言ったこと、すさまじい殺気を放っていたが、天のおかげで戦闘にならずに済んだこと。

その全てを聞いてから、艦長は静かに、少しの間考えた。

「結論から言つて、ステイグマがどうたらつてのはデタラメよ。気にしなくていいわ。」

確かにミーティアちゃんのLPは少し特殊なものだけど、人工遺物じゃない。その白装束さんは何か勘違いしてるわね。彼女も彼女で只者じゃないのは確かなんだけど」

そこからの話題は白装束の女性に集中した。白装束の女性と対峙した時、エルナは疲労していたからかもしれないが、その女性の放つ威圧感に気圧されて身動き一つできなかった。

その感覚について、まず艦長は「正常な判断ね」と結論を下した。「惑星カリダから離陸する単独用小型宇宙艦が観測されたわ。おそらくその白装束さんのもので間違いない。問題は、単独で宇宙航行

ができるだけの後ろ盾が彼女についてるってことね」

ドレッドノートは大型宇宙艦の部類に入る。これは旧式の宇宙航行艦である以上避けようのない分類だ。

しかし、宇宙航行艦は時代を経るに従って小型化してきており、その極限にまで達したものが単独用小型宇宙艦である。その名の通り、単独で宇宙を航行することができると小型の宇宙艦だ。

問題はその費用。船そのものの製造費もそうだが、メンテナンスを行うための維持費も、その最先端の技術に追いついている技術者が——辺境である第四区画には特に——少ないために割高になっている。

それは決して、単独で支払うことのできる額ではない。単独用の航行艦でありながら単独では購入も維持もできないということがよく皮肉られる。

つまり、白装束の女性がその単独艦に乗っていたとするならば、彼女は只者ではない。組織だったバックボーンがあるのだ。

そんな相手がミーティアのLPをステイグマだと言ってきた、というのはなんだかとても恐ろしいことのような気がした。いかに勘違いとは言え、組織ぐるみでミーティアが狙われてしまう可能性が出てきたのだ。

全身白装束ということと連邦騎士団なのではないかという話も出たが、それに関しては艦長も否定的な見解だった。宇宙連邦領第四区画という辺境に、連邦政府直属の——連邦最強の武装集団と謳われる——特殊部隊の構成員が単独でやってくるとは考えにくい。

また、一週間前の校舎で負傷していた民間人と同一人物であったことから、やはり連邦最強の集団の一人である可能性は捨てても構わないだろう、というのが艦長の話だった。

「まあ、戦闘能力はそれなりにあるみたいだけど、天ちゃんと千香ちゃんがいれば問題にはならなかったわね。それより怖いのは、その後。彼女のバックが黙ってるかどうかってところなんだけど」

単純な戦闘ならば、天と千香の二人がいればその白装束を撃退す

るのに不自由はしなかったという。エルナはその二人の実力をあまり知らないのだが、艦長は絶対の信頼を置いているようなので強いのだろう。

問題は白装束の後ろにいる何らかの組織。単純に戦闘で撃退した場合、ドレッドノートという船そのものが組織と真つ向から対立することになりかねなかった。政府公認のギルドとは言え、依頼者たるギルドに対しては単なる請負者である政府がドレッドノートに加勢してくれることはない。よって、今回、実際に戦闘にならなかったのは幸運だと言っている。

「さて、お話はこれくらいかしらね。クレレちゃん大丈夫？　しばらく休んでたほうがいいんじゃない？」

「あ、はい……」

クレレはあの白装束に会ってからというもの、顔色が優れない。今の話を聞いていた時もうわの空だったようで、瞳の奥には見えな何かに脅えるような感情がある。艦長に答えた声も弱々しい。

エルナは彼女を部屋まで送っていくことにして、艦長室を出た。

「玲菜ちゃんはすごいね。僕にはマネできないよ」

「何のことかしら？」

エルナ達が去った後、熱いコーヒーをすすりながら、ノクスは自分より年上の艦長を感じたように見つめた。

「本当のこと、言わなくてよかったのかい？」

金色の碇のマークの刺繍のある紺色の制服の女性は、静かにため息をついた。開いた黒い瞳はその奥に多くの感情を秘めている。しかし混沌としているわけではなく、そこには確かに憂いの色があった。

もう一度瞬きした後には、その感情も全て消えていた。あらゆる世界を見てきた者の目。薄汚い世界の冷酷さ、無情ささえも知り尽

くした目は、自らの感情を殺すことも容易い。

「私たちの任務は期間中ミーティアちゃんを守ること。そのために必要のないことはしないわ」

しかし、感情を殺すことはすなわち非情という言葉には結びつかない。穏やかな対応は相手の怒りをなだめる。彼女は『エルナ達にステイグマとミーティアの真実を伝えること』を必要のないことだと言った。それは、彼女の優しさだ。

「軽くないんだろう？ ミーティア・エンシスハイムの症状は」

「そうね。私も驚いたけど、今回の彼女の症状で確信したわ。ステイグマは所有者の魔力を際限なく食らい尽くす。結果として、彼女のリミッターは常に外れた状態になる。魔法を使うときの魔力の調整ができなくなる。」

タダでさえ食われ続けて枯渇状態に近いのに、魔法を使おうとすればステイグマが更に体の中から魔力を搾り取ろうとする。正直言つて、死ぬ直前だったわ。これ以上、魔法を使わせないほうがいいわね」

ミーティアは今回の任務——惑星カリダの魔獣掃討任務——の途中で倒れた。報告によると、アースワームと魔導砲を正面から撃ち合ったらしい。

それだけでも常人なら魔力の枯渇——貧血に似た症状——を起こして倒れてしまいかねないのに、それに加えてステイグマという人工遺物の存在がミーティアの魔力を常に食らい続ける。

深刻な魔力の枯渇は生命活動に影響を及ぼすこともある。運び込まれたミーティアを見た時、玲菜は動揺を抑えるので精一杯だった。それほど、ミーティアが危険な状態だったからだ。

「今後、もし任務が増えるようなら、彼女には待機してもらうことになるね」

「ええ。少なくとも戦闘のある任務には参加させられないわ」

玲菜はもう一度静かに深く息を吐いた。

上は動きを妨げないゆったりした袖の道着、下は長いスカート状の袴という姿。これは戦うための服装であり、武道をたしなむ者の正装だ。

白柳 千香は幼い頃からこれを着て育ってきたので、この格好が一番落ち着く。急な任務にも対応できるように、常にこの格好で生活している。

一本に結った髪が乱れていないかどうか、着ている和服に汚れやしワがついていないか、入念に確かめた。白柳の名を受け継ぐ者として、常にあるべき姿であらなければならない。特に、あの人の前では。

ドレッドノートの乗組員には、各人に個室が割り当てられている。それぞれについて十二畳はある広い部屋だが、彼女が訪れたこの部屋はその広さを感じさせないほど散らかっていた。床の面積の実に四分の一には専門書がうずたかく積み上げられ、もう四分の一には魔導工学のよくわからない機器が並び、残されたスペースにも足の踏み場もないほどよく使う工具が散らばっていた。

千香はため息をついた。こんな部屋でどうやって寝ているのだろう。

「兄さんは小難しい魔導工学理論より、整理整頓という言葉を学ぶべきだと思うんです」

「お前は何を言ってるんだ。充分すぎるほどに整理された部屋だろう。この配置美がなぜわからない」

部屋の主、白柳 天は目の前に置いた紫色のごつごつした石を観察しながら、脇に置いた端末のキーを叩いて何か調べているようだった。自然召喚核を形成していた魔王石の分析らしい。

全く悪びれた様子のない天に、千香はもう一度深くため息をついた。こんなどうしようもない男が白柳の長男であり、跡取り候補の筆頭なのだと考えると眩暈がした。

白柳は剣の名家だ。宗家である風戸から派生した庶家ではあるものの、剣術において由緒正しい家系である。その跡取り候補の筆頭が、千香の目の前であぐらをかいて石ころの分析をしている男、白柳 天だ。服装は千香のものと違って白いシャツにジーンズというラフなものだし、生活は規則正しくないし、起きている時間の大半は魔導工学の機械いじりに勤しんでいる。

天は昔からそうだった。自分の好きなこと以外はしなかった。少なくとも、周りにはそう認識させてきた。そんなだらしない兄の代わりに、千香は親族の期待を一身に背負った。寝ても覚めても剣の修行に明け暮れて、十七歳で奥義まで会得した。

それでも、全く足りない。天は自分の好きなこと以外しなかった。周りに修行をしているところを欠片も見せようとしなかった。誰もが寝静まった頃に、己を鍛え抜いていた。

千香は、一度だけ天に稽古試合を挑んだことがある。その時にはつきりと確信したのだ。まだ、自分の剣ではこの男の足元にさえ及ばないと。対峙したただけで震えが走るほどの気迫と、無駄な動きの一切を排した立ち回り、確実に敵の動きを崩す太刀筋。その全てが千香の想像をはるかに凌駕した領域に達していた。

純粋な剣術のみで戦ったためにその試合は千香の勝ちで終わったが、魔術を絡めた戦いになれば千香は自分に勝ち目などひとかけらもないことを理解してしまった。それほどまでに、天の剣は強かった。正規の修行をこなして、全ての時間を剣にささげてきた千香にそう感じさせるだけの實力を持っていた。

持つていながら剣を握らず魔導工学の道を志したことに、憤りを感じることもある。だが、今必要なのは皮肉にも魔導工学の知識だ。千香はそのため天の部屋を訪れた。

「ステイグマについて、兄さんなら何か知ってるんじゃないかと思つて」

「ああ、あれか」

惑星カリダでの任務が完了したときに遺跡の外で出会った白装束

の女性が言っていた、ステイグマ。その存在が人工遺物の中でも危険性の高いインテリジェンス・ウェポンであるということくらいは、千香も知っている。学園の宇宙史の講義で一番最初に習う部分にも登場するからだ。

しかし、それ以上の詳しいこととなると、諸説あるために学園の講義では扱われない。LPを作る技術を中心とした魔導工学に関連する書物を読み漁っている天ならば、古代のLPに関する知識もあるのではないかというわけだ。

「文献によって記述の異なる部分は多いんだが……」

二、三キーの操作で手元の端末を省エネルギーモードにして、天は千香のほうに向きなおった。一度閉じた目が開かれた時、天の周りにあった空気が先ほどまでと比べてガラリと変わった。

魔導工学、特にLPのこととなると、天は人が変わる。彼が研究するのはLPの構造であり、改良手段だからだ。真剣な目で見つめられて、動揺しそうになった。普段はやる気のない顔なのに、どうしてこうすばやく切り替えが利くのか。

「古い文献の中に共通する記述がひとつある。聖なる傷の話だ。

完全の刻印だとか、神の子の傷だとか、いくつか異なる表現で書かれていて、そのどれもが抽象的だから詳しいことは全くわからないんだが、どうも人体に浮き出る痕らしい。

手足か、脇腹か、額か、あるいは背中中の十字傷か。ステイグマの継承者にはそいつがあるらしいんだが……」

天はもう一度目を閉じた。千香は助かったと思った。今の表情を見られるのはよくないことのような気がしたからだ。

「ま、どうせおとぎ話だ。あの新入りのLPは確かに製造番号も書いてないが、人工遺物の類じゃねえだろ」

次に天が目を開いたときには、彼の表情はいつものやる気のないものに戻っていた。ひとまずは秘密を守れたことに安堵し、千香は部屋を去った。

懐かしい夢を見ていた。まだ、エンシスハイム卿に引き取られたばかりの頃の夢。

最初は怖かった。エルナもシャズおばさんもない。大きな大きなお屋敷で、これからお父さんになる人が優しく笑っていた。

どんな綺麗な絵が飾ってあっても、ちり一つ落ちていない絨毯の上を歩いても、ジャンプしたって届かないほど高い天井を見上げても、やっぱり怖かった。

だけど、ひとつの部屋にたどりついたとき、怖くはなくなった。ベッドの上で本を読んでいた、自分よりも少し年上の子が笑いかけしてくれたから。

「よろしく。僕はエルネスト」

「……ミートイア」

差し出された手は暖かくて、伸ばした手を握り返してくれたことが嬉しくて、怖いだけの世界が全部明るくなった気がした。それが、エルネストとの出会いだった。

その先は見たくなかった。エルネストとの楽しい思い出ばかりが繰り返されて、だけど、その夢を見ている時は、たまらなく悲しくなった。いつだって最後に来るのは、あの日だから。

背中の傷が痛くて苦しむエルネスト。その傍に転がる杖。杖が語った知識に従って、刃で同じ傷をつけて、さいごに、激痛の中で一度だけ……。

不意に、頭をやわらかく撫でてくれる感覚がした。瞳からこぼれる涙の感覚で、目を覚ました。目を強く閉じて、涙を振り払う。

わずかにかすんだ視線の先には、和装の少女がいた。優しい眼差しが夢の中で見た人に似ていて、もう一度涙が出そうになった。

「お、おはよう！」

甘えそうになる自分を誤魔化すために、わざと大きな声で言った。

千香は驚いたみたいだったが、それでもいつもの落ち着いた調子で「おはようございます」と答えてくれた。

起き上がるうとして、背中に鋭い痛みを感じた。表情が強張ったのを見られなくて良かった。千香の視線はベッドのそばに立てかけてある杖に向いていたから。

「やっぱりあれば、ステイグマなんですか？」

遠慮のない直球の質問。この船に乗っている者の中で、ミーティアの傷を見たのは千香だけだ。背中の十字傷。少し詳しい者なら、その意味がわかるかもしれない。

「……うん」

小さくうなずいて、ミーティアは答えた。背中の傷が痛んで体も起こせないけど、そこまで悟られてしまうわけにはいかない。

「ステイグマ。インテリジェンス・ウエポン知性ある魔導具。色々、怖い伝説があるものだよ」

「そう、ですか」

短く答えて、千香はステイグマを睨んだ。傍目には何の変哲もない杖型のLPに見える。

千香はどこまで知っているのだろう。ミーティアは不安になった。ひょっとして、他の皆にも知られてしまっているのだろうか。

それは嫌だ。伝説は人を狂わせるか、恐怖を与えるかのどちらかしかない。

「ステイグマのこと、皆に知られちゃった……？」

「いいえ。兄さんもステイグマなんておとぎ話だと言っていました。大丈夫ですよ」

心を小さく突き刺す痛み。千香の「兄さん」に反応したのだろう。もう戻らないことはわかっているのに、いつまでもこの心に刺さったトゲは消えない。

それから千香の話聞いて、白装束の女性がステイグマの存在を示唆したこと、千香はステイグマについて持ち主が聖なる傷を持っているということ以外知らないこと、誰にも傷の存在は気付かれないことを知った。

「またお願いになっちゃうけど、やっぱり、このことも誰にも言わないで欲しいの」

背中が疼いて痛む。笑えただろうか。千香はいつもの調子で「わかりました」とだけ答えてくれた。

宇宙連邦政府は第四区画にも支部を置いている。区画ごとに自治を行っており、異なる区画には中央政府である第一区画の権限以外は干渉できない。

背後には要人の控える議事堂がある。辺境とは言え、政府関係者に負傷者が出たとなれば第四区画中央防衛師団の実力が疑われてしまう。議事堂付近の民間人を素早い対応で避難させることができたのはハーヴィ中將の辣腕によるところが大きいだろうが、今も昔もそういった事実あまり公にならず、特に軍隊という立場にいる以上は失敗を咎められるのみだ。

そうなってしまうためにも、今回の急な襲撃者は全て排除しなければならない。第四区画の議事堂城下町に魔獣が入り込んだという報告から、すでに一時間は経過している。どこかに召喚核が存在するのだろうが、それを無力化するために人員を割くことができないほどに襲撃は激しい。

前線の様子は追尾眼チェイスアイを通して小柄な部下、スキルヴィルが伝えてくれる。

しかし、全く役に立たない。前線では師団員が善戦している、とかいう寒いギャグを言われても反応できないくらいに、迷彩色の軍用制服に身を包んだ中年の男の神経はすり減っていた。

「くそつ、けが人が次々に運ばれてくる。追尾眼の情報はアテにならないな。ベズヴィルド、前線の者を第二防衛ラインまで引かせろ」「了解しました」

同じ制服に身を包んだ女性は短く敬礼して駆け出した。本来はベ

ズヴィルドが走らなくてもその場で前線と通信すればすぐに命令が伝えられるのだが、ハーヴィ中將はそれをしない判断を下した。

通信はハーヴィ中將の傍らにいてモニターを注視している小柄な男、スキルヴィルの追尾眼を通じて行われる。本来、追尾眼は特定の対象を追尾してその映像を通信によって得る特殊形状のLP——簡単に言えば魔術的動力に頼った移動式監視カメラ——なのだが、スキルヴィルの改造によって双方向通信が可能になっている。

追尾眼本体を前線をはじめとする要所に配備し、その情報をスキルヴィルがモニターによって得る。そこから指令を送れば師団長たるハーヴィ中將はこの拠点から動かずとも良く、非常に効率的な任務遂行が可能になる。

だが、追尾眼の奮闘する師団員の映像とは裏腹に、現状はけが人が次々に運び込まれてくる。元々、魔術というものにあまり強く頼らないハーヴィ中將は追尾眼を真つ先に疑った。追尾眼の情報がどこかで操作されていれば、そこから指令を送っても意味をなさない。「おかしいな。そんなはずはないんだけど……」

スキルヴィルはモニターの前でキーを叩いている。追尾眼の操作は体系化されたLPの機構を流用しており、視覚的にわかりやすいGUIで確認することができる。モニターの映像の隅で小さなウィンドウが開閉しながら、動作に異常がないことを告げていた。

「ようやく来たか」

黒光りする巨大な航行艦が青空の中に現れた。ハーヴィはその船を複雑そうな表情で見つめた。

「援軍ですか？ 必要ですかね……」

疑り深いスキルヴィルの言葉に、ハーヴィは忌々しげにため息をついた。第四区画がずっと平和で、訓練とパトロール以外にすることがなかった防衛師団なのだから仕方がない。まだ若いスキルヴィルは戦場というものを知らないのだ。

政府の防衛師団がギルドに頼らなくてはならないのはシヤクだったが、彼らは圧倒的に戦場を知っている。下手な師団員よりは百倍

以上までもな働きをしてくれる。

宇宙航行艦ドレッドノートが議事堂付近の開けた場所に着陸し、その中から戦場を知る者達が下りてくる。ここから本当の議事堂防衛戦が、始まる。

5：剣に刻まれた想い

ドレッドノートにまたしても政府関係機関から依頼が来た。これはとても珍しいことだ。

「宇宙の終焉でも近づいてるのかな？」

いつものようにコーヒーを飲みながらノクス・アージエンタイム副艦長が言った。彼なりの驚きの表現だろうが、あまり冗談に聞こえないのでやめてほしいとエルナは思った。

「今回の依頼は急を要するわ。それも血沸き肉躍る戦闘任務。議事堂城下町に入り込んだ魔獣の掃討よ」

なんだかともうれしそうな艦長の説明を聞いていたのは、エルナ、ノクス、天、千香の四人。ミーティアは先の任務で倒れてしまったので、この任務には参加しないことになっている。クレレも顔色が良くなかったし、そもそも彼女は非戦闘員なので参加メンバーではない。

ドレッドノートの出動の際には、実質的に戦闘が可能な人員を留守番役として船に置いておくことになっている。ミーティアもクレレも、現状では戦闘不可能。よって、その二人を除く五人の中から番人を選ばなければならない。

「じゃ、千香ちゃんです」

即決だった。千香も同意したが、天があからさまなため息をついた。

「ここら、ぐったりしないの。天ちゃんだって重要な戦力なんだから」

「あのね、だからって技師^{エンジニア}を頻繁に戦場に連れてくのはどうかと思わねえの？」

白柳 天は魔導技師^{魔導技師}だ。ドレッドノートを技術面から支えている。自動航行システムや長距離砲^{LCR}のメンテナンスも、必要ならば船員のLPの調整だって行うこともある。

魔導工学の分野に特化した知識・技術の持ち主であって、本来彼は戦闘員ではない……と本人は主張している。

ぶつぶつと文句を言いながら、天は立ち上がった。彼が望もうと望むまいと、船はすでに議事堂付近に着陸し始めているのだ。艦長命令となれば乗組員である彼に拒否権はない。

天はロッドタイプのLPの駆動部とポケットに無造作に突っ込んだ増幅回路を確認しながら、任務に向かう準備を始めた。その姿はエルナには魔術を中心に戦うタイプの戦闘員にしか見えない。これまでに聞いた艦長の話から総合しても、天が相当の実力を持っているのは疑いようのないことだ。

最初の任務を思い出すと、そういえば天は鍊金系と合わせて拘束系の術式を行っていた。鍊金系は扱いが非常に難しい系統の魔術だ。クレレが用いていた水の生成陣は戦闘のような秒が命運を分ける世界のものではないが、戦闘において鍊金系を使いこなす魔術師というのは間違いなく主戦力レベルだ。

「彼の實力なら心配しなくていいよ」

そう言ったのはノクスだった。この人もこの人で相当な使い手のような気配を持っている。艦長のガンタイプや天のロッドタイプのように、目に見えるところにLPを持つてはいないが、それも今回の任務で明らかになるのだろう。

「何やってんだお前ら。置いてくぞ」

「あ、すみません！」

「ああ、すぐに行くよ」

長い杖を肩に担いで、天は艦長と一緒に先に船を下りて行った。

「なんだ、意外と乗り気じゃないか」

ノクスがおかしそうに笑ったので、エルナも釣られて曖昧に笑った。

無駄な装飾がなく、建物自身もそれほど新しくない議事堂の前では、いくつかのモニターの前で小柄な男がキーを叩いていて、その傍らに口ひげをはやした中年の男が立っていた。司令官だろう。

二人とも迷彩色の軍用制服を着ていることから、連邦軍に所属している男であることがわかる。近くに貼られたテントの下では、重傷者がひしめいていて、救護班は確実に人員不足だった。

玲菜の姿を見つけるなり、司令官と思しき中年の男が話しかけてきた。

「お久しぶりです。教官」

「ハーヴィ中將もお変わりないようで」

中年の男は背筋を伸ばして玲菜に向かって敬礼した。玲菜も軽く敬礼をして、今回の作戦に関する話が始まった。

教官、というのは玲菜のことらしい。年齢を考えれば（おそらくは）玲菜のほうが年下だろうが、ハーヴィ中將の態度から考えて、立場的には玲菜のほうが上らしい。

「艦長、昔は防衛師団の教官やってたんだとよ」

「へえ、そうなんですか」

天が教えてくれたことは、エルナにとっては少し不思議なことだった。玲菜は容姿から判断するに、まだ二十代前半と言っても十分通る。天の言う「昔」がどれほど前の話なのかわからないし、玲菜と今話しているハーヴィ中將はどう見ても四十を超えている。ひよっとしたら五十代かもしれない。顔に刻まれた深いシワが、中年独特の貫録を醸し出している。

そんな相手——ひよっとすると自分の倍は生きているような相手——よりも、玲菜は上の立場なのだろうか。そんな相手に戦術指南をしていたのだろうか。あり得ない話ではないが、あまり自然な話でもないような気がした。

ハーヴィ中將は軍用制服の上からでも鍛え上げられたことがわかる。腰に下げているブレードタイプのLPを使って戦うのだろう。魔術にはさほど頼らないタイプかもしれない。

ハーヴィ中將の話は軍人らしく簡潔だった。議事堂城下町に魔獣が侵入したこと、防衛師団で殲滅にあたっているが、負傷者が多すぎることに、第一防衛ラインを捨てて第二防衛ラインにまで前線を引き下げたことなど。

彼らがドレッドノートに依頼したのは、この防衛戦の援軍だ。魔獣の掃討と、発生源の除去が今回の仕事になる。

「お、チェイス・アイCEか。どれどれ……」

天の目の色が変わった。追尾眼は特殊形状のLPで、一般ではほとんど使われることがない。普通に生活してはめったにお目にかかれない代物だからだろうか。天はモニターを見てすぐにそれが追尾眼の映像であることを見抜いた。声の色も心なしに嬉しそうだった。

だが、直後に彼の表情は一変した。だんだんと血の気が引いていくようだった。直後に彼が発した言葉は、その場を騒然とさせた。

「引かせろ！ 第二、第三防衛ラインはもう使い物にならねえ！ ここまで一気に来るぞ！」

「な……そんなはずはない！」

反対の声を上げたのは追尾眼の持ち主、小柄な男スキルヴィル。モニターを一目見る限りでは、スキルヴィルの主張が正しいかと思われた。魔獣を相手に奮闘する師団員達の姿が映されていたからだ。しかし、天はその声を無視した。

「クソッ！ どうしてこうなるまで放つときやがった！ OSは何だ？ CEならソニックスシリーズだろうが……」

それは質問などではない。スキルヴィルの存在は天にとってもう見えてすらいらないようだった。小柄な男を力づくでモニターの前からどかして、キーの操作をのっとった。指の動きが目に見えないほどの速さで操作を続けながら、彼の表情は徐々に険しくなっていた。

「バ、カヤロオ！ 通信系にシンプル入れるヤツがあるか！」

彼が叫ぶのと同時に、銃声が響いた。魔獣の断末魔が響いて、重

傷者を手当てするテントの前に黒い体が倒れ、溶けた。それを合図にするかのように、幾多の獣の咆哮が木霊した。

黒い狂犬ヘルハウンド。その大群が押し寄せてきたのだ。テントにいる重傷者の血の匂いに反応しているのだろう。議事堂のほうにはわき目も振らず、狂犬達はテントを目指した。

「死ぬ気がないならおとなしくしてなさい！」

鋭い声とともに、銃声がいくつも連なった。艦長のガンタイプLPが火を噴いたのだ。先ほどまでハンドガンの形をしていたのが、モードチェンジャーによってサブマシンガンの形状となっている。

テントの中にいた者は、全員静かになった。下手に騒いで逃げ出そうとすれば、流れ弾に当たってしまうからだ。玲菜の放つ赤い魔導弾丸は着実に黒い狂犬達に命中し、その息の根を止めていく。

「玲菜ちゃんの教官時代の通り名、教えてあげようか？」

エルナの隣に立っていたノクスが言った。この緊迫した場にそぐわない、とても楽しそうな声色で、エルナには微妙にそれが怖かった。

「紅弾丸の鬼狂官」

ノクスが言ったすぐ後に、玲菜のガンタイプLPの咆哮が響き渡った。

白柳 天はキーを叩きながら苛立ちの頂点に達していた。追尾眼はウィンドミル社が開発した特殊形状のLPだ。武器としての使い方はほぼできないに等しいが、静音性と低視認性に優れた偵察道具として、軍用では特に重宝されている。

ウィンドミル社が開発するLPには、同社が作成したソニックシリーズという基本ソフトウェア——通称OS——が入っている。その中で最も広く普及していて扱いが容易なものが、シンプルソニックだ。

ただし、このシンプルソニックには穴がある。基本的な機能以外は搭載されておらず、改造を行う場合、セキュリティの面から余分な改造が必要になる。低知識層向けに販売されるものであって、改造されることを前提としていないのだ。

したがって、半端な知識を身に付けた者が改造を施したりすると目も当てられない事態になる。特に、通信系であれば傍受はるか伝達情報の操作、すなわち通信の割り込みさえ容易く受け付けてしまふのだ。

通常、改造至高の場合はカスタムソニックシリーズを用いる。シンプルソニックなんかで改造するのは馬鹿か猿のやることだ。

「双方向通信だあ？　どんだけゼロセキュリティだよ……」

スキルヴィルは小柄な男だが、天よりは年上だ。プライドをズタに傷つけられたのか、頭に血が上って顔が赤くなってしまっている。ここでわめかないだけの分別はあるようだが、天の毒舌は止まらなかった。

「ミジンコがふざけたマネしやがって。危うく殺されるとこだ」

キーの操作を終えて追尾眼を強制シャットダウン。これ以上この装置を稼働させていても、情報を得るところか逆に利用されてしまいかねない。それに、必要な情報はもう得た。

伝送情報の改ざん手段の解析、それから逆探知による黒幕の座標特定。おそらく、魔獣を呼び出した召喚核も同じ場所にあるだろう。必要な情報だけを書き込んだ特殊な増幅回路を、艦長に投げる。

「改ざん者と魔王石の座標だ！」

「さんきゅー！」

天はロッドタイプLPを持って立ち上がった。面倒だが、この状況で戦闘を怠けることはすなわち死を意味する。

「ノっ君と天ちゃんてここの守りは十分だよ。エルナちゃん、行くよー！」

「は、はい！」

艦長と新入りが走り出して、その脇をすり抜けてヘルハウンドの

軍勢がやってくる。

天はそのうちの一匹、自分に迫ってきていたものを硬化術式で強度を上げたLPの駆動部で殴って黙らせ、頭蓋ごと踏みつぶす。副艦長が大型の武器を薙いで、群がる狂犬達をまとめて吹き飛ばした。「そんじゃあおこぼれ頂戴と行くか」

増幅回路をセットして、天は得意の鍊金系術式を構成し始めた。

軽く一薙ぎして、左右から飛びかかってきた下級魔獣を斬り崩した。雑魚には構うなと言われているので、エルナがこうやって倒す魔獣は少ない。何匹も脇を素通りさせてしまいが、艦長は副艦長と天の実力なら問題にならないと判断したのだろう。

事実、もうだいたい遠くまで走ってきたはずなのに、後ろからは激しい炸裂音が断続的に響いてくる。天か、あるいはノクスが大暴れしているらしかった。

後ろで起こっている戦闘の状況に身震いしながら、白いタイルが規則的に敷き詰められた中央の道を駆け抜ける。

突破力、という意味ではエルナも多少なりとも自信はあったのだが、艦長を前にするとその自信もどこかへ消えてしまった。かと言って、自信を失って落ち込むかと言われるれば、艦長の実力はそれすら許さないほど電撃的で刺激的だった。

「邪魔よ！」

そう短く言い放つ艦長の手に握られたLPは、モードチェンジャーによってチョークのないショットガンの形状になっている。大経口の大型銃を脇に抱えるようにして構え、装弾から射出までのタイムラグは小数点^{コンマ}一秒かと思うほどの手慣れた操銃。雷管の弾ける音が立ちふさがる黒い狂犬達の動きを止めて、そのうちの数匹の頭蓋を射出された九発の散弾が打ち抜いた。

人間がまだ一つの星に住んでいた頃からの形状を忠実に再現した

バックショット。多数の弾丸を一度に射出・拡散させる中型獣用の弾丸で、チヨークのないソードオフ・ショットガンで放つ場合は特に、至近距離の集団制圧に向いている。

一つだけ単純な銃器の散弾と異なるのは、着弾後にもう一度弾が弾ける炸裂弾になっているところだ。弾丸に破壊術式を組み込んだ特殊な増幅回路を埋め込んでいるために可能な芸当で、近接戦における破壊力は数ある武器の中でも群を抜いている。

そして何より、この局面で炸裂弾を使用したことで得られた利点は、その音にある。鋭い炸裂音が狂犬達の動きを、一瞬とは言え止めたのだ。彼らが怯んだのはわずかに二秒だが、ドレッドノートの艦長、本川 玲菜にとっては充分すぎるほど長い時間だった。

モードチェンジャーで形状を変更する場合の処理は極限まで短くしており、二丁のハンドガンタイプに変更して装弾から初弾を放つまでが一秒。残りの一秒で低空をまっすぐ前に跳んで、体をひねりながら前と左右に向けて乱射、近距離にいた魔獣達を全て撃ち落とす。

空中で体が地面と水平になった状態から、片方のハンドガンをくわえて空いた手で地面を弾く。魔術的要素を一切なしにそれだけで体勢を整えなおして着地。着地した時にはすでに装弾が終わっており、次の乱射が開始されている。

「こ、これ、ボク必要でしたか……？」

「まあね。もう少ししたらわかるわ」

撃ち漏らしたヘルハウンドが横から飛びかかって来るのを適当に蹴飛ばしてハンドガンの正確な射撃で追い打ちをかける。

「それ来た。ここからしばらくエルナちゃんのお仕事増えるわよ」

「あ、はい！」

エルナにもそれはすぐにわかった。ヘルハウンドに着弾したその弾丸が炸裂弾として弾ける際の衝撃が、小さくなっているのだ。

ヘルハウンドは結果として一瞬で死ぬことができずにその場でもがき苦しむ。すぐにエルナが追い打ちをかけてトドメを刺した。辺

りの空気も変わっている。

「広域対魔法結界。^{アンチルーン} だいぶ効果範囲が広がってるみたいね」

アンチルーン（AL）とは魔術の基礎となるルーンの効力を弱体化させる特殊な構成の対魔法用の結界である。魔力素の固定化によって術式の構成そのものを阻害するため、並の術者では魔術が完全に無力化されてしまう。

もっとも、ALにも出力や効果範囲の制約があり、維持し続けるためには術者に負担を強いるために扱えるのは訓練された者だけなのだが。

「ハ―イ。久しぶりね、ベズ」

跳びかかってくる狂犬を短刀で器用にいなして、ハ―ヴィ中将与同じ軍用制服に身を包んだ女性が現れた。軍人にしては珍しく前髪が少し長い。しかし、背筋はまっすぐに伸びている。玲菜よりも少し背が高いように見えた。

「ゆっくり紹介できれば良いんだけど、そういう事態でもないのよね。ベズ、防衛ラインの状況は見てきた？」

「第一、第二防衛ラインは破棄。第三防衛ラインも撤収を開始した。最終防衛ラインを死守する形になるだろう」

やはりこの女性も軍人らしく簡潔にモノを話した。

「そうね。私達が来なければそうなっていたでしょうね」

「何……？」

直後、信じられないことが起きた。玲菜のLPから放たれた紅い弾丸が短刀を持つ女性の頬をかすめたからだ。

「召喚核のありかを言いなさい」

「……何のことだ」

またひとつ、弾丸が発射された。弾丸はその女性の足元のタイルをえぐり取ってめり込んだ。

「三度目の正直よ。ベズヴィルド・ハートウーン。慈悲深い教官の計らいにたっぷり感謝しながら吐きなさい」

小さく歯をかみしめる音が聞こえて、直後にエルナは動いた。大

剣を突き出してその刃を受け止めた。

短刀による素早い攻撃。ベズヴィルドなる女性軍人から放たれた一撃は危うくエルナの首元にまで届くところだった。懷まで潜り込ませた場合、大振りなこの武器を扱うエルナに勝ち目はない。

そう踏んで後ろに下がっておいしたのは正解だった。短刀を受け止めて、少し力を込めれば逆に押し返すことができる。問題は、この後体勢を崩されないかということだ。

小振りで密着した状態でも融通の利く短刀は、エルナの大剣と比べてより精密な力加減で操ることができる。短刀に込める力を少しずつらせてしまえば、エルナは体勢を崩してその隙に心臓をグサリ。それでおしまいだ。

「やっぱりあんたが犯人か。お姉さん悲しいぞー」

だが、この場には玲菜がいる。エルナがすぐに間合いを取るべきでないと判断したのはそのためだ。玲菜はベズヴィルドの後頭部にハンドガンを突き付けた。

「ALが利いている状況下ではその武器は無意味だ」

「じゃあ、そのALをいつまで維持できるか試してみる？」

ALを維持し続けるためには術者に負荷がかかる。ベズヴィルドは玲菜が教官を務めていた頃からALの扱いに長けていたが、それでも持続時間には限界がある。

単独行動では挟み撃ちにされたこの状況から抜け出すことはできない。したがって、ALを維持し続けるのは無意味だ。ベズヴィルドは短刀を捨てた。そのLPに彼女自身の力を流し込むことで発動していたALは消える。重苦しい空気が晴れた。

「殺せ」

「だーめ。召喚核の場所を吐いてもらわないと。それから教官が愛を込めてお説教してあげるから、それまでおとなしくしてなさい」

ポケットから取り出した手錠をベズヴィルドの両手首にはめた。

ALと同時に逃走防止用の術式が編みこまれた対魔導師用の手錠で、これをつけられたら魔術を使うことはもちろん、物理的に所有者か

ら半径五十メートル以上離れることができなくなる。

召喚核の場所はベズヴィルドに聞き出してすぐにわかった、第一防衛ラインの付近の広場にある噴水だ。

「なるほど、真っ先にそこを潰して、追尾眼もクラックしといたのね」

第一防衛ラインを制圧して、しかしその情報を隠すためにスキルヴィルの追尾眼に間違った情報を流し込む。兵長という立場にあるベズヴィルドなら十分に可能な芸当だ。

噴水の真ん中、台座の上から沸き出る水に守られるようにして、丸い紫色の宝石が鎮座していた。先の任務で天が回収したようにごつごつしていないことから、それが人工の召喚核であることがわかる。

やはり、今回の議事堂城下町襲撃事件は人為的なものだ。そして、ベズヴィルドという内部の人間が犯人または共犯者としてこの件に加担していた。

エルナは魔術にあまり頼らない戦いをする。増幅回路を使った火力重視の技は封じられるが、A-L領域下でも安定した戦いはできるそれに比べて、ノクスはわからないが、天は魔術を重視した戦いをするのだらう。人工召喚核は無力化に特別な知識を要しないため、天を連れてくる必要はなかった。

玲菜が連れてきたのはエルナ。ここまで——A-Lを持つ相手と対峙することまで——玲菜は見通していたのだらうか。

「あなたに不穏な動きがあったのはハーヴィ中將もとつくにお気づきだったわ。隠し事が下手なのね」

「ふ、私は踊らされていたに過ぎないのか」
ベズヴィルドから小さく漏れたのは自嘲の笑み。

「じゃあ、一応動機を聞いておきましょうか」

「出世と金に目がくらんだ愚かな者の愚かな選択だ。これで十分だらう」

「いいえ。不十分すぎる。誰よりも思慮深く行動したあなたがそん

な理由で凶行に走るはずがない。あなたは愚かではないわ。少なくとも愚かな選択の理由を説明できるくらいにはね」

玲菜はまっすぐにベズヴィルドの目を見た。厳しく、それでいて優しい眼差し。

エルナはその眼差しに、どこか懐かしさを感じていた。かつて、孤児院で面倒を見てくれたシャズおばさんに叱られたときを思い出した。

「どうだかな。教官が期待するほどの分別など、とうに捨ててしまったよ」

ベズヴィルドは拒絶した。ただ目を閉じて、静かにうつむいていた。

「話してください」

そう言ったのは玲菜ではない。エルナだった。エルナは我慢ならなかった。

「黙ったまま牢獄の中に入るつもりなら、今ここで話してください。あなたにはそうする責任があります」

突然の発言。その中に渦巻く激しい感情を、エルナは精いっぱい隠そうとしたが、おそらく隠し切れていないことは自覚していた。それでも、こう言わなければならなかった。

エルナはまっすぐにベズヴィルドを見た。自分よりも背は高い。

どこか繊細な印象があつて、しかし力強さも秘めている。きっと師団内でも尊敬される立場にあつただろう女性。

「罪人に釈明の余地などない」

「関係ありません。あなたは話さなければなりません。あなたを想っていた人がいたかもしれない、あなたを追いかけていた人がいたかもしれない、あなたが守りたかった人がいたかもしれない。

それだけの人を置いて、黙したまま冷たい牢獄に入るのは許されません。あなたには可能な限りの釈明をする義務がある。だから、どれだけ情けなくても、ここで話してください。あなたに選択を迫った理由を」

言い終わってから、エルナは自分の心臓の鼓動が加速しているのに気付いた。頭に血が上って熱くなってしまっているのも、なんとなくだがわかった。

間違ったことを言ってしまったていないか不安にもなった。研修生の分際で出しやばったマネをしてしまったのはまずかっただろうか。感情に任せてモノを言ってしまうのはあまり良いことではないとわかってはいるのに、止められなかった。

それでも、まっすぐにベズヴィルドを見た。彼女が目を合わせてくれるまで、そうしているつもりだった。確かに間違ったことを言ったかもしれない。感情に流されるままに嫌なことを言ってしまったかもしれない。だけど、これが間違っていると認めてしまったら、今までの努力が全て無に還ってしまうような気がして、恐ろしかった。

心臓が押しつぶされるような不安だった。呼吸が苦しくなっていく。頭の中が焼けるように熱くて、足が地面を踏みしめているかどうかもわからない。ただ黙って、ベズヴィルドの返事を待つことしかできない。あるいは、玲菜に咎められるだろうか。そうならば早くそうしてほしいとさえ思った。

「もう見たか。防衛師団の情けない姿は」

やがて、ベズヴィルドは顔を上げた。まっすぐにエルナの目を見返してきた。先ほどの頑なな色は消えていた。

「訓練で互いの優劣を競うばかりで実戦の恐ろしさを知らない。そのくせ、狭い環境で己が優れた実力の持ち主だと思い込む。拳句、襲撃に対しては及び腰だ。まともに戦いの世界を知っているのはハ―ヴィ中將くらいのものだよ。私が今回の件に関わった理由の一つはそれだ」

「防衛師団の現状に嫌気がさして、彼らに実戦の世界を教えるために？」

静かにうなずいて、ベズヴィルドは続けた。

「もう半分は別の理由だ。私はある高利貸しから多額の借金をして

いる。この戦いで手柄を立てれば私は出世し、臨時手当も入るだろう」

「なるほど。妹の入院費用を借りていたけど、そろそろ限界になってきた、ってところね？」

玲菜の言葉に、ベズヴィルドは目を見開いた。

「そこまで、調べられていたのか……？」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。あなたの上司は部下思いなのよ」
ベズヴィルドの上司、つまりはハーヴィ中將のことだ。ベズヴィルドは妹の入院資金が足りず、高利貸しにまで頼らなくてはならなくなっていた。それを完全には知らなかっただろうが、最近のベズヴィルドの様子から彼女が何かに追われるような事態にあることを、中將は見抜いていたのだ。

「そうか……。師団長にも迷惑をかけてしまった。教官、ひとつお願いがある」

「何？」

「連邦騎士団のフォルラムルに連絡をお願いしたい。私の名前を出せば応じてくれるはずだ。『セーレイズの面倒を頼む』と、伝えてほしい」

「ほい了解。さて、それじゃあ共犯者がいないかどうかも聞いておきましょうか」

「召喚核をここに置くように言った者がいる。今回の作戦はヤツの指示だが、私はヤツの素性を知らない。正体もわからぬ相手と手を組んだのは我ながら軽率だったな」

魔王石の回収は無事に終わり、召喚核を無力化したことで新たな魔獣は召喚されなくなった。ベズヴィルドを連行した時、スキルヴィルは驚いていたようだったが、ハーヴィ中將はただ苦い表情でそれを受け入れていた。

最終防衛ラインだった場所は綺麗さっぱり魔獣が掃討されていて、天とノクスの実力が確かなものだったことを証明していた。

「エルナちゃんすごかったんだから。意地になってる犯人の心を揺

さぶるあのセリフと視線！　かわいいだけじゃない男の娘って良いわねー」

「え、えっと……」

「ほお、お手柄だったわけだ」

「玲菜ちゃんの様子からすると、期間が終わっても引き抜きたい逸材かな？」

周囲からの称賛がくすぐったくて、エルナは曖昧に笑った。

「まあ、そこは本人の意思次第ね。何か他の目的があるかもしれないし」

依頼は無事に完了。ベズヴィルドが言っていた共犯者は見つからなかったが、それを探すのは防衛師団の仕事だ。

ドレッドノートへ戻る途中、エルナは空を見上げた。果てなく続く宇宙。位置を緻密に計算された人工太陽によって、昼間は青く、夕方になれば赤く、夜になれば暗くなる空。同じ空の下に、という古典的な表現があるけれど、銀河系を飛び出し、広大な宇宙を四つに分割した人類にとって、同じ空の下、とはどういう範囲を指すのかわからない。

ドレッドノートでの生活は悪くない。むしろ、個性的なメンバーに囲まれて仕事ができるのは楽しい。けれど、ここにずっととどまつたままではいけない、とも思う。

研修期間が終われば、また学園で訓練と勉学に励む日々がやってくる。いつか第四区画から抜け出して、探したい人がある。顔も知らないけれど、一振りの剣を残してくれた人。幾度となく夢に見て、けれど、一度だって会うことができなかった人。

LEONARDという、剣に刻まれた名前以外はわからない。この宇宙のどこかで、生きているのかどうかもわからない。けれど、エルナが必死に勉強して魔法学園に入学したのはこういう理由がある。

きつといつか、広い世界へ飛び出して、探す。その決意がある以上、ドレッドノートのメンバーとして正式に迎えられることはない

だろう。

探したい人が残してくれたのはこの大剣だけ。シャズおばさんもハーンおじさんも、その人の行方は知らない。黙ってどこかへ行ってしまったその人に、憤りを感じることもある。だから、先ほどのベズヴィルドに対しては熱くなってしまった。どんな事情があつたって、生きていることや居る場所がわかるのは、わからないよりもずっと良い。

第四区画の外へ飛び出すために。まずそのために、ドレッドノートで与えられた役目をしっかりと果たそう。
強く心に刻んで、エルナは歩き出した。

眠るミーティアの表情はだいぶ落ち着いてきた。千香は安心した。先ほど目覚めたときの涙は、悲しみによるものだったのだろう。そしておそらくその悲しみは、背中の傷に関係があるのだ。

ミーティアの、誰にも知られたくない傷。それを千香は知ってしまった。知ってしまった以上、知らないものとして彼女に接することはできないだろう。

逆に言えば、知っているからこそ支えられる部分もある。秘密を抱え込まなければならぬというのは、それだけで心を圧迫する。その重圧を少しでも肩代わりできる存在になれば、と思う。

自分はおせっかい焼きだろうか。そんな自分に酔っている部分も少なからずあるのだろう。天は、親族にはだらしないと言われ続けてきたが、あれで隙がない。おせっかいを焼く余地がほとんどないのだ。

散らかっている部屋も、自作の自動掃除機で清潔に保っている。

「ハイパージョン君」とか言うあり得ないネーミングのその機械のおかげで、ドレッドノートの船内もちりひとつ残らない。

心のどこかで、あの人に優っている部分を欲しがっているのはわ

かっていた。だから、礼儀作法に関しては家の教えを忠実に守っているし、剣の修行にもとことん打ち込んだ。おせっかいを焼いて、自分があの人より優れた存在であると証明したかったというのもあるかもしれない。

それができないから、代わりにミーティアにおせっかいを焼いて心の隙間を埋めているのだろうか。あまり褒められたことではない、というのはわかった。わかったけれど、だからと言ってミーティアに対してそっけなく接することはできそうにない。ある程度冷静に自分を見つめられたとして、その自分を矯正することができるかどうかは時と場合によるのだ。

ミーティアは一応、自分より一つ年下だ。せめて、この心の迷いが悟られないように強くあり続けよう。それが先輩である自分である唯一の強がりだ。

刀型LPの収まった鞘を持って、医務室を出る。ブリッチに足が向きかけて、ふと思いとどまった。そう言えば、他の面々は任務で出てしまっているのだ。

今、ドレッドノートに残っているのは千香とミーティア、そしてクレレだけだ。クレレは遺跡での任務が終わった時に顔色が悪かったようだが、大丈夫だろうか。おせっかいな自分に小さく苦笑して、千香はクレレの部屋に向かった。

扉を軽くノックする。返事はない。ドアノブをつかんで音を立てないようにゆっくりと開けた。そつと中を覗き込むと、明りはついている。忍び足で中に入って、ベッドの前まで歩いた。

白い制服を着た小さな少女は、ベッドの上で丸くなって寝息を立てていた。目元が濡れて小さく光っていた。アースワームとの戦いでミーティアに負担をかけてしまったことを悔やんでいるのだろうか。クレレは優しい子だ。ドレッドノートの中で最年少で、それについて全ての船員をよく観察している。

本人が直接戦うことはできないけれど、それでも自分の役目をしっかり果たそうとしているし、その努力に見合った相応の結果は伴

っている。他人を気にかけるだけの余裕も持っているのだから、たいしたものだと思う。

長いまつすぐな金髪を梳くように、クレレの頭を撫でた。寝顔に安堵の色が見え始めたと思ったのは自惚れだろうか。気持よさそうに眠るクレレの顔を見てみると、なんだか自分まで眠くなる気がしてきた。

だが、留守中に眠ってしまうのは良くない。規則正しい生活を心掛けてきたこともあるし、ここで眠ってしまうわけにはいかなかった。音を立てないように明りを消して、部屋を出る。

食堂でお茶でも入れよう。目の覚めるローズマリーが良い。少し刺激を与えないと、すぐにでも眠りに落ちてしまいそうだった。

ゆっくりと歩き始めて、数歩進んだところで、足の力が急に抜けた。おかしい。そんなに疲れるような任務ではなかったはずだ。任務前の訓練の疲れが今更出てきたのだろうか。

壁に手について、深く息を吐く。神経を研ぎ澄ませて、眠気に抗う。視界の端に、何か黒いモノが映った。

（魔、獣……？ どうしてこんなところに……）

危つく刀を取り落すところだった。そうせずにしっかりと鞘と柄を握ることができたのは、剣とともにあり続けた鍛錬の日々があったからかもしれない。

袴に取り付けた丈夫な刀帯に鞘をくくりつけて固定し、低く構える。鯉口を切るのと踏み込むのは同時。神速の居合いが人の背丈ほどもある巨大黒力マキリの首と胴を切り離す。

ゴトリ、と音を立てて、首から上が千香の足元に転がった。なぜここに魔獣がいたのか、千香にはわからない。訓練室の人工召喚核を誰かが持ち出したのか、天の部屋にあった回収済みの魔王石が誤作動でもしたのか。

意識が睡魔にかき乱されていく。少しでも気を抜けばその場に崩れ落ちてしまいそうなほどの、強制される眠気。

（まさか、催眠術式……？）

訓練室の人工召喚核を最後に使ったのは千香だ。確かに動力は落としたはずだし、そうでなくても召喚された魔獣が訓練室の外側に出不然なような工夫は施してある。天が回収した魔王石を誤作動する状態で放置していくほど愚かではないことは、千香も良く知っている。

であれば、この魔獣の存在理由には何者かの悪意が介在する。ミィティアとクレレが眠っていたこと、そして千香も不自然な眠気を感じていることから考えて、強力な催眠魔術が行使されている可能性が高い。

そうであるなら尚更、ここで眠ってしまうわけにはいかない。刀の柄を握る手に力を込めた途端、千香の体を激痛が走りぬけた。

「がっ……！！？」

刃の先を突き立てて、足元に転がっていた魔獣の首から上にトドメを刺す。首の根元にくつついていたカマが、千香の左足に食い込んでいた。トドメを刺された黒力マキリは霧散したが、千香の傷からは赤い液体が滴り落ちる。

痛みは眠気を阻害する。悪意の持ち主を捜すため、千香は足を引きずって歩き出した。クレレの部屋から、訓練室へ。人工召喚核はその部屋の隅に鎮座していて、何者かが触れた気配はない。

訓練室から出て、栽培室。魔導植物の発育の関係上、この部屋の照明は特殊なものになっている。目を刺激する嫌な空間だが、見渡しても何も怪しいものはない。

医務室の入り口前に、黒い人影が立っているのが見えた。神経を集中して、その正体の気配を感じる。

背は高く、黒いロングコートを着ている、おそらくは男。顔立ちには中性的で、しかしつりあがった目元口元が冷血な印象を与える。

その紅い瞳にとらえられた瞬間、千香はひどい寒気を感じた。まるで、背骨の代わりに氷の塊を埋め込まれたようなおぞましい感覚。血の色だからだろうか。どうであれ、この男に悪意があるのは間違いないさそうだった。

その男が脇に抱えているのは、眠ったままのミーティアだったからだ。

「何者、ですか」

刀を体に引き寄せるようにして、切っ先をそいつに向けて威嚇する、突き八双の構え。白柳の剣は一撃必殺を基本とする。先の居合もそうだが、この構えも非常に攻撃的な構えだ。

「答える義理はない」

冷たく低く言い放った男はミーティアを抱える右手とは逆の左手を薙ぐように振った。

轟音とともに放たれるのは火炎。空間を走りながら灼熱の紅い炎が千香に迫る。四元系の中でも攻撃性の強い火の魔術だ。

蛇のように迫る炎をくぐりながら、千香は素早い踏み込みでその紅眼の前まで迫り、刃を突き刺そうとする。踏み込みによる前方への推進力と鍛え抜かれた一撃必殺の突きが放たれる。

肩を縫い付けて相手の動きを奪ってしまえば、勝ったも同然。命を奪わずとも、相手の動きを完全に殺す、これが一撃必殺。

だが、刃が通り抜けた軌道上に、男はいなかった。足の激痛が動きを鈍らせ、確実に相手を仕留める刺突の一撃を反らしたのだ。

一撃必殺の白柳の剣は、防御を必要としない。突き八双の構えはその中でも攻撃的で、速度と力に特化している。つまり、完全に防御を捨てている。

その一撃が外れれば、それは決定的な隙になってしまう。

「ぐ、あ……ッ」

腹部に拳が突き刺さる。前方に突き抜ける勢いをそのまま利用されたのだ。殴られた個所が熱を帯びていくのが分かる。魔力素が渦巻いて、収束する独特の耳鳴り音。

「イグニス」

それが魔術であると理解した瞬間に、爆ぜた。千香の鳩尾を完全にとらえた拳はそのまま前方に突き出され、火炎の魔術を放ったことを示す煙が男の掌から上がった。

千香は背中から壁に打ち付けられ、そのままずり落ちるように座り込む。シヨックで一時的に呼吸が止まる。空気の塊を吐き出して、呼吸が戻った時に感じたのは激痛。

足の傷と、殴られた際の痛み。それから、しつこく意識を奪おうとする催眠術式。全てが白柳 千香を蝕み、殺そうとする。

だが、負けるわけにはいかない。

「その子を、離さない……！」

おせっかい焼きでも、自分のコンプレックスを誤魔化すためだとしても、ミーティアの秘密を知ってしまった以上、その秘密を守り続けると約束した。相手の目的が何であれ、ミーティアを連れ去られてしまうわけにはいかない。

正面に構えて、立ち上がる。奥歯が砕けるほどに強くかみしめて、自分の意識を殺そうとする激痛を押しこめる。

「邪魔するな」

紅眼の男はその手から炎を放つ。命を燃料として燃える火柱が千香の周りを取り囲み、動きを封じる。

千香は増幅回路を取り出した。薄く小さな黄緑色のチップ。あまり魔術は使いたくなかったのだが、そうも言ってはられない。刀の柄の駆動部にセットして、その術式を発動する。

四元系の中でも攻防一体の動きを可能とする風の術式。刀の周囲を取り囲むように風が渦巻いて、その力を術者たる千香に委ねる。

炎の壁に向けて振り下ろす一撃。風の刃が炎を切り裂いて、一瞬だが通り抜ける道が形成される。そのまま踏み込んで、返す一撃。斜め下から切り上げる刃は男の顔面をとらえるはずだった。

千香は驚愕した。刃が切り裂く手ごたえが全くない。確かに、男の目を狙った一撃だったはずなのに。

男の姿が消える。男は千香が斬りつけた場所よりも後ろに立っていた。炎を操る術だけではない。何らかの幻覚系術式も使う相手なのだ。

「あ……」

終わった。再び放たれた爆炎の魔術で吹き飛ばされた千香の意識の中に、最後に浮かんだのは諦念。背中から再び壁に激突して、ずり落ちる。

世界から光が消える。意識の中で敵の気配を知ろうとしても、その意識さえも奪われていく。周りを取り囲む炎が酸素を喰らい尽くし、足の傷から流れ出る血が体の熱を奪って、千香の意識を殺す。焼けるように熱いはずなのに、その感覚が自分のものでないような気さえた。

やがて、力を失った手から剣士の魂たる刀が落ちて、小さな音で戦いの終わりを告げた。

6：奪還作戦——始動

ドレッドノートの船内には巡回する自動掃除機がいる。円盤型のそれは地面を滑るように動いて、汚れを残さずにドレッドノートの廊下を綺麗にしていく。天が作つたらしく、ハイパージョン君とか言うわけのわからない名前が付いている。

エルナ達が帰ってきたときにも、それは忙しく働いていた。汚れがだいぶしつこいらしく、同じ場所にとどまる時間が長引いてしまつて過熱状態になりかけていたが。

その原因に気付いた時、天は叫んでいた。壁に背中を預けて気を失っている千香の、左足からの出血が原因だつたからだ。

「何があつた！ いや、それよりも早く治療を……！」

その時の慌て方は尋常ではなかつた。普段が落ち着いているといふか気力のない天だから、こうやって取り乱し、声を荒げるのは珍しい。

千香はすぐに医務室に運びこまれ、艦長によって治療が施された。出血量が多かつたようだが、命に別状はないらしい。

ブリッジにメンバーが集められた。医務室から出て、最後にブリッジにやってきたのは天だつた。瞳の奥に怒りの感情が燃えていて、普段とは別人のようだつた。

ブリッジに集まつたのはエルナ、クレレ、天、ノクス、玲菜の五人。重苦しい雰囲気だつた。クレレは沈んでいるのがすぐにわかるような表情をしているし、天は渦巻く怒りを隠せていない。ノクスもいつもの柔らかな笑顔ではないし、艦長も苦い顔をしている。

まずは艦長が口火を切つた。

「状況を整理しましょう。まず、私達が知っているのは千香ちゃんは何者かに襲われて怪我をしたこと。それから、ミーティアちゃんが船の中からいなくなっていることの二つ。その時、船に残ってい

たのはクレレちゃんだけ」

「はい。眠ってしまったので、何が起きたのかはわかりませんが、残っていた魔力素の痕跡から使用された術式は特定しました。神経干涉系と四元系の風と炎です。風は千香さんのものですが、それ以外は第三者が使用したものです」

魔術は使用すれば世界に変化をもたらす。その変化の痕跡は魔力素の小さな変質として現れる。探査・解析系術式ならばそれを分析することは可能だ。

使用された術式の大まかな系統はそれでわかる。個人が使用する術式にはたいいてい限りがあるので、その場にいたかどうかを判断する材料の一つとして用いられることがある。

今回の場合、千香の使った風以外に、神経干涉系と四元系の炎の術式の形跡が見られた。クレレは探査・解析系に特化した術者だし、ミーティアも使うのはもっぱら単純な破壊系の術式のみだ。

そうなれば、今回の事件には第三者が関わっていることになる。

おそらくはその人物が千香を傷つけ、ミーティアを連れ去ったのだ。次に口を開いたのは天。目覚めた千香の話を聞いていたらしく、一番重要な情報を持っているのは彼だ。彼の口調や表情から、抑えられない怒りの断片を垣間見ることができた。

「襲来者は黒いコートの男。紅眼の男で、催眠と幻覚の術式、それから炎の術式を使っただけらしい。クーの話とも一致してる」

「紅眼バレイグの炎使いかな？」

「そうね。千香ちゃんほどの使い手を相手にしてまともに戦えるのだから、可能性はある」

バレイグという一族は、人工遺物を管理する古代から続く血筋だった。だった、というのは、その血筋の者が人工遺物を使って起こしたある事件のせいで、彼らが連邦政府から追放されているからだ。

紅い目が特徴の、四元系の中で最も攻撃的な炎の術式を巧みに操る一族で、連邦騎士団とも互角に渡り合うほどの力を持っているら

しい。

千香の実力は、エルナはよく知らないのだが、訓練室を使う頻度や艦長達の信頼の仕方から見て、相当の使い手であるらしいことはわかった。

千香から聞いたという天の話は、さまざまな情報をもたらした。その黒いコートの炎使いが千香を負傷させ、ミーティアを連れ去ったということ、ミーティアがインテリジェンス・ウエポン『ステイグマ』の所持者であったこと、その『ステイグマ』も船内から姿を消していること。

それらから総合して考えると、何らかの魔術的理由があつて『ステイグマ』とその所持者を必要としていた可能性がある。相手が人工遺物について曰くのあるバーレイグの者なのだとしたら尚更だ。「今回得られる情報はそのくらいね。となると、まだ行動は起こせないか。

ノッ君、最近の依頼に関して調査をお願い。おもに依頼元を徹底的に調べ上げて。

天ちゃん、情報が集まり次第、すぐにでも打って出るから、それまで頭冷やしときなさい。

エルナちゃんとクレレちゃんは少しここに残って。それじゃ、解散！」

艦長の指示は素早い。ノクスはすぐにブリッジを出て行ったが、天の足取りは重そうだった。その後姿を見送って、艦長はため息をついた。

静かにエルナ達に向きなおった艦長の表情は、やはり苦いままだった。議事堂城下町の防衛戦のメンバーを選抜したのは彼女だからだろう。ドレッドノートに残ったメンバーの中で、実質的に戦闘に参加できる者は千香だけだった。

千香の実力を過信していたわけではない。相手が悪かった、という負け惜しみに聞こえるが、今回は本当に相手が悪かったのだ。そもそも、第四区画に連邦騎士団と渡り合えるような化け物がいる

ということがまず想定外。

「ノッ君が情報を集めている間、私も行くところがあるの。天ちゃんなら時期に落ち着くと思うけど、それまでの間、留守をお願いするわね」

「わかりました」

「ミーティアちゃんは必ず取り返す。いつでも出られるように準備しておいてね」

「はい！」

エルナは力強く返事した。

艦長が船を下りた後、エルナとクレレはブリッジに残っていた。

エルナは目を閉じた。状況をもう一度整理しないと、頭が混乱してしまいそうだったからだ。

まず、議事堂城下町の防衛戦に出た後からエルナ達が戻ってくるまでの間に、黒いコートを着た何者かがこのドレッドノートに忍び込んだ。

その男が紅い目をしていたこと、炎の術式に千香が敗れたこと、人工遺物である『ステイグマ』とその所持者であるミーティアを連れ去ったことから、その男はかつて人工遺物を管理していたバーレイグの一族である可能性が高い。

ミーティアが本当に『ステイグマ』を持っていたという事実には驚いたが、ここで考えるべきは、なぜその男が『ステイグマ』だけを持ち去らず、所持者であるミーティアまで連れ去ったか、ということだ。

杖を一本持ち歩くのと、人一人を抱えて歩くのでは勝手が全く違う。単純に人工遺物として高値の付く『ステイグマ』を欲していたなら、まずミーティアには目もくれないはずだ。

何らかの理由で、ミーティアも連れて行かなければならなかった

のだろう。インテリジェンス・ウェポンとその所持者が魔術的なつながりを持つことはいくつかの文献に書かれているようだが、それが理由だろうか。

エルナは目を開けた。今ここで考えても、答えは出なさそうだった。理由がどうあると、ミーティアは救い出すまで。

クレレのほうを見ると、やはり沈んだ表情のままだった。千香が戦っている時に自分は眠っていて、千香は大きな怪我をしてしまったし、ミーティアは連れ去られてしまった。その事実が辛いのだろう。

「エルナさん」

震える声で、クレレが口を開く。

「怖く、ないんですか」

うつむく青い瞳が小さく揺れた。クレレの中にあるのは恐怖。それも、ただ一つの恐怖ではなさそうだった。

千香が傷ついてしまったこと。足の傷は深く、出血量も多い。もう少し措置が遅かったら危なかったかもしれない。痛みへの恐怖。血への恐怖。死への恐怖。

ミーティアが連れ去られてしまったこと。相手は連邦騎士団とともに張り合おうという力の持ち主であること。その相手にとらわれて、ミーティアがどうなってしまうのか、その先を想像する恐怖。痛みを、死を知ることへの恐怖。すなわち、知への恐怖。

そしてこれから、ミーティアを助けるためにドレッドノートが総力を挙げること。始まるうとする戦いへの恐怖。船員として依頼をこなしてきた時間はエルナよりも長いが、平和な第四区画ではここまでの緊張を強いる戦いがなかったのだろう。

エルナは深く息を吸った。吸い込んでから、ゆっくりと声にして吐き出していく。

「怖くないよ」

クレレは顔を上げた。まっすぐに見つめる瞳はその奥に決意の色を秘めて、戦いに赴く勇者のごとく輝く。クレレがそれを認識した

直後に、エルナは力なく笑った。

「って、自信たっぷりと言えれば良かったんだけど……」

「へ？」

そのあまりにも急激な変化に、クレレは思わず間抜けな声を出してしまった。

エルナは風船がしぼむように息を深く吐いて、弱々しく笑っていた。

「ボクも、すごく怖いんだ。わからないことが多すぎて。犯人はなんでメンバーが出払ってる時を狙って侵入できたのか、なんでミーティアが連れて行かれたのか、なんで千香さんが傷つかなきゃいけなかったのか、なんで、なんで、なんで……」。

ボク達の足元には不確かなものばかり転がってる。尖ったものを踏みつけたら痛いし、大事なものを踏みつけたら壊してしまうかもしれない。動くことは、とても怖い」

だけど、いや、だから。そう続けて、エルナはまっすぐにクレレを見つめる。

「動くべき時を見極めて、その時にしっかりと動けるようにしておくんだ。今は副艦長の情報を信じて待つ時。すぐに動けないのはすごく不安だけど、こんな時こそ心を落ち着けるほうが良い」

自分に言い聞かせるようにして、エルナは深く呼吸した。

「エルナさんは、すごいです。こんな時にも冷静でいられる人は、そう多くありません」

「あはは……もう少しこの手足の震えがなんとかなってくれれば言うことないんだけどね」

苦笑するエルナの前に、グーで握った拳が突き出された。白い袖から出た小さな手は、揺るがない決意を握りしめている。

「がんばりましょう。ミーティアさんは必ず、私達で助けましょう」

「うん！」

こつん、とエルナは自分の拳をクレレの決意にぶつけた。小さな手はとても心強かった。

純白の廊下。蛍光灯の明りに満たされた冷たい空間。この場所にも夜が訪れ、窓の外には黒い深淵が広がっている。

人工光で照らされた廊下には、ほとんど人がいない。病院という神聖なる場所で、しかも夜であるということが原因の一つだ。

そして、ここが一日の大半を眠って過ごす者達の病室を集めた、眠りの病棟だからでもある。定時の巡回かナースコールがなければ、ここに訪れる者はほばいないと言っても良い。

本川 玲菜はそんな廊下で、ある人物と対峙していた。白装束を身にまとった背の高い女性。腰に下げていたはずのレイピアは、病院ということを考慮してか外している。

それでも、彼女が戦いの中に生きる戦士であることを隠すことはできなかった。戦いの世界に必要とされる筋肉のみが鍛えられ、装束から覗く腕はそれだけで凄みを感じさせる。刃のような威圧感さえ持つその女性は、自分の前に立ちほだかった玲菜を見て顔をしかめた。

「何か、御用か」

「ええ。まさかあなたが連邦騎士団、銀雷ぎんらいのフォルラムルだったとはね。探す手間が省けたわ。ベズヴィルドからの伝言よ」

ベズヴィルドの名前を出した途端に、白装束——フォルラムル——の眉が動いた。

「セーレイズの面倒を頼む」

先の任務でベズヴィルドに言われたままに、玲菜はその言葉を伝えた。

「そうか。わかった。ベズは動けないのだな」

「ええ。あなたには頼りたくなかったのでしょうけど、そうせざるを得ないことには薄々気付いてたみたいね」

「伝えてくれたことに感謝する」

そう言ってフォルラムルは玲菜の脇を通り抜けて去ろうとする。

玲菜は詳しいことを聞かされていないが、セーレイズというのがベズヴィルドの妹であり、このフォルラムルという女性は少なからずその二人と関係しているということ、それから、フォルラムルがセーレイズに対して並々ならぬ愛情を注いでいることを見抜いていた。先ほど、フォルラムルが出てきた扉には、セーレイズの名が書かれたネームプレートがつけられている。誰も来ようと思わないこの眠りの病棟に、フォルラムルは一人やってきたのだ。

それも、連邦騎士団の構成員という立場にある豪傑が、である。連邦騎士団と言えば、全員が何かしらマスタークラスか、あるいはそれよりも更に上のレジェンドクラスの實力の持ち主ばかりが集う、宇宙連邦最強の精鋭武装集団だ。

彼女の後ろ盾は連邦政府。それならば単独で宇宙を航行できるのも納得がいく。その連邦騎士団にあつて、銀雷のフォルラムルはその名を宇宙全域に轟かすほどの剣の使い手だ。

「ひとつだけ聞きたいことがあるんだけど」

それほどの使い手を相手にして、玲菜は少しも動じなかった。勿論、戦いになれば一対一では勝ち目は薄いだろう。しかしそうでなくとも、連邦騎士団の威圧感は並のそれではない。

純白の装束と、戦場に立ち続けた者だけが得られる独特の貫録。その前では半端な實力の持ち主は二本の足で立つことすら叶わない呼び止められて、フォルラムルは立ち止った。長い銀髪は人工光の中にあつて尚、人の立ち入れぬ領域の神秘を見せつけるように輝いていた。

「第四区画にバーレイグの生き残りが隠れている、という話を聞いたことはあるかしら」

「勘違いをするな。我々はバーレイグを根絶やしにしたわけではない」

バーレイグは人工遺物を用いて一度、宇宙連邦政府に刃向おうとした歴史を持っている。だが、バーレイグという一族そのものは元

々一枚岩ではなかったらしい。事件が有名になれば、連邦政府は対応をとらないわけにはいかない。

連邦騎士団を用いた武力鎮圧、という形で、事件は終息した。その際にバーレイグの多くが死に、生き残った者も散り散りになった。「ヘルテイト・バーレイグの話なら、私に言えるのはこれだけだ。ヤツには関わるな」

それだけ言い捨てて、フォルラムルは姿を消した。玲菜は小さく笑った。予想以上の収穫があったからだ。

ヘルテイト・バーレイグ。名前がわかっただけでも良い。連邦騎士団が関わるなど忠告するほどの使い手。千香が負けたのも納得がいく。

だが、玲菜はフォルラムルの忠言に従うつもりはなかった。取られたものは取り返す。かわいい部下が痛めつけられたなら、同じだけの痛みを返してやるまで。

病院の廊下を歩く者の足取りは、おぞましいほどに軽かった。

「少し、できすぎているような気もするね」

ブリッチでいつものブラックコーヒーを飲みながら、ノクスはつぶやいた。

情報を集め終わった彼が戻ってきた後、すぐに作戦会議が行われ、それを実行に移すために三人が出動した。エルナ、クレレ、天の三人だ。

天は柄にもなく自ら作戦メンバーに加わることを申し出た。千香を傷つけられて腸が煮えてしまっているのだろう。

最悪の場合は戦闘が予想されるこの作戦のメンバーにクレレを加えたのは、ドレッドノートを襲ったバーレイグの気配を探るためだ。彼女の探査術式でこの船に残っていた魔力素から犯人の魔術的特徴がわかっている。彼らが向かった先にそいつがいるかどうかは、ク

レレの探査によってわかるだろう。

本来、犯人を直接見た千香が赴くのが一番良いのだが、傷が癒えるまではまだ時間がかかる。艦長が治癒促進術式を施したとは言え、やはりそれは治癒を促進する効果しか持たない。

そして、天とクレレの二人だけでは戦闘面での不安が残る。天の実力は言うことなしだが、クレレを守りながらの戦いとなると彼一人では厳しい。もう一人、戦闘員をメンバーに加える必要があった。とはいえ、ドレッドノートの守りもおろそかにしてはいけない。

あのバーレイグがドレッドノートに対して個人的な恨みを持っていたとなれば、再びここにやってくる可能性だつて捨てきれないのだ。そうなった時、連邦騎士団と互角に渡り合う相手を止めるには、エルナは経験が乏しすぎる。いざとなれば逃走が可能な今回の作戦に対し、船の防衛は敗北が決して許されないものだ。艦長と副艦長の二人で万全の防衛体制を敷かなければならない。

「畏だった場合のことも考えての配置か。玲菜ちゃんの判断はいつも最善だね」

「そう言ってもらえると少し気分が晴れるわね」

玲菜はあまり晴れやかな表情ではない。作戦の判断、指揮に関しては艦長らしく最も迅速で適切な彼女だが、それは想定を大きく外れた事象に弱いということでもある。

今回の件はまさに想定外。名門、白柳の剣を奥義まで極めた千香が敗れる相手など、この第四区画にいるはずがないと思い込んでいた。

ヘルテイト・バーレイグ。この船を襲った男の名はおそらくこれで間違いない。第四区画に来ていた連邦騎士団の構成員、フォルラムルが言及したとなれば、ヘルテイトという男もこの第四区画にいる可能性が高い。

そして、ベズヴィルドの取り調べで明らかになった議事堂城下町襲撃事件の共犯者の容姿が、長身の黒いロングコートに紅い目。船を襲撃したバーレイグと一致している。

それから、ノクスが得た筋の情報によれば、中央魔法学園の幼少組襲撃事件の少し前、第四区画に別荘を買った政治家がいる。連邦政府の枢密院議員ディグルディだ。金にがめつい男らしいという噂が絶えない。エンシスハイム卿に何度か接触したという情報もあるし、ディグルディの別荘に黒いコート的人物が出入りしているという目撃情報もある。彼が『ステイグマ』を狙っている可能性は十分に考えられる。

特殊調査部という名前の部署は第四区画には存在せず、従って第四区画のギルドに依頼を出すとは到底考えられない。遺跡事件の際の依頼者に対する違和感はまさにノクスが想像していた通りのものだった。天が回収した召喚核は、自然のものに見せかけられていたが、人工のものである可能性も充分に考えられるという。遺跡入口に仕掛けられていた転移陣もそれを裏付ける。

最後に、フォルラムルの話だ。幼少組校舎襲撃事件の際に彼女が追っていた相手がヘルテイトであるとするなら、カリダの遺跡に彼女がいたことにもつじつまが合う。

つまり、ディグルディが特殊調査部という部署をでっちあげてドレッドノートに依頼を受けさせ、遺跡にドレッドノートのメンバーを呼び出す。ミーティアが任務に参加していれば遺跡内部で転移陣によって分断したところを捕まえればいいし、そうでなくても転移陣で時間を稼いでその隙に船を襲えばいい。ヘルテイトが遺跡に召喚核を仕掛け、フォルラムルが彼を追っていたのだろう。

しかし、できすぎている。ノクスはそう感じていた。特別なツテがあるとは言え、これだけの情報が整然とすぐに集められたのには違和感がある。

たとえば、ヘルテイトはわざわざベズヴィルドにその姿を見せたりしたのだろうか。ベズヴィルドを使い捨ての駒にするなら、彼女の口を封じる手段も用意するのが自然だ。

そして、ベズヴィルドに議事堂城下町を襲撃させ、その隙にドレッドノートの船内に侵入するつもりだったなら、ここにも奇妙な不

自然さが残る。そもそも彼は、ハーヴィ中將がドレッドノートに援軍を要請することを予め知っていたのだろうか。

ディグラルディの別荘付近で目撃されているのも不可解だ。神経干涉系の、それも幻覚術式の使い手なら、目撃されないように細工することなど造作もないはずのに。

ヘルテイトに誘われているような気がする。それも踏まえて、玲菜は防衛のメンバーを重視した。作戦メンバーはあくまで偵察が目的。最悪の場合には戦闘が予想されるが、そうでなければより確かな情報を持ち帰るのが仕事だ。

「後は、天ちゃんが突っ走らないことを祈るだけね」

「そうだね。それだけが心配だ」

香りと苦みを楽しみながら、ノクスはカップの中の黒い液体をすすった。

第四区画中枢惑星の郊外。食糧の調達に事欠かない場所であり、なおかつ人通りの多くない場所。そこに最近新しくできた別荘がある。

立地としては最高の条件だが、こう無駄に大きな建物となると人々の目を引かずにはおれない。だから、人通りは多くなくとも、黒いロングコートを着た長身の男が出入りする様子を見ている者は多い。

中に入ると、床には赤い絨毯が敷かれている。ロイヤルレッド。古の時代からの権威の象徴である。あるいは、男を興奮させる色としても、この毒々しい赤は役に立つことが多い。はるか昔の闘牛という競技で用いられたマントが赤いのもそのためだ。

赤は権威のみならず、戦いを象徴する。全てを焼きつくす炎、強者が浴びる勝利の美酒、すなわち敗者の血液。

「下らん」

その赤の中にあつて尚映える紅蓮の瞳の持ち主は、この別荘の主の間へと向かった。赤い絨毯の奥、目の痛くなるような煌びやかな部屋の中央の椅子に、一人の男が座っていた。

「戻ったか、ヘルテイト」

自分だけの玉座を作り、自分だけの世界で王を気取るその男は、その態度と同じく体も大きい。着るものももちろん特注。椅子も特注でなければ座れないほどだし、あごと首の境目がわからないくらいに贅肉が垂れ下がっている。

「して、ステイグマは手に入ったのか？」

そのくせ、考えているのは金のことばかり。『ステイグマ』を手に入れることでさえ、高く売り飛ばすため以外の目的は持っていない。

「口の利き方に気をつける」

拳を前に突き出す。それだけで、黒いコートがなびいて、隠されていた殺気が全て外に出てきた。拳にはモードチェンジャーによってその形を剣の形状にしたLPが握られている。

メタモル。ウィンドミル社が開発したモードチェンジャー内蔵型のLPの究極系。普段はブレスレットをはじめとするアクセサリの姿をしており、武器だとわからないが、モードチェンジャーによって即座に武器に変形する。

剣、杖、弓、槌、斧、槍……。カスタマイズに従ってあらゆる形態の武器に変形できる半面、扱いは全てのLPの中で最も難しいと言われている。その刃を突き付けられて、太った男はわめきたてた。「貴様こそ気をつけるんだな！ 忌まわしいバーレイグを雇う者などこの私、ディグラルディ・ギンナル以外にはおるまい！ あれだけの報酬を出してやるのだから、お前は私に従属する義務がある」

ディグラルディ・ギンナル。宇宙連邦政府の大統領の諮問機関、枢密院の議員である。行政において非常に強い力を持った集団だが、それ故の束縛も多く、枢密院の議員は互いが互いの動きを表面上、監視しているような状況にある。

表面上、というのは、つまるところ、監視は行政的な公の場で行われているだけであって、裏では何をやっているか不透明だということと言う。中には連邦の政治を民衆のために良くしていこうという意志を持つ者もいるのだが、デイグラルディは裏で汚いことを平気でやってのけるタイプだった。

枢密院議員は大統領の諮問機関であり、行政において非常に強い力を持つ。それ故に、マスメディアの注目も集めてしまったため、表立った動きはあまりできない。政治資金を集めるための活動も、裏でこそそとしなければ横領だの何だのとうるさく騒がれてしまう。宇宙という広い世界に出ておきながら、枢密院にその広大な自由を享受する資格は与えられていなかった。デイグラルディは強欲な男で、身分の保障される枢密院議員に必死で成り上がったのだが、この現状に満足してはいない。

民衆が思うほど、枢密院議員は金を受けとってはいない。否、受け取ってはいるが、そのほとんどが政治活動や公共事業のために消えていく。議員個人の自由にできる金は決して多くはない。

その枢密院議員が金を得る方法と言えば、裏の世界での取引くらいしかない。特に人工遺物は高値で取引されるため、『ステイグマ』の存在を嗅ぎつけたデイグラルディは何としてもそれを手に入れようとした。

エンシスハイム卿を脅迫させたりもしたが、すんでのところあの娘を——『ステイグマ』の所持者を——逃がしてしまった。ドレツドノートとかいう部隊に研修生として配属されたことは、役所の連中に金を積んだらすぐにわかった。

世の中は金で動いている。人の心を最も効率よくつかむ道具が、金だ。目の前で自分に刃を突き付けている男も、デイグラルディが金で雇っている。荒事を片付ける用心棒として、だ。

デイグラルディは刃さえ恐れなかった。いかに強い男とは言え、このヘルティトという男はバーレイグ。今や宇宙で敵を持たない政府にとって、最も疎ましい存在。そんな男を雇おうという者はいな

い。食うに困らぬ金と住居を与えてやれば、雇い主たるディグラルデイに逆らえるはずはないのだ。

「よもや、手に入れられなかったのではあるまいな？」

「見くびるな。俺は『ステイグマ』を必ず手に入れると言った」

「ならばすぐに渡せ。秘書に金を用意させよう」

ヘルテイトの口元がつりあがった。残忍で冷酷な声が紡がれた。

「何を勘違いしている。俺はステイグマを手に入れると言ったが、貴様にくれてやると言った覚えはない」

「貴様！ 裏切るのか！」

「裏切るだと？ どうやら脳みそまで肉団子のような」

鈍い輝きを放つ刃がだらしなく垂れ下がるアゴの肉を撫でる。ディグラルデイはこの世のものとは思えない怒りの形相でヘルテイトを睨みつけた。

犬歯をむき出しにしたヘルテイトは意識を後方に移した。この太ちよを殺すことなど容易い。キツネを狩るのに比べれば、豚を処刑するだけのこの状態は実に退屈だ。

どうせなら公開処刑にしよう。悲鳴の独奏曲には聴衆が、血と肉片の飛び散る殺戮遊戯には観衆が必要だ。誘いに応じてちょうどいい相手がやってくる。それを迎えてやるのも悪くなくろう。

ヘルテイトは、懷に隠し持っていた人工召喚核を操作した。

道中、天は無言だった。夜も更けて、ただでさえ人通りの少ない郊外は本当に誰もいなくなっていた。エルナ達三人にとってそれは好都合だ。

今回の任務は偵察。ディグラルデイの別荘に出入りしている者が船を襲った黒コートと同一人物かどうか、ミーティアがここにとらわれているかどうかを探るのが目的だ。

クレレの探査術式を用いれば、船に残されていた魔力素の形跡と

この屋敷の付近にある魔力素の形跡を照合して、ここにヘルテイト、ミージェアがいるかどうかはわかる。

別荘の門は手動式だった。高さはそれなりにあるが、魔術的な錠が施されている様子はない。金をできるだけかけないような作りになっているのだろう。それにしても無駄に大きい建物のような気もするのだが。

宵闇を切り裂いて、魔獣の咆哮が響いた。三人はすぐにそれぞれのLPを握って、格子門の外から内側を覗き見た。左右対称で、王冠のような形をしている建物。その中からゾロゾロと、黒い狂犬達が這い出てくる。

次々と湧いて出てくる雑魚の一番奥、まるで番犬のように、一際大きな狂犬がいた。他のヘルハウンド達よりも一回り以上大きな体で、遠目にも胸元に渴いた血が付いていることがわかる。ヘルハウンドが体高約二フィート七インチほどであるのに対し、その親玉は背の高い天と同じくらいの高さを持っている。ガルムと呼ばれるヘルハウンドの上位種だ。

「クー、ここから探査できるか」

「はい！」

クレレは羽根ペンを建物の外壁に滑らせる。白い魔力光が魔導文字を紡ぎ、ルーン言語の文法に従って詳細な探査を行っていく。

与えられた機構と入力に従って探査の術式は結果を出力する。クレレ以外にその文字を読み取することはできない。

「間違いありません。船内にあった形跡と同じ、神経干渉及び炎の術式が確認されました。」

建物自体は単純な構造をしていて、中央をまっすぐ行くだけで広い部屋に出ます。そこに、強い魔力反応があります。それから……」

「充分だ」
エルナは天を見てぎょつとした。十個で一セットにした増幅回路をくくるピンを噛んで引き抜いて、その全てをロットタイプLPの駆動部にセットしたからだ。

普通、ウィンドミル社のLPの駆動部に一度にセットできる増幅回路は四つが限界である。魔術的要素をあまり必要としないエルナの大剣LPはハーフウィンドミルという二式駆動タイプで、増幅回路は一度に二つまでしかセットできない。

LPの販売において圧倒的なシェアを誇るウィンドミル社だが、天が使っているのはウィンドミル社製のものではなかった。クイックキャスト社製のサークル・ラダー・モデルだ。その中でもサークル・ラダー・Xは一度に十個の増幅回路を並列処理できる高機能なものである。

しかしながら、増幅回路の使用は術者に対して身体的、魔術的負荷を強いる。一度に十個扱えるからと言って、それは利点ばかりではなく、むしろそれを扱うことのできる人間は一握りだ。

「遅れるなよ」

天はそう言つて地面を強く蹴った。高い格子門の上にその一ステップだけで飛び乗る。脚部強化の術式だ。それから門の内側に飛び降りる際に別の術式を発動する。

門の前まで迫ってきていたヘルハウンド達はその術式によつて駆逐された。地面から生える無数の銀色の剣が、黒い狂犬達を逃さず串刺しにして息の根を止めた。広範囲に渡る錬金系。増幅回路を使ったとしてもここまでの威力と範囲を持つ錬金系の術式を操れる人間はそういない。

やがて、白銀の剣は地面に吸い込まれるようにして消えていく。ただ一本を残して。

残された一本はそれだけ地面に突き刺さるように柄が上に向いている。疾駆して左手でそれを引き抜き、勢いを殺さずに天は狂犬達の親玉の下まで駆ける。脚部強化が効いているのか、かなり速い。エルナ達がやっとこさ高い門を飛び越えた時には、天はすでにシヨートレンジ圏内にガラムをとらえていた。振り下ろされる黒い剛腕。その断面は人の顔ほどの大きさもある。

なぜ、エルナは断面の大きさを知ることができたのか。それは、

振り下ろされたはずの腕が綺麗に切断されて宙を舞っていたからだ。見えない神速の剣閃が反対の腕も斬り落とし、天はそのまま踏み込んでクロスレンジへ。

「邪魔だッ！」

突き立てられた刃はガルムの胸元に深く刺さった。渴いた血の痕を己のそれで汚しながら、狂犬の親玉は激痛に悶え、高く吼え猛った。

その咆哮の中で、天は消えた。突然姿を消した仇を探すように、血管の浮き出た首と血走った目を動かしてガルムは辺りを見回す。エルナ達のいる方を向いてその視線が固定された。とにかく人間であれば何でも良いのだろう。失った両腕、胸に突き刺さる銀の剣、体の支えをなくして尚、その狂犬は立ち上がった。後ろ脚のみを器用に使って、その頭を月の輝く夜空に向けて持ち上げた。

来るかと思つて大剣を握るエルナだったが、その心配はなかった。その場に縫い付けられたように、ガルムの動きが止まった。叫びをあげることにすら許されず、その原因が明らかになる。

ガルムの胸元、剣の刺さった場所のすぐ近くから、別の剣の先端が飛び出した。一か所、二か所。まるでその獣の体内から剣が生えているかのように、鮮血をまきちらしながら銀の剣花が咲く。

ガルムの奥に、ロッドタイプLPを掲げる天がいた。錬金系術式、固体を操るその魔術によって、剣の形状を変化させたのだ。完全に息の根を止められ、核をつぶされた魔獣の黒い肢体が月夜に溶けていく。

ガルムの体内で大暴れしていた針の玉のようになった銀の剣が地面に落ちて、これも溶けるように消えていった。建物の内部にもヘルハウンドがひしめいているが、天は迷わずにその中に突っ込んでいった。銀の剣を錬成し、迫りくる狂犬を斬り捨てて突き進む。時には右手に握った杖で地面を激しく隆起させて雑魚を吹き飛ばし、左手の剣で行く手を塞ぐ者の首を飛ばす。

「すごい……」

鬼神。作られた命に死を撒き散らしながら猛進するその姿は、鬼神と呼ぶに相応しいほどの圧倒的な威圧感をまとっていた。

「千香さんのことが、ショックだったんですね」

天の頭に血が上っているのは傍から見ても明らかだった。最初に見た印象とは少し違う。仲間の為に怒り、行動できるだけの心の暖かさを、彼は持っているのだ。

「天さんは、優しいお兄さんですから」

今の姿は優しいとは程遠い位置にあるように見えるが、そうではない。クレレの言葉には、そう感じられるだけの説得力があった。

「ちよつとだけ、うらやましいとか思っちゃうこともありますけど」
クレレは穏やかに笑って、目を閉じた。次に目を開いたときには、その瞳には強い色が宿っていた。

「行きましょう。今、冷静でいられるのは私たちだけです」

「うん」

エルナとクレレは、天を追いかけてディグラルデイの別荘に入った。明らかに今回の任務の範囲を超えているが、天を一人で行かせるわけにはいかない。それに、別荘を覆うほどの魔獣が外に出ないようには駆逐するという大義名分もある。

赤い絨毯の上の狂犬達は一掃されて、エルナとクレレの行く手を阻む者はいなかった。

7：裏切りの気配

エルナ達は開け放たれた大きな扉をくぐった。ディグラルディの別荘の中で、おそらく最も豪華絢爛な作りになっている部屋だ。煌びやかなシャンデリアと実用性を無視した高価な材質の暖炉など、目が痛くなりそうな部屋である。

しかしそんなものよりも、エルナ達の目に入ってきたのは恐ろしい光景だった。元々、それが人であったのかどうかさえわからぬ肉塊が血にまみれて転がっている。黒いコートの男が丸いモノを踏みつけて、水分を含んだ何かがつぶされる不快な音がした。

「ヘルテイト……ッ！」

忌々しげにその男を睨みつけるのは、長い銀髪 of 白装束を着た女性。エルナにとっては既視感のある光景。白い装束の脇腹を赤く染めている。レイピアを握ってはいるが、意識を保つだけで精一杯といったところだろう。

「新入り」

エルナより先に来ていた天が低い声で言った。

「そいつとクーを連れてここから離れる。俺はこいつに用がある」

ヘルテイト・バーレイグと対峙する天の背中からは、その場にいるだけで足がすくんでしまうほどの怒気がにじみ出ている。エルナはそれに従う以外になかった。先ほどまでの天の戦いから、彼の実力が圧倒的に自分よりも上であることはわかっている。下手に手を出せば足手まといになってしまう。

そして、ヘルテイトという男の威圧感もそれ以上に感じていた。紅い瞳が放つ独特の殺気は、その目に睨まれただけで全身の毛が逆立ってしまうほどの恐ろしさを持っている。

こんな相手と向かい合うことになれば、秒を要せずに恐怖に押しつぶされてしまうだろう。ヘルテイトはそれほどに恐ろしい男だった。エルナにも、見ただけでそれがわかるくらいに。

白装束の女性は何か言いたげだったが、脇腹の傷の深さがそれを許さないようだった。エルナは肩を貸して、部屋の外まで彼女を連れていった。天を止めるべきか迷ったが、今この場にいる者の中でヘルテイトを止められる者は天以外にいない。

広い部屋の中央にいる天とヘルテイト。部屋の外に出れば、巻き込まれることはないだろう。白装束の女性を壁に寄り掛からせる形で座らせて、エルナは立ち上がった。

「クレレ。艦長達に連絡して、ここまで来てもらおう」

「は、はい……」

クレレは震える手で連絡用の携帯端末を取り出した。ドレッドノートへの連絡は登録した番号を呼び出すために数キーの操作で済むのだが、思うように操作できない。恐怖が指を震えさせ、一つキーを間違うことに焦りが震えを助長する。

「大丈夫。大丈夫だよ。だから、落ち着いて」

そう言いながら、エルナは大剣から手が離せなかった。もし、天が敗れるようなことがあったら、あのヘルテイトとか言う男はこちらにやってくるだろう。そうなったとき、クレレを守るのは自分だけ。天が敗れるような相手にどれだけの時間が稼げるかはわからないが、いつでも剣を振るえるようにしておかなければならない。てのひらに滲む汗が不快だった。

唾を飲み込む音さえ聞こえるほどの静寂の中で、対峙する魔術師が動き出す。

「何の用だ」

「妹が世話になったらしいな。その礼をしに来た」

その二人以外の時が凍りついたような世界。広い部屋の中央、電気的な証明を散乱させるシャンドリアの真下で、ヘルテイト・バレーグと白柳 天が対峙する。

互いに忌々しげに睨みあって、LPを構える。紅眼の男は自在に変化するLPを剣の形状にして、対する白いシャツの青年は愛用の杖の駆動部に増幅回路を十個セットして。

そこにあつた椅子の傍に転がる血塗れの肉塊など、彼らの目に入つてはいない。怒りを以つて挑む天に応えるように、ヘルテイトは剣を振り下ろした。ミドルレンジの間合いからでは刃は届かないが、刃にまとわせた魔術の炎は蛇のように天に向かって飛んでくる。

天は杖の先端を前方の床に向けた。術式の構成はLPにストックしてあるため、増幅回路と合わせて高速で発動することができる。鍊金系の術式に従い、床の材質が変化する。鍊金系は固形物の形状と材質を操作する魔術だ。材質の劇的な変化に耐えきれず、床が地鳴りのような轟音で悲鳴を上げた。

直後、床から銀色の刃が無数に突き出した。天の足元から始まつたその変化は加速しながらヘルテイトの場所までたどり着く。ヘルテイトはそのうちの一つに飛び乗った。そうしなければ、突然の床の隆起に対応できずに体勢を崩し、そのまま剣の山に突き刺さるところだった。

迫る炎の蛇をくぐつて天は駆けた。途中、一本だけ柄が上を向いていた白銀の剣を引き抜いて、ミドルレンジからショートレンジ、そしてクロスレンジへ肉薄するまで秒を要さない。ヘルテイトの剣を白銀の剣で弾き、体勢を低くして跳ねるように相手の顎を蹴り上げる。

爆発。ヘルテイトの爆炎の術式が炸裂して、二人のいた場所が煙に包まれる。天は素早く後ろに跳んで煙から抜け出し、杖を煙の中に向けてもう一度床を隆起させる。鍊金によって生成された三本の鋭い柱が煙から飛び出て天井に突き刺さり、シャンデリアを破壊して落下させる。

ガラスの割れる音が響いて、部屋は明りを失った。大きな窓から差し込む青白い月の光だけが世界を照らした。

紅い光が奔った。炎の柱が三本、煙の中から飛び出て天に絡みつ

こうとする。天はそれをくぐって煙の中へ。直後に響くは激突する剣の金属音の連打。

晴れた煙の中では剣戟が続いていた。刃と刃が交わって甲高い音を奏で、均衡が崩れそうになると押されているほうが魔術で仕切りなおす。

天が神速の突きの連撃でヘルテイトの剣の動きを封じれば、紅眼の左手から炎の柱が襲いかかってくる。それをかわすために後ろへ下がり、迫りくる刃の追撃をいなして床を隆起させる。互いにミドルレンジまで離れて、それから再びショートレンジへ。互いにクロスレンジへ踏み込ませないだけの技術を持ち、相手の動きを常に予測して刃と魔術を繰り出す。

幾度かそれが続いて、もう一度爆炎によって二人が煙に包まれる。天は強化術式で剣を極限の速さで振るう。金属音。受け切れずに後退するヘルテイトに追撃をかけようとして、再び爆炎に阻まれた。

しかし、強化術式が効いているのは剣を振るう腕だけではない。爆炎の中に潜り込んで、岩石さえ貫く鋭い突き蹴りを放つ。ヘルテイトの腹部に突き刺さったが、衝撃を最小限に緩和され、互いに煙の外へ出る。間合いは再びミドルレンジに戻った。

身体強化術式は術者への負荷が大きい。筋肉や骨に無理な負荷がかかって過熱し、その疲労が痛みとなる。しかし、その痛みさえも今の天にとっては燃え盛る怒りに並々と注がれる油でしかない。

再び、ヘルテイトから爆炎の魔術が放たれる。

「イグニス」

「イージス」

つんざく轟音の後、煙が晴れて現れたのは天を守るようにそびえたつ白銀の壁。錬成された全てを防ぐ白銀の盾。その上を飛び越えて再びショートレンジに間合いを詰めて剣戟。刃と炎と白銀が飛び交い、戦いは佳境へ上り詰めていく。

幾度目になるかもわからない爆発と煙。両者は接近し、肉薄し、そして終わることのないとさえ思われた戦いに、終焉がもたらされ

る。

最後に響いたのは金属音ではなく、刃が肉を貫くおぞましい音だった。

「あ……」

あり得ない。こんなこと、あるはずがない。

連絡用の端末を取り落して、クレレはただ目の前にある現実を見つめるしかできなかった。

足から力が抜けて、膝をついた。絶望という鈍器で頭を殴られたようだった。

白いシャツの背中から突き出る、鋭く尖ったアレは何？

白かったシャツの背中を、真紅に染めていくアレは何？

それを言葉として理解するよりも早く、意味が理解された。密かな憧憬の対象ですらあった青年は、自らの腹に突き刺さったそれを引き抜かれて、ゆっくりと——まるで空気の粘性が変わって水中になっってしまったかのように——倒れた。あまりに軽い音を立てて、白銀の剣が転がった。

気が遠くなつた。全てが現実でないような気さえした。頬をくすぐる一筋の涙さえ、自分のものではないように感じられた。

腹を貫かれて倒れた青年を、紅い目が見下ろした。つまらないゴミでも見るように、退屈そうに鼻を鳴らして、踵を返した。月の明かりが差し込む窓へと歩いていく。

クレレの肩が跳ねた。紅眼の男の左腕を、床から飛び出た白銀の刃が貫いたからだ。真っ赤な血の海に横たわりながら、天はしっかりとロッドタイプLRPを握っていた。

「キ、サマア……ッ！」

ヘルテイトは振り返り、貫かれたほうとは逆の手を上へかざした。

LPは刃の形状から元のブレスレットに戻っている。大気を巻き込み、橙色に光る粒子が渦巻いてヘルテイトのてのひらに集まっている。輝きが臨界を超えてそれは炎の玉となって燃え始めた。

ヘルテイトが振り下ろす手に従い、炎の弾が倒れた青年の体を叩いて、爆ぜた。怒りにまかせてもう一発、火炎の術式を組み上げようとする。

「やめて、ください……！」

クレレが振りしぼろうとした声は震え、音にならずに霧散する。吐き出されるのは小さな空気の塊だけ。もう一度、てのひらに火の玉が形成される。

しかしそれは、振り下ろされる前に消えた。紅眼の男は貫かれた手を見て、目を見開いた。銀色の刃が形を変え、腕の筋肉を貫いていく。針の玉になるように、刃から新たな刃が生えていく。

やがて、何かが液体を叩く水音がした。肘から先が完全に切断され、白銀の剣の山とともに床に転がったのだ。ゆらゆらと、倒れそうになりながら、紅い目の男は窓の傍までたどり着き、背中から元々頑丈なつくりになっていなかったであろうガラスを破って外へ落ちて行った。

ここは二階だ。背中から落下すれば、タダでは済むまい。ヘルテイトという脅威がいなくなったことで、暗く広い部屋から、緊迫した空気が消え去った。代わりに残されたのは、血だまりの中で動かない青年。

連絡を受けてノクスが駆けつけた時には、ディグラルデイの別荘は涙と血が流れる悲劇の場となっていた。

駆けつけたノクスの迅速な対応によって、天は病院に搬送された。エルナは、船の自室に戻って崩れるようにベッドに倒れた。

深いため息が沈黙の部屋に溶けて行った。静寂が耳にうるさい。

何か、時計の針が動く音でも良いから、聞いていたい。だけど、声を発するだけの気力さえも残ってはいなかった。

どこで間違っただらう。屋敷に突入しようとする天を、無理やりにも引き留めておくべきだっただらうか。あの場からすぐにも離れて、この船に逃げ帰ってくるべきだっただらうか。

壁に立てかけた大剣が、嫌に遠く感じられた。顔も知らない誰かの名前とともに刻まれた決意が、自分から離れていってしまうような気がして怖かった。

あの悲劇を、ただ立ち尽くして見ているしかなかった。その事実が心を深くえぐり取っていく。何のための大剣だらう。剣を託してくれた誰かは、この剣で何を為して欲しかったんだらう。

ただ黙って、刃に貫かれる背中を見ていることだらうか。絶望と悲しみの涙に背を向けて、虚勢を張ってその場に立っていることだらうか。もしそうなら、剣を振るう意味とは何だらう。

やわらかい人工光で薄い西日が差し込んだような色に染まった天井を見上げた。頭の中でぐるぐると何かが回っていた。後悔のようでもあったし、あるいはそれ以外の何かだったのかもしれない。その正体を考えるほどの余裕は、今のエルナにはなかった。

どれだけ時間が経っただらうか。五分だったのかもしれないし、一時間くらい経っていたかもしれない。ドアをノックする音が響いた。返事をするのも億劫なくらいに参ってしまったが、無視するわけにもいかない。よろよと立ちあがって、ドアまで歩く。内開きの茶色いドアを開けて、返事をする。

「やあこんばんは。お休み中だったかな？」

「いえ、お構いなく」

煩雑な手続きを終えたのだらう。やってきたノクスは柔らかい笑みを浮かべてはいたが、その裏にやや深刻な色——ある種の疲労か何か——を持っているように見えた。ノクスの後ろには、思わず目をそむけなくなるほど憔悴したクレレの姿があった。

虚ろとさえ言える青い瞳が、エルナの心に深く突き刺さった。照

れくさそうにもそと帽子をかぶりなおす彼女はどこに消えてしまったのだろう。アースワームを撃退した時のような、頼もしいとさえ思った声は、どこに消えてしまったのだろう。

「ブリッチまで行こうか。大事な話なんだ」

エルナは立てかけてあった剣をとって、ノクスの後続に続いた。まず目に飛び込んできた光景が悲しかった。初めて来た時のブリッチの賑やかさがまるで嘘のように静まり返っていた。白い人工光で照らされるブリッチは、悲しいくらいに広すぎた。

コーヒーを入れたりもせずに、ノクスはエルナとクレレの二人に座るように促した。艦長はいない。ノクスの話によると、こんな時にどこかに出てしまっているということだった。

エルナの頭に、一つの恐ろしい可能性が浮かび上がってきた。

「あの……」

「まずは状況を説明しておきたいんだ。君の考えならその後で聞くよ」

有無を言わせぬ言い方に、エルナは従うより他になかった。天を病院に送り届けた後、危うくディグラルディ殺害の容疑で捕まることだったこと、白装束の女性が容疑を晴らしてくれたこと、クレレと一緒にもう一度ディグラルディの別荘に行ったこと、ヘルティが飛び降りた場所に転移陣が描かれていて、クレレがそれを探査したことによってヘルティの居場所がわかったこと。

そのどれもがエルナの最悪の想像を否定してはくれなかった。むしろ、肯定する材料になり得てしまった。ノクスは必要な情報を話し終わると、エルナに話すように促した。言ってしまった良いものかどうかエルナはずっと迷っていたが、やがて決意した。

「ボクの思い過ぎなら良いんですが……艦長が今どこにいるか、わかりますか？」

ノクスは黙って首を横に振った。ドレッドノートの艦長、本川玲菜は今、行き先も告げずに船を下りてどこかへ行ってしまったという。

「艦長が、ヘルテイトと内通していた、ということは、考えられませんか」

ノクスの目が鋭くなった。クレレも信じられないと言った表情でエルナを見た。

「そう思う根拠は、何だい？」

「議事堂城下町襲撃事件の時、ヘルテイトはどうして都合良くメンバーの留守中にこの船に来ることができたんでしょうか。」

ヘルテイトが襲撃事件の共犯者だというのはベズヴィルドの証言からわかっています。もし、ヘルテイトの目的が最初からこの船のミーティアを連れ去ることだったとしたら、防衛師団がドレッドノートに援軍を依頼することを最初から知っていたことになります」

「なるほど、玲菜ちゃんがヘルテイトと通じていたなら、つじつまは合うね。出撃メンバーを決めたのは玲菜ちゃんだし、師団長とも親交があつた彼女なら、議事堂城下町を襲撃すれば防衛師団が援軍を依頼してくることくらいは予想がついただろう」

新参者が失礼なことを言うなと一蹴される可能性も考えていただけに、ノクスが話の筋をしっかりと理解してくれたのはエルナにとつては心強かった。だが、クレレは違った。

「玲菜さんに限って、そんなこと、あるはずがないのです！」

震える声と今にも泣き出してしまいそうな目。両手を机について、勢いよく立ちあがりながら言ったクレレは、唇を固く結んでエルナを睨んだ。怒りと悲しみの入り混じった感情が、エルナの心に重くのしかかった。

「ボクだって、こんなこと信じたくない。だけど、根拠はこれだけじゃないんだ」

エルナはクレレの目をまっすぐ見た。自分に向けられる敵意が辛かったけれど、全て話さなければならぬ。そうしなければ、残されたこの二人だって危ないかもしれないのだ。

「城下町襲撃事件の時、艦長は犯人がベズヴィルドだって知っていたんだ。あの時はハーヴィ中將から聞いたって言ってたけど、本当

はそうじゃなかったのかもしれない」

それからノクスに向きなおって、エルナは一番大事なことを話す。「今までの流れを見ると、ドレッドノートの戦闘員が一人ずつ狙われているように見えるんです。」

カリダの遺跡でミーティアがアースワームと魔導砲を打ち合って魔力枯渇になりました。

千香さんが船に襲撃したヘルテイトによって負傷しました。天さんがヘルテイトと戦って負傷しました。その時はボクもクレレもいませんでしたけど、戦力として数えられていなかったんだと思います。

そして、白装束の人がいなかったら、ディグラルディ殺害の罪を着せられてボクやクレレ、ノクスさんが捕まってしまうところだった」

「戦力を分散させて一人ずつぶしていく、か。そう考えると、毎回出撃メンバーを自由に決定できた玲菜ちゃん是十分怪しい」

目を閉じて思考を重ねたノクスは立ち上がった。彼が要点をまとめてくれるおかげで、エルナも自分の考えにだんだんと確信が持てるような気がした。信じたくないことではあるが、この考えが正しいかった場合、覚悟を決めておくに越したことはない。

クレレは下を向いて震えていた。エルナにとっては辛いことだが、ここで覚悟を決めておくことは、彼女を守ることにもつながる。

「どうだろう？　すぐにでもヘルテイトの居城に乗り込もうと思うんだけど」

確かに、艦長のいない今を逃せば機会はないような気がした。ノクスの口ぶりでは、一人でもヘルテイトのいる場所まで行くつもりでいるようだった。

エルナが戦力として数えられていない以上、次に狙われるのはノクスだろう。エルナは少しためらったが、立ち上がった。自分の剣で誰かが救えるなら、その機会は逃すべきではない。ヘルテイトに連れ去られたミーティアだって、ひょっとしたら助け出せるかもしれない。

「私は、行きません」

クレレがうつむいたまま言った。

「私は、玲菜さんを信じています。だから、ここで待ちます」

クレレの顔から、何か光るものが落ちて弾けた。ノクスは玲菜が裏切り者であると仮定した上で行動を提案した。玲菜を待たずに行動することが、クレレには許せないのだろう。

「良いよ。君がそうしたいなら、ずっとここで待っていると良い」

クレレをまっすぐに見たノクスの言葉は、驚くほど冷たかった。

その言葉を向けられたクレレだけでなく、エルナさえも責められていると感じてしまうほどに。

顔をあげてノクスを睨んだクレレの顔を見て、エルナは胸が締め付けられるような気がした。あふれた涙が頬を伝って、それでも青い瞳は悲しみをこらえてまっすぐノクスに向けられている。口は言葉を押し込めるように固く一文字に結ばれて、しかしその表情がどんな言葉よりも痛切に彼女の気持ちを語っていた。

ノクスはその瞳に睨まれても、決して己を曲げようとしなかった。やがて、クレレはブリッヂから走り去ってしまった。追いかけるべきかと思つてエルナも走りだそうとするが、ノクスに肩を掴まれた。

静かに首を振ってから、ノクスは言った。

「あの子は優しいからね。玲菜ちゃんを疑うこともできないし、かと言つて僕達を嫌うことだつてできない。今は僕達は何を言つても、あの子を傷つけるだけだ」

ブリッヂの出入り口のほうを見つめるノクスの顔を見て、エルナは悟った。二人とも、優しいのだ。その優しさが食い違つて衝突して、それでもまだ優しい気持ちを捨てられない。だから、クレレはこの場にいることに耐えられなかった。

ノクスだつて、これ以上クレレに冷たい言葉をぶつけることはしたくなかつたのだろう。少しだけ安堵の意味を込めたため息をついて、立ち上がった。右手首につけたメタリックグリーンのお小さなバングルに軽く触れて、その形状を変化させる。

どうやら、ノクスはメタモルの使い手らしい。剣、槍、槌などに変化させてLPに異常がないことを確認して、エルナのほうへ振り返った。

「君はどうする？ かなり危険な戦いになるかもしれない。研修生である君が、無理についてくることはないよ」

これは最後の確認。ここでの答えが、未来を決定づける。エルナにはなんとなくそれがわかった。ノクスはそれだけ真剣だったし、エルナもこの機会を逃せばもう二度と剣を振るえない気がした。

「いえ、ボクにも行かせてください」

ノクスは小さくうなずいた。二人は船を下りて、目的の場所へ向かうことにした。船に残っているのは怪我をした千香とクレレだけ。それが少し気にかかるが、大丈夫だろう。次に狙われるのは十中八九ノクスなのだ。

そして、ノクスはそれさえも見越して、クレレを置いていくような状況を作り出したのだろう。すれ違う優しさが悲しかったが、エルナは振り向かないことにした。ヘルテイトと戦うことはできないかもしれないが、ノクスのサポートくらいならできるだろう。

今できることを剣とともに為す。恐れてばかりではいけない。自分の中に確かに芽生えた決意を感じながら、エルナはノクスとともに歩き出した。

夜中と早朝の間、第四区画の中央惑星の首都には、太陽も月も見えなくなる深淵の時間が存在する。人工の軌道で人工の間隔で回る月の見える時間は、夜の間であるというのは決まったことだが、それでも衛星軌道を完全に操ることはできない。夜から朝にかけて、月と名付けられた巨大衛星が見えない時間帯が存在する。

従って、この白い廊下には外から欠片も光が差し込まない。人工光もロビー付近の一幕を除いて全て消灯している。本川 玲菜はそ

んな暗い場所に来ていた。

金色の碇マークの刺繍が左胸に施された紺色の制服を着た彼女は、この場所に相応しい制服——白衣——を着た男性と向かい合っていた。男性は玲菜よりも少し年上なのだがそれを感じさせないような清潔感を持っていた。腕を組んで玲菜と話す彼は、二十代と言っても十分に通るだろう。

「天ちゃんは面会謝絶にすること。それと、絶対に外に出さないでね」

「あの状態じゃ立ち上がることでだってままならんと思うがね。まあ、玲菜ちゃんの頼みならしゃあない。良いだろう。彼はきっちり閉じ込めておこう」

おそらくは医師であろう彼は、玲菜の要求をすぐに飲んだ。玲菜は軽く礼を言ってから病院を出た。役所の近くに停泊しているドレツドノートのほうとは、逆の方向へ歩き始めた。

くるくると人差し指にひっかけてハンドガンを回す彼女の足取りは軽い。作戦がもうすぐ完遂されるのだ。空の明かりが消えた闇の中で、彼女は小さく笑った。

「が、ああ……！」

ちぎれた腕が痛む。肘から先を失った左腕を抑えて、ヘルテイトは低く唸った。右手に付けたブレスレット型のLPを失わなかったのは不幸中の幸いか。

もっと力が必要だ。宇宙の中で最も優れたバーレイグという一族として、辺境の錬金術師風情に屈するわけにはいかない。そのような事実が存在してはならない。

炎の術式を組み上げて、ちぎれた腕にかざす。焼けつく痛みが体の感覚を塗りつぶして、皮膚を溶かしていく。溶けた血管をつなぎ合わせ、溶けた皮膚を張り合わせて、元からそうであったようにし

てしまう。

バーレイグは古来より人工遺物を管理してきた、選ばれた一族。敗北などという事実は認めない。失ったのはただの飾りだ。頭の中をめぐるのは強い選民思想のみ。

痛みからようやく解放された意識で、ゆらゆらと暗い廊下を歩く。悔しいが、失った血の量が多すぎて幻覚術式は小規模なもの以外、維持できそうにない。このアジトを隠すための術式を維持できない。忌々しい。元々、人目に付かないような場所にあるとは言え、『ステイグマ』を継承する儀式に邪魔が入る可能性の存在する余地が生まれてしまうことが気に食わない。

たどり着いたのはドーム状の空間。主の帰還を迎えるように、橙色の明かりが暗闇のドームを照らした。宇宙の始まりを模した炎の炸裂。永遠の輝きを象徴する太陽のように、ドームの頂上に橙色の光を発する球体が浮かぶ。

それを作ったのが自分であることさえも、今のヘルテイトにとっては忌々しい。永遠の輝きを求めるということ、それはすなわち、輝きを失うことを恐れることに他ならない。宇宙で最も優れた一族が、暗闇を恐れたりなどするものか。

ドームの中央には儀式のための十字架に張り付けられた現在の『ステイグマ』の所持者がいる。ベージュ色の大きな三角形の襟のついた制服を着ている少女。確か、名前はミーティアとか言ったか。

『ステイグマ』というインテリジェンス・ウェポンはそれ単体で奪ったとしても意味がない。固有の手続きを踏んでそれを支配下に置かなければならない。一つのインテリジェンス・ウェポンに対し、二人以上の所持者が存在することは絶対の法則として認められない。それを継承するためには儀式を行う必要がある。かつて、この娘が愚かにも行ってしまったように。だが、それも今となっては良いそのおかげで『ステイグマ』の暴走は少しばかりおとなしくなったのだ。

全ては『ステイグマ』をバーレイグの管理下に置くため。万に一

つの失敗さえも許されない。儀式の後はいよいよ身動きが取れなくなってしまう。故に、儀式を邪魔する恐れのある可能性は全て排除しなければならない。

幸い、連中の戦力はだいぶ落ちている。こちらに向かってくる者も二人だけだ。この情報は信頼できる。召喚核を操作して、守護者を呼び出す。四本の腕を持つ魔人。意志を持たぬゴーレムの最も優れた姿。ヘルテイトの二倍から三倍はあるつかという背丈の黒い魔人は、感情のない目を開いた。

こいつがいれば、しばらくは安心だろう。紅い目の男は壁に背を預けて、座り込んだ。静かに目を閉じる。やがて訪れるであろう戦いに備え、万全の状態にしておかなければならない。

連中さえどうにかしてしまえば、『ステイグマ』の継承を邪魔する者は誰もいなくなる。橙色の光が満ちるドームの中で、紅眼の男は小さく笑った。

8：紅い弾丸の行方

第四区画中央惑星の夜が明ける。人工の太陽が首都郊外の暗闇を切り裂いて、朝の訪れを告げる。

第四区画はこの中央惑星であつても開発の済んでいない場所がある。岩肌がむき出しになつた崖の下、木々に囲まれた誰も来ない場所に、その扉はあつた。

魔術的な隠蔽があつたり、クレレの探査がなかつたりしたらこの場所は絶対にわからなかつただろう。崖下の壁に固く閉ざされた鉄の扉がある。転移陣の解析で、ヘルテイトがこの場所まで転移してきたことがわかつている。

この中に、ヘルテイトがいるのだろう。そしてミーティアもここにいるかもしれない。

とりあえず扉を押したり引いたりしてみるが、物理的に錠が施されているようで、重たい鉄の扉は動く気配がなかつた。だが、幸いにもこれは内開きのようだ。

エルナは背負つた大剣を引き抜いて、増幅回路をセットした。青い光の線が刃の周りに円を描き、魔法陣を形成する。武器と身体能力を強化する術式が組み上がり、エルナは大きく踏み込んだ。

大剣の本分はその破壊力。剣ではあるが、斬ることよりも潰したり砕くことに特化しているため、多少分厚いだけの壁なら問題なくぶち抜くことができる。

轟音が響いて、衝撃の強さを物語る。固い扉を叩いているのだから反動も強いが、身体強化の術式によってエルナはそれを感じずにいられる。鉄の扉が悲鳴を上げながら一瞬でひしゃげて、中央に穴が開いた。

ノクスの言つた通り、魔術的な施錠はなかつた。ヘルテイトは天との戦いで左腕の肘から先を失っている。魔術を操る者にとって手を失ふことは致命的だ。たとえそれが利き手でなくとも、術式の緻

密な構成が困難になる。今のヘルテイトに、魔術による施錠を行うだけの力は残されていないのだろう。

朝日の差し込まない暗い廊下に入って、エルナとノクスは警戒しながら歩き始めた。道の幅は二人が並べるほどではあるが広くはなく、心臓が食い破られるかと思うほどの圧迫感で二人を攻め立てる。夜明けの薄暗い場所から来たので暗闇に目が慣れるのは早い。だが、それは決して良いことではないと、二人はすぐに悟ることになった。たどり着いたドーム状の空間には橙色の眩しい光が満ちていて、目をくらませた。

大剣で光を遮ったのは、暗い廊下を歩いてきた警戒心のおかげか。剣に重い衝撃が加わる。その場に踏みとどまることができずに、エルナは後ろに押し戻される。剣ごと横に投げ飛ばされ、壁に激突して全身の骨が嫌な音を立てた。

追撃を予測して咄嗟に前へ転がる。エルナがいた場所に四本腕の黒い爪が突き刺さった。こちらは任せるという旨のノクスの声を聞いて、エルナは青眼に構えて突然襲いかかってきた黒い影を睨んだ。エルナの背後、ドーム状の空間から漏れる橙色の光に照らされて、全身が黒い絵の具で塗りつぶされたような魔人の姿が明らかになる。身の丈はエルナの三倍近く、腕を四本持つ以外は人間とさほど変わらない体をしているが、それでも発達した筋肉の威圧感はすさまじい。黒い魔人が四本の腕を壁から引き抜いて、エルナを見据える。口と思われる場所から、低いうなりが聞こえてきた。

壁には四本の腕によって碎かれた痕がしつかりと残っていた。まともにあれの攻撃を受けようと思っただけはいけないようだ。魔法生物の中でも上位の、ゴーレムの一種だろう。種にもよるが人並みに魔術さえ使いこなす厄介な相手だ。

左に小さく剣先を振る。相手の意識がそこに集中した瞬間を見計らって、思い切り逆方向へ剣を引いて、体勢を低く踏み込む。右から左へ。薙いだ剣は確かに黒い影の胴をとらえた。巨体が壁に叩きつけられ、エルナは隙を最小限に抑えるためにそのまま前へ進んで

方向転換する。大剣は重量があるので、剣の向きを変えるよりは持ち主の体の向きを変えたほうが隙が小さくなることも多いのだ。

ちょうど、入口に背を向ける形になる。黒い影の後ろを盗み見ると、すでにノクスとヘルテイトの戦いが始まっていた。ドーム状の広場の中央に、十字架が置いてある。それに張り付けられている少女の姿を確認して、エルナは剣を構えなおした。増幅回路をセットする。再び青い魔法陣が剣とエルナの身体能力を強化する。

短時間のうちに増幅回路を二回も使うのは負荷が大きいですが、能力的にエルナは相手より劣っている。次の一撃で決めなければ、勝ちはない。

大剣を担ぐように構えて、体勢を低くして駆ける。迎え撃とうとする四本の腕をかわして高く飛び上がり、渾身の力をこめて振り下ろす。魔人の左肩から深く斬り込み、そのまま反対側まで押しつぶすように刃を進める。もう少し。気合の声をあげて柄を握る手に力を込めた。

直後、エルナの体は宙を舞った。何が起きたのかさっぱりわからなかった。わからないうちにエルナは空中に投げだされて、背中を地面に向けた状態で最高点に達する。時間が止まったような気がした。

暗い廊下の天井は意外にも高い。どのくらい高く跳ね上げられたのかはわからないし、どうしてこうなったのかもわからない。ただ一つ、エルナの目の前にはただ一つの事実がある。四本腕の黒い魔人がすでに天井の前に待ち受けていて、炎の魔術を行使しようとしているという恐ろしい事実が。

四本のうち、右上の腕がゆっくりと振り下ろされる。握られていたのは赤々と燃える炎の塊。剣を模した爆炎の集合体。まるで炎ではなく実体のある物質であるかのように、投げおろされた炎の剣はまっすぐにエルナの体を貫く。

「が……ッ！」

声を上げることすら許されなかった。熱い、と感じたのも一瞬だ

け。実際には質量を持たない灼熱の炎が突き刺さった瞬間、時間の流れは一気に加速した。

激しい炸裂音が響いて、エルナは背中から床に激突した。うずくまってしまうようになるような鋭い痛みが背中全体に広がって、頭を打って脳震盪を起こしながら胸の辺りが焼ける痛みに顔を歪める。手元から離れた剣が床に突き刺さって鈍い金属音を発した。

制服にはある程度防御の術式が施されているが、それは傷を防ぐものであって痛みを防ぐものではない。熱いという感覚は一瞬で焼き切れて、エルナの全神経を痛みだけが支配した。

こうなってしまうては視覚や聴覚はアテにならない。顔に吹き付ける強い風を感じて、エルナは咄嗟に音が聞こえたほうへ転がった。うつ伏せになって両手で地面を弾き、立ち上がりながら後ろへ下がる。ちょうど剣が刺さっていた場所を通ったので、床から引きずるようにして引き抜いた。

重量のある剣を持ち上げて構えるのがひどく辛い。立っているのもやっとで、視界がかすむ。全身を蝕む激痛の感覚に、意識を手放しそうになる。だが、ここで倒れてはいけない。

ここで倒れたら、ここまで来た意味がない。ミーティアを助けることもできないし、ノクスにだって迷惑がかかる。こいつだけは、倒す。

残された力を振り絞って大剣を担ぎ上げ、先ほどまでエルナが倒れていた場所に腕を突き刺す魔人に向けて駆ける。モノの数歩でたどり着いてしまうような距離がひどく長く感じられた。刃が振り下ろされて、戦いは決着を迎える。

橙色の明かりに照らされる広いドーム状の空間の片隅で、床が激しくえぐり取られた。背の高いノクスの身長と同じくらいの長さを持つ柄と、その先端に取り付けられた樽型の重量感のある頭部。こ

の大槌が直撃すればそれだけで戦いは終わっていただろう。

その武器を軽々と持ち上げて、ノクスは柄を軽く撫でた。メタモルのモードチェンジャーが起動し、槌が徐々にその形を変えていく。長い柄はそのままに、樽型の頭部が鋭くとがった刃に変化する。空気を巻き込むように柄を軸にして回転させ、その先端をヘルテイトの心臓に向けた。

刺突。直線的だがその速さは重量のある槍とは思えないほどのものであり、ヘルテイトはそれをかわすだけで反撃に移ることができない。今度は槍の刃の部分が長くなり、逆に柄が短くなって騎士剣の形状へ。

無骨でありながらもその刃は冷酷なまでの美しい輝きを放ち、斬ること、突くこと、叩き折ることのいずれにも対応した力の象徴としてヘルテイトに迫る。狙うは首のみ。撫でるだけでも頸動脈を切り裂いて死に至らしめるであろう残酷な剣の軌道は、しかし首の骨ごと叩き斬ろうと深いところまで迫っていた。

すんでのところまで剣で弾こうとするが、その勢いを殺しきることはできず、ヘルテイトは衝撃で床を転がることになった。

「僕は天ほど優しくないからね。生き長らえようと思うなら必死で逃げたほうがいいよ」

そう言いながらも、ノクスは死の刃を繰り出し続ける。コーヒーを飲む時と同じような穏やかな表情で、武器を振るう。一撃ごとのインターバルは天のものに比べて長いが、重さはノクスのもののほうがある。

対するヘルテイトは、手にした剣でなんとか襲い来る連撃を受け流して後退することしかできない。やはり、片腕の肘から先を失ったのは大きな打撃だった。

両手で扱う騎士剣の攻撃を、片手しか扱えないヘルテイトの剣でまともに受けようとするほうが無理だ。無理をすれば剣が叩き折られてしまうし、片腕が半分失われた今、ヘルテイトは体のバランスを保つことさえ難しい。体勢を崩されないように、しかし剣が折ら

れないように戦おうとすれば必然的に攻めを意識することはできなくなる。

翻られるように後退させられていく現状に対し、ヘルテイトの表情に苛立ちが浮き出てくる。しびれを切らせたヘルテイトは大きく後ろに跳んで、剣を横薙ぎに振るった。炸裂する炎の魔術。あまり破壊力の強いものではないが、爆発によって相手を攪乱し、仕切りなおすことができる。

「バーレイグを、ナメるなアツ！」

メタモルを元のブレスレットの形に戻し、煙に包まれたノクスに向かつて、ヘルテイトは更に強力な爆炎の魔術を放つ。一発、二発、合計三発。鼓膜を突き破らん程の乱暴な爆発音がドーム状の空間を支配した。

「あ、がッ……！」

淡い緑色の鋭い残像が奔って、直後、ヘルテイトは右肩を何か鋭いモノに撃ち抜かれていた。煙が晴れて、そこに悠然と立つノクスの姿が見えた時、ヘルテイトの表情は怒りに塗りつぶされた。

「そうカツカしないですよ。この僕が」

もう一撃、破壊系術式によって形成された淡い緑色の魔力の矢をつがえて、手元にあるメタモルが変化した姿、弓を引き絞る。

「君と死神の間でキューピッドやってあげようって言ってるんだ」

放たれた矢は閃光のごとく、肉眼で観測することが不可能な速さでヘルテイトの左肩に命中する。破壊系術式は魔力素をそのまま破壊のエネルギーとして用いる単純にして最も威力のある攻撃魔法の系統であり、その直撃は固い金属の武器と同等もしくはそれ以上の破壊力を誇る。

ヘルテイトの両肩は魔力の矢に撃ち抜かれて、しかし傷跡が確認できなかった。あまりに細く鋭いモノに、あまりに素早く貫かれたために筋肉が収縮し、傷口を塞いでしまったのだ。

本来、ボウタイプのLPは実戦に向かない。より素早く攻撃可能で様々な状況に対応できるガンタイプのLPが存在する以上、引き

絞る隙など無駄の多い弓型のLPはもはや競技用以外での需要がない。

だがノクスは、メタモルの一形態としてではあるが、それを使っている。なぜか。

「さあ、次はどこを撃ち抜こうか。一思いに心臓が良い？ それとも、両足も封じて豚の丸焼きにしてみようか？」

ノクスの表情はコーヒーを飲むときとまったく変わらない。穏やかで落ち着いていて、一欠片の乱れもない。コーヒーと同じようにこの狩猟を楽しんですらいる。弓を使うのもそのためだ。弦を引いて狙いを定め、貫かれた傷を押さえて悶え苦しむ獲物を見て楽しむために、弓という使いづらい武器を選んだのだ。鋭い刃よりも刃こぼれたモノのほうが傷口をより残酷にえぐるように、獲物をいたぶるのは性能のよくない武器であればあるほど良い。猟奇的な嗜好が込められた矢が、放たれる。

再び放たれた矢はヘルテイトには直撃せずに、その脇の壁に鋭い穴を開けるにとどまった。二人のいる場所はいつのまにかドーム状の空間から離れていた。ヘルテイトが後退を続けたことによって、エルナとノクスがここに来た時のものとは違う廊下に来ていた。

道幅は広く、しかし明かりは少ない。ドーム状の空間からわずかに橙色の明かりが差し込んでくるだけの薄暗い場所だった。淡い緑色の魔力光が筋を描いて、ヘルテイトの足元にもう一つ鋭い穴を開けた。

ドレッドノート
「僕達恐れなき者を敵に回して、勝者になれるとは思わないほうがいい」

もう一度放たれた矢と炎の魔術がぶつかって、対峙する二人の真ん中で激しい爆発が起こった。ノクスは爆炎の中に更に矢を放つが、当たった感触がない。

溢れていた殺意と殺気がこの場から消えている。

「さて、いつまで逃げられるかな？」

逃げる獲物をすぐに追いかけるようなこともせずに、ノクスは小

さく笑った。

「あ、か……ッ！」

再び床に突き刺さった大剣。背中に触れる床が冷たいと思うことすらできないほどに、痛みと苦しみが全神経を支配する。四本のうちの一本につかまれた首は、喉にある食道や気道が前後でぴったりとくっついて、死を意識させられた。

首の骨をへし折られて終わるのか、このまま息ができずに窒息で死ぬのか、自由な三本の腕で殴り殺されるのか、未来はわからないが、とにかくこのままでは確実に人生に幕を下ろされてしまうことはわかった。

魔人の二本の腕におさえこまれて身動きは取れず、呼吸のできない状況が酸素の供給を止めて思考を蝕んでいく。視界が霞み、目の前の世界が暗闇に包まれていく。

やがて苦しいと感じることもできなくなり、全身から力が抜けて、瞳は完全に閉じた。走馬灯も諦念も、何もない。これが死ぬことなのだとおぼろげに感じて、

「う、けほっ……」

エルナは次の瞬間、喉を押さえていた。反射的にそうしていた。前後に押しつぶされてくっついてしまっていた喉が解放されて、呼吸が戻ってきた。足りない酸素を補うように大きく息を吸い込んで吐き出し、なんとか正常な状態に戻ろうとする。

魔人の姿はすでにエルナの視界にはなく、ドームの天井にある橙色の光が徐々に失われていくのが見えた。ノクスがヘルテイトを倒したのだろうか。そうであるなら、召喚主を失った魔獣が姿を保てなくなったことの説明はつく。

上体だけ半分起こして見ると、魔人は地面に倒れ伏し、ゆっくりと灰になって消えていくところだった。安堵したと同時に力が抜け

て、エルナはまた背中から床に倒れた。

「いたっ……」

頭をぶつけた。ゴロンと、頭の向きを変えてドームの中心にいるミーティアを見る。十字架に張り付けられているが、どうも今まで眠っていたらしい。彼女を解放しないことには、今回の目的は果たされない。這うようにして大剣の刺さった場所までたどり着き、それを杖にして立ち上がった。

足に力が入らなくて、がくがく震えた。自分の膝につられて、エルナは力なく笑った。顔の筋肉の制御もできないくらいに疲労しきってしまった。だから、今まで見えなかったのだろう。自分より早くミーティアに歩み寄る、白装束の影と、魔人の残骸に突き刺さっていた鋭いレイピアが。

「あ、ありがとうございます」

魔人に刃を突き刺して助けてくれたのだろう。全身が震えてしまつて、声になっているかどうかも怪しいが、確かにその言葉は届いたらしかった。白装束の背の高い女性はレイピアを床から引き抜いて、エルナに振り向いた。

冴える銀の刃と雷のような気迫を秘めた瞳がエルナをとらえた。その女性が放った言葉は、エルナの安堵を奪い去るのには十分すぎるほどの重苦しさを持っていた。

「礼を言うな。私はミーティア・エンシスハイムを殺しに来たのだ」

あり得ない。ヘルティト・バーレイグが考えられるのはその短い五文字だけだった。

それ以上のことを考えようとしても、頭の中ではそれを拒んでしまった。

こんなことは、あり得ない。『こんなこと』が具体的に何を意味しているかすら、考えたくない。考えてしまつたら、自分が自分で

いられなくなる。

予め用意しておいたもう一つの脱出口。ここなら、厄介な追手も来られないだろう。どうせ、『ステイグマ』のところに魔人を置いてきたのだから、先ほどまで弓を構えていたヤツもそちらに向かっているに違いない。

思い出すだけで腸が煮えくりかえるようだった。左腕のひじから先を奪われ、次は両肩の自由を制限された。無理に動かそうとすれば、先ほど鋭い矢で射抜かれた痛みが全ての感覚を塗りつぶす。

傷を負ったばかりか、『ステイグマ』さえも奪い返されてしまったことになる。ひつついてきた小さい剣士はともかく、あの弓使いは魔人程度で太刀打ちできる相手ではない。もう少しで継承の儀式を行って、正式に『ステイグマ』を自らの支配下に置くことができるというのに……。

郊外の森に朝の風が吹いた。過熱した思考を冷やして、全身の筋肉を覚ましてくれる。傷には少ししみるが、このくらいでなければ意識を手放してしまいそうだ。

落ち着いてこれから先のことを考えなければならない。ヘルティトは目を閉じた。まず、意識を蝕む傷を癒さなければいけない。治癒促進術式を用いれば二週間、いや、一週間で完治するだろう。それから、あの連中を出し抜いてステイグマとその所持者を奪い返す。そこまで考えてから目を開けて、ヘルティトの思考は凍りついた。差し込んでいたはずの朝日が、何かに遮られて自分のいる場所が陰になっている。それが何であるか理解する前に、額に冷たい鋼が突き付けられた。

「ハロー。バーレイグの落ちこぼれさん」

「な、なぜだ……！ 貴様がここに来られるはずが……！」

あり得ない。ドレッドノートにいた者達の中でここに向かったのは二人だったはずだ。それなのに、なぜこの女がここにいるのか。落ち着きを取り戻しかけていたヘルティトの頭の中は完全にそれを失って混乱し、思考は先に進まずに同じ五文字を堂々巡りするだけ

になった。

紺色の制服、左胸に金の碇マークの刺繍、船長の証たる特徴的な帽子。そして、ヘルテイトにハンドガン突き付ける本川 玲菜の瞳は、流れる血のような深紅。爆ぜる炎と同じ、紅の色。

「一族の恥をさらしてくれたのはどうでも良いんだけどね。冥土の土産に教えといてあげるわ。あなたが何を間違っちゃったのか」

カチリ。冷たい鋼の、嫌な音が響いた。拳銃の安全装置を親指でゆっくり解除する音だ。

「喧嘩をふっかける相手の選び方よ」

紅い目で猟奇的に嗤いながら、レイナ・バーレイグは引き金を引いた。

どうして、こんなことになってしまったんだろう。頭がずきずきと痛む。けれど、その痛みも長く続きすぎて麻痺してきた。医務室のベッドの前で丸椅子に座り、クレレは眠る千香の顔を見ていた。足の傷が痛むのか、寝顔にも苦痛の色が滲んでいる。

膝の上で握りしめた手に、力が入った。そうしていないと、涙が出てきてしまいそうだった。とても幸せな居場所、楽しかった毎日が、バラバラに引き裂かれた。

姉のように振る舞ってくれた千香は、怪我をして眠っている。ミィティアはどこかへ連れ去られてしまった。ぶっきらぼうだけど誰よりも優しい天は、ひよっとしたら助からないかもしれないほどの深い傷を負った。

自分にこの居場所を与えてくれた玲菜は行き先もわからないまま、一緒にミィティアを助けようと決意したエルナはその玲菜を疑い、ノクスもそれに同意した。皆の心が離れて、ドレッドノートという一つの家族が壊れてしまった気がして、辛い。

「ん……クレレ？」

「千香さん……」

千香が目を覚ました。自分以外の誰かがこの場にいるということを実感できるから、千香が目を覚ましてくれたことはとても安心できる。だけど、安堵の陰から不安が顔をのぞかせていることもわかった。

「私、また寝ちゃってたんですね。他の皆は、どうしてますか？」
こう聞かれることが目に見えていたから。他の皆と言っけれど、千香が一番気にしている人を、クレレは知っているから。千香がその人を見る時の目が、他の人に向けているものと違って特別なことを知っているから。

玲菜以外に家族と呼べる存在がいなかったクレレにとって、兄弟とは未知の存在だった。玲菜は自分を引き取ってくれただけで、姉にはなり得なかったから、千香が姉のように接してくれるのはとても嬉しいことだった。姉とはこういうものなのだろうとわかった。だけど、その千香が特別な視線を向ける相手は、兄という存在はわからなかった。千香がその人に向ける視線もその人が千香を見る目も、他に向けられるものとは少し違っていたけれど、どうして違うのかはわからなかった。そういった未知の部分に、兄弟という関係そのものに、憧れていたのだろう。

けれど、その人は……。クレレはそれを言葉にしなくてはいけない状況を恐れていた。

「みんなは……」

声が震えている。自分でもそれがわかるくらいに震えている。続きを紡ぐとしても、口の中が乾いてしまっってうまく言葉が出てこない。

一度深く呼吸してから、絞り出すように、続ける。

「みんなは、ミーティアさんを連れ戻すために外に出ました」

ウソにはなっていない。けれど、質問の答えにもなっていない。千香とクレレ以外のメンバーは皆、確かにミーティアを助け出すために外に出た。だが、今どうしているかという問いの答えにはなら

ない。勿論、ノクスやエルナはそういう目的もあってヘルテイトのいる場所まで行ったのだろうが、玲葉はどこで何をしているかわからないし、天は病院にいるはずだ。

なんて、ずるい。千香が傷つく姿は見たくない。だけど、ウソは言っていないという安心感も欲しい。自分勝手に、だけどそれが千香にとっても最善じゃないかと自分に言い訳する自分が嫌だった。

うつむいていると、手を掴まれた。何ごとかと思つて顔を上げる前に、クレレは引つ張られてバランスを崩し、千香のベッドの上に倒れ込んだ。髪を優しく撫でられ、背中を優しく心地よいリズムで叩かれた。

「クレレは、優しいですね」

「う、あ……」

せきとめていたものが両目から溢れてきた。千香の胸に顔をうずめて、泣いた。声もあげずに、熱を帯びた吐息と涙だけを吐き出した。

どれだけそうしていたか、背中を叩く心地よいリズムが気の高ぶりを鎮めて、震えていた呼吸も落ち着いてきた。なんとなく気恥ずかしくて、制服の袖で涙をぬぐつて千香から離れようと、手で胸を押した。

顔を離れた直後、額にこつんと何かがぶつかって、目の前に千香の顔があった。

「やっぱり、少し熱がありますね。横になったほうが良いかもしれません」

「……はい」

ずるい、と思つた。今度は自分に対してではなく、千香に対して。「何か言いたそうですね？」

「千香さんも、たまには甘えてくれればいいのに、と思つただけなのです」

ずるいと思つたから、少し口をとがらせて拗ねてみせた。

いつも、甘えるのはクレレ。というよりも、千香にそう仕向けら

れているような感じがしている。姉のように、クレレの甘えまいとする心の壁を簡単に崩してくるのだ。千香はいつも生真面目で、甘えたりなんかしないのに。

「甘えてますよ。クレレに甘えてもらうことで。私は頼られたいし、おせっかいを焼きたいんです。だから、クレレに甘えてもらうことは、私が甘えてることと同じです」

優しく柔らかく笑って、千香はクレレを撫でた。いまひとつ納得がいかなかったけれど、でも笑いかけてくれる千香を見ていたらどうでもよくなった。クレレもつられて、小さく笑った。

「あ、艦長」

スライド式のドアが開く音がして、一人の足音が入ってきた。入口に背を向けていたクレレにはその人物が誰であるかわからなかったが、千香の声を聞いて肩が跳ねた。

「玲菜さ……」

振り返ってその名前を呼ぼうとしたが、クレレは固まってしまった。状況に理解がついていかない。頭が痛い。ずきずき痛い。

紺色の制服、左胸に金の碇マークの刺繍、船長の証たる特徴的な帽子。ここまでではいつもの本川 玲菜だ。だけれど、今クレレの目の前にいる玲菜は、爆ぜる炎のような深紅の目をしている。流れる血と同じ、紅の色。それから、何よりもクレレにとって信じられないのは、その手に握ったモノを、冷たく輝くソレの鋼の口を、クレレのほうに向けているということ。

「ごめんね」

クレレがそれ以上何かを考える前に、ドレッドノートの医務室に乾いた破裂音が響いた。

9：切り開く剣

「どうして、ですか？」

言いながら、エルナは白装束の女性とミーティアの間に割り込んだ。彼女が言った、ミーティアを殺しに来たという言葉はエルナからあらゆる感覚を――疲労さえも――奪うほどに衝撃的だった。

白装束の女性は無言で剣を構えた。細く鋭い剣、レイピアの先端をエルナに向け、腕をまっすぐに伸ばす。レイピアは武器としては使い勝手が良くない。刀身が他の類の剣と比較して異常なほど細く、下手な使い方では曲がったり折れたりしてしまう。

ただし、それ故に片手で地面と水平に構えやすく、武器や腕の長さ、リーチを錯覚させやすい。上下左右の動きを極力排し、前後の動きで戦うために無駄な動きがなく洗練された剣術となる。腕力さえあれば扱いやすい大剣とは違い、使い手の力量が限定される。つまり、白装束の女性はかなりの手練である。

惑星カリダで対峙した時もそうだった。天が傍にいたにも関わらず、エルナはこの女性の威圧感で身動き一つできなかったのだ。あの時と違うのは、今この場でミーティアを守るために動けるのがエルナだけであるという事実。

剣を握り、青眼に構える。いつもは軽い刃も、疲労のせいで重たく感じられた。全身に魔人との戦いでの痛みがまだ残っているが、それは幸いなことだ。この痛みがなければ、恐怖から来る震えは止まらなかっただろうから。

直後、鋭い刺突の一撃が飛んできた。咄嗟に剣を横にして、大きな腹で弾く。軽い武器の一撃だけでも、衝撃は重たい。

「く、あ……ッ」

飛来する無数の斬撃が剣の脇を抜けてエルナの白い肌に細く赤い筋をいくつも描き、時に剣を叩いて威圧する金属音を発しながら攻め立てる。エルナは歯を食いしばった。ここで剣を手放し、倒れて

しまうわけにはいかない。

どれだけ傷ついたとしても、ここを退いたりはいしない。この剣で、誰かを守る。それはエルナが目標にしてきたことの一つだ。それを為すのだと思うと、体の奥底に眠っている力が湧きあがってくる気がした。

剣を託してくれた人が、この剣で為してほしかったこと。それはきっとこういうことなのだ。幼馴染を、仲間を、ミーティアを守。剣に刻まれた名前が力を貸してくれる。

クレレと約束したこと。必ず、自分達でミーティアを助けると。クレレの探査でこの場所がわかって、今度は自分が動くべき時。いつまでも震えてなどいられない。

そして何より、自分がしたいと思ったこと。この場でミーティアを守る理由は、この三つだ。それがあある限り、倒れたりなどするものか。

レイピアは攻撃のインターバルがほとんどなく、エルナの動きを封じるように続いている。諦めを誘うように、切り込みは深くない。そこが狙い目だ。剣を叩く固い感覚の間隔を測る。

「何ッ!？」

レイピアの先端が大剣の腹にぶつかる瞬間。そのタイミングを、剣をそのまま突き出すことによってずらし、相手をよろめかせる。エルナの目論見は十中八九成功した。そのまま振り上げ、まっすぐ振り下ろす。いかに強化術式を使っていようと、武器の重量の差は大きい。細いレイピアでこの一撃を受け止めようとは思わないだろう。

その直後、エルナは冷たい鋼の床を転がっていた。エルナの目論見は、十中八九しか成功しなかったのだ。相手が振り下ろす一撃を受け止めようとしなかったところまでは良かった。だが、それはすなわち相手が後方へ下がり、間合いを取ることと同一ではない。

カラン、と小さな鋼が床を叩く音がした。エルナの傍に細い鎖のつながった小さな首飾りが転がった。エルナがレイピアを弾いてか

らの一連の流れで、あの女性が落としたものだろう。女性は振り抜いた足を下ろした。武器を弾かれて上半身がよろめいても、鋭い蹴りが残されていたのだ。本来、足を大きく動かす蹴りは戦いにおいて使う機会は少ない。片足を持ち上げた状態では容易にバランスを崩されてしまうからだ。だが、今回に限ってはその心配は全くなかった。エルナは重量のある剣を振り上げていたから、相手の足を狙ってバランスを崩す余裕がなかったのだ。

倒れたエルナを一瞥して、白装束の女性はミーティアに向かって歩く。剣を握って立ちあがっても、もう届かない。鋭い刃がミーティアの心臓めがけて放たれる前に、エルナができたのはそこに落ちていたロケットを投げつけることだけだった。

聖なる傷。それは『ステイグマ』との魔術的つながりの証だ。

どういった基準で選ばれるのか不明だが、手足、脇腹、額の傷や、背中に十字の傷を持つ者が『ステイグマ』と魔術的につながっている。

そうして古代のインテリジェンス・ウェポンとつながった者は魔力を吸い上げられ、身体的に衰弱してしまう。

そしてそれは、『ステイグマ』の所有者に限ったことではない。傷を持つ者全てが『ステイグマ』とつながってしまう可能性を持っており、そうなってしまったという事実は当人と周囲の人物以外には知れない。

知られないのは、連邦が情報を徹底して封鎖しているからだ。その情報の封鎖に、フォルラムルら連邦騎士団も奔走している。彼女の今回の任務の一つはそれでもあった。

ヘルテイト・バーレイグという男が『ステイグマ』の情報を持っていると言うことはすでに連邦騎士団に知れていた。故に、『ステイグマ』を管理下に置きたい連邦政府は連邦騎士団を動かさざるを

得なかった。

だが、派手に動くわけにもいかなかった。連邦最強の武装集団を大きく動かしてしまえば、何か重大な事件なのだと勘繰られてしまう。出先が辺境の第四区画となれば尚更だ。『ステイグマ』の情報に絶対に洩らしたくない政府にとってそれはこれ以上ない不都合となる。結果として、フォルラムルが一人でこの第四区画に来ることになった。

その任務に関連して、フォルラムルにはもう一つの任務が与えられていた。インテリジェンス・ウェポン『ステイグマ』の抹殺だ。『ステイグマ』はインテリジェンス・ウェポンの中でも最も危険なものだと言われている。聖なる傷の持ち主全員から魔力を搾り取り、安定した供給が得られなくなると次の持ち主に乗り移ろうとする。『ステイグマ』自身の持つ知性を見せることで、継承の儀式を行わせるのだ。

インテリジェンス・ウェポンを欲しがる者は多いから、継承の儀式を行う人間は簡単に見つけることができる。長期間、継承の儀式を行うことができないでいる場合、『ステイグマ』が暴走を開始する。所有者を食い殺して辺り構わず破壊系の魔術を放つ。現代ルーンのように安全性を考慮した制約が存在しない古代ルーンによる術式なので、その被害は甚大なものになると予想されている。

その『ステイグマ』の暴走を止める方法は、現在判明しているだけではない。所持者、ミーティア・エンシスハイムの殺害だ。

魔力供給の根っこである所持者を失えば『ステイグマ』のシステムは強制終了され、暴走は止まる。『ステイグマ』そのものに搭載された自己逃走機能も、誰かが再び『ステイグマ』を起動するまでは無効になる。『ステイグマ』と魔術的つながりを持つ全ての人間の死を以って。

『ステイグマ』とつながった少数の者を殺せば、他の多数の人間が助かる。大義を為すべき連邦騎士団にとって、とるべき行動は選ぶまでもない。フォルラムルは障害となりうる少年を蹴って退かし

た後、レイピアを引いて構えた。

ミーティア・エンシスハイムは十字架に張り付けられていて、この刃を避けることなどできないだろう。銀雷の一撃として多くの敵を屠ってきた最強の刺突が、『ステイグマ』の所持者である少女の心臓に向かう。

この決断が辛くなかったかと言われれば、そんなはずはない。この刃がいくつもの命を奪うのだ。いくつもの可能性を摘み取るのだ。いくつもの未来を閉ざすのだ。それだけの罪を背負って、自分も逝くのだ。

鋭く尖ったレイピアの先端が、肉を貫く前に止まった。

「く……」

止まってしまった。止めてしまった。雷のごとく全てを貫く銀の閃きを止められるのは、それを放った自分自身をおいて他にはいない。

迷いなどとうに断ち切ったはずだった。だから、一撃で全てを終わらせるために心臓を狙ったというのに。それなのに、フォルラムは刃を止めてしまった。

全ては視界に飛び込んできた首飾りと、そのロケットの中の写真にいた三人の笑顔。三人の中で誰よりも眩しく笑う、一番下の妹、セーレイズ。その笑顔が、フォルラムの刃を止めさせた。

セーレイズは第四区画の病院にいる。一日の大半を眠って過ごさなければならぬほど、その症状は重たい。彼女の面倒をベズヴィルドに押しつけてしまう形になったのは、連邦騎士団として頻繁に辺境に赴くと周囲の混乱を招きかねないからである。

ベズヴィルドが動けない今、セーレイズにとって頼れる人間はフォルラムしかない。『ステイグマ』を抹殺するという任務、ミーティア・エンシスハイムの殺害を遂行してしまえば、そのフォルラムの命も失われる。セーレイズは、完全に孤独になってしまう。命を奪うことも、命を捨てることも、とうに覚悟を決めたはずなのに。セーレイズが孤独の中で死を待つ時間を作り出してしまっ

とが、耐えられない。一度鈍った決意はあつという間に碎けてしまふ。そうしてはいけないのに、連邦騎士団の任務を全うしなければならぬのに、刃を握った手を下ろしてしまう。

ゆらゆらと、力のない足取りで落ちている首飾りを拾いに行く。先ほど少年を助けた時か、蹴飛ばした時に外れてしまったのだろう。首飾りのロケットの中で笑う三人の顔が、滲んだ。この思い出があったから、ベズヴィルドとセーレイズの二人が生きていてくれたから、死を覚悟できたのに。今また、ここでその思い出に足を引っ張られて、決意を鈍らせている。

手を伸ばしてそれを拾おうとした時、激しい衝撃でフォルラムルは床を転がることになった。

エルナは目を疑った。半ばやけくそで投げたロケットのおかげかは知らないが白装束の女性の刃がミーティアを貫く寸前で止まり、その女性が何かに吹き飛ばされて床を転がったからだ。

ゴトリ、と何かが固い床を叩く鈍い音がした。先ほどの魔人の腕を思い出させるような物体だった。ところどころが黒く変色しているが元は肌色だったらしいことがまだうかがえる、関節を持った楕円筒に近い形状のモノ。つまるところ、腕。形こそ人のそれに近いが、大きさはまるで人外だ。だって、あのてのひらはエルナの体を簡単に握りつぶしてしまえるくらい大きい。

その正体を確認した瞬間に、腕がエルナに迫る。フォルラムルと同じように、吹き飛ばされてしまえばタダでは済まないだろう。体が小さい上に、体力を消耗しているエルナであれば尚更だ。直撃を覚悟して目を閉じるが、直後にエルナは自分の足が浮いたのを感じた。

「危機一髪だね」

目の前にいつもの笑みを浮かべるノクスの顔があった。かなり近

い。エルナはその端正なつくりに半ば見とれてしまっていたが、次のノクスの一言で状況を客観的に見つめなおすことができた。

「ちよつと想定外だから、カメラは遠慮してね」

「えー！ イケメンがシヨタをお姫様抱っこなんて図はなかなか撮れないですよ！」

どうやらノクス以外に誰かいるらしい。声は高めだから女性だろうか。いや、その理屈でいくとエルナも女の子と間違われるから、ひよつとすると同類なのかもしれない。エルナが男だとしつかり見抜いてくれたようだし。お姫様抱っこ状態から下ろしてもらってから、後ろを見てその声の主を確認した。

縁のないメガネの奥で爛々と輝くのは子供の純真さ、好奇心を捨てていない瞳。華奢な手には似合わない大きなカメラが握られている。白く透き通るような首から黒く細長いベルトでつながれている。フォーカス用の大きなレンズが付いていることから、写真に関係のある仕事をしている人物のようだった。

ノクスにも劣らないほどの整った顔立ちだが、その女性からにじみ出るある種の欲望が二人の雰囲気을 正反对に分かつ。半そでの白いブラウスと膝まで隠れる黒いスカートのその女性は、かっ闊達な笑みを浮かべて名乗った。

「私はスペースタイムズの龍見 たつみ マヤと言います。以後お見知りおきを！」

冗談のつもりなのかそれとも彼女なりのあいさつなのか、右手で敬礼をしている。ノクスのように制服と呼べるほど形式ばった服装でないためか、友人と話しているような気楽さを感じさせた。色々と突然すぎて状況が把握できていないエルナは、曖昧に「はあ」と答えることしかできなかった。

スペースタイムズと言えば、宇宙で最も広く読まれている新聞雑誌のことだ。情報の速さと正確さに定評のある、信頼できる新聞として有名である。見たところ、このマヤという女性はその記者をしているらしい。情報に貪欲な姿勢と知ることへの欲望が、彼女の純

粹で深い好奇心を露わにした眼光の原因だろう。

「さーて、これは一大スクープですよー！」

そう言ってカメラを構えてフォーカスを合わせ始めたマヤの視界を、ノクスが遮った。

「確かに君には記事のネタを提供すると言ったけれど、これは見逃してくれないかな。彼女の命がかかってるんだ」

「む、むう……。仕方ありませんね」

覗き込んでいたカメラを下ろして、マヤはため息をついた。エルナは二人の視線の先を見た。先ほど襲いかかってきた巨大な腕の持ち主が、そこに立っていた。人の形をしているが、明らかに人ではない大きな腕を持つその人物は、エルナもよく知っている相手だ。

「ミーティア……」

右の肩から先が異常なまでに膨張して、巨大な血管の浮き出るグロテスクな腕になってしまっているが、それ以外は顔も形もミーティア・エンシスハイムそのものだった。

だが、エルナの知るミーティアとは少し違うような気もした。快活な彼女らしさはどこへやら、うつむいた顔をゆくり上げた時、エルナはその悲愴な瞳に息を飲んだ。ドームの冷たい空気を震わすかすかな音とともに、ミーティアの唇が小さく動いた。

「見ないで」

人の姿を保っている左手で顔を押さえて、ミーティアはもう一度言った。

「見ないでよ……！」

涙で震えた悲痛な声が、彼女がまだミーティアであることを証明していた。

何が理由でああなってしまったのかわからない。ただそこにあるのは、ミーティアの腕が人のモノではなくなってしまったという事実だけだ。

「『スティグマ』の暴走か。こんなに早く来るとはね」

「どういう、ことですか？」

『ステイグマ』はミーティアの魔力を喰らっていた。休むことである程度回復するとは言え、『ステイグマ』の捕食量が回復量を上回ってしまえば、いつかはミーティアの魔力は枯渇する。

喰らうべき魔力が不足することによって、『ステイグマ』が制御を失って暴走する、と言うのだ。

「インテリジェンス・ウェポンの中で最悪と言われた能力があの程度のはずはないから、彼女が必死で抑え込んでるんだろう」

そう淡々と付け加えて、ノクスは視線をミーティアからエルナに移した。鋭い眼光にまっすぐ貫かれて、エルナは背筋が伸びるような気がした。

「君は、どうしたい？」

どうすべきだと思うか、ではなく、どうしたいか。ノクスの問いは今の状況が決して良いものではないと物語っていた。

今どうすべきか、という答えがノクスの中に存在しないか、あるいは存在するにしてもそれが最後の手段であるかのどちらかなのだ。ノクスの左手に握られた弓が、最後の手段の残酷な輝きを帯びていた。

エルナは迷わずに手を差し出した。ノクスの右手から、名前の刻まれた大剣を受け取った。守るための刃、未来を切り開くための剣を、ミーティアに向かって構えた。それがノクスの問いに対する、エルナの答えだ。

構えを崩さずに一步一步、距離を詰めていく。

「来ないで！」

今、ミーティアの右腕は人のそれではない。異常なまでに膨張したその腕の力は、先ほど吹き飛ばした白装束の女性がいまだに目覚めないことが証明している。不意打ちとはいえあれほどの使い手を一撃で気絶させる力に、消耗したエルナが真っ向からぶつかったところで勝ち目はない。

しかし、エルナがミーティアの鋭い拒絶を受け入れることはなかった。その叫びを合図に、剣を脇に構えて駆け出した。全てを破壊

する剛腕が横薙ぎに迫ってくる。そのまま走れば直撃コースだ。それでもエルナは止まらない。

走りながら勢いを利用して思い切り大剣を振り抜く。右から左へ。エルナは悟った。剣に刻まれたあの人が為して欲しかったのは、こういうことなんだと。守りたい者の為に剣を振るい、戦う。そうすることの意味を考えるより、そうしたいと思い、行動することが大切なのだ。

成功するかどうかはわからない。確率は良く見積もって五分。迷いを捨てた刃は風を切り裂き、道を切り開くべく弧を描く。エルナは怪物の腕に正面から挑むように大剣の腹を叩きつけ、そして、柄から手を離れた。

重たい大剣が回転しながら宙を舞う。それが鋼の床に突き刺さるまでの短い時間の出来事だった。刃を弾き飛ばした腕をぐり抜け、エルナはその手を伸ばして、つかみかかった未来を、ミーティアの肩をつかむ。

「な、んで……」

息が上がっていて、エルナは涙と困惑で震える声に答えることができなかった。だから、せめて少女を抱きしめる腕に力を入れて、応えた。

自らに近づく者を全て排除しようとしていた腕は、しかし密着したエルナをとらえることができない。

「大振りな武器は、間合いを詰められると、使い物にならないんだ」息をなんとか整えて、エルナは笑ってみせた。手も足も震えて仕方がないけれど、心の底から笑った。

「やめてよ……私に笑いかけないで。そんなことされたら、わかんなくなっちゃうよ……！」

首を横に振って、けれどその声の感情に頑なな拒絶の色はない。あるのは大きくなった不安と迷いに潰されそうになっているか弱い少女の心だ。

「わかんなくて、いいよ」

肩を優しくつかんで、エルナはまっすぐにミーティアの目を見た。お気楽に笑っていた頃とは違う。迷いと悲しみの涙が頬を濡らして、まぶたも赤く腫れていた。

「わかんなくても、いい。一緒に考えようよ。何も言わずにいなくなつてそれきりだなんて、寂しいよ」

ジワリと、ミーティアの目から新しい涙が溢れてきた。大粒の雫が落ちて、エルナの制服を濡らした。少女はかすれた声で、けれども確かにエルナの名前を呼んだ。

エルナはその声を聞いて、ようやく安堵した。ミーティアは「見ないで」と言つたから、醜くなつてしまった自分を見られなくなつたのだらう。もうドレッドノートのメンバーとは一緒にいられないと思つていたのだ。何も言わずに孤独の殻に閉じこもつて、一人で朽ちるつもりだつたのかもしれない。悲愴な瞳からは、その覚悟が伝わってきた。

だから、そんなものはわからなくても良いと伝えるために、エルナは剣を振るつた。ミーティアを傷つけるためではなく、守るために。腕が一本大きくなつたからと言っても、ミーティアを嫌いになつたりしないと、悩みがあるなら一緒に悩もうと、そう言える頼もしい仲間がいることを、伝えるために。そのために剣を咄にしてミーティアに近づいて、抱きしめた。

成功するかどうかはわからなかった。少しでもタイミングを間違えばあの腕に吹き飛ばされて死んでいたかもしれないし、ミーティアが心を許してくれるかどうかもわからなかった。大きな賭けだったが、ノクスが取るうとしていた最悪の場合の手段よりはずっと良い。

ミーティアの右腕が、膨張する前の、元の人間のそれへ戻っていた。ミーティアの意思によって『ステイグマ』の暴走を抑えていたなら、それを後押しすれば腕は元通りになるのではないかと考えたのだが、その通りだった。

とにかく、これでミーティアは無事に連れ戻すことができそうだ。

安心した途端に、全身から力が抜けた。今までも立っていられるのが不思議なくらいに震えていたから、仕方がないかもしれない。

抱きしめたミーティアの重みもあって、エルナはそのまま真後ろに倒れた。

「いたっ」

やつぱり、固い床に頭をぶつけた。痛かったけれど、同時に心地よい疲労がまぶたを閉じようとした。

閉ざされる視界の中で、泣いていた少女が笑いかけてくれた気がした。

乾いた破裂音の直後、紅い瞳と鋼の口が視界から消えて、真っ白になった。

背中から落ちていく感覚。ゆっくりと、けれど確実に加速しながら、意識も闇へ落ちていく。

心臓が圧迫されるような独特の感覚は、長くは続かなかった。

何故。そう頭の中で繰り返しても、答えは出ない。今わかつているのは、自分を引き取ってくれた相手に銃を向けられて、その銃が発射されたということだけ。

ぐらぐらと、体を揺さぶられる。誰かがため息を吐く音が聞こえた。

「クレレ、良い夢を見ようと思うなら、もう少し起きていたほうが幸せになれますよ」

頭の上から降ってきたその声に、強く閉じていた目を恐る恐る開ける。

「……あれ？」

玲菜に発砲されて、後ろに倒れたところまでは記憶の通り。しかし、クレレに銃弾が命中したような外傷は全くないし、そもそも先ほどの緩やかな頭痛以外の痛みさえない。

声が降ってきたほうを見上げると、千香がいつもの澄まし顔をしていた。後ろに倒れたクレレを千香が受け止める形になっていた。前方、ガンタイプのLPを構えていたはずの玲菜が、クレレに向かって手を差し伸べていた。相変わらず瞳は紅いが、表情はクレレのよく知る——大好きな——優しい笑顔だ。

真顔で謝られて銃を向けられ、発砲されたと思ったらこの状況。クレレには何がどうしてこうなったのかさっぱりわけがわからなかった。

よくわからないまま玲菜の手を掴んで、立ち上がる。立ちくらみで今度は前に倒れてしまいそうになるが、玲菜がしっかりと受け止めてくれた。そのはずみで床を見て、クレレはそこにピンポン玉程度の大きさの球体の残骸が転がっていることに気がついた。

「チェイス・アイ追尾眼、ですか？」

ベッドから少し乗り出して、千香が言った。彼女の言う通り、それは監視用LP——追尾眼——の残骸だった。

「ごめんね。もっと早く撃ち落としてあげたかったんだけど」

玲菜の説明によると、その追尾眼はカリダの遺跡から戻ってきた段階ですでにクレレにくっついていたらしい。船内及び船員の動向を何者かが監視しているという状況に最初に気付いたのは天だったが、監視されている状況下でそれを伝えようとすれば、監視者側に気付かれる恐れがある。監視者側を出し抜くために議事堂城下町の防衛任務に出て、そこで玲菜に、クレレに追尾眼がとりついていることを伝えたのだ。

ちなみに、クレレが頭痛に悩まされていた原因もこの追尾眼だ。クレレにとりついて魔力を強引に吸い出して幻覚術式を展開し、迷彩性を確保していたのだ。幻覚術式をここまで高度に編み込める者は限られる。千香を襲った犯人が幻覚術式を使ったという情報を得て、追尾眼の持ち主もその人物なのだとわかった。

それからノクスがある筋から情報を得て、犯人とその居場所を特定。その後はクレレも知つての通り、三人でディグラルディの屋敷

へ行つて天がヘルテイトに重傷を負わせた。

その説明が終わる前に、クレレは玲菜に抱きついて泣いていた。

「良かった……良かった……！ みんなが玲菜さんを疑って、わたしも最後の最後で信じ切れなくて、それで、怖くて、不安で……！」

胸につかえていた不安を、心を押しつぶすような恐怖を全て吐き出すように、震えながらもかすれながらも、クレレは自分の中にあつた感情を音にして発した。もう何も心配することはない。それを確かめるように、玲菜の胸の中で泣いた。玲菜はただ黙って頭を撫でてくれた。

しばらくそんな状態が続いて、

「あー、もしもし？ 感動的なお話の最中申し訳ないんですが」

ちつとも申し訳なくなさそうな声が玲菜の後ろ、医務室の入り口から飛んできた。クレレにとつても聞き覚えのある声だった。今までも何度か、玲菜と話しているのを聞いたことがあるからだ。

これ以上玲菜を独占してはいけない。クレレが自分はもう大丈夫だということを頷いて伝えると、玲菜は訪問者に向きなかつた。

「お久しぶりね、マヤちゃん」

半そでの白いブラウスと膝まで隠れる黒いスカート、肩まで伸びた黒髪はクセがついているものの、汚らしさを感じさせない。玲菜が振り返った瞬間に、マヤがカメラを構えて、白い閃光が医務室を満たした。

「む、なかなかやりますね……」

「あなたの考えそうなことくらいわかるわよ。撮れたにしても、使うのはあなたの主義に反するのではなくて？」

玲菜の手がカメラのフォーカス部分を驚掴みにしてレンズを塞いでいた。

「それもそうですね。玲菜さんがバーレイグだなんて驚きすぎてつい反射的にフラッシュ炊いちゃいましたけど」

「そんなことより、あなたの後ろで足止め喰らってるうちの力ワイ
イ研修生を通してあげてくれないかしら」

マヤが退いて、医務室に入ってきた人物を見て、クレレは胸が詰まるかと思った。疲労しながらも、ミーティアを背負ってきた少年はクレレの視線に気付いて、笑いかけてくれた。弱々しくて、けれど頼もしい笑顔だ。

ミーティアをベッドに寝かせて、エルナ本人もあいているベッドに倒れ込んだ。

「ノッ君、余裕があるんだったら二人とも担いで上げればよかったのに」

「王子様の役目を奪っちゃいけないだろう？」

ノクスもエルナ達の後ろからいつもの調子で出てきた。クレレが心配しているほど玲菜に対して敵対心がないどころか、これまでと全く変わらない様子だ。安心を通り越して、クレレは気が抜けてしまった。

マヤの目の奥には純粹すぎて恐ろしいくらいの欲望がある。ただ一つのを純粹に追い求める、子供のような頑固さと残酷さを秘めた何かが。早く目的のものを手に入りたい、という彼女の気持ちが、その目を見ただけでもすぐにわかった。

「玲菜さん？ そろそろ約束のスクープを頂けると嬉しいんですが」「そう焦らないの。天ちゃんなら今面会謝絶だから独占性は保証されてるわ」

クレレの肩が跳ねた。後ろにいた千香に気付かれはしなかっただろうかと考えてしまつて、また小さな自己嫌悪が生まれた。

天は今、病院にいるはずだ。あれほど深い傷では、治癒促進が効くかどうかもわからないし、効いたにしても完治までは相当長い時間がかかる。そもそも治るものなのかどうかもわからない。

「焦りもしますよー。こちとら一四隔壁^{イチヨウ}抜けて来てんです。正規の一般ルートじゃあ最短でも一週間はかかるところを半日で跳んできたんですから、それなりの対価はいただかないと。ねえ？」

そう言つてマヤが横目でノクスを見る。珍しくノクスが肩を落としていた。要するに、それなりの対価の一部をすでに搾り取られた

後らしかった。

「……どのくらいとられたの？」

「お財布が悲鳴を上げてるよ。しばらくコーヒーがお預けになりそうなくらいにはね……」

玲菜の問いへの答え以上に、深いため息が彼の心情と懐の状況を物語っていた。

宇宙連邦領の四区画は互いに隔壁によって隔てられており、通行の際に必要なに応じてその一部を開く。第一区画と他の区画を結ぶそれは特に頑丈で、第四区画とは行き来のお機会がほとんど存在しないために、一四隔壁と言えれば越えられない壁の代名詞にもなっている。その一四隔壁を何らかの形で抜けるとすれば、隔壁を開くための手続きを踏むために時間がかかり、ひどい時には第二区画、第三区画を経由して一週間以上かけて第四区画に来たほうが早い場合もある。正規の一般ルートではないにしても、相応の対価を支払わなければ半日で第一区画からこの第四区画まで来ることはできない。

つまり、ノクスがうなだれているのは、その対価の一部を払わされたからなのだ。一部だけでも、今後しばらくコーヒーの購入を躊躇させるくらいには激しい金額だったのだろう。

すでにコーヒーが生活の一部になってしまっている彼にとって、これほど辛いことはない。だが、逆に言えばそれだけのことをしてでも龍見 マヤに頼らなければならなかったのだ。

「速くて正確な情報が必要だったからね」

情報の速さと正確さはスペースタイムズの売りの一つだ。それは、紙面上に限ったことではない。

第四区画にいるマヤの部下にディジタルディヤヘルテイトの情報を調べさせることの対価として、マヤ自身にスクープを提供する、ということになったらしい。

それなら第四区画にいる部下にスクープを渡したほうが効率が良いとノクスも説明したのだが、マヤはそれで納得するような人物ではなかった。

「バーレイグ絡みの事件は偏見が多いですからね。私は真実のみを追いつめるのですよ」

スクープに対して貪欲な姿勢は少し恐ろしいが、クレレも情報に対して変な色眼鏡をかけないマヤの見方は正しいと思った。バーレイグは連邦に反逆して追放された過去を持つため、瞳が紅い、というだけでその人物を差別する風潮があった。玲菜が普段、カラーコンタクトをして目の色を隠していたのはそういう理由もある。

「とても良い心掛けね。それじゃあそろそろ行きましようか。クレレちゃんと千香ちゃんも来る？」

「どこにですか？」

「天ちゃんのところ」

千香はまだ、天が入院しているということを知らない。玲菜の口ぶりでは天がこの船の中にいないことはすぐにわかる。天は、あまり出歩かずに部屋の中で機械を弄っていることが多い。千香は怪訝そうな顔をしていたが、やがてゆっくりと立ち上がった。

足の傷はほとんど塞がっているようだがまだ痛みはあるらしい。

立ち上がる際に千香の表情に苦痛が見えた。しかし、松葉杖を使うかと聞かれても千香はそれを拒んだ。

クレレは肩に手を置かれて心臓が跳ねるかと思った。千香の表情は柔らかく、優しい。

「クレレが心配しているような事態には、なっていないと思いますよ」

声も手の温もりも、不安を鎮めてくれる。クレレも天の病室に行くことを決めた。玲菜のことだから、何かしらの考えがあるに違いない。天の傷もきっと良くなる。根拠はないが、優しい仲間に囲まれているとそう信じることができた。

10：訪れない平穩

紙媒体の新聞が人の手から姿を消したのは、人類が一つの星に住んでいた頃である。ネットワークを介した電子的な記事の配信はすでに当たり前に行われる世界だ。そうなったからには、情報の鮮度を落とさないために電子新聞というものはリアルタイムで更新されるようになった。

しかしながら、広大な宇宙では情報量も多い。重要な記事が最新の些細な事件に流されてしまうという弊害もあった。それ故、その日にあった特に重要な事件のみをピックアップして作られる記事集が朝と夕方の定時に更新される。朝刊とか夕刊と呼ばれるものだ。

その日のスペースタイムズの夕刊の一面は、ヘルテイト・バーレイグが枢密院議員ディグラルディ・ギンナル殺害の容疑で逮捕されたという記事だった。記事には圧倒的な力を持つ凶悪犯ヘルテイトと一騎討ちをして、大した外傷もなく相手の腕を一本もぎ取ったという魔術師の独占インタビューや、逃げ出したヘルテイトをアジトまで追いかけて行動不能に追い込んだとあるギルドの副艦長と艦長の話が書かれていた。どちらも名前は伏せられていたが。

ミーティアを連れて帰ってからすぐに眠ってしまったて、時間の間隔がないエルナはブリッチに壁に掛けられている丸い時計を見て小さく驚いた。日付が変わる時刻の手前だったからだ。徹夜明けでいるんなことがありすぎたのもあって、疲れていたのだろう。

とりあえず何がどうなったのか確認しておきたくて、ブリッチの机に設置された端末で夕刊を確認したのだが、読む限りエルナの知っている情報との相違がいくつか見受けられた。艦長はエルナが疑っていたようなスパイではなかった、というのは帰ってきた時の会話の様子から何となくわかっていたが、ヘルテイトの腕を一本もぎ取った魔術師、というのはいったい誰のことだろう。

天のことだとしたら、大した傷もなく、という一節が引っかかる。

エルナが知る限り、天はヘルテイトの剣に貫かれて重傷を負ったはずだ。スペースタイムズの見解ではあの傷が大した傷にならないとも言うのだろうか。

「あ、エルナさん、起きてたんですか」

夕刊の一面を見ながら考え込んでいると、ブリッヂの入り口からクレレが入ってきた。いつもの白を基調とした制服姿ではなく、今は淡い緑色のゆったりした寝巻姿だ。先端に白いボンボンのついたナイトキャップがかわいらしい。事件解決前に見た時と比べると顔色が格段に良くなっている。素直に良かったと思う反面、あの場を一緒に見ていたクレレに天のことを聞いても良いものかどうかという迷いも生まれた。

「うん、ついさっき起きたんだけど……。クレレは眠れないの？」

「実はわたしも今日が覚めたところなんです」

苦笑いしながら言うクレレにつられて、エルナも笑った。一晩で色々なことが起こりすぎたのだから、その次の日を寝潰してしまうのも仕方がない。

「もう聞きました？ 天さんのこと」

クレレのほうからこの話題を振ってくれたのはありがたいことだった。ありがたいのだが、どうにもエルナには引つかかるところがある。あまりにもそっけないというか、クレレの反応もスペースタイムズと同じなのだ。まるで、天の傷が本当に些細なものであるかのように。

ひよつとしたら本当に、天はかすり傷程度——あるいは無傷——で済んだのだろうか。自分の記憶を疑いかけながらも、エルナは首を横に振った。

「その、ですね。天さん、今入院してるんですけど」

それはエルナも知っている。ノクスが素早い対応で入院の手続きを済ませるところを、エルナはただ茫然と見ていることしかできなかった。やや言いづらそうにしているとところを見ると、やはり天の傷は深かったのだろうか。

「ほとんど、無傷なんです」

「……えっ？」

聞き間違いだと思った。

クレレはほとんど無傷だと言った。話の流れからして、天が、ということだろうか。そうであるなら、スペースタイムズの記述と一致している。

しかし、天が剣で貫かれたところはクレレも見えていたはずだ。あれでほとんど無傷とはどういうことだろう。そもそも、ほとんど無傷なのに何故入院しているのだろうか。

さっぱりわからないエルナに、クレレが補足説明してくれた。

「幻覚術式で刺されたように見せかけていたんだそうです……。相手を油断させるためだったにしても、心臓に悪いですね」

クレレの話によれば、煙の中で天は幻覚術式を展開し、その場にいた全員に幻を見せていたのだと言う。本当は刺されてなどおらず、したがって流れているように見えた血も幻影だったということになる。

しかしながら、あの場にいたのは天を除いて四人。それだけの人数に等しく幻覚を見せるほどの術式は、十個の増幅回路があったとしてもそう容易く操れるものではない。要するに、天が入院している理由はそういうことしかかった。

「短時間に魔力を消費しすぎて、軽い炎症起こしてるって言うてました。遅くとも一週間程度で退院できるみたいです」

短時間に人体から放出する魔力の量が多すぎると、それからしばらくの間、魔力の放出力が小さくなったり、放出の際に痛みを伴う状態になることがある。放出口は目に見えない——仮想的なモノとしてとらえられている——が、イメージとしては円筒型の空洞だ。その空洞の入り口の面積を押し広げるほどの量の魔力が短時間の間に通った場合、放出口は元の大きさ、形状を保とうとして収縮しようとする。

したがって、平時よりも放出口の面積が小さくなり、普段と同じ

感覚で魔術を使おうとすると余計な負荷がかかってしまったため、それが痛みとなって術師を襲うのだ。この状態は、炎症を起こした状態と呼ばれるが、よほどひどくない限りはしばらく安静にしていれば治ってしまう。

エルナは一気に力が抜けてしまったような気がした。端末の電源を落として机にもたれかかった。緊張の種と疑問が無くなって、頬の筋肉が緩んだ。

「なんだか起きたばかりなのに一気に疲れた気がするよ」

「あはは、でも」

一呼吸置いて言ったクレレの言葉と

「良かったです。みんな、無事で」

今まで見た中で一番眩しい笑顔が、エルナに平穩の訪れを実感させてくれた。色々なことがありすぎたけれど、この笑顔が戻ってきたことが答えの一つだ。エルナからも自然に笑みがこぼれた。

時計の秒針が力チ力チと静かに時を刻む心地よい音を意識させて、エルナは時間を確認した。「もう遅いし、眠ろうか」と言おうとして、その言葉を遮る音が二人だけのブリッジに響いた。来るべきものが来ない状態のまま待ち続けて、緊張が解けたと同時に待機状態を解除する音だ。

数秒の間、二人は身動き一つできなかったが、やがてどちらからともなく笑い出した。

「うん、そうだね。軽く何か食べようか」

朝から眠っていたとは言え、生きている以上、お腹は減るものだ。

クレレと一緒に軽食を取ってから、エルナは医務室に向かうことにした。目が覚めてからすぐにブリッジに向かったため、まだ私物が置きっぱなしになっているのだ。それを取りに行く他に、ミーティアの様子も気になる。

医務室の扉はスライド式の自動ドアになっている。部屋の用途上、この自動ドアは静音性に優れており、緊急時にも対応できるように高速に開くようになっている。扉の前で立ち止まる必要は全くない。

ベッドの傍に立てかけておいた剣を、音を立てないように気をつけながら持ち上げる。自分の呼吸の音もそうだが、隣のベッドからかすかに聞こえてくる規則正しい寝息を意識するとなんだかむずがゆい気がした。朝、ミーティアを連れて戻ってきた時はとにかく疲れていて何も考える余裕がなかったのだが、ミーティアの隣のベッドで眠っていたという事実が今更ながら少し恥ずかしくなった。

落ち着かない変な気分になってしまいそうだったので、急いで部屋を出ようとミーティアに背を向ける。そうしたところで、ドアの前に誰かが立っていることに気がついた。

背が高いことから、クレレではないことがわかる。今この船にいる人物で近いのは玲菜かノクスだが、エルナの前に現れたのはそのどちらでもなかった。端正な顔立ちと触れたら消えてしまいそうな儚さを持つ表情がエルナの目を引いた。

見たこともない相手だが、敵意は感じない。瞳の奥深くには優しささえ感じるほどだった。薄い青の甚平型の患者衣のような服に身を包んだその青年は、ゆっくりと口を開いた。

「君が、エルナか」

決して大きな声ではないが、聞く者の胸の奥深くにまで入り込むような芯のある声だった。一方的に名前を知られている状況に、普段ならば小さな不快感を持つはずなのだが、この青年に対しては不思議と嫌悪感を抱かなかった。むしろ、エルナの目にはこの青年がとても悲しい存在に見えた。

何故だか詳しいことはわからない。だけれど、その瞳、その声、その佇まいが、どこか悲しい。わからないのに無性に悲しくなっていて、それが少し不快だった。

「僕はエルネスト。ミーティアの、兄だった」

エルネスト・エンシスハイム。青年はそう名乗った。ミーティアは十年前に孤児院からエンシスハイム卿に引き取られた。エンシスハイム卿に他の子息がいたとすれば、その人物がミーティアの兄であつても何もおかしくはない。

それなのに、エルナにはわからないことが更に増えたような気分だった。そもそも何故、ミーティアの兄だったというエルネストが、今この船にいるのか。兄「だった」と過去形になっているのはどういうことなのか。そして、このエルネストという青年から感じる、何か重大な欠落の気配の正体は何なのか。

三つの疑問のうちの最初のは、本人に聞けばわかることだ。わからないことがたくさんあつても、一つずつ解決していけばいい。エルナはミーティアを起こさないように声を押さえながら、エルネストに問いかけた。

「あなたはこうしてここへ来たんですか」

言つてから詰問するような口調になつてしまつていたことに気がつくが、エルネストは逆に安心したように微笑んだ。敵意はないのに、エルネストはどこか普通の人間と違う空気を持つていて、エルナは無意識のうちにそれを恐れていたのかもしれない。

エルネストの目がずっと細まり、エルナの後ろで眠るミーティアに向けられた。限らない慈愛の眼差し。ただ一人を強く想う深い愛情が、エルネストという存在の全てを形作つていた。時計の針が逆に回っているのにそれに気付けないような、大きすぎる違和感。エルナの意識の中で強くなつたそれは、敵意も悪意も持たないエルネストという青年に対する警戒心を煽る。やはりこのエルネストという青年には、人間としては何か致命的な欠陥がある。

「ミーティアと『ステイグマ』の関係について、ミーティアが一番信頼している君に伝えておきたいんだ」

『ステイグマ』という単語を聞いた瞬間、背筋に何か冷たいものが走つたような感覚がした。ともすると忘れそうになつてしまうのだが、エルナの考えが正しければ、『ステイグマ』の暴走はまだミ

ミーティアが押さえているだけなのだ。

近くにいる自分がそれを支えていければ良いと漠然と思っただが、そう簡単な問題でもないのかもしれない。そもそもそんなに簡単なことならば、あの時ノクスは最後の手段を用意したりしたのだろうか。

「『ステイグマ』はミーティアの魔力を喰らう。喰い尽くされればまた『ステイグマ』の暴走を抑えることができなくなる」

要するに、ミーティアの腕が変質したのと同じことがまた起こる、ということだろう。否、ノクスはミーティアが必死に暴走を抑えていたからあれで済んだのだと言った。連邦政府さえもが危険視する古代の魔導具の中でも特に強力な力を持つ『ステイグマ』が完全に暴走したとしたら、その被害はどれほどのものになるのだろうか。そして、ミーティアはどうなってしまうのだろうか。

想像するだけで頭の中が拒否反応を起こした。最後まで具体的に考えてしまいたくない。

「ミーティアを今の苦しみから救うには、まずミーティアから『ステイグマ』への魔力供給量を減らさなければならない。それから、ミーティアは今、生きることへの執着に欠けている。君が少し取り戻してくれたようだけど、その気力もいつまでもつかわからない」

エルネストは淡々と説明した。感情そのものが欠けているわけではないが、この青年にはどこか人間らしさが無い。エルナの中でその違和感がようやく具体的な形になって理解されてきた。それと同時に、ある種の怒りに近い感情がエルナの中で芽生えた。

「あなたは、ミーティアを救おうとはしてくれないんですか」

エルネストが説明したのはミーティアを『ステイグマ』による苦痛から救う方法だ。その方法を知っているのなら、エルネスト自身がそれを行えば良い。それを行わずに他人に押し付けようとするような行為は、どこかおかしい。

エルナの問いを聞いて、エルネストは悲しげな表情を浮かべた。「僕はミーティアを喰い殺そうとする『ステイグマ』そのものだ。

『ステイグマ』の所有者は継承の儀式を終えるか『ステイグマ』に喰い尽されるかすると、こうして『ステイグマ』の中に飲まれてしまう」

「どういことですか？」

エルネストが『ステイグマ』そのものである、という説明はよくわからない。

ミーティアの近くに立てかけられていた杖、『ステイグマ』がエルネストの目の前に浮かんだ。エルネストと同じ意思を持つモノのようにエルネストの発言に合わせて杖の先端の薄い黄色の光が明滅する。

それがエルネストの説明だった。同じ意思を持つモノのように、ではなく、同じ意思を持つモノなのだ。すなわち、エルネストは『ステイグマ』であり、『ステイグマ』はエルネストであるということだった。

「僕はミーティアだけを愛している。けれど、『ステイグマ』はそうじゃない。『ステイグマ』の枠から出ることのできない僕がどれだけ願っても、ミーティアが解放されることはない」

エルネストはミーティアだけを愛している。つまり、エルネスト自身への愛が全く欠けているのだ。エルネストの人間としての致命的な欠陥は、自らの生命に執着しないこと。『ステイグマ』の枠から出ることができない、とはつまり、彼が人間として意思を持つて行える行動が制限されている、ということだろう。

ミーティアを『ステイグマ』の呪縛から解放することは、魔力供給を必要とする『ステイグマ』の根本命令に反する行為だから、『ステイグマ』そのものであるエルネストには行えない。だから、エルナにその方法だけを教えたのだろう。

この青年を信用しても良いかどうかはまだわからない。だが、エルネストの話し方や眼差しから、ミーティアを深く愛しているという事実だけは覆しようのないものだとなった。

「どうして、ミーティアのお兄さん『だった』んですか？ 今は違

うんですか？」

ミーティアと『ステイグマ』に関する情報をもたらすためにここに来たことと、エルネストが自身の生命への執着に欠けるといふことはわかった。だが、もう一つだけわからないままなことがある。最初に彼が「ミーティアの兄だった」と過去形にした理由だ。

エルネストはこれまでと変わらず、悲しげな表情で、しかし淡々と語った。

「ミーティアは僕を殺したんだ」

エルナは何も言えなかった。何か声を出そうとしても喉の奥に引っ掛かって出てこない。胸に何か固いモノがつかえているようで、呼吸が少し苦しい。

「『ステイグマ』にそうさせられた。そうなる前に、僕が勇気を出すべきだった。ミーティアの手を汚す前に、自分でケリをつけるべきだったんだ。そうすれば『ステイグマ』の機能は停止して、今みたいにミーティアが苦しむことはなかった……！」

話しながらエルネストの語気は強くなっていった。数多の人間を喰らい尽したであろう『ステイグマ』の中で、エルネストという青年が持ち続けることのできた気持ち。ミーティアへの強い想いと後悔が、彼の言葉の中に込められていた。

「けれど願ってしまった。ミーティアの傍にいられる未来を。ミーティアが傍にいてくれる世界を。だからこうして、『ステイグマ』としてミーティアを喰い殺そうとしている。同じ世界に引きずり込まうとしている。もう、ミーティアに兄はいないんだ」

出会った時にエルナが感じた悲しさはこれだったのだ。本当は傍にいたいのに、そうすることで傷つけてしまう。離れようとしても自分の力ではどうにもならない。だから、外にいる誰かを頼るしかない。

「ミーティアは、あなたが『ステイグマ』の中にいることを、知っているんですか？」

エルネストは首を横に振った。

「知らないし、知ってはいけない。ミーティアは僕のことを忘れるべきだ」

エルナは納得がいかなかった。エルネストはミーティアのことだけを考えているのに、その想いを伝えることさえ許されない。ミーティアだって、『ステイグマ』にそうさせられたからと言って、兄を殺してしまったことはひどく悔やんでいるに違いない。その死んだ兄がこうして意識を持ってここにいるという事実を、ミーティアが知らないのはあまりに悲しい。

「でも、それじゃあ……！」

「三日だ」

エルナの言葉を遮って、エルネストが短く言った。

「ミーティアが『ステイグマ』を押さえていられるのはせいぜいあと三日だ。必要なことは伝えたから、僕は戻るよ」

「え、ちよつと……！」

エルナが呼び止めるのも聞かずに、エルネストはその場から姿を消した。ドアから医務室の外に出るわけでもなく、文字通り体が透き通って、大気に溶けるように消えた。固く軽いものが床を叩く力ランという音がして、一本の杖がその場に転がった。

「三日……。急にそんなこと言われても」

エルナはその場に転がった『ステイグマ』を拾って、ミーティアが眠るベッドの傍に立てかけた。眠るミーティアの表情は先ほどのエルネストによく似て、悲しげだった。

「エルう……」

絞り出すような小さな声がミーティアの口から洩れた。エルネストがミーティアを愛していたのと同じように、きっとミーティアもエルネストのことを強く想っているのだ。

エルナは音を立てないように医務室の自動ドアを抜けて、自室へ向かった。忘れないうちに、エルネストが言っていたことをメモしておかなければならない。多くの情報で頭が混乱している今よりもひと眠りして落ち着いてから考えたほうが良いだろう。『ステイグ

マ』に関する魔術的なことはよくわからないから、クレレに相談するのも良いだろう。

自分の部屋に置いた薄型の端末に知り得た情報をまとめて、頭の中で色々と考えながらベッドにもぐりこむ。得た情報も多かったがわからないことも同じくらい増えたため、複雑な思考を繰り返す前にエルナの意識は眠りに落ちて行った。

翌朝。エルナが医務室に来た時にはすでに玲菜とクレレの姿があった。

ミーティアはまだ眠っているようだったが、昨晚よりも顔色が悪くなっているような気がした。

そのミーティアをじつと見つめて、玲菜は腕を組んで考え込んでいる。傍らにいるクレレの表情も、困惑と不安の色に塗りつぶされていた。

エルナに気付いた玲菜は一応笑顔を浮かべて挨拶してくれたが、すぐに難しい表情に戻った。エルナはすでにちゃん付けで呼ばれることに全く違和感を覚えなくなっていたし、引つかかっていたとしても表情に出すのが躊躇われる雰囲気だった。

「仕方ないわね。片付けないといけない書類もあるし、あとはクレレちゃんに任せるわ」

そう言い残して玲菜が医務室から出ていってからも、重苦しい空気は変わらなかった。エルナが口を開いても良いのかどうか躊躇っているうちに、クレレのほうから話してくれた。

「その……ミーティアさん、まだ危険な状態なんです……」

「『ステイグマ』のこと？」

クレレは小さくうなずいた。エルネストから聞かされた情報があったため、エルナはさほど驚かなかった。出来るだけ安心させようとしてくれているのか、クレレは今わかつている情報を可能な限り

丁寧に説明してくれた。

『ステイグマ』がミーティアから魔力を吸い上げていること、このペースで吸い上げ続けるとミーティアの魔力が枯渇し、魔力の供給を失った『ステイグマ』が再び暴走を始めること、ミーティアと『ステイグマ』の魔術的つながりを安全に断ち切る方法が存在しない以上、暴走を防ぐには魔力供給のペースをミーティア自身の魔力の回復速度よりも低いレベルまでどうにかして抑えなければならぬということなど、昨晚エルネストから説明を受けたこととほぼ同じ内容だった。

違ったのは、ミーティアから『ステイグマ』への魔力供給を減らす方法を見つけるために、『ステイグマ』の構造を天に調べてもらっているということ、それから、もってあと三日という情報が抜けていることだった。

クレレの探査でも『ステイグマ』の構造そのものは見えるのだが、LPの知識が豊富でないと見えた構造を読み取することはできない。天はまだ病室から動くことができないらしいから、構造図の写しをクレレが作成して、それを今見てもらっているとのことだった。

エルナは、エルネストのことを言い出すべきか迷った。言い出したところで、あと三日しかもたないという不安を煽る情報が増えるだけで、クレレを安心させる要素がどこにもないからだ。

互いに黙ったまま、何か声を発するべきかどうか迷ったまま、時間がゆっくり過ぎて行った。

次に医務室のドアが開いて千香が入ってくるまで、呼吸さえ苦しくなるような沈黙が二人の間に流れていた。

「大方調べ終わりました。構造図に色々書き加えたものみたいなんですが、私にはさっぱりわからないのでクレレに任せます」

情報を格納する増幅回路がクレレに渡される。千香はそのまま医務室を出て行った。足の傷が良くなってきたから、少しずつ本格的な稽古を再開するということだった。

医務室の専用端末の駆動部に渡された増幅回路をセットして、淡

い青の空中ディスプレイに構造図を表示させる。わかりやすく拡大された画像が小分けになっでいて、簡潔な――けれど素人にもわかる――説明がいたるところに書き込まれている。

先ほどの話でもあったように、『ステイグマ』とミーティアの魔術的つながりを安全に断ち切る方法は存在しないらしく、最後の画像には『ステイグマ』への魔力供給を最大五十パーセント減少させる方法が記されていた。

『所持者と『ステイグマ』の供給路に割り込みをかけて強制的に別の魔力を流し込んでやることで、『ステイグマ』側からの魔力要求量を恒久的に減少した状態にさせる。流し込む魔力の周波が低ければ低いほど供給妨害性は高く、減少効率が良い』

エルナにはそれだけ読んでも何のことだかさっぱりだった。クレレに詳しいことを聞こうとして、彼女がひどく動揺していることに気がついた。

この内容が信じられないという様子で、視線がせわしく泳いでいる。

「えっと……そんなに難しいことなの？」

「そ、そうじゃ、なくて……！」

尋常ではない慌て方だが、エルナにはさっぱりその原因がわからない。深呼吸をして落ち着くように促すと、更にクレレの呼吸が速くなった。結局疲れて息切れしながら落ち着くと、クレレはゆっくり、言い聞かせるように説明を始めた。

「えっと、その、まず、魔力の周波というのは、普段あまり魔術を使わない人のものほど低くなります。この船に乗っている人だと、一番低いのはエルナさん、次点で玲菜さんか千香さんになります。」

つまり、この三人のうちの誰か……一番望ましいのはエルナさんですが、誰かの魔力をミーティアさんから『ステイグマ』への魔力の供給に割り込んで、『ステイグマ』に流し込む必要があるんです」「うん。ボクに何かできるなら、何でもするよ」

クレレが視線を下のほうにそらした。なんとか目を合わせようと

努力してはくれているものの、どうしてもエルナの目を見た瞬間に下を向いてしまう。仕方なく、クレレはそのまま話を続けた。

「割り込むには、ミーティアさんと魔術的なつながりを持たないといけないですけど、その、その方法は……」

次のクレレの言葉を聞いて、深く考えもせずは何でもすると言ったことを、エルナは後悔することになった。

「……キス、なんです」

11：魔導砲——ドラゴンの脅威

「……キス、なんです」

「えっ？」

最初は聞き間違いだと思った。けれど、言い出すのに躊躇したり、うつむいて目を合わせられないクレレの様子からすると、どうもそういうことで間違いないらしいとわかった。

「え、あ……その、それってつまり、ボクが、ミーティアに？」

ミーティアを助けようという気持ちは揺るがないが、それでも突飛すぎる展開にエルナの頭の中はパニック状態になっていた。クレレが黙って首を縦に振ったことによって、具体的な状況を想像してしまいそうになり、慌ててそのヴィジョンを頭の中から追い出す。

追い出しても追い出しても、それはしつこく頭の中に蘇ってきた。おとぎ話の眠り姫に王子様がそれをして目覚めさせるという、ロマンチックすぎる状況。血液が頭のほうに上ってきて、下手をするとそのまま倒れてしまいそうだった。

「て、手の甲に、とかでも大丈夫？」

「い、いえ、体液の混合が必要不可欠になるので、口と口でないと……」

「うわぁ……」

頭の中の收拾がつかないことで、エルナはなんだか泣きたい気分になってきた。もう、ミーティアの寝顔など直視できない。

「え、エルナさんがどうしても嫌だと言うのでしたら、その、玲菜さんが千香さんに代わってもらうこともできないのではないのですけど……」

「う……や、やるよ。ボクがやる」

「そ、それじゃあ、私は席をはずしますのです」

クレレは早足で逃げるように医務室を出た。結局、部屋を出るまでクレレは目を合わせてはくれなかった。ということを冷静に考え

終わってから、エルナは頭を抱えた。

（ば、馬鹿ッ！　なんでボクがやるとか言っちゃったの！）

自分が嫌だと言う理由だけで千香や艦長にこの恥ずかしい役割を押し付けるのは流石に情けないと思った……のだろう。今にして思えば、ミーティアのために必要な行為なのだからせめて同性のほうが良かったのかもしれない。

今度は千香がミーティアに口づけているところを想像しかけて、混乱してきた。言いようのない罪悪感から思考を反らすために、現在の状況について考えてみることにした。とにかく、自分がやると言ってしまった以上、それはもうどうしようもないだろう。

深呼吸して脳に足りない酸素を送り込む。キスと言っても、人工呼吸のようなものだ。ヨコシマな意味は一切ない。

意を決して、ミーティアの寝顔を見る。少し顔色が悪いように見えるのはきつと気のせいではない。もってあと三日、というのがどれほど危険な状況かエルナにはわからないが、できる限り早くなんとかしないといけないのは確かだ。

薄手の布団をかぶった胸元が規則正しく上下している。閉じた目も、寝息を立てる鼻も、小さな唇も、全てが今までと違って見えてきてしまつて、エルナの決意を鈍らせる。本当に、してしまつて良いのか。

答えを待たずに、顔は近づいていく。できるだけ痕跡を残さないように、あとで無かつたことにできればなどと都合の良いことを頭の隅で考えながら、ゆつくりと、唇を重ねる。

冷たくて少し湿った柔らかい感覚が思考を甘美に溶かしそうになつて、エルナは慌てて顔を離れた。離れた瞬間に、後悔という鈍器が後頭部を強打した。

「う、わ……」

眠るミーティアの目からこぼれた一粒の雫。たとえ彼女に意識がない状態であっても、エルナの罪悪感を煽るには十分すぎる出来事だった。今すぐにでもここから逃げ出してしまいたい衝動にかられ

るが、足は鉛のように重たく、床にくっついてしまったように動かない。

涙の痕が光るミーティアの寝顔から目を反らすこともできずに、エルナはしばらくそうして後悔に苛まれることしかできなかった。ちよつとでも刺激を受けたらエルナのほうが泣き出してしまいそうだった。

血相を変えたクレレが飛び込んで来ても、肩を揺さぶられるまでエルナは気付くことができなかった。

ブリツチでは、玲菜が苦い顔をしていた。こんな時に限って、厄介極まりない任務が飛び込んできたのだ。

ヘルテイトのアジトに残されていた召喚核が暴走し、あるうことがドラゴンを呼び出してしまったらしい。辺り構わず魔導砲を撃ちながら移動しており、これが人里に下りてしまうようなことがあれば甚大な被害をもたらすことになる。

ドラゴン。強靱な鱗と大きな体躯、そして非常に強い魔力を持ち、短いインターバルで魔導砲を乱射できる。更にアースワームのような劣等種と異なり、大きな翼を使って自由に飛び回る。めったに目にかかれない希少な種の魔獣だが、その力は古の時代から人間を脅かしてきた。

真っ向から魔導砲とぶつかることができるのは、この船に乗っている中ではミーティアだけだ。だが、ミーティアは今眠っているし、そうでなかったとしてもこれ以上魔導的負荷をかけるわけにはいかない。

しかし、政府から依頼があつた以上、ドレッドノートは動かざるを得ない。他のギルドは第四区画の外にいてすぐには動けないし、防衛軍には相応の力も装備もないのだ。第四区画の平和な状況に胡坐をかいて防衛に費用を割かなかつた政府の責任だが、それを糾弾

したところでドラゴンがどうにかなるわけではない。

最悪の場合、長距離砲の使用が許可されるということだが、その決断はもつと早くにするべきだった。ドレッドノートに搭載された長距離砲は、出力を抑えても着弾点から半径数十キロ単位で焦土にしてしまうのだ。そもそもが大気圏外で使用することを前提に作られたものである以上、それは仕方がない。

ヘルテイト以外の何者かの陰謀がうごめいている可能性もあるため、船の防衛も必要だ。今動けるメンバー、クレレ、ノクス、エルナの三人がブリッジに揃う。エルナの顔色が良くないところが気になったが、今はそれどころではない。

ドラゴンのいる、ヘルテイトのアジト周辺の地図を表示して、任務を説明する。ドラゴンの討伐任務だが、最悪の場合は長距離砲を使わなければならない。長距離砲の発射権限を持つのは艦長である玲菜と、整備士である天だけで、しかしながら天は今動ける状況ではない。

長距離砲による被害が最小限に収まるような範囲からドラゴンを外に出してはならず、発射が決定し次第、任務にあたっているメンバーを退避させることが必要になるため、戦場付近に転移陣を描かなければならない。

「つまり、この船に残るのは私一人。クレレちゃんの護衛にエルナちゃん。ノッ君にはドラゴンを足止めしてもらうことになるわ」

「ヒュー、ドラゴンと一騎打ちか。燃えるね」

冗談めかして口笛を吹いたノクスに、玲菜の鋭い視線が飛んだ。

「無理に傷を負わせなくても良いわ。長距離砲発射まで時間が稼げれば良いの」

「でも、発射のためにはお上の許可が必要なんだろう？ 許可を得てからチャージを開始したら、発射はいつになるかわからないね」

玲菜の表情が更に苦いものになった。ノクスの言う通りだからだ。長距離砲を撃つには政府高官の許可が必要になる。更に大気圏内で使用する場合には、最低でも三名の署名を要する。

ディグラルディの殺害事件の後始末で政府関係者が慌ただしい中、三名もの署名が集まるまでにどれだけの時間がかかるかわからない。そこまでして長距離砲の発射許可が得られた時に、ドラゴンが街に近づいてしまっていたら全く意味がない。魔獣一匹殺すために、街一つを失うことになってしまう。

「援軍は期待できないわ。危ないと感じたら、すぐに退避すること。必ずよ」

「努力はするよ」

背を向けて片手を上げ、ノクスはさつさと任務に向かってしまった。船を下りてからは別々に行動するものの、エルナもクレモスぐにそれを追いかけた。

誰もいなくなったブリッジに、艦長のため息が響いた。

正六角形の小さな増幅回路を指先で転がして、メタリックグリーンの金属質の数珠つなぎになったプレスレット型LP、メタモルにはめ込む。右手首に付けたそれを指先で軽く撫でて、下腕に固定する小型のライト・クロスボウに変形させ、目の前に広がる戦場を睨む。

森であつた場所はまるでアースワームが這つたようにまばらに地面がえぐり取られ、木々が黒く焦げて煙を上げていた。だが、ここにいる厄介な相手はアースワームではない。そんな程度の魔獣など比較にならない存在が、無差別に暴れまわっているのだ。

袖に金の線が入った紺色のダブルのジャケットを着た背の高い青年は、疾駆した。倒れた木の幹を蹴って前へ前へ。ドラゴンは想像していた以上に速いペースで移動しているらしく、長距離砲で狙える安全な領域から外に出ようというところで、ノクスはようやくその巨体を発見した。

陽光を鈍く反射する、鋼色の強靱な鱗。アースワームと同じく、

その強度は魔導砲プレスを吐き出す直前直後の短い間以外は無敵とも言える強固な鎧だ。腕をまっすぐ伸ばして指先の操作で放った淡い緑の魔力の矢はその装甲に傷一つ付けることさえできずに霧散した。

ノクスが手加減したわけではない。全力で撃つてようやく、ドラゴンの注意を引くことができたくらいだった。あまり良い状況ではないと考えながら、舌先を折り丸めて指笛を鳴らした。

「ドラゴンと踊れるなんて、ステキな一日になりそうだ」

よく通る音が、昼の森をなぎ倒す巨竜の鼓膜を刺激した。振り向いたドラゴンの首元を狙って三本の矢を立て続けに放つ。逆鱗と呼ばれる周囲よりもやや脆い個所ではあるが、それでもたいした傷をつけることはできなかった。

しかしながら、ノクスの射撃は玲菜にも引けを取らないくらいに正確だ。周りの鱗よりも感覚が鋭敏な逆鱗に連続して何かが触れたという事実は、ドラゴンの狙いをノクスに絞らせるには十分すぎた。長い首を振り上げて空気を大量に吸い込み、強いはばたきと同時にドラゴンは咆哮した。叩きつけるような突風と一緒に、耳をつんざく甲高い威嚇の音が轟く。

腕で強風から目をかばって、それでも対象を視界にとらえたまま、ノクスは身を低くかがめた。風が止む一瞬のインターバル。もう一度空気を吸い込むために首を振り上げたのを確認して、素早く右へ飛ぶ。秒を数える前に、先ほどまで立っていた場所に圧縮された高温の熱線が降り注いだ。

音と光の氾濫が収まると、急激に熱せられた地面が音と煙を立てて熱を放出した。そこにあった木々は折れて倒れるどころか、欠片すら残らなかった。人間ならば触れただけで吹き飛ぶだろう。

それが、魔導砲。魔獣達の王座に君臨し続けた伝説の神獣、ドラゴンが持つ最強の魔導兵器だ。一步でも踏み外せば、一瞬でも反応が遅れれば、意識を反らしてしまえば、死の閃光に焼きつくされる。死と隣り合わせのこの状況で、ノクスは少しも怯んだりしなかつ

た。冷静にドラゴンの首の動きを見て、次の魔導砲の軌道を正確に予測する。予測した上で、長距離砲で狙える安全圏内なるべく奥におびき寄せる方向へと逃げる。何がどうなっても、この化け物を町の方まで行かせてはいけない。

人間の大人の倍ほどはあるつかという巨体の動きは必然的にパターン化され、幾度か避けているうちにノクスにもその法則が見えてきた。しかし、慣れは慢心を呼び、注意力を削ぐ。

「くっ……」

抉れた地面から埋まっていたであろう岩が跳ねてノクスを横殴りに突き飛ばす。ドラゴンの動きと魔導砲の軌道だけに注意を向けていたせいだ。受け身をとるものの、真横から直撃した岩は拷問用の鉄球かと思うほどに大きく、重かった。

「まいったね、アバラの一本や二本は覚悟しないといけないな」

軽口を叩いてみるものの、苦痛と焦燥が彼の表情から余裕という余裕を奪い去ってしまった。鋼色の鱗をまとったドラゴンの、黄金の瞳が動けなくなった対象を識別した。たとえノクスが動けなくとも、それにとっては関係ない。気高いドラゴンが自分の逆鱗に何度もちよっかいをかけた相手を簡単に許すはずもなかった。

避けるべき方向はすぐにわかる。力に任せた単調な攻撃ならば、軌道を読むのは容易い。

けれども、体が動かない。体の側面が凹むかというほどの衝撃は激痛を残していった。立ち上がるだけでも筋肉と骨が悲鳴を上げて意識をかき乱して行く。

歯を食いしばって、跳ぶ。地面を何度も転がって、転がるたびに思考が焼き切れそうになった。おそらく、回避できるであろう最後の魔導砲が地面を抉る。だいぶ離れた場所まで跳んだにも関わらず、倒れた背中に地響きが伝わってきた。

「ははっ、ずいぶん情熱的なアプローチじゃないか」

今度こそ、黄金の瞳は動けないノクスをとらえた。仰向けに寝転がったノクスの口から、自嘲的な笑いがこぼれた。メタモルに盾の

形状でもついていたれば少しは違ったのかもしれない。

「今度、天に改良してもらおうかな」

この状況を見る限り、その今度という時に自分は肉片すらも残っていないというのに。

ドラゴンの首が持ち上がり、最後の一撃が放たれることを告げる。ノクスは、奥歯が砕けるほどに強く歯をかみしめた。
「くそっ」

普段の彼では考えられないほど低い声で、己の無力さを呪った。あの岩さえなければ。あの時、注意力を欠いてさえいなければ。悔いても時は戻らない。

せめて、目は閉じずにいることに決めた。憎き相手を呪い殺さんばかりに睨みつけ、そして、そこにある違和感に気付いた。

音と光の蹂躪が始まり、木々をなぎ倒し、大地を抉り取った。

四角く締め切った空間。他の部屋に比べ、壁や扉の強度が格段に上がっているこの場所で、黙々と剣を振り続ける少女がいた。いつもの和装を身にまとい、いつも使っている打刀型のLPを振るっているが、その表情はいつになく険しい。

この間と違い、人工召喚核を使用した実戦に近い形の訓練は行っていない。行うことができない。使用許可が下りなかったのだ。

それだけならまだ良い。傷が塞がったとは言え、足の負傷はまだ完治したわけではない。余計な負荷をかけないための艦長の配慮だろうと、彼女も理解している。

理解しているからこそ、彼女の表情からは怒りに近い感情が消えない。足の痛みがその怒りを助長する。刀を鞘に納め、灰色の壁に背中を預けて座り込む。息が上がるほどに苦しいのは、怪我のせいで体力が落ちているからだろうか。

悔しい。奥歯が砕けるかと思うほどにかみしめて、けれども立ち

上がることはできなかった。

千香がたった一人の襲撃者に無様に負けて、その後始末をするために天は傷を負った。外傷は確かにほとんどなかったけれど、体の内側はボロボロだ。

身体強化系の増幅回路を同時に多数使用したことにより、天は自らの肉体が本来耐えうる以上の力を使ってしまった。結果、見た目は何ともなくとも、触れるだけで激痛が走るほどに激しい筋肉の損傷を招いた。魔力炎症を起こしているのも確かだったが、それ以上に彼が入院していなくてはならない理由は酷使した腕の筋肉にある。そんな満身創痍の状態にありながら、病室の天は普段と何も変わらない様子だった。内部の損傷を誰にも教えないでいるつもりだったのだ。事実、千香以外はその傷に気付かなかった。クレレは緊張の糸が切れて座り込んでしまっていたし、艦長も軽い口調であまり無茶をするなと天を注意しただけだった。

艦長とクレレの二人が帰った後、千香は天の腕を掴んだ。平静を装っていた表情に激しい苦痛の色が浮かんで、天は呻いた。千香が腕を離してしばらくしてから、天は黙ったままだった。何故そんな無茶をしたのかなんて、聞けなかった。答えは聞く前からわかってきっていた。出来の悪い妹の尻拭いだ。

目頭に不快な熱がせり上がってきた。歯を食いしばることでそれが零れるのを無理やり抑え込んで、一度深くゆっくりと息を吐いた。訓練室の壁は冷たい。何やらブリッヂのほうが騒がしかったが、千香が呼ばれることはなかった。何の役にも立たない、弱い自分。手を伸ばしても、走って追いかけても届かないあの人の背中。

思考を負の感情がめぐる。きっと頭の中が見えるなら、雑念だらけでひどいことになっているだろう。それこそ、あの人の部屋みたいに。

このまま訓練を続けていても、良い事は何もない。訓練にならない。汗と一緒にこの雑念を流してしまおうと考えて、彼女は訓練室を後にした。

白柳 千香は驚いていた。こんな時間に大浴場を利用している人間がいたことも、その相手が素っ頓狂な声を上げて石鹸を踏み、そのまま後ろにスライドして湯船の中にしぶきを上げて背中から倒れ込んだことも十分に驚くべきことだが、今はそれ以上にその相手が目を覚ましていたことに驚いていた。

湯船の中でぶくぶくやっているその相手を抱き起こす。

「大丈夫ですか？」

前にも全く同じことがあったが、今回はあの時以上に心配だった。ついさっきまで――千香が確認したのはもう二時間ほど前だったが――彼女は眠っていたのだ。それも、あまり良くない状態だったらしいことは艦長やクレレの表情からすぐにわかった。

急にお湯の中に背面ダイブするという行為は間違いなく身体に負荷がかかるものである。それが原因でまたどこか悪くなったりでもしたらたまらない。

「はっ」

千香の心配は杞憂に終わった。深く息を吸うミーティアの顔色は全く悪くない。呼吸が荒いのは、水面から顔を出しているのに気付いていなかったせいだろう。

「なんだ千香さんだったのかー」

千香を確認して、強張っていたミーティアの体から力が抜けた。信頼を得られたようで心地よい反面、千香にとってそれは心苦しくもあった。

湯船から離れて、二人はシャワーの前に並んで座った。今回はアクシデントで先に入水してしまったが、本来は全身を清潔にしてから浸かるべき場所だ。

「艦長に挨拶はしましたか？」

「まだですー。やっぱり身だしなみって気になるし……」

「ああ、それはわかります」

あまりだらしない格好で人前に出るのは、たとえ家族同然の艦長が相手であっても抵抗がある。ずっと眠っていればそれだけ汗もかいただろうし、何より起きぬけの顔を誰かに見られるのは恥ずかしい。そう考えれば、目覚めたミーティアがすぐに大浴場に来るのはごく自然なことだ。

自然。今回の一件が過ぎて、またこの自然に戻ってくることができたことを実感できる会話だった。シャンプーを泡立てながら髪を梳く手に力が入った。うつむいた瞬間に、小さな泡が零れて落ちた。「ひよつとして、泣いてる？」

ミーティアが心配そうに覗き込んでくる。零れる弱さの印を見られたくなくて、千香は目をつぶってシャワーのノブをひねった。

「目にシャンプーが入っただけで……ひゃああ！？」

冷水に打たれて、千香は今度から目をつぶったままシャワーのノブをひねるまいと強く心に刻むことになった。

全身を清潔にした後、二人は湯船に肩まで浸かった。先ほどのアクシデントで体が冷えてしまったからだ。結局、千香は別の意味で恥ずかしいところを見られてしまったのだが、怪我の功名か、そのおかげで落ち込んだ心は少しだけ軽くなったような気がした。

「お風呂は良いなあ……」

目を閉じて、タイルに響く声さえも楽しむように、ミーティアがつぶやいた。それからしばらく、沈黙が続いた。シャワーヘッドに残った水滴が落ちて、静寂を叩いた。

「みんなには、迷惑かけちゃったかな」

千香のほうに向きなおって、ミーティアは続けた。

「こうして戻ってこれたのは、みんなのおかげなんだよね。ありがとう」

「私は」

ほとんど間をおかずに、千香が口を開いた。

「私は、何もしていません」

水面に映る照明の光を見つめながら、小さな震えを隠すように、声が不自然に大きく響いた。

「ミーティアの誘拐を許し、エルナや副艦長が救出に向かっている間もただ眠っているだけでした」

耐えがたい無力感が心に巣食った自尊心を抉り、切り刻んでいく。「結局、私は何もできなかったんです」

雫が水面を叩いて、二つの波紋が広がった。己の無力を認めるのは辛かった。ひどく惨めで、ひどく悔しかった。今の顔を見られたなくて、ミーティアに背を向けた。

目を閉じて抑えようとしても、涙は止まらなかった。呼吸と肩が震えて、一文字に結んだ唇のおかげで情けない声を封じ込めることはできていたけれど、背中越しでも泣いていることはバレているだろう。

「死んでしまった者は、埋めてしまうに限る」

浴場のタイルに反射して響く強い口調の声。けれどもそれは糾弾するものではなく、優しく諭すような色を帯びていた。千香がその真意を理解する前に、ミーティアは続けた。

「失敗はいつでも私達の後ろにいて、影を踏んでいる。だけど、失敗が踏んでるのはただの影。だから、引きずっていくより、そこに埋めちゃったほうが良い」

千香は振り返った。泣き顔を隠すことも忘れてそうしてしまうほど、ミーティアの声にある種の力強さを感じたからだ。彼女はこんなに大人びていただろうか。普段の明るい表情の裏側に、彼女が見せたくない暗い部分があることは知っていたが、ここまで強い、まったく心を持っていたのか。

ミーティアもまた、千香に背を向けていた。彼女は今、どんな表情をしているんだろう。その表情を見ることはできなかったけれど、ミーティアの背中を見ることで彼女の真意がわかった。

「なーんて、偉そうなこと言ったけど、私もついさっきからこう思い始めたんだ」

「冗談めかしてそう言いながら振り返ったミーティアは、すでに先ほどの真面目さをすっかり失っていた。

「そう、ですね。失敗の過程でついた傷痕も、いずれ癒える。痛みも乗り越えられる」

「正直言うと、この傷は、もう少しだけ残ってほしい、なんて思ってたんだけど、いつまでも甘えてられないよね……」

ミーティアの背中にあつた十字の傷は、ステイグマの影響から逃れたためか、一目見ただけではわからないほどに薄く小さくなっていた。

かき乱され、切り裂かれて悲鳴をあげていた千香の心も、不思議と落ち着いていた。足の痛みも消えた。敗北に打ちひしがれた弱い心が、ありもしない痛みを感じさせていたのかもしれない。

もう二度と、負けない。大切な人たちを守り抜く力を、仲間の信頼に答える力を、あの人に追いつくだけの力を、身につけて見せる。

心地よい決意だった。この気持ちがあるだけで、どこまでも強くなれる気がした。

「ところで、千香さん」

きっかけを与えてくれたミーティアに礼を言おうとしたが、その前にミーティアが口を開いた。なんだか、声が上ずっている。顔も赤くなっていた。

「なんででしょう?」

「千香さんって、いつもこんなに長湯するの?」

千香は慌ててミーティアを抱きかかえ、浴場を後に行きかけた。千香は慌ててミーティアを抱きかかえ、浴場を後に行きかけた。千香は慌ててミーティアを抱きかかえ、浴場を後に行きかけた。

一か八か。最初の綱渡りを終えて、エルナは深く息をついた。

大剣を青眼に構え、切っ先を向けた相手を睨む。あらゆる衝撃を弾き返す強靱な鱗、睨まれるだけで足がすくんでしまうほど鋭く、猛で野性的な黄金の瞳、燃えるような真紅のたてがみ、風を切り、天空を翔けるための鋼色の翼。人で知らないそれは、普通ならばまず出会ったことのない最高位の魔獣——ドラゴン。

目の前で吼え猛るドラゴンは片翼を折られ、すでにその巨体を支えて飛びあがるだけの力を残してはいなかった。無敵の鎧とも言えるドラゴンの鱗が、魔導砲ブレスを放つ直前から直後の短い時間だけに脆くなることを利用し、エルナが斬りつけたのだ。

強化系術式の増幅回路を二つ併用し、傾いた木を滑走路にして飛び上がったエルナは、ちょうど魔導砲が放たれる瞬間にドラゴンの片翼を叩き折ることに成功した。

だが、その無茶な綱渡りが災いして、エルナはすぐに動き出せなかった。そもそも、強化系術式の増幅回路は身体への負荷が大きい。鋼鉄の肉体を持つ屈強な戦士ならばまだしも、細身のエルナには二つの併用は戦闘の継続に支障が出るレベルだ。構えてはいるものの、体勢を崩したドラゴンにすぐさま畳みかけることはできなかった。

次の綱渡りは、これから襲い来るであろう極太ビームをかいくぐってあのドラゴンにトドメを刺すこと。本当にそんなことができるのかどうかも疑わしい状態だが、エルナは退くつもりはなかった。

ここでエルナが逃げれば、他の誰かがこのドラゴンと対峙しなければならぬ。天、千香、ノクスの三人は今動けない状態だし、まさかクレレに戦わせるわけにはいかない。艦長も長距離砲の発射のために待機していなければならない。

結果として、今のドレッドノートでドラゴンと対峙できるのは、エルナしかない。多少の無茶は覚悟しなければならない。

しかし、エルナがここから退かない理由はそれだけではなかった。今は、何も考えたくないのだ。少しでも意識を反らせば、蘇るのは心を突き刺す涙の記憶。それを考えるのは戦いが終わってからにし

ると自分に言い聞かせ、体勢を立て直したドラゴンに意識を集中する。

翼を折ったとは言え、魔導砲ブレスは死んではない。いかにしてその攻撃をかくぐって一撃を入れるかが勝負だ。ドラゴンが首を振り上げ、大気と共に魔力素を吸い込み始める。強烈な気圧の変化が、周囲に暴風を巻き起こす。

エルナは強化系の増幅回路を大剣にセットした。安全な使用のためには十分なインターバルが必要だが、この際そうも言っていない。狙うべきはブレスを吐き出す瞬間。振り上げた首を振り下ろす魔導砲発射の予備動作と同時に、エルナは地を蹴った。

大振りな武器は間合いを詰められると役に立たない。この魔導砲ブレスも同じで、ドラゴンの口から放たれるその極太の熱線は、ドラゴンの体に近づけば近づくほど細くなる。

ただ、まっすぐ近づいたのではエルナの大剣も十分な威力が出せない。従って、魔導砲ブレスの死角となるギリギリの角度から、ドラゴンに対してナナメに突進。首元を狙って大剣を振り下ろす。

近づきすぎれば魔導砲の余波でタダでは済まない。大剣のリーチを生かして、可能な限り離れた位置から振り下ろしの一撃を叩きこむ。

はずだった。

「か……はっ」

エルナは魔導砲の衝撃の余波を軽く見積もりすぎた。激しい風圧で首元を狙った一撃が反らされ、振り下ろした刃はわずかにドラゴンの片足を斬りつけるだけにとどまった。

その影響で魔導砲は止まったが、エルナはドラゴンに尻尾を叩きつけられ、決めた地面を転がった。強化系の増幅回路による負荷と、硬い鱗におおわれた尻尾の一撃がエルナに激しい苦痛を与え、その場から立ち上がることを許さない。

何も考えられなかった。考えてしまうことが恐ろしかった。ドラゴンが再び首を振り上げて大気を巻き込んでいく。魔導砲ブレスが来るのはわかっている。わかっているにしても、エルナは動けない。

エルナに出来たのは、ただ恐怖を見ないで済むように瞳を閉じることだった。

12：追憶からの解放

「彼は、無茶なことをするね」

ノクスは、自分で言っておかしいと感じた。その感覚の正しさを、抱き起こしてくれた少女の表情が裏付けてくれた。

エルナ以上の無茶をしていたのはノクスだ。事実、エルナが空中にいるドラゴンに向かって飛びかかるなどという無茶をしなければ、ノクスはとくに魔導砲の直撃を受けて消し飛んでいただろう。

「ありがとうクレレ。もう十分だよ」

不安そうな青い瞳を安心させるように、白い帽子の上に軽く手をのせて撫でる。この小さな少女が、肩を貸そうとしてくれるのを制して、ノクスは倒れかかった木に手について立ち上がった。

体の中から骨のきしむ嫌な音が聞こえてくるようだった。頭の神経が切れてしまいそうなほどの激痛が走る。呼吸のたびに肋骨が悲鳴を上げて、苦痛が意識を蝕む。

それでも立たなければならなかった。立つと決めていた。メタモルの形状を長剣に変えて杖の代わりに地面に突き刺し、研修生が一人奮闘している方向を見つめる。あのドラゴンは、何としてでもここで潰さなければならぬ。

一歩踏み出そうとしたその先に、両手を横に広げたクレレが割り込んだ。

「そこを、退いてくれ」

「無理です！ 立つてることだって辛いのに、ドラゴン相手に何ができるって」

「退いてくれッ！」

クレレの肩が大きく震えて、ギュツと閉じた瞳から雫が落ちた。このまま押しのけてここを通ることはできるだろう。剣を一步先の地面に突き刺して、白い制服の肩に手をかける。

持てる全ての勇気を振り絞って立ちあがった少女の、震える肩

を押しつけて、また一步先へ。こんな体でも、困くらいにはなるだろう。ドラゴンを排除できるなら、それでも構わないと、ノクスは強く思っていた。

思っていたが、彼は次の瞬間に前のめりに倒れ込んでいた。気力が続かなくなっただけではない。誰も手を出さなければ、彼は這ってでもドラゴンの元にたどり着いただろう。だが、そうしようとする前に、痛みで体が動かなくなった。後ろから、首の下の背骨の浮き出た個所に強烈な打撃を受けたせいだ。

「あ……？」

なんとか首だけ動かして、うつ伏せに倒れた状態からその犯人の素顔を見ようとする。見る前に、聞きなれたため息が聞こえた。

「兄さんや艦長が言ってた通りですね。頭に血が上ると冷静な判断ができなくなる」

和装に身を包み、刀の柄を握った少女、千香だ。どうやら、柄で強かにどつかれたらしい。

「ごめんなさいッ！ ノクスさん」

あまり申し訳なくなさそうな謝り方の声が千香とは反対のほうから聞こえた。それについてノクスが何か感じる前に、その声はとも頼もしく宣言した。

「ドラゴンは、私達が仕留めてきますッ！」

ノクスが精一杯の力を込めて立ち上がる頃には、二人の背中はずいぶん小さくなっていった。それでも、立ち上がる途中に見えた研修生の背中、あまりの力強さに見とれてしまうほどだった。

「なるほど、彼女なら、ドラゴンと真っ向から撃ち合えるってことか」

先ほど怒鳴りつけてしまった少女が手をとって、彼女の肩に回してくれた。

「少し歩いたところに、帰還用の転移陣を描きました」

すでに涙は拭いた後で、この小さな少女の声にも力強さが宿っていた。ノクスは笑いながら小さくため息をついた。

「帰ったら、玲菜ちゃんから大目玉だな」

浮遊感。放たれた魔導砲の閃光が視界を焼き、轟音が鼓膜を突き刺した。

体が地を離れ、吹きつける風以外の感覚が全てなくなる。死ぬ、というのはこういうことかと納得しかけて、しかけたところでエルナの意識は現実呼び戻された。

背中を地面に強かに打ちつけて、咳き込む。奇跡的にも魔導砲の直撃を免れたのだろうか。そう思って粒子熱線の放たれた場所を見ると、そこには信じられない光景が広がっていた。

「えつと……えつ？」

ドラゴンの口から吐き出される黄金色の筒状プレス。その先端が、淡い緑色の光の塊で押し返されている。その淡い緑の光の発生源には、巨大な魔法陣を目の前の空中に展開し、それに向けて杖を掲げた一人の少女の姿があった。

白いブラウスにベージュ色の三角襟、ひざより少し下までの丈がある長めのスカートと、肩の辺りまで伸びた茶色がかった髪が魔導砲が巻き起こす風で舞っている。

「ミー、ティア……！」

押して押されて。アースワームの時よりも強い魔導砲プレスなのか、ミーティアの放つ魔術がやや押され気味だった。それでも彼女の表情に迷いや焦りは全くない。必ず勝つという信念さえ感じられるような勇ましい表情だった。

そして、その理由は間もなく理解された。鋭い何かがドラゴンの鱗を切り裂き、皮膚を貫いて辺りに鮮血を撒き散らした。ドラゴンの放つ魔導砲が消え、ミーティアの特大魔法陣から放たれる粒子の氾濫が直撃して爆ぜる。

やがてミーティアの放つ魔法も一度区切りを迎え、エルナから見

てその通過経路の向こう側に見えたのは振り抜いた刀を鞘に納める少女の姿。しかし、彼女はドラゴンのいる場所から二十メートルほど離れている。背丈の関係上、彼女の刀もそう長くはないため、魔導砲に触れるギリギリまで接近しなければドラゴンを斬ることはできない。

ただし、それは彼女の刃が実体を持つ刀だけだと仮定した場合の話だ。ゆらゆらと立ち上がるドラゴンに対して、彼女はその場から動かずに姿勢を低く構え、刃を鞘の中で走らせて神速とも言える振り抜きを放った。

当然、二十メートルも離れていれば刀は当たらない。当たらないはずなのに、先ほど斬られた傷からドラゴンは再び黒い血を噴き出した。ドラゴンの後方、少し離れた位置にある木がナナメに切れて倒れた。ドラゴンを、木を斬ったのは、風の刃だ。

千香はあまり魔術に頼らないが、それでも四元系の風の術式を扱うことができる。剣術と融合した神速魔法剣は、ドラゴンの強靱な鱗の上から――魔導砲の影響で脆くなっているとは言え――深い傷を与えるほどの威力がある。更に続けざまに二発。風の刃が黒い血飛沫を上げ、ドラゴンの動きを鈍らせる。

その刃の主が千香だと気付いたドラゴンは千香に向けて魔導砲を放とうとするのだが、もう遅い。すでにミーティアの魔導砲が詠唱を完了しているからだ。

「ルーニック・バースト！」

淡い緑色の光の粒子群が、伝説の魔獣、ドラゴンを飲み込む。音と光の氾濫が収まる頃には、すでにドラゴンは鱗の一欠けらさえ残っていないかった。

「そんなわけで、任務完了ー！ ドラゴンとったどー！」

眩しい笑顔で言うミーティアを見ても、エルナはなんだか釈然としなかった。というより、頭が状況をまだ理解していなかった。

「え、えつと……もう大丈夫なの？」

吹き飛ばされた痛みは、あまりにも急な展開のせいか気にならなくなっていた。足が笑ってしまつて立ち上がることは無理だったけれど。

「おうよ！ 完全復活パーフェクトミーティアちゃんだぞー！」

ぐるぐると肩を回して快調をアピールするミーティア。安堵と同時にある種の疲労を感じて、エルナは起こした上体をもう一度後ろに倒した。

「いたっ」

相変わらず頭をぶつけてしまつて痛かった。げんなりしている隙にミーティアが悪戯っぽく笑つたのを、エルナは見逃してしまつた。直後、体が軽くなり、背中に触れていた地面の感覚がなくなる。

「え、あのっ、み、ミーティア？」

「んぐ、意外と重量感が……」

「多少は筋肉つけてるからね。って、そうじゃなくて！」

「何か問題があるのかな？ エルナくん」

おどけた口調で言われて、具体的に問題点を指摘できないことに気付いたエルナは小さくつぶやくことしかできなかった。

「こ、これじゃあ逆だよお……」

エルナは、その体勢のまま——ひざの裏と背中の下に手を入れて持ち上げられた状態のまま——ドレッドノートまで運ばれることになった。

あまりにもあつけなく、ドラゴンの一件は終結した。ドレッドノートに搭載された長距離砲を撃つ許可は結局得られなかったが、玲菜は「撃たないに越したことはない」と心底ほっとした様子だった。ノクスは肋骨にヒビが入ってしまったということで、数日から一

週間程度入院しなければならなかった。だが、本人は怪我のことよりもコーヒーが飲めないことを嘆いていたほどなので、心配はないだろう。

千香は足の傷が完治したようで、いつも通り訓練——本人いわく、訓練ではなく稽古らしいのだが、エルナにとってその違いはさっぱりわからない——に勤しんでいた。

クレレは天やノクスのお見舞いに行ったり、訓練室の千香に差し入れを持って行ったり、魔導植物の世話をしたりと忙しそうにしているが、本人はそれが嬉しいのだと言う。

この三日間は色々なことがありすぎて慌ただしかったが、このドレッドノートにもようやく平穏が訪れたようだった。エルナは傷がさほど深くなかったので、軽い手当を受けてからは普段の生活に戻っていた。

普段、というのはドレッドノートにとっての普段だ。第四区画にも元の平和が戻り、そしてギルドの仕事はほとんどない。ほとんどの以上、エルナは暇になってしまふ。玲菜の書類もついさっき運び終えて、完全に手持無沙汰になってしまった。

ブリツヂにはあの記者、龍見 マヤが来ていて玲菜と話をしている。エルナはすっかりマヤという女性が苦手になってしまっていた。何でもミーティアや千香とほぼ同じタイミングでドラゴンとの戦いに駆け付けたりしく、「生ドラゴンですよ！ 生ドラゴンと戦う生勇者ですよ！」などと目を輝かせながらシャッターを切り続けたのだという。

そんな記者の鑑とも言うべき彼女が、ドラゴンと戦った勇者にインタビューしないはずがなかった。

『ドラゴンの翼に傷を負わせたそうですが、どうやって戦ったんですか？』

『危ないところを正義のヒロインによって救われましたが、彼女はあなたにとってどんな人ですか？』

『ひょっとしてもうあんなことやこんなことまで済ませちゃって…』

…！？」

夢に出てくるかと思うほど矢継ぎ早に質問され、しかもドラゴンに全く関係ない方向に話が向かってしまうので、タチが悪かった。エルナお得意の笑って誤魔化す作戦も、真実を追求する彼女には全く通用しなかった。当たり前障りのない答えでなんとか乗り切ったが、その答えを聞いた時のマヤが心底残念そうに肩を落としていたのは、気のせいではない。

ともあれ、今はブリツヂには行きたくない。クレレは色々動きまわって疲れたのか、部屋で眠ってしまったているらしかった。千香の訓練——稽古——を邪魔するわけにもいかないし、天やノクスもそう何度もお見舞いに来られても迷惑だろう。

結果として、残っているのはミーティアだ。いや、意図して最後まで彼女を残しておいた、と言ったほうが良い。切羽詰まった問題でない限り、悩ましいことはとりあえず先送りしてしまうエルナの悪い癖だ。

本当は、気になって仕方がなかった。ステイグマの影響はもうないのかとか、あんなに激しい魔法を使って平気なのかとか。何より増してエルナの心に重くのしかかるのは、あの時の涙の記憶だった。「はああああ……」

胸につかえた嫌な気持ちの塊を吐き出すように、ベッドに寝転んだまま壁に向かってわざと少し大きなため息を吐いた。吐き出した嫌な気持ちは情けない声になって耳からまた入ってきた。

大げさに寝がえりを打って、反対側の壁に立てかけた剣を見ようとした。

「ん？」

見えなかった。その理由を理解すると同時に、エルナは飛び起きた。

「わ、あああ、ああっ！？」

「そこまでテンパられると傷つくなあ」

わざとらしく肩をすくめた少女は、ちょうどエルナの考えていた

ミーティアその人だった。

「い、いつからいたの？」

「壁に向かって悩ましいため息を吐いてた辺りから」

「声くらいかけてよ……」

「かけたけどエルナが気付かなかったんだよ」

そう言ってミーティアはエルナに顔を近づけ、覗き込んだ。真剣なまなざしに見据えられて、エルナは思わず目を反らした。目を反らしても、鼻をくすぐる良い香りが考えていることを片っ端から吹き飛ばして行った。

「悩み事？ それなら相談に乗るよ」

「う……」

言えない。まさかこの悩みをミーティア本人に相談するわけにはいかない。エルナはミーティアの顔を直視できなかった。純朴な視線が冷たい刃に変わって自分を切り裂く事を、明るい声が鋭い棘に変わって自分を突き刺す事を想像すると恐ろしい。

「だんまりかぁ」

小さいため息の後、ベッドのスプリングが小さく軋んだ。エルナの隣、少し離れた場所にミーティアが腰かけたからだ。

「一緒に考えようって言うてくれたのは、エルナなのに」

非難の色よりはいじけるような、寂しげな色の強い声。それがまたエルナの心を抉り、かき乱し、追い詰めていく。

「わかった」

納得したような声と同時に、もう一度スプリングが小さく軋んだ。ミーティアが立ち上がったからだ。

「エルナが話したくないなら、しょうがないね。でも、辛くなったら、無理しないでよ？」

その優しささえも、今のエルナにとっては自分を追いつめる原因の一つになってしまう。肩が震えて、目頭に熱い物がせり上がってきた。

何か、言わなければ。早くしなければ、ミーティアが部屋から出

で行ってしまふ。このまま行かせてしまつたら、二度と言えない気がして、エルナはようやく震える声を振り絞つた。

「待って……！」

足音が止まつた。耳鳴りがするほど静かな部屋だつた。何か言おうとするたびに、迷いが邪魔をした。何度もそれを繰り返して、どれだけの時間が経つたか、ようやく小さな声を発することができた。

「ボク……」

引き留めてしまつたんだから、覚悟を決めなければならない。一つ深く呼吸して、

「ボク、ミーティアに、キス、したんだ……」

ついに、言つた。それが声になつているかどうかともわからなかつた。それからの沈黙は、エルナが今まで生きてきた中で最も長い沈黙だつた。いつそ罵つてくれたほうが気が楽だと、何度も思つた。指先は震えるし、呼吸は苦しい。喉が渴いて仕方ない。

「うん。知つてた」

そう言い切つたミーティアの口調は、普段の明るい色を持つてはいなかつた。その内側にどんな感情を隠しているのかわからないくらいに平淡で、冷たい印象を受ける声だつた。

「じゃあ、やっぱりあの涙の意味は……」

拒絶だつたのか。ひよつとしたら、言うべきではなかつたのかもしれない。言わなければ、ミーティアはあの出来事を無かつた事にしてくれたかもしれない。何事もなかつたかのように戻つてきた平穏を享受して、お互いに心穏やかに過ごせたかもしれない。

けれど、エルナは言つてしまつた。そうすることを、選択してしまつた。選択した後の痛みを受け入れなくてはならない事はエルナ自身もよく知っている。

不確かなモノばかりが転がる場所で、動く事はとても恐ろしい。動いた結果の痛みが、それを意識させるだけの静寂の時間が――実際に三十秒にも満たないわずかな時間だが、エルナには何百倍にも感じられた――エルナの心をすり減らして行く。

「うん。あれは、私が弱かっただけ」

平淡な声の中に混じった悲愴の色を感じて、エルナは顔を上げた。ミーティアはまたエルナの隣に座った。座って、深く息をついた。

「実はね。エルナが初めてじゃないんだ」

「えっ？」

真意を量りかねて聞き返すと、ミーティアは少し拗ねたように答えた。

「ファーストキスじゃなかったってこと！」

「あ、そうなんだ……」

「嫌な気分になった？」

「え、うん……。わからない、けど、ちょっとチクリとは、したかな？」

「そっか」

ミーティアの口調と表情は穏やかなものになっていた。エルナにとって、今の二人はどこか懐かしい雰囲気だった。幼少の頃、昼間に散々はしゃいで、疲れておとなしくなったミーティアと、布団の中で眠くなるまでおしゃべりしていた時のような、落ち着いた幸福感があった。

不思議な気持ちだった。さっきまでは目を合わせるのも怖かったのに、少し話しただけでそれが嘘のように、心が穏やかになった。涙の意味を考えるとまだ少し重い気分になるが、今はあのキスがミーティアにとって初めてでなかったことに半分安堵し、もう半分に奇妙な寂しさを覚えるくらいの余裕はあった。

「エルナに、聞いてほしい話があるんだ」

エルナは「うん」と頷いて、促した。並んでベッドに座って、目を合わせてはいないけれども、確かに一緒にいて話していることが実感できた。並んで布団に入って天井を見ながら話していた頃の感覚にとてもよく似ていた。静寂の中で心地よく響くささやき声が耳から入って全身にしみわたり、暗闇の中で不思議と心を弾ませるあの感覚に。

「私ね、お兄ちゃんがいたんだ」

遠くを見るように目を細めて、ミーティアはポツリと話し始めた。

十年前。ミーティアは六歳の時に孤児院から引き取られ、エンシスハイム卿の養女になった。

ちり一つも落ちていないきれいな絨毯と、引き込まれるほど鮮やかな色合いの絵画が飾られた天井の高い廊下を過ぎて、たどり着いた部屋。そこで彼女は、一人の青年と出会った。

青年と言うには当時まだ少し幼かったが、流れるような髪も、線が細く触れたら壊れてしまいそうな華奢な手も、ミーティアを優しく見つめる瞳も、その全てがミーティアには大人びて見えた。

「よろしく。僕はエルネスト」

突然、育ての親や幼馴染と引き離されてしまったミーティアは、自分の周りにある世界全てを怖がってしまったが、自分に向けられた、自分だけに向けられた優しい声と、穏やかな笑顔と、暖かい手に、次第に心を解きほぐされていった。

エルネストという青年はミーティアより幾分か年上で、初めて二人が出会った時には十二歳だった。普通ならば学校へ通い、友人たちと騒いで過ごすであろう年頃だが、彼は体が弱く、外に出ることはほとんどできなかった。

ミーティアは優しいその青年に甘えたし、エルネストも寂しかったのか、ミーティアにはいつも優しくかった。遊びたい盛りのミーティアは家の中でおとなしくしていることなど耐えられなかったけれど、それまでよりも早い時間に家に帰るようになっていたし、それからエルネストと話すために体力を温存することも覚えた。

「今日ね、ヒーちゃんが木に登ろうとして怒られちゃった。わたしは見てただけなのに」

「みんなで作った巣箱の中で、小鳥さんが生まれたんだよ！　すご

いでしょ」

「空を飛ぶのってどんな気持ちなんだろうね。雲とか食べられるのかな？」

外に出られないエルネストが話すことはあまりなかったから、必然的に話し手はミーティアだった。エルネストはミーティアの冒険譚の全てを興味深く聞いてくれたし、それならばとミーティアも気合を入れて毎日話のネタになるようなことを探しまわった。

どうしても話すことが見つからない日は、エルネストがいろんな本を読んでくれた。ミーティアはだいたい途中で寝てしまうのが悔しくて、そうならない方法を色々と考えたりもしたが、結局は心地よい温もりと柔らかな声に負けて夢の世界へ誘われてしまうのだった。

三年ほど経ったある日、ミーティアは常日頃から気になっていた疑問をエルネストにぶつけた。ベッドの脇に立てかけられた、その杖はいったい何なのか、と。

聞かなければ良かったと、思った。幸せが満ちていたその空間に一つだけある異質なものに目をつぶっていれば、それは本当になかったことになったかもしれないのに。

それを聞いた時の、エルネストの悲しそうな、寂しそうな表情はミーティアの心の奥深くに刻み込まれた。

「これは僕が考えた昔話なんだけど」

そう言ってエルネストが語った話は、どこまでが本当でどこからが作り話なのかミーティアにはわからなかった。否、エルネストはわからないように話してくれた。

昔々、あるところに魔法使いがいた。その魔法使いは、永遠の命について研究していた。けれども、そんなものは人の身には決して得られないものだと思い、ある導具にその夢を託した。

それが、この杖——ステイグマ。元々は名前もないただの杖。人

間には実現できない、「完全」を閉じ込めた魔法使いの最高傑作だった。

やがて時が過ぎて、それを作った魔法使いが死に、その杖はどこかへ売られて行った。魔法使いが残したその杖についての書記には、ただ「人の身に得られぬ完全」としか書かれていなかったから、周りの人間たちはそれについて好き勝手に噂し始めた。

あらゆる傷をいやし、死者を蘇らせ、人の身にはあまりある奇跡の力を持つ、と。誰が言い始めたのかはわからないけれど、そんな力があるはずはなかった。ただ、その杖は、自身が未永く存在できるように作られただけ。

人はその杖を欲した。奪い合った。ただ一本の、夢を詰め込んだだけの杖のために、幾千の人間が死に、幾万の血が流れた。その血を浴び、杖はやがてその構造を歪めていった。この杖に触れた人間の中から、最も適した所有者を選ぶようになった。

杖のために殺された人間の怨恨が、それとも夢を汚された魔法使いの呪いか。所有者の候補達には想像を絶する痛みが与えられた。それぞれの持つ傷が疼き、その痛みで命を落とす者もいた。

そうなって尚、人はその杖への狂気にも近い憧れを捨てられなかった。所有者として選ばれた者が、必ず一つは持っていたとされる傷。杭を打ち込まれたような手足の傷、槍で突かれたような脇腹の傷、荊の冠の棘によってひつかかれたような額の傷、十字架に張り付けられたような、背中の十字傷。

それらは「聖なる傷」と呼ばれ、ステイグマを欲しがる者はこぞって自らの体にその傷を刻んだ。杖のために、また多くの血が流れた。

今でもその杖は、運悪く傷を持ち、運悪く所有者として選ばれてしまった者の傷を疼かせ、苦しめているという。

話を聞いて青くなったミーティアを、エルネストは優しく撫でてくれた。

ミーティアはそれでも怖くて仕方がなかった。少しでも考えると泣き出してしまいそうだった。

なぜなら、エルネストの背中にも、十字の傷があったから。

その話を聞いた晩から、ミーティアは恐ろしい妄想に苛まれるようになった。目を閉じるたびに、ありもしない悲劇がまぶたの裏に映し出された。眠ろうとするたびに恐怖が意識を引きずり出し、彼女を震えさせた。最初のうちはエルネストと一緒に眠ることと不安を和らげることができていたが、一年、二年と時が経つにつれて成長と共に遠慮や気恥ずかしさが生まれ、それもできなくなった。

成長しても、恐ろしい幻想はなくならなかった。なくなるどころか、意識の底に根を生やしてしまっていて、余計に大きくなっていった。眠りを妨げられる日々は、ミーティアがエンシスハイム卿に引き取られてから八年後、彼女が十四歳になる年に終わりを迎えた。

空想が——空想のままであり続けてほしかったのに——現実のものとなってしまったのである。

ある朝、いつものようにエルネストに会いに行ったミーティアは、そこで現実となった悪夢を見た。ベッドの上で体を弓なりに反らせて痙攣したかと思うと、その後に荒い息を吐き出す。額には汗が滲んで、時折、吐息と共に小さい呻きが零れた。

ミーティアは一瞬だけ、別人かと思った。そう思ってしまうほどにエルネストは疲弊し、憔悴し、擦り減っていた。駆け付けて顔を見た時、ミーティアは血の気が引いていくのがわかった。

生気を失った虚ろな目が、頼りなく宙を見つめていた。何か言葉を発することができずの状態ではなかったし、意識さえほとんど残されていなかったかもしれない。ミーティアの呼びかけに瞳だけ動かすものの、すぐに痛みに表情を歪めて目を強く閉じてしまう。

何とかしないと。お医者様を呼んでこないといけない。ミーティアがそう思っただけで、彼女の行く手を阻むように、一本の杖がそこに浮いていた。

エルネストがこちらに向かって何かを必死に伝えようとしている

けれど、ミーティアにはそれよりも杖の放つ言葉に聞き入ってしまった。

その青年を苦しみから解放する方法が一つだけある。痛みを伴うものだが、お前にその覚悟があるのか、と。

『あらゆる傷をいやし、死者を蘇らせ、人の身にはあまりある奇跡の力』

あるはずがないと聞かされていても、それを信じてしまいたくなる。杖自身がそう語りかけてきたのだから、頭の片隅で疼く小さな予感を踏みつぶしてでも、ミーティアはそれにすがってしまった。

「大丈夫だよ、エル。私が、なんとかする」

ミーティアはステイグマの指示通りに動いた。与えられたナイフを壁に固定して、上に着ていた服を全て脱ぎ捨て、肩甲骨の辺りを刃の先端にあてがう。激痛。硬く冷たい鋼が肉を貫く。声すら出なかった。

歯を食いしばって、白い肌にナイフの先端を食いこませたまま、真横に移動する。左右の肩を背中ですなぐように、赤い一筋の傷からゆっくりと生温かい物が滲み出た。

「だい、じょう、ぶ」

額からは汗が吹き出し、手も足も感覚がどこかへ連れ去られてしまったようだった。それでも、これはエルネストを救うため。ミーティアは苦痛の中でも、エルネストに笑いかけた。

もう一度。今度は刃の向きを九十度変えて。首筋から、腰まで。

「あ、ああッ！」

耐えきれずに両目から大粒の雫が零れ、息が苦しくなる。背中につけた傷が焼けるように痛い。苦しそうに声を出そうにも出せなかったエルネストのほうは、次第に落ち着いていく様子が見られた。

「エル……」

痛みがミーティアの意識を食い破って闇へ引きずり込もうとする。エルネストが眠るベッドまでの距離が、長い。視界に緑色の靄がかって来る。もう何も考えられない。

さいごに、激痛の中で一度だけ、許されない口づけをした。

「なんで、あんなことしちゃったのかな」

語り終えたミーティアは、遠い日に思いを馳せるように目を閉じた。口調は淡々としていたが、それはミーティアにとって、そうしなければいけないという自制心のようなものを抱かせる話だったからだろう。事実、彼女の呼吸は少し震えていた。

「そうしないとエルネストさんは助からない、って言われてたんでしょ？」

「そう、だったのかな」

ゆっくり目を開いて、ミーティアは深く深く息を吐いた。

「実はね、あんまりよく覚えてないんだ」

反動をつけてベッドから立ち上がり、もう一度深く息を吸い込んで「本当に、エルお兄ちゃんが好きだったのかもしれない。でも、あの時の私が何を考えてたのか、正確なところはわからない。

だから、忘れられなかったし、いつまでも引きずってたんだろうね」

エルナはそれを聞きながら、胸にもややした気持ち広がっているのを感じていた。

不快と言うには弱すぎるし、決して快いものでもない。ただすつきりしない、優柔不断で行動できない自分を見ているようで、苦しいような悲しいような気持ちになった。

ミーティアに伝えなければならぬことが、あるはずだ。

「エルネストさんは」

本人には口止めされていたけれど、やはりこれは伝えるべきだ。エルナはそう決断するための後押しとして、冒頭の部分だけをまず口にした。

「ずっと、ミーティアの傍にいたよ」

意図をつかみかねて不思議そうな表情をしているミーティアの目をまっすぐ見て、エルナはあの夜、エルネストが現れた事を告げた。ずっと、杖の中にいてミーティアを見守っていたことも。

それを伝えても、ミーティアが驚く様子はなかった。むしろ、納得したような表情で柔らかく微笑んだ。

「やっぱり、いてくれたんだ」

そして、ミーティアがその事実を受け入れている事に対して、エルナも驚いたりしなかった。きっとこういう反応をするだろう、とエルナも予測していたからだ。

「だから、杖に向かって話しかけてたりしたんだね」

「あはは、見られてたのか……」

照れくさそうに頬をかいてから、ミーティアはまっすぐにエルナを見つめ返した。

「ずっと、そうなんじゃないかって思ってた。きっとこの杖の中にいて、私を見守ってくれてるんじゃないかって。」

あれから——私がステイグマを受け継いで、エルが死んでから——、今度はあの日の夢ばかり見るようになった。いつも、六歳の私がエルに初めて会った時の事から始まって、早回しみたいに、駆け抜けるみたいにあの日になって、キスするところで目が覚めた」

ミーティアの目はいつになく真剣で、見つめられるエルナも自然と背筋が伸びた。ミーティアの言う「聞いてほしい話」の一番大事な部分は、これから出てくる。ミーティアの雰囲気から、なんとなくそれがわかった。

これから話されるであろう大事な部分はいったい何だろう。単純なことを好む性格のミーティアがここまで話を引っ張るのは気になった。「エル」という愛称が出てくるたびに胸の奥が少しチクリとするよりも、次に話される内容に対する不安や焦燥に似た気持ちが強くなっていた。

「でも、今日は違った。今までのキスは全部、一色に塗りつぶされ

た理想の味がしたけど、今日のは震えてて、迷ってて、どこか弱々しくて……。なんて言えいいのか。夢の中の、思い出とのキスじゃなくて、生きてるって感じだった」

聞いた言葉が一つ一つ、エルナの頭の中で繰り返し響いた。心臓の鼓動が速くなって、思考が良く回らなかった。

「だから、エルナがキスしてくれたことには、感謝してるんだよ」
ミーティアは悪戯っぽく笑って「それじゃあまたね」と手を振りながら部屋を出て行った。

静かな部屋に一人取り残されて、ようやくミーティアの言葉を思考の中でなぞることができた時、エルナは更に心臓が締め上げられるように苦しく、沸騰しそうなほど顔が熱くなった。

ドレッドノートへようこそ 第一章―完―

13：第一章覚書

覚書

■人物

□エルレナード・フィンブルツール（エルナ） 十六歳

魔法学校高等部一年所属。優柔不断。弱気。

一度目の長期休暇研修で持ち前の優柔不断さを発揮し、弱小艦ドレッドノートに配属されてしまった。

優柔不断だが、追いつめられると思いきった行動に出てしまう。そして後悔する。

両親はなく、孤児院育ち。

ブレードタイプ、大剣型のLPを使用。戦闘となると普段の気の小ささは無くなる。

十六歳にしては小柄で、華奢。声も高めなのでよく女の子と間違われる。更に、顔に幼さが残っているので年相応に見られないことも多い。よく頭をぶつける。

将来、自分に剣を残してくれた人に会うために必死で勉強して魔法学園に入学した。

□ミーティア・エンシスハイム 十六歳

魔法学校高等部一年所属。お気楽。

十年前に孤児院からエンシスハイム卿に引き取られた。

ロッドタイプLP【ステイグマ】を使用。破壊系の術式が得意で、並外れた威力のものを撃つことができる。

ステイグマの呪われた力の継承者だったためにヘルテイトに囚われ、一度は怪物となりかけるのだが、エルナによって救われた。

□白柳 天 二十歳
しろやなぎ てん

ドレッドノートの魔導技師。自称非戦闘員。

背はそれなりに高い。普段はやる気のなさそうな顔をしているが、基本的に気分屋。やる気がある時は強い。夜型。

ロッドタイプLPを使用。錬金・生成系の術式を得意とするが、探査・解析系も扱える。見ただけで相手の魔術的資質を見抜く。

やる気はなくても割と優しい。整理整頓ができない。

魔導工学、特にLPのことになると人が変わる。

普段だらしのないのに魔法も剣も扱えるのは、隠れて努力してきたから。ただし、純粋な剣の腕は千香には敵わない。

本職は本人の言う通り技師。自動航行システムや長距離砲のメンテナンスなど、ドレッドノートを技術面から支えている。

□白柳 千香^{ちか} 十七歳

ドレッドノートの数少ない常識人。天の妹。やや小柄。背はエルナより低い。

紺色の道着を着ている。落ち着いているが、想定外の事態には弱い。

白柳の剣術のほとんどの技を若くして会得してしまっているが、まだ己の力に不足を感じている。

また、なんでもできる（ように見える）天に対してコンプレックスを抱いている一面も。

刀型のLPの使い手。神速の剣技と四元系の風の術式を使うことができるが、魔術にはあまり頼りたくないと思っている。

訓練室の常連。世話焼き。

服装は和風だが、飲食に関しては特に和風が好みというわけではないらしい。（眠い時の目覚ましにハーブティーを入れようとしている）

□ノクス・アージェンタイム 二十二歳

コーヒートをこよなく愛するドレッドノート副艦長。背が高い。

線が細く、目は切れ長。なんでもジョークや皮肉にしたがる。その性格ゆえか、他のクルーのことをよく観察している。

副艦長ではあるが、実質的に完全な戦闘員。扱いの難しいメタモルを操り、数多の形状の武器を使いこなす。

それなりにSツ気があり、仲間を傷つけた相手に対しては容赦しないという方針の玲菜と気が合う。

□クレレ・ヴェリタス 十四歳

すぱーつどりんく一筋なドレッドノートの非戦闘員。艦長補佐。書類運び、魔導植物の世話など、細かい雑用をこなす。

雑務において人一倍頑張るのだが、どう考えても物理的に難しいことに挑戦するため、見ていて危なっかしい。とても小さい。

ドレッドノートの中では珍しい、白を基調とした制服を着る。ゆるめの帽子は大切なモノらしい。金髪碧眼。

ペンタイプLPを使用。探査系術師として優れた実力の持ち主。義務教育期間だが、通信教育で済ませてギルドの仕事をしている。優しい性格だが、芯の強い一面を見せることも。

□本川 玲菜^{れいな} 二十五歳^{もとかわ}？

コーヒーよりは紅茶が好きなドレッドノート艦長。トレードマークは艦長帽子。

頑張るクレレを見るのが幸せ。

かつて、第四区画中央防衛師団の教官をしていた。当時の通り名は「紅弾丸の鬼狂官」

戦闘能力は全く衰えておらず、ガンタイプのLPを駆使しての突破力、制圧力は他のメンバーの追隨を許さない。

作戦の判断や指揮は迅速で的確。指揮官としての腕もかなりのものだが、想定外の事象で予定が狂わされると弱い。

本名「レイナ・バーレイグ」。バーレイグに対する風当たりは強

いので、普段はカラーコンタクトで色を隠している。

□エルネスト・エンシスハイム 享年二十歳

エンシスハイム卿の一人息子。生まれつき体が弱く、ほとんど外に出ることができなかった。

死後もステイグマの中に意識を宿し、ミーティアを見守っていた。

□第四区画中央魔法学園 学園長

白ヒゲの老人。正義感が強い。

□ハーヴィ中将

第四区画中央防衛師団師団長。口ひげのナイスミドル。

オーソドックスなブレードタイプLRを使う。魔術にはあまり頼らない。

□スキルヴィル

第四区画中央防衛師団の師団員。追尾眼の使い手。

□ベズヴィルド・ハートウーン

ハーヴィの部下。若くして兵長まで上り詰めた実力者。

ALの使い手。つまり、その他の魔術を全く使わない。

玲菜とは色々確執があったらしい？ 愛称はベズ。

□フォルラムル

連邦騎士団 銀雷のフォルラムル。ベズヴィルドの姉。三姉妹の長女。

レイピアの使い手。ベズヴィルド、セーレイズと関係がある。ま

た、セーレイズに対しては並々ならぬ愛情を注いでいる。

ステイグマの無力化を命じられ、第四区画に来ていた。

ステイグマと魔術的つながりを持つ候補の一人だった。

□ セーレイズ

ベズヴィルドの妹。第四区画の病院の眠りの病棟にいる。

□ シャズおばさん

エルナがいた孤児院のおばさん。

□ ハーンおじさん

エルナがいた孤児院のおじさん。忙しい。

□ ハイパージョン君

天が作った自動掃除機。ドレッドノート船内をいつもきれいに保つ頑張り屋。

ネーミングはただの思いつきらしい。

□ ヘルテイト・バーレイグ

背の高い、黒いロングコートを着た男。顔立ちは中性的。

四元系の炎の術式、神経干涉系の幻覚、催眠の術式を使う。また、メタモル型のLPを操ることもできる万能戦士。

目的のためには手段を選ばない冷血さを持っている。

己の強さと人工遺物の所持に固執したが、ドレッドノートの前に敗北した。

□ デイグラルディ・ギンナル

ぶくぶくに太った金にがめつい政治家。連邦政府大統領諮問機関、枢密院の議員。

ヘルテイトを雇い、ステイグマを手に入れようとするも、飼いだに喉元を食いちぎられる形で死亡。

□ 龍見^{たつみ} マヤ 二十四歳？

情報の速さと正確さに定評のあるスペースタイムズの記者。表向きは明朗闊達な性格。

玲菜やノクスとはヘルテイトの事件以前から知り合いだった。

情報というものに対する態度は人一倍真摯。誰よりも情報の価値を信じている。

■用語

□魔法と魔導と魔術

魔法は魔の力の法則。魔導は魔の力を導く事。魔術は魔の力を扱う術。

したがって、厳密には違うものとされるが、たいして区別はされない。

魔法は理論的分野、魔導は工学的分野、魔術は実戦的分野で用いられることが多い。

基本的にルーン言語によって制御される。

□魔導工学

魔法理論と電子工学を融合した分野。LPの開発など、この世界では無くてはならない学問。

□魔術師

魔法使い、魔導師とも。魔術を行使する人の事。

□魔獣

本来は魔力を持った獣の意味。だが、召喚核によって生成・召喚された魔獣のみを指して言うことが多い。体内に核があり、それを潰すと溶けてなくなる。

ヘルハウンド：

黒い狂犬。生成・召喚が容易な初等的魔獣。単体での力はさほ

ど強くないが群れて行動する。

咆哮に魔力がこもっており、訓練を積んだ者でなければ聞いただけで動けなくなってしまう。

アースワーム：

地を這う巨竜。翼のない竜。大気中の魔力素を吸い込み、体内で術式を構成して吐き出す。

魔導砲は破壊力の塊。動きは鈍いが、非常に硬いシールドを全身に持っている。

魔導砲を撃ち終えた直後にだけ、全身のシールドが消える。

ガラム：

人と同じくらいの背丈を持つ、ヘルハウンドの上位種。

ドラゴン：

伝説の神獣。鋼色の強靱な鱗を持つ。アースワームと同じく魔導砲ブレスを吐き出す。

巨大な翼で空を自由に飛びまわるため、アースワームとは比べ物にならないほどの強さを誇る。

ただし、魔導砲を放つ直前直後に全身のシールドが消える。

□ 召喚核

魔獣を生成・召喚する装置。人工的に生成されたものと、自然に生成されたものがある。原材料は魔王石。

□ 魔法学校

魔法学園とも。この世界では学校と学園の区別は特にない。寮制の場合は学園と呼ばれることが多い。

魔術師を育成するための機関。初等部、中等部、高等部に分かれている。

高等部を卒業する前にギルドへの所属手続きを行う場合も多いため、高等部を卒業する者は少ない。

更に上の機関として、魔法の研究を行う魔法大学がある。

□ルーニック・プロセッサ L P

魔導処理装置。簡単に言えば魔法使いの杖。

ただし、杖に限らず用途によって様々な形状のものが存在する。スロットがついていて、そこに増幅回路^{チップ}をはめ込むことで魔法の力を増幅したり、様々な効果を発現させることができる。

普通、話さない。

ガンタイプ：

遠距離戦に秀でた銃器型。

玲菜が使うベルベット・ダークはこの一種で、モードチェンジャーを内蔵している。

モードチェンジャーにより、ハンドガン、ライフル、ショットガンなど様々な形に派生できる。

弾丸として増幅回路を用いるが、消費量が他のLPと比較にならないので安価な量産型を用いることが多い。

ペンタイプ：

特殊形状。筆型。戦闘向きではない。探查系などの非戦闘員が用いる。クレレが使うのもこれ。

ルーン文字を直接これで書くことで細かな魔法の制御が可能になる。

ブレードタイプ：

剣型。接近戦に秀でた形。スロットの数が少なく、魔法の行使には向かない。

武器の殺傷力や使用者の身体能力を強化する強化系に適している。

エルナが使うのはこのタイプに属する大剣型。千香のものは刀型だが、やはりこの分類。

ロッドタイプ：

杖型。携行可能なものでは最も魔法の行使に適している。

LPの基本系であり、多くの術師に好まれる。

他のタイプと違い、あまり形の違う派生形がない。

ミーティアのステイグマや、天のものもこのタイプ。

メタモル：

不定型。あらゆるタイプの形状を取ることができ、扱える人間は限られる。

普段はブレスレットであったり、指輪であったり、暗器としても用いられることがある。

ノクスやヘルテイトが使うものはこれ。

チェイス・アイ
追尾眼：

ウィンドミル社が販売する特殊形状LP。頭文字をとってCEとも呼ばれる。

対象の追尾・監視に特化したタイプで、術者の魔力によってLP本体を自在に動かすことができる。

追尾眼の映像は専用モニターによって確認できる。

作中ではスキルヴィル、ヘルテイトが使用した。

チップ
□増幅回路

用途が弾丸に近いのでバレットとも呼ばれる。

LPのスロットにはめ込むことで魔法の力を増幅したり、魔法そのものを発動したりする。

チップには複数の種類が存在しており、それぞれについて増幅したり発動する魔法が異なる。

たいていのものは消耗品で一度使うと力を失うが、情報記録媒体として繰り返し使えるものも存在する。

アーティファクト
□人工遺物 AF

現代ルーン言語が成立する以前、古代に作られたと言われる魔導具。

暗黙的危険性の排除されていない古代ルーンによって記述されて

いる。

名目上は連邦政府が管理することになっているが、いまだに未発見、未回収のものも多い。

自己逃走機能が備わっていたり、表に出ないルートで出回るなどするため、発見や捕捉が難しい。

物珍しさと強力な魔術的能力から、高値で取引される。政府も買い取りに躍起になっているが、取引の価格からみれば誰も政府に売るうとはしない。

□ インテリジェンス・ウェポン IW

人工遺物の中でも特に危険性の高いもの。全部で三十一ある。ミーンティアの所持しているステイグマはその一つ。

□ 宇宙連邦

大きく分けて四つの区画からなる宇宙最大の国家。これに対抗するような勢力はないに等しいが、国家と言うにはあまりにスケールが大きすぎるため、区画ごとに自治区のような体をなしている。

区画は互いに内政不干渉の原則を貫いている。規模の大きな第一、第二区画は内部で更に小さな自治区に分けられている。

□ フェデラル・ナイツ 連邦騎士団

宇宙連邦最強の武装集団。政府嫌いの人間やひねくれ者からは連邦の犬と呼ばれることも。^{ウインド}

所属する全員が何かしらの方面についてマスタークラスか、レジエンドクラスの實力の持ち主。

□ ギルド

連邦政府に認められた便利屋。政府および民間からの依頼をこなす。ただし、政府とのつながりはさほど強くない。

宇宙を航行するための船を所持している。

□バーレイグ

かつて、人工遺物の管理者だった一族。紅い目が特徴。炎の術式を自在に操り、かなり高い戦闘能力を有していた。ただし、一部が連邦政府に反抗したため、連邦騎士団によって鎮圧され、それ以降も危険視され続けている。

□宇宙航行艦ドレッドノート

かつては最先端の性能を行く戦艦だったが、今では旧型となってしまうた。

区画間移動を可能とするユニットを搭載していないため、辺境の第四区画から出る事ができない。

更にギルド「ドレッドノート」に所属している人数も少ないため、弱小艦に分類される。

道に迷うには十分な広さ。

ブリッジ：

自動航行機能を後付けで実装したために不要となった管制・操舵室。

現在ではクルーのたまり場や作戦会議室として用いられる。

訓練室：

人工召喚核が備え付けられた戦闘訓練室。

栽培室：

魔導植物を栽培する部屋。魔導植物の発育の関係上、照明が特殊なモノになっていて目に悪い部屋。

台所：

キッチン。

大浴場：

広い浴場。男女で入浴時間が分けられている。

洗濯・乾燥機室：

大浴場の隣にある。

医務室：

大事な部屋。軽いけが程度ならここで完治できる。

□ 長距離砲 Long Range Cannon (LRC)

ドレッドノートに搭載された魔力砲台。

「魔導式環状砲 (Lunatic Ring Cannon)」 「魔導砲」とも。

ドレッドノートに搭載されたものは特に性能が良い。

ただし、撃つ場所を考えなければ周囲への被害も甚大になる。

(出力が高すぎて、着弾点から半径数十キロを焦土にしてしまう)
その破壊力から、使用には厳格な制限がある。(政府関係者の許可が必要になる。発射キーを政府側が握っているため、許可を無視して撃つことは基本的にできない)

■ 術式分類

□ 破壊系

攻撃魔法の中で攻撃性の高いもの。破壊力のある魔法で、消耗、隙共に大きい。

魔力素を圧縮するだけで特に変質させたりはしないため、威力は出やすい。

ミイティアが得意とするのはこの系統。

□ 追尾・誘導系

攻撃魔法の中で追尾・誘導性の高いもの。破壊力はあまりなく、消耗や隙も小さい。

□ 神経干涉系 (幻覚、催眠など)

相手の神経に干涉する術式。消耗は術師の力量や相手の魔法耐性に依存する。扱いが非常に難しい。

ヘルテイトはこの中の幻覚、催眠を使用した。また、天も幻覚を

使用。

□ 探査・解析系

魔法関連物を解析したり、空間を探査したりする。特殊な術式で単独戦闘には向かない。

クレレが担当する。ペンタイプLPはこの系統に特化したもの。

□ 強化系

身体能力や武具の性能を強化するもの。魔術的消耗や隙が小さく、近接戦向き。

だが、身体的に大きな負荷がかかるため、多用しすぎると危険。

□ 錬金系

物質の本質を変化させるもの。また、無から有を生み出す（ように見える）術式も。

クレレと天が使用した。

□ 移動・浮遊系

特定座標に移動したり、空中に浮かんだりする術式。

浮遊系は研究がなされている最中の術式であり、完成されたモデルとして存在はしない。

一応、クマバチの飛行モデルを利用した浮遊術式は完成しているが、空気の粘性を人体の大きさに合わせなければならぬため、実用的でない。

また、ゆで卵の回転を利用した浮遊モデルもあるものの、飛行時間や高度に問題がある。

□ 四元系

火、水、風、地の四属性の魔術。それぞれ、他の系統に近い性質を持っている。

また、分類が非常にあいまいで、四元系の火の術式でありながら破壊系の術式である場合などが存在する。（他の術式分類と排他的でない）

火：破壊系に近い。攻撃的

水：硬化系に近い。防御的

風：移動系に近い。攻防一体。

地：錬金系に近い。

□ アンチルーン（AL）

対魔法結界。特殊な術式であり、大気中の魔力素の運動を固定化して魔術の行使または持続を妨げる。

ALの効果範囲や威力は術者によって変わるが、出力を上げすぎると展開したALがAL自身の持続を妨害するため、術者の負担が跳ねあがる。

■ 魔力

魔術の行使または持続に要する力の中で最も大きな割合を占めるもの。

この力は魔力量として定量的に論じることが可能。微細な粒子状の魔力素として体内や大気中に存在する。

□ 魔力反応

魔力素が密集している場所は、探査の術式によってすぐに見つけることができる。ただし、探査範囲と精度は術の威力と術者の分析力に依存する。

□ 魔力光

通常は、魔術の行使の際にLPの駆動部から溢れる余剰魔力が発する光のことを指す。

しかし、魔力素は激しい回転運動をすることによって発光する性質を持つため、人工的に魔力光を発することも可能。

駆動部からわざと魔力素を溢れさせることによって、LPを懐中電灯のように扱うこともできるが、魔力効率を考えると実用性は高くない。

余剰魔力とは言っても、意図的に駆動部から魔力素を溢れさせる行為は頻繁に行われる。探査・解析系などの精密な操作を要求される術式の構成などには、魔力素の配列の操作やそれによって得られ

る結果を視覚的に確認できると都合が良い場合が多いからである。

□ 魔力枯渇

体内に存在する魔力素の量が病的に少なくなった際に発生する貧血のような状態。魔力枯渇症、魔力枯渇症候群とも。

体内の魔力量は呼吸によって大気中から魔力素を取り込むことによって正常値を保とうとするが、その回復量を超えて魔術の行使などで消費量が多くなった場合、体内の魔力量が少ない状態になることがある。

症状としては頭痛やめまい、動悸・息切れなどが挙げられる。

通常はしばらく安静にしているだけですぐに回復するが、あまりに深刻な魔力の枯渇は生命活動に影響を及ぼすこともある。

□ 魔力炎症

短時間に人体から放出する魔力の量が多すぎると、それからしばらくの間、魔力の放出力が小さくなったり、放出の際に痛みを伴う状態になることがある。放出口は目に見えない——仮想的なモノとしてとらえられている——が、イメージとしては円筒型の空洞である。その空洞の入り口の面積を押し広げるほどの量の魔力が短時間の間に通った場合、放出口は元の大きさ、形状を保とうとして収縮しようとする。

したがって、平時よりも放出口の面積が小さくなり、普段と同じ感覚で魔術を使おうとすると余計な負荷がかかってしまったため、それが痛みとなって術師を襲う。この状態は、炎症を起こした状態と呼ばれるが、よほどひどくない限りはしばらく安静にしていれば治ってしまう。

14：白き騎士たちの来訪

宇宙艦ドレッドノートのブリッジには、艦長、本川 玲奈がいた。いつもの紺の地に金の碇の刺繍があしらわれた船員の制服と、艦長の帽子をかぶった姿だが、表情は思わしくない。

「大変なことになりそうですね」

「他人事みたいに言わないでよ」

スペースタイムズの龍見 マヤとそう会話したのがだいたい一週間ほど前。バーレイグによるミートピア誘拐とドラゴンの件が解決して一息つけたかと思えばそうではなく、ドレッドノートにとって不都合な問題がまったくなくなつたわけではなかった。

まず、バーレイグが第四区画に現れ、枢密院議員を殺害したこと。この件は犯人であるヘルテイト・バーレイグを捕らえたため解決したかに見えたが、実はそう簡単な問題ではない。第四区画議員の議員が第一区画への報告書をまとめて提出しなければならず、結果として第四区画の政治そのものが慌しくなった。

さらに、その事実——バーレイグによる殺人事件が第四区画で起きてしまったという事実——はスペースタイムズによってその日のうちに広まっていた。辺境の第四区画は今まで平和そのものだったが、この事件で民衆の心に不安が芽生えることとなつたのは間違いない。治安の悪化は連鎖する。不安が新たな事件を呼ぶ可能性が生じたのだ。

それに関してはマヤが手を打った。事件は起きたがすんなり解決した、という内容の報道をすることによって、不安の芽をできるだけ小さくしたのだ。殺害されたディグルルディの金にがめつい、大衆から嫌われそうな面もさり気なく記事に加えておくという工夫もなされていた。

だが、その対応策はドレッドノートにとって必ずしも良い結果をもたらすものではない。確かに、バーレイグをたいした外傷もなく

撃退してしまうほどの人物が第四区画を守る立場であるギルドに所属しているとなれば民衆に対して安心感を与えられるが、外部のギルドからはその人物に目をつけられる結果となる。

天がヘッドハンティングに応じることはないだろうが、連中には強引な手を使う輩も少なからずいる。今はまだほかのギルドが第四区画に入ってきたという話はないが、時間の問題だろう。

これが、今のドレッドノートが抱える最も簡単な問題である。さらに厄介な問題は、無力化したステイグマと、その所有者であり、破壊系の魔術に優れた資質を持つミーティアだ。

ステイグマに限らず、人工遺物を狙う輩も多い。さらに、その持ち主がドラゴンと生身で張り合えるほどの使い手ならば、そちらにも目をつけられる恐れがある。

高秘匿性通信により連邦政府直属の武装集団、連邦騎士団から団員が派遣されてくるということが伝えられたのは、ドラゴンが倒れてほっと胸をなでおろしている時だった。おそらく、マヤの情報が真つ先に連邦政府の中枢に回されたのだろう。

荒事が予想される事態に対しては、連邦騎士団が派遣される。銀雷のフォルラムルがミーティアの命を狙っていたという話も聞いていただけに、玲奈としては気が気ではない。ほとんど御伽噺の中の世界であると言っても過言ではないほど、連邦騎士団と直接関わる機会というものは存在しない。逆らえばただでは済まない相手だろう。

研修生としてドレッドノートに来ていたエルナとミーティアを、研修の終了を早めるという形でこの船から降ろしたのもそのためだ。彼らは用件を伝えず、ドレッドノートを訪問する、としか言わなかった。命を狙われていたミーティアを彼らに直面させるのは得策ではない。万一のときに身動きが取れるよう、あの二人にはこの船を降りてもらったのだ。

この時点で行えることはすべて終えたはず。それなのに玲奈はため息をついた。天とノクスの退院が今日で、それからまだしなければ

ばならないことがあるのだ。連邦騎士団を迎えるのに準備してしぎることはない。

とにかく、今できることはすぐに動けるように疲れを取っておくことだ。艦長席の椅子に深くもたれて、玲奈は目を閉じた。

ドレッドノートには医務室がある。だが、医務室で扱える怪我や病気、その治療の範囲には機材や人材の面で限界がある。千香の足の傷のように、単純な外傷ならば医務室だけで完治することもできるが、肋骨が折れてしまったり筋肉が著しく損傷してしまったりするとそれだけではどうにもならない。

どうにもならない場合のために、病院という施設が存在する。治療促進の術式をよく理解し行使する術者とそれを補助する機材の数々が配置された、怪我や病気の治療のための専門施設だ。

その一室で、ドレッドノートの副艦長、ノクス・アージエンティムは窓の外の雲を眺めていた。朝の清涼な青い世界を緩やかに流れる白い塊は、第四区画の平穏が維持されていることを実感させる。

ドラゴンとの戦いで何本かやられてしまったアバラも、一週間かければすっかり元通りだった。治療促進術式の進歩には恐れ入るばかりである。爽やかな目覚めを堪能したついでに隣のベッドにいる同僚に目をやると、気だるそうに窓の外を見ていた。

彼の表情にやる気を感じられないのはいつものことだが、この爽やかな朝を楽しめないのは悲しいことだとノクスは思った。

「朝か」

「君、寝てないのか？」

「これから寝るんだ」

布団をかぶって寝息を立て始めた青年は、白柳 天。ドレッドノートのクルーの一人で、ヘルテイトの一件で負傷した……ように見せかけるために入院したのだが、どうして彼が一週間もここにいろ

のか、ノクスにはわからなかった。

魔力炎症を起こしてドラゴンの事件の際に動けなかったのはまだわかるのだが、一週間も入院していなければならぬほど重たい症状だったのだろうか。無理をしてもそれを隠し通そうとする意地っ張りな性格なので、やはりそれなりに重い症状だったのだろうか。

退院の準備は昨日のうちに終えてある。あとはこの患者衣からいつもの制服に着替えるだけだ。袖に金の線の刺繍があらわれた紺色のダブルのジャケット。土で汚れてしまっていたはずだが、もうすっかり綺麗になっている。クレレ辺りが頑張ってくれたのだろう。天は制服をめったに着ないが、彼の着替えには珍しく長袖のYシャツが用意されていた。普段はTシャツばかりで、服装というものに全くと言って良いほど気を使わない彼だが、機械の廃熱にさらされる関係上だろうか、半袖を好む傾向があるのだ。

彼が入院し続けていた理由と関係があるのかもしれない。どうせ彼が目覚めますまでは時間がかかるだろうし、それはまではゆっくりしているのも悪くないだろうと思いかけたところで、病室のドアがノックされた。

入ってきたのは車椅子に座ったロングスカートの女性だった。ドレッドノートの乗組員ではないが、ノクスの知り合いではある。彼女がただここに来ただけならば、玲菜が連絡したのだろうと言う事で納得できるのだが、彼女の車椅子を押している人物に見覚えがないのが問題だった。

「やあ姉さん。ガールフレンドでも作ったのかい？」

「あつはっは！ 実はそうなんだよ。それはもう劇的に告られてね。ついOKしちゃったのさ」

車椅子に座った女性はノクスと同じく長身で、髪は栗色のショートボブ。目は細く常に笑っているように見える。地味なベージュのカーディガンを羽織っており、服装だけならしとやかな女性に見えるただろうが、彼女の後ろで車椅子を押してきた人物は非常に困った表情をしている。

「呼吸するように嘘つかないでよ。僕まで嘘つきだと思われるじゃないか」

「いやごめんごめん。つかわいい子だったもんだから」

あまり申し訳なくなさそうな様子で笑いながら謝ると、自分の後ろで車椅子を押してくれていた人物を見上げた。

後ろを結い上げた長い金髪と澄んだ空のような水色の瞳が印象的な、少女の面影を残した女性。背丈がやや高く見えるのは、見た目が似ているクレレと無意識のうちに対比してしまっているからだろう。着ている服も白いため、視覚が与えるイメージはクレレとよく似ている。

彼女が着ている服は本当に白一色のワンピースで、そこには純粹を超えた純白とも言うべき、寒気のするような崇高さが備わっていた。パーツだけを見れば人形のようにも見えるその女性は、しかし瞳の中には鋭い強かさを持ち合わせている。

「連邦騎士団では軽装備と寄り道が流行ってるみたいだね」

「軽装なのは否定しないが、寄り道とは心外だな。私がここへ来たのは任務を円滑に進めるためなのだが」

白い服とその女性の持つ雰囲気もそうだが、ノクスは予め玲菜から連邦騎士団がドレッドノートを訪問するらしいということを聞いていたため、目の前の相手をその一員だと断定できた。帰ってきた反応からも、それが正しいことがわかる。

白い女性の言葉の意図を理解して、ノクスは忌々しげにため息をついた。

「そんなことより、弟君は私に言うべきことがあるんじゃないかなあ？」

「ああ、今日も綺麗だね。姉さん」

期待される言葉と違うものをわざと返す。元々が少しねじ曲がった性格だというのは自覚していたが、どうにも気が立っているらしい。言ってしまったから、ノクスは少し後悔した。

「うちにあるコーヒーは廃棄処分かな」

「そこにいる連邦の犬みたいに汚いマネしないでよ」

低い声の脅しに、ノクスはまたため息をついた。マヤに財布の中身を搾り取られたせいで、ギルドにいる間は当分コーヒーが飲めなくなってしまうのに、家に帰ってもコーヒーがないのは拷問だ。もつとも、帰る機会はさほど多くないのだが、それでも帰ればしっかりコーヒーと姉が待っていてくれるというのは安心の材料になる。コーヒーを人質に取られると姉に反抗できないように、今この状況は連邦騎士団に姉を人質に取られている状況に等しい。

「こらっ、そんなこと言ったら私が殺されるでしょ。ごめんね。口の悪い弟で」

「何、気にするな。我々は誇り高き連邦騎士団。その程度の言葉で頭に血を登らせるほど野蛮な者は我々の中にはいな……いや、いっぱいいるな」

人質と言っても、ノクスの姉におびえた様子は全く見られなかった。平常心が服を着て歩いているような人間なので、よほど切羽詰まった状況にでもならない限りは精神面の安定について全く心配する必要はない。

「ほら見なさい。危うく弟君のせいで殺されて毎晩弟君の枕元に立って朝までエロいことささやいて悶々と眠れない夜を過ごさせちゃうところだったじゃない」

こんなジョークを言うだけの余裕もあるようだ。人質に取っている側の白い女性も、その軽い会話に付き合うだけの落ち着きを保っている。ノクスにはそれが気に食わなかった。

「後半は大歓迎だけど、そいつがわざわざここまで姉さんを連れてきたってことは、殺したりはしないよ。そうだろう？ 早いところ本題に入ったらどうなんだい？」

「ああ、すまない。すぐにでも話そうと思っていたのだが、姉弟喧嘩は犬も食わないからな」

こちらの張りつめた気分を解すための冗談なのか、あるいは連邦の犬呼ばわりされたことを多少なりとも怒っているのか判断がつか

なかった。ノクスの神経が擦り減らされ、相手は少しも動じていない状況に変化はなかった。

本題に関しては、簡潔に説明がなされた。人質という言い方は乱暴だが間違っではおらず、ドレッドノート外部の人間でありながら内部の者とながりのある人物、すなわちノクスの姉をノクスの前に連れてくることで、人質がいることを認識させるという目的があったというのだ。

万が一、ギルドが連邦騎士団の要求を跳ねのけて反抗する可能性もあるため、彼らがこういった手段を取ることは珍しくもなんともないということだった。

「余計な警戒はしなくても良い。我々に従っていればこちらとしても手荒なまねはしない。」

彼女をここに連れてきたのはむしろ最大の誠意だと思ってほしい。いざという時の手を明かしておくのだからな」

大人びた澄んだ声に言い切られ、ノクスは黙り込んだ。不満はあるものの、それを表に出したところでどうなる状況でもない。ただ沈黙によって渋々ではあるが了解したということを保えたところで、再び誰かがドアをノックした。タイミングの悪い来客だ。

新たな来客の姿は、ノクスを更に苛立たせた。白い長袖のYシャツに白いタイトな長ズボン。更に、白い包帯をぐるぐる巻きにして両目を隠した男だった。連邦騎士団はとにかく白ければ何でも良いらしい。あれでは前が見えないのではないかと思うのだが、どうやらそうだった心配はないらしい。アイマスクにしては斬新なデザインだ。精悍な顔立ちの若い男で、声も低く落ち着いたものだった。「失礼する。シャンテ、^{りん}燐はどうした」

入ってきた男はノクスのほうには目もくれずに、白い女性に話しかけた。落ち着いた声ではあるが、その言葉の端からは焦りがうかがえる。どうやら切羽詰まっているらしい。

「おろ？ 一緒ではなかったのか」

対して、シャンテと呼ばれた女性がさほど焦った様子 wasn't なかった。

「あ、ああ……」

男は片手で頭を抱えて肩を落とし、短く「失礼した」と言って部屋を出て行った。燐なる人物を探していたようだが、何かまずいことでもあったのだろうか。シャンテの様子を見る限り彼女は平然としているようなので、連邦騎士団にとって致命的な事態というわけではないらしい。少し残念だった。

そのシャンテも念を押すように

「我々に協力する限りは彼女の身の安全は保障する」

とだけ言って姉を連れて帰ってしまった。そうして部屋にいるのがノクスと天だけになっても、ノクスの表情は晴れなかった。今日退院してからあの汚い連中と関わらなければならぬのだと思うと憂鬱だった。

「何が誇り高き、だ」

誰に言うまでもなく一人ごちて、ノクスは白服の騎士が去った後のドアを睨みつけた。何の為にドラゴン相手にあんな無茶をしたと思っている。守りたい世界があったからではないか。いつだって自分を待ってくれている優しい姉と、それを取り巻く第四区画の世界を守りたかったからではないか。

拳に力が入った。爪が食い込んで痛む。奥歯は強く噛みしめすぎて砕けそうだった。

誰かの言いなりにならなければ守れない己の無力さを噛みしめて、気分を落ち着けるために深く息を吐く。

「最大の誠意も、誰に対する誠意だかわかったもんじゃないな。犬が飼い主以外に誠意を見せるもんなのか？」

起き上がり、目も開けずに天が言った。どうやら全部聞いていたらしい。

「君、寝たんじゃなかったのか？」

「これから寝るんだ」

ノクスは、自分より少し年下のこの青年は良い夢を見られないタイプだなと思った。

鈍い風の音が朝の清涼な空気を裂いて響く。額からこぼれた汗が顎を伝って足元の芝生に落ちる。薄手のシャツは肌に張り付いてしまつて気持ち悪いし、腕や足は幾度も訪れる負荷に悲鳴を上げている。

ちょうど三百回目の振り下ろしを数えて、重量化の増幅回路をセツトした大剣型のLPを地面に突き刺し、足の力を抜いて後ろへ倒れ込む。

「あたっ」

芝生だからと甘く見ていたが、それでも頭を打った衝撃で意識が飛びそうになった。腕も足も、全身が熱を帯びてしまつていて焼けるようだった。あのゴーレムの炎の剣よりは幾分かマシかもしれないが。

第四区画中央魔法学園の高等部の校舎はガラリとしていた。それもそのはずだ。まだ長期休暇は半分以上残っており、その間、研修生としてほとんど全ての生徒がギルドに配属され、寮を離れているのだから。

そんな校舎と寮の間の中庭は、ちょうど日陰になるスペースがあつて朝の鍛錬の場には相応しい。魔導回路を用いて年中緑の芝生を維持できるようになっており、芝が痛んでしまつても数分放置すれば元通りになるといふ、手間のかからない施設だった。

授業期間中のこの時間は寮から登校するための生徒でにぎわう中庭だが、今は誰もいない。彼が思う存分に剣を振るえたのもそのためだ。

柔らかな芝に背中を預け、雲ひとつない青空を見上げる。穏やかな風が吹き抜けて、疲労を優しくぬぐい去っていくような感覚が心地よかつた。その感覚に身を任せて目を閉じ、そして直後にエルナは悲鳴を上げて飛び起きた。

「ひゃあああああ！」

「おお、相変わらずエルナはカワイイ声で鳴くね」

悲鳴の原因を手でひつつかんで振り向くと、予想通りの顔がそこにいた。こんな子供じみた悪戯を仕掛けてくる人物は、エルナが知る限り一人しかいない。

「心臓止まっちゃうかと思ったよ……」

「うえーい。それは困るなあ」

いきなり顔にキンキンに冷えた濡れタオルをかけられるのは、心臓に良くない。運動後で体が火照っていれば尚更だ。全身が熱を帯びているこの状況で濡れタオルの差し入れは嬉しいのだが。

珠の汗が噴き出た額をぬぐって、熱くてたまらない腕を冷やす。熱と共に疲労が吸い取られていくようで、心地良い。冷たくて心地良かったのだが、次の瞬間、今度はエルナの首から上が一気に熱くなった。

「あ、あの、ミーティア？」

「うん。やっぱりまだ心拍数下がらない？」

エルナの目の前には――正確には、顔のほぼ真下には――茶色がかった髪の毛の頭があつた。それが誰かは考えるまでもない。けれども、何故いきなりこんなに近くに来たのかはわからない。何か理由を考えようとするとするたびに、髪から漂う香りが鼻腔をくすぐって思考を吹き飛ばして行く。

ミーティアは、エルナの胸に耳を当てていた。エルナにはわけがわからなかった。脈を測りたければ手首――いくらミーティアがおかしな子だからと言っても、せいぜい首――に手を当てるのが手軽だし、そのほうがやりやすいだろう。心臓の位置に耳を当てるにはエルナの腕が邪魔になるのだが、その腕に触れる柔らかい感覚がエルナの神経を伝って頭の中で暴れまわった。

「お、エルレナードじゃないか。ギルドはどうし……」

よりによって最悪のタイミングで、後ろから聞きなれた声が聞こえてきた。眼鏡をかけた同い年くらいの少年だ。学園の制服姿なの

は研修に行く際の服装だから当然だが、そもそも彼は研修で第一区画に行っていたはずだった。どうしてその彼がここにいいのか、エルナはそれすらも考える事ができなかった。やはり最悪のタイミングで、ミーティアが

「聞こえるよ。エルナの音」

などと口走ったからである。エルナの後ろから歩いて来ていた彼の言葉が止まったのは、そんな砂を吐き出してしまっただけで恥ずかしいセリフが聞こえてしまったからだろう。ひよっとしたら、エルナとミーティアがいやに接近しているこの状況も見える位置まで来てしまっていたかもしれない。

「あ、ああ。悪かった。邪魔だったな。僕はここで失礼するよ」

「待つてよリック！ これは……ああ、ああもう！ ミーティアも誤解を招くようなこと言わないでよ！」

恥ずかしさを紛らわすように大声で行って、ミーティアを押しつける。そうしたところで、筋肉痛がエルナの動きを制限した。研修期間の早期終了という形でドレッドノートから追い出されてからというもの、エルナは毎日のようにここで剣を振るっていたのだ。だからミーティアもエルナがここにいることを知っていてタオルを持ってきてくれたし、エルナの筋肉痛も激しいものになってきていた。リックを追いかけようにも痛みのせいでその場から動けず、結局リックへの誤解は全く解けなかったし、ミーティアもさして反省している様子はなかった。

「こうなるだろうと思って、湿布も持ってきたよ」

「あ、ありがとう」

湿布を貼ってもらった間、エルナの心拍数が下がる気配はなかった。ミーティアも終始笑顔だったように見えたのは、エルナの気のせいだったかもしれないし、そうではなかったのかもしれない。

エルナは寮の部屋に戻ってからも、物事に手がつかなかった。訓練で疲れた体を休めるためにベッドの上に寝転がっても、眠気はさ

っぱり訪れない。

（本当に、このままじゃボクが誤解しちゃうよ……）

湿布を貼った手足の熱はちっとも冷めなかった。

病室の白柳 天が目覚めたのは、すっかり日が落ちてからだだった。患者衣から用意しておいたYシャツとジーンズに着替え、軽い退院手続きを済ませて外へ出る。第四区画の中央惑星の、そのまた中心とも言うべき町は家庭から漏れる温かな光に照らされて淡く輝いていた。

外は静かなモノだった。娯楽用の施設は町はずれに集中しているため、落ち着いて星を眺めるには最高の夜だった。人家の明かりよりも黒い空に散りばめられた幾千の点に目が行くのは、その光を宿す世界の広大さに酔っているからだろうか。

名前は自分と同じなのに、ドレッドノートに乗ってそこを飛び回することはできるのに、見上げた先にある世界が遠く感じた。その理由が脳裏をかすめて、天はそれを振り払うために一つ深く息をついた。

「くだらねえ」

つぶやいたのは、もう何年も昔に発見した便利な言葉。自分の動きを封じ込めようとする無意味な思考を打ち切って歩き出すための、彼が持つ最も強力な呪文だった。風のない夜を歩いて、町はずれのドレッドノートに戻ってくる。たった一週間離れていただけなのに、ずいぶん懐かしい感じがした。

船を支える足の部分に取り付けられた端末を操作して、魔力認証用のパネルを呼び出す。ブウン、と鈍い電子音を発して青い空中ディスプレイが目の前に現れた。それに手をかざして暗号配列を組み込んだ魔力を照射することで、船のハッチが開く。セキュリティのためとは言え、面倒なものを取りつけたものだ。玲菜辺りが急ごし

らえで設置したものだろう。

確かに、留守中にあんな襲撃があつては困るが、この旧式のロックシステムはもう少し改善する必要がある。改善案を頭の中で描きながら開いたハッチに足を踏み入れ、少し進んだところで天は異和感に気付いた。空気が張り詰めている。

独特のF B T鳴きにも似た高音が走つて、天は咄嗟に真横に転がった。それまで彼が立っていたところを炎の柱が駆け抜けた。

古臭いロックシステムはこれだから困る。鍵を持つ者に対して扉を開けるシステムより、鍵を持たない者に対して扉を閉ざすシステムのほうが強力だと言われ初めてからはたして何百年経つたと思つているのだろう。本職が技術屋でない玲菜に対して無茶な要求をしても仕方がないというのはわかつていても、急造のシステムの脆弱性をまんまと突かれてしまったこの状況ではため息の一つや二つは出てしまつて当然だった。

「迷子か？ 子供は帰つて飯食つて寝てろよ」

こんな冗談の通じる相手ではない。それは放たれた炎の魔術の威力を見れば一目瞭然だった。仮にも対魔法結界のギミックが仕込んである内壁に対して焦げ目をつけ、煙を上げさせてしまつていいる。あまり考えたくない事態だが、この相手はミーティアクラスか、それ以上の魔力バカだ。

何より恐ろしいのは、目の前にいる少女の服装だった。白いマントとつばのない帽子はところどころが破けよれてしまい、その下のブラウスは右の袖が乱暴にちぎられたように無くなつていて、白い肌が露出されている。その先の手首には白い丸石が数珠繋ぎになつたブレスレットを身に着けていた。

ボロボロでありながら汚れ一つも許さぬ純白。白い髪の間から幼い瞳が狂気に満ちて天を睨みつけた。スクレラと虹彩の境目がわからないほどに、不気味なまでに白い瞳だった。

「なつかしいにおいがするう……」

天から視線を外し、半ば恍惚とした表情で船の奥のある一点を見

つめる少女の声は、聞いているだけで冷たいナイフに頬をなぞられるような寒気を催した。背は低くクレレと同じくらいの年頃だろうが、気配が常人のそれとはまったく違う。

病室を訪れたシャンテの話によれば、連邦騎士団には野蛮な輩がいっぱいいるらしいので、ここに現れた少女もその類だろう。この殺気は野蛮というより狂気染みてすらいるのだが。

どれだけ冷静に分析しても、厄介な状況は変わらない。白く狂った少女が天から視線を外したのは、そこに天以外の誰かを見つけたからだ。よりによってこの状況でクレレが現れてしまったのは不運以外の何者でもない。

「あ……あ……」

クレレは白い少女を見てひどく怯えてしまっている。先ほどの白い少女の言葉からも、過去に二人の間に何かあったらしいことが伺えるが、今はそれどころではない。艦長かノクスでも呼んで来れるならそれが一番良いが、クレレは今にもその場に崩れてしまいそうなほどに足が震えてしまっている。

（さて、LP無しでどこまでできるんだ？）

魔法の術式の構成を補助したり、実行効率を上げたりする目的で使われるLPだが、特にロッドタイプは非常に高性能で、LPを使つて行使できる術式とLP無しで使える術式の差が著しくなっている。

特に天が得意とする錬金系は、LPがあってもすばやく正確な術式を構成するのが難しい。目の前の白い少女はおそらくあのプレスレット型のLPを使って高速詠唱を行っているのはある意味ではチャンスだったし、一瞬の猶予もない切迫した状況でもあった。

人差し指の先に神経を集中し、天は静かにしゃがむ。構成のためにルーン文字を自前で刻むなど、もう何ヶ月もしていないことだ。頭の中で術式は思い描いた。可能な限り扱いの容易い、しかしそれでいて目の前の相手の動きを封じるに十分な術式が必要だ。

天が指を船の床に滑らせ、術式の構成を開始したのと白い少女が動き始めたのはほぼ同時。白い少女がブレスレットをした右手を高く掲げ、その先に火花が散って、青白い放電が起こる。

風の術式の圧縮を突き詰めていくと、雷の術式と呼ばれるものに变化する。強烈な破壊系の術式のひとつで、並みの魔術師はおるか、マスタークラスでもその出力までたどり着くには相当な消耗がある。それを、事も無げに構築しながら、白い少女は左右に裂けた狂気の笑みを浮かべた。

（ヤバい客が来たもんだ）

指先から出る魔力光を、雷の術式に飲み込まれないように固定化し、素早く構成していく。一瞬の猶予もない。あの右手が振り下ろされる前に決めなければならぬ。

天は右手の平を船の床に叩き付けた。完成した術式が発動する。金属が軋む甲高い音と船全体に大きな揺れが生じて、白い少女が後ろに倒れた。雷の術式構成が解け、火花を散らしていた光の弾は霧散する。

一か八か。痛む腕など気にはいられない。電光石火の踏み込みで接近し、白い少女の首と右手を抑え込む。あまりそうしたくはないが、自衛のためならば仕方がない。首を抑える右手に力を込める。抵抗する余裕を早い段階で奪ってしまわなければ、危険だ。

先ほどの揺れは、さほど綿密な構成を要求されない低級の錬金系術式だ。相手の体勢を崩すことが目的だったが、細かい揺れの範囲を指定できなかったため、その効果はその場にいたクレレにも及んでいる。ここでこの白い少女を野放しにしてしまえば、クレレに逃げ出す術はないのだ。

そう。ここで手を離してはいけなはずだった。けれども、天は後ろに飛び退いてしまった。そうせざるを得なかった。ゆらりと起き上がる白い少女の顔には悪魔のような狂気的笑み。その左手には光を反射する透明な剣が握られていた。剣の先端から丸い透明な雫が落ちる。剣の一部が欠けている、というよりは、剣全体が流動性

を持って蠢いていた。水のある領域に閉じ込めて作られた、液体の剣だ。LPを抑え込まれて尚、逆の手からそれを錬成したというのか。

水の生成は制御が非常に難しく、常人に行えるものでは決してない。どうやら、常識というものがこの白い少女には通用しないらしかった。

「アハハ。お兄さん、私と遊んでくれるの？」

白い瞳を狂気に染め上げ、指先を天に向ける。天が咄嗟に左へ跳ぶことができたのは魔術師としての勘のおかげだった。先ほどまで天がいた場所に紅い光の線が走り、直後に爆ぜる。

横に跳んで直撃は避けたものの、その余波までは防ぎ切れない。

船の床に叩き付けられ、天は何度かそこを転がった。

腕がつぶれるかと思うほどの激痛。動かせる程度に回復したとは言え、まだ無理をさせていいわけではない。痛みが意識を食いちぎって、天は動きを止めてしまった。

ゆっくりと間合いを詰める靴音。無造作に振り上げた水の剣。隙だらけの構え。全て見えているのに、この先どんな軌道で刃が襲い来るのかも、それに対する最適な反撃さえもわかっているのに。それなのに、体は動かない。

白い少女の腕が完全に振り下ろされて、戦いは終結した。

「全く。勝手に歩き回るなど言っただろう」

「ぐう……」

腕は確かに振り下ろされていた。しかし、そこに水の剣は握られていなかった。それどころか、本来振り下ろされた後にあるべき場所よりも少し高い位置にある。

「……ああ？」

天は状況がよく把握できなかった。白い少女は何故だかわからないが宙に浮いていて、おもちゃを取り上げられた子供のように眉を

ハの字に曲げて天の方を見ている。

天が特に何かしたわけではないが、白い少女のほうは何かされたようだ。よく見ると彼女の後ろに誰か立っている。

少女が左の方へスライドした。首根っこを掴まれて宙吊りになっているらしい。これでは猫か何かだ。少女に隠れていた人物が姿を現した。背の高い男で、白い長袖のYシャツにタイトな白い長ズボンの男だ。今朝、病室に現れた包帯目隠し男である。近くで見ると包帯がより奇妙に際立って見えた。

「すまない。うちの燐が迷惑をかけたようだ」
「危うく殺されるところだ」

直接的な害意は見受けられないにしても、やはり外部の者に対して警戒を解くべきではない。気の抜けない状況は変わらなかった。

「ところでこの船の責任者はどこにいるだろうか」
「お呼びかしら」

目隠し男は燐と呼ばれた少女の首根っこをつかんだまま振り向いた。艦長帽子の女性がクレレと目隠し男の間に、腕を組んで立っていた。連邦騎士団の二人を前にしても、欠片も動じている様子がない。

それがはったりかどうかはわからないが、警戒心をむき出しにしなければならぬ天とは踏んできた場数が違うということだろう。
「いらつしゃい。狭い船だからあまりゆっくりしていかないでいた
だきたいものだけれど」

言葉による牽制にもどこか余裕を感じ取れる。天から見ても、この艦長は底の知れない人物だ。対する目隠し男も、連邦騎士団の肩書に相応しい余裕の笑みを浮かべていた。

「そうだな。手短に済ませよう」

意外にも、目隠し男の用件はすぐに終わった。翌日中に研修生を含めた乗組員全員をこの船に集めること、それから、技術スタッフを用意しておくことを要求してきたが、後者はすでに天がいるし、前者も万が一のために滞りなく事が進むように準備は済んでいる。

詳しい説明は明日行うということで、燐をつかんだまま早々に引き揚げてしまった。

「さて、天ちゃん。せめてお昼くらいには起きられるようにしておいてね」

「努力する」

そう言つて天が部屋に戻る時にはもう連邦騎士団の二人はいなくなっていたが、クレレはいまだに脅えているようだった。

「うあーッ！」

ベッドに正面から倒れ込んで、ゴロンと寝返りを打つ。やるせない思いを吐き出さんばかりに叫んでみても、一人には広すぎる部屋に霧散して消えるだけだった。

自室の柔らかいベッドに埋もれながら、ミーティア・エンシスハムは鬱屈とした感情を募らせていた。机の上に積み上げた未開封の湿布を見て、何度目かもわからないため息を吐き出す。

（誤解、かあ……あれで勇氣出したんだけどなあ）

夜の静寂が膨らませる嫌な気分を振りはらうべく、もう一度——今度はわざとらしく声を出して——ため息をつく。情けない声が出た。あの時のエルナもこんな気持ちだったのだろうか。

悩みは相談すれば良い。一人で抱えなくても良い。誰かと一緒に悩めば良い。今回の事も、そうするべきだっただろうか。けれど、これは

（これは、私の問題……）

ステイグマの時のように、周りを巻き込む問題ではない。エルナを、こんなくたらないことに巻き込みたくはない。

巻き込みたくはないけれど、心のどこかでこの牢獄から助け出して欲しいと思つてもいた。だから、あんな——エルナが言うには、誤解を招くような——真似をしたのかもしれない。

元々、ミーティアがドレッドノートに研修生として配属されたのは、ステイグマがこの家にあるという事実を嗅ぎつけた男——おそらくはヘルテイトのことだ——がいたからだと言う。ドレッドノートは単純に、一時的な避難先にされたのだ。

そのヘルテイトという脅威がなくなった今、ミーティアがドレッドノートにいる理由は「研修」という名目以外では無くなってしまった。

（どうして、こんなに早く終わっちゃったんだろう）

ギルドは、役所の人間である父が圧力をかけられるような機関ではない。依頼としてミーティアを研修生として受け入れさせることはできても、研修そのものを終わらせる権限はないはずだ。

けれど、この研修の早期終了にステイグマが関係している可能性は否定できない。人工遺物としての力は失ったものの、ステイグマというものの存在が第四区画外の人間に知れ渡ってしまったのは確かだ。

それに力があるかどうかは関係ない。あると信じる者がいれば、それが狙われるには十分な理由となる。エルネストが聞かせてくれたステイグマの伝説はそういったものだった。

急に寒くなった気がして、ミーティアは自分の体を抱きしめるように小さくなった。

（寂しいよ……）

それまではエルネストが傍にいてくれたような気がしたが、ステイグマの無力化によってそれが無くなってしまったことを知らされた今、ミーティアにとって心を許せる近しい存在はエルナだけだった。そのエルナとの接点も、研修の終了、外出の禁止という形で絶たれてしまった。

締め付けられるように苦しくて、目を強く閉じる。これが夢ならば今すぐにでも覚めてほしい。次に目を開ける時には、この長い夜が明けていてほしい。

ベッドの脇のテーブルに置かれたリモコンで明かりを消して、深

く布団をかぶる。

（誰か、傍にいてよ）

じわりと、不快な熱を帯びた雫が顔を伝って流れる。

ミーティアが泣き疲れて眠ってしまった頃、机の上の湿布の奥に置かれた携帯端末に、連絡があったことを示す小さな緑のランプがともった。

15：出発前夜

玲菜が旧友を応接室に通したのは、ドレッドノートの面々が一名を除いて朝食を終え、しばらくして落ち着いた頃だった。

おそらく昨晩の連邦騎士団の男が来るのだらうと予想していた玲菜にとっては、想定外の——しかし、必ずしも悪い方向ではない——事態だった。

二本の刀を携えた背の高い若い男で、暗い茶色の長い髪を頭の後ろで結っている。服装は千香が普段来ているのと似た和装だが、下はネズミ色のズボンタイプをはいて、上はえんじ色の長い外套を羽織っている。鷹のように鋭い目は今は玲菜に向かって優しく微笑んでいた。

「久しぶりね、ガリユー。あなたもうちの優秀な人材の噂を聞き付けてやってきたのかしら」

「はは、相変わらずレイナは難しい質問が得意だな。少なくとも野次馬や引き抜きのために一四隔壁を抜けられるほど、うちのギルドに余裕はないよ」

ガリユーと呼ばれた男は、第一区画で活躍する少数精鋭ギルド『マジエスティック』の艦長だ。ギルドの規模そのものは大きくなく、運営方針はドレッドノートのそれに似ている。

実力も折り紙付きであり、そのことが今回彼らマジエスティックがわざわざ鉄壁の一四隔壁を抜けてまでここへやってきた理由にも深く関係する。

「まさか、艦^{ふね}ごと一区に連行されることになるとはね」

「ここまで規模が大きくなれば反抗もしにくいからな。荒事に特化した連中だとばかり思っていたんだが、そうでもないらしい」

第一区画で活動していたはずのマジエスティックが一四隔壁を通り抜けてまでここに来た理由は、連邦騎士団の来訪に関係している。彼らは、連邦騎士団に——結果として、連邦に——雇われたのだ。

昨日の連邦騎士団の要求にあつた技師を用意しておくというのは、マジエスティックが持ってきた区画間移動用のユニットセット一式で明快到理解された。宇宙航行艦ドレッドノートは区画間の移動に必要な装備を持っていなかったために第四区画から出ることができなかったのだが、これを取り付けることによって他の区画への移動が可能となる。

連邦騎士団の要求はミーティア——それと場合によっては天——だと思つていたのだが、どうやら艦ごと第一区画へと連行するつもりらしい。第四区画の常駐ギルドが全くなりなくなるのを避けるために、第一区画でも実力を持ち、信賴のおけるマジエスティックが連れてこられたのだらう。

ギルド単位で拠点を移動させるという規模の大きなことを行うのだから、反抗もそれに匹敵する規模でなければ意味を為さない。彼らがミーティア一人を連行する場合よりも、反抗の可能性はずっと低い。加えて、連れてこられたギルドの艦長が玲菜の旧友である。ギルド同士の抗争は好ましくないし、それが元々友好関係にあつた者同士なら尚更だ。

連邦騎士団は何重にも策を巡らせている。それだけ彼らが本気であり、事態が深刻だということでもある。

「要するに、三日以内にギルドごと区画外に出られるようにしろ、ということね」

「ああ。それと彼らだが、目的地にたどり着くまではこの艦に居座ることになるだらう」

連邦騎士団の三人は、マジエスティックの艦に乗って第四区画まで来たらしい。確かに連邦騎士団の艦が動けば——それも、このタイミングで一四隔壁を抜ければ——目立ちすぎる。

「それはさぞ楽しい航海になるでしょうね」

玲菜は憂鬱にため息を吐きながら言う。ドアをノックする音が聞こえた。玲菜が入るように促すと、「失礼します」と短く言ってから千香が入ってきた。

千香には今朝、一人だけ起きてこなかった天を叩き起こしてもらっていた。マジエスティックの研修生から区画間移動に必要な装備を受け取り、説明を受けなければならぬからだ。三日以内に第四区画外へ出られる体制を整えなければならぬため、取り付けも三日以内で済ませろというお達しが来ている。天ならば可能だろうが、あの青年はいささか気分屋すぎる。

案の定、必要な装備を受け取って、すぐさま寝てしまったらしい。明日の朝には取り付け作業を終わらせているということだったので心配はないだろうが、千香は深いため息をついていた。

マジエスティックの研修生が彼らの船に戻ったことを伝えて、千香は机の上に何も無いことに気がついたようだった。

「お茶、入れてきましょうか」

「お気づかいなく。私もこれから面倒な手続きが目白押しなんだ」今朝からクレレの具合が悪いため、こういった細かい気配りのできる人物がいなかったのだ。天は寝ているし、ノクスは絶対にコーヒーを入れてくるに決まっている。千香も千香で、稽古を始めてしまえばしばらくは他の事が見えなくなる。

それでも他の男二人よりはよく気が付く千香の申し出を、ガリユーはさりと断った。玲菜がクレレの面倒を見るように言っと、千香は静かに応接室を出ていった。

「嘘、うまいのね。手続きなんて全部連邦側でやってくれてるでしょうに」

「役所務めのレディの顔と名前をしつかり覚えなさいいけないのですね」

「呆れた」

事務的な話が終わったことを表すように、二人は向かい合ったソファに深く座り込んだ。あまり二人でゆっくりと話す機会がなかったが、これと言って話題が多いわけでもなかった。ギルドを経営していると、任務上知り得た事を明かさないために自然と秘密主義になっってしまう。結果、残された話題は任務に関係のない他愛のない

ものとなる。しかしながら、任務をこなして生計を立てている身としてはその他の話題などスズメの涙ほどしかない。

ガリユーは後ろの扉へ振り向いて、こうつぶやいた。

「一度手合わせしてみたいものだな」

「千香ちゃん強いわよ」

剣士の性というやつだろうか。このガリユーという男も、例にもれず強いと感じた相手に対しては好戦的になる。

「だろうな。だが、剣士にあるまじき迷いと甘さを抱えている」

「へえ、剣士にはわかるもんなの？」

そう問いながら、玲菜は自分の周りにいる男はどうして鋭いのか疑問に思っていた。天もノクスも勘は冴えているし、ガリユーも千香を見ただけで迷いがあると見抜いている。この三人に共通するのは、剣が扱えるということ。

剣を扱う男には何か特別な能力が備わるのだろうか。玲菜も剣の扱いには多少なりとも心得があるのだが、初対面の相手に対して迷いの有無を見抜けるほどの慧眼には正直なところ恐怖すら感じる。

「かわいらしいレディの迷いなら手に取るようにわかるさ」

ガリユーらしい答えが返ってきた。彼の場合は本気でこう言っている可能性も否めないのが困りどころである。

「私の迷いは？」

「ギルドを導く立場にある君が迷うはずなどないだろう？ もっとも、その気になれば私が君を惑わす自信はあるがね」

「んもう」

ガリユーは昔からこうだった。常に余裕を絶やさないポーカーフエイスで、しかしそれでいて気障なセリフを呼吸するように使いこなす。それが不快にならないだけのルックスもあるし、言い方やタイミングなども完璧に心得ているのだ。

「さて、研修生をタゲンと二人きりにするのは忍びないから、私もそろそろおいとまするよ」

「あの一匹才オカミさんも相変わらず愛想ないのね」

見送りのために立ち上がって、応接室のドアを開ける。

変わらない旧友の姿に安心しつつ、玲菜はこれからも変わらぬ自分でいられるかどうか——たとえば、この迷いを悟られないだけの余裕を保っていられるか——考えていた。

エルナが寮の端末で召集命令を確認したのは、起きてからすぐだった。昨晩は色々と考えることが多すぎてよく眠れなかったが、不思議と朝起きる時間はいつもと変わらない。

食堂で朝食を取ってから、急いで制服に着替えた。本日中に集合、ということなのでそこまで急ぐ必要はないのだが、エルナはじっとしていらなかった。

広い宇宙に出られる機会は、この研修が終わると一年は先になる。ドレッドノートの活動範囲は思ったほど広くなかったけれど、これまでエルナが過ごしてきた狭い世界とは比べ物にならないほど広かった。それまでの生活では会えないような人にも会えだし、立ち入ることのできなかった場所にも入れた。

研修が早期終了してしまったのは残念だったが、こうして期間内に再度召集がかけられたのだ。また、この大剣を授けてくれた人を捜すチャンスが巡ってきたということでもある。

剣を背負って、寮を出る。出寮手続きはすでにドレッドノートが済ませてくれていた。それだけ重要な用件なのだろう。きっとミータシアにも連絡が行っているに違いない。

ギルドポートまでの転移陣を通れば、すぐ目の前にドレッドノートが停泊している。入口に何やら新しい装置が取り付けられていたが、今は動作してないらしかった。そのまま艦の中へ歩みを進めていくと、エルナは見知った顔に出会った。

エルナが通っている学園の、ベージュ色の三角襟のついた制服は、上は男女でほぼ同じデザインのもので、下は男子がズボン、女子は

ズボンとスカートのどちらを着用しても構わない事になっている。
その制服を着た銀髪眼鏡の男子が、ちょうどドレッドノートから降りようとしていた。

「ああ、エルレナードか。おはよう」

「おはよう」

とりあえず反射的に挨拶だけを返すが、エルナは突然のことで事態が把握できていなかった。

「どうして僕が第四区画にいるんだ、って思ってるだろ？」

「う、うん。その通りだよ。リック、第一区画に行ってたはずじゃないの？」

「そうなんだけどな。ギルドの任務で戻ってきたんだ」

それより、とリックは悪戯っぽい笑みを浮かべながら眼鏡を上げ直した。彼が何かに強く興味を持った時、あるいはそれについて言及する時のクセだ。エルナには嫌な予感しかなかった。

「リックが何を言おうとしてるのかわかった気がする……」

「それなら話は速いな。あの子は誰なんだ？ 研修で知り合ったのか？ それにしてはずいぶん仲良くなっていたようだが、どこまで行った？」

真面目に見えて、リックはこの手のゴシップにとってもよく食い付く。エルナはすぐにでも逃げ出したい衝動に駆られたが、肩に腕をまわされてがっちりと捕まえられてしまい、それは叶わなかった。

「ははは、あの子って何のことかな」

「ほおう、『エルナ』君はとぼける気でいらっしゃるようで」

目を反らしても、顎を掴まれて無理やり視線を合わせられる。しかも、『エルナ』という呼び名を持ち出されてしまった。女の子みたいで嫌だったから、学園では自分でも忘れるようにしていたのに、それもこれもミーティアのせいだ。あんな恥ずかしい……いや、紛らわしい事をするから。

「あの子なんて言ってたっけ？ 確か、『エルナの音が』」

「わー！ わかった！ 洗いざらい白状します！ だからやめて！

掘り返さないで！」

思い出すだけで転げ回ってしまいそうなほど恥ずかしいセリフを復唱されそうになって、エルナは慌ててそれを遮った。

リックが満足そうにうなずいて、エルナは深くため息をついた。

おそらく、リックの誤解を解くことはできないだろう。彼は頭の回る人間であるため、色々と邪推もしてしまうのだ。

「えーっと、どこから話せばいいの？」

「まずは名前からだな。次に馴れ初め。それからどこまで行ったか、だ」

「どこまでって……」

リックは完全に勘違いしている。これはありのままを説明したところで到底信じてはもらえないだろう。しかしながら、エルナには正直に話す以外の選択肢がない。詰みだ。

仕方なく当たり障りのないところから話し始めようとした時、それを落ち着いた声が遮った。

「こらこら、可愛いレディの色事を無理やり聞き出すものじゃないぞ」

二本の刀を携えた背の高い男が、二人の後ろに立っていた。エルナにとっては見覚えのない人物だったが、リックが艦長と呼んでいることから、彼が研修に出ているギルドの艦長であるうことはわかった。

悠然とした佇まいと鷹のような目は、見るからにその男が歴戦の勇士であることを感じさせる。リックと話していて気が緩んでいたとは言え、声をかけられるまで全く気配を感じなかったことも、それを裏付ける。

ギルドの仕事で忙しいのだろうか、彼は挨拶もそこそこに、リックを連れてドレッドノートから去っていった。

リックから解放されたは良いが、エルナは釈然としなかった。

（そんなに女の子に見えるのかなあ……）

確かに、制服で男女の見分けはつかない。女子でも好みや実戦面

での事情によってズボンタイプの制服を選ぶ事はある。けれど、それにしたって間違えられすぎだ。

自分の中性的な顔立ちとか伸びない身長にため息をつきながらブリッヂの前に来ると、ちょうど玲菜が出てくるところだった。

「エルナちゃん！ 久しぶり！ 今回の呼び出しについてはちょっと長くなるから、ノッ君にでも聞いておいてね」

どうもこれから出かける用事があるらしく、彼女は慌ただしく走り去ってしまった。

ブリッヂではいつものように、袖に金の線が入った紺のダブルジヤケットを着こなす長身の青年、ノクスがコーヒーの香りを楽しんでいた。その表情は渋い。

「ああ、久しぶり。慌ただしくてすまないね」

「いえ……。もうお怪我は大丈夫なんですか？」

いつもなら幸せそうにコーヒーマスターの味と香りを嗜んでいるのだが、今日のノクスは冴えない表情のままだ。時折ため息なんかも吐いている。

ドラゴンとの戦いで傷が治り切っていないのだろうか。

「ああ、特に後遺症らしいものもないよ。お財布とコーヒーマスターの質には致命的な傷が残っているけれど」

「あ、はは……。そうなんですか」

一週間前、ノクスの財布は致命的な打撃を受けた。バーレイグによるミスティック誘拐事件の調査のためにスペースタイムズの龍見マヤを雇った際の費用と、ドラゴンの襲撃で負った傷の治療費が重なったのだ。

ギルドの経費で落ちる部分ではあるのだが、元々のコーヒーマスターが経費で落ちていたため、今回の費用もそこから差し引かれてしまったらしい。

結果として、いつもの上質なコーヒーマスターを仕入れる事ができなくなってしまったというのである。

「ところで、今回の召集のことなんですけど」

ノクスがあまりにも落ち込んでいるようだったので、エルナは話題を切り替える事にした。

ノクスもエルナの気遣いを察してくれたようで、カップを置いて今回の任務について説明してくれた。

親の心子知らず。古くから言い伝えられているその言葉の意味を、玲菜は初めて意識した。

「本当は令状なんか見せたくなかったんだけどね」

「あれくらいしいないとあの頑固おやじは納得しませんよ」

彼女の隣を歩きながらむくれているのは、魔法学校の制服を着た少女。茶色がかった髪が朝日を受けて輝いているが、表情はいつもの明るいそれではなかった。

荷物は大事そうに抱えている専用の柔らかいケースに入れた杖一本のみ。その他はすでにドレッドノートへの転送を済ませている。

ギルドからの召集命令に対して、彼女、ミーティア・エンシスハムが応じない——正確には応じる事ができない——でいた理由は、玲菜にも容易に想像がついた。

タダでさえ危ない目にあつたというのに、その上またギルドに娘を預けるなどと、素直に聞き入れるほうがどうかしているのだ。

エンシスハム卿は妻と息子に若くして先立たれ、残された家族は養子のミーティアだけだった。誰よりもミーティアを心配するのは当然の事であり、玲菜としても氏の心の支えとも言うべき一人娘を強引に連れ出す形になった事には心を痛めていた。

当のミーティアはと言うと、本人としては召集命令に応じる気ではなかった。父親の態度を過保護としか見ていないらしかった。

玲菜はもしも自分がミーティアと同じ立場であつたなら彼女と同じ気持ちになっていただろうが、それでも父親側の気持ちも理解できた。いつの間にかできるようになってしまっていた。

玲菜にとって、ドレッドノートは家族も同然である。もしも、自分に抗えないほど強い力で、メンバーの誰かが強制的にどこかへ連行されてしまうような事があったら。そう考えると、とても不快な熱が胸の奥で渦巻くようで、苦しくなった。

今、エンシスハイム卿はどんな気持ちでいるだろう。ステイグマなどというわけのわからないもののために無二の家族と引きはがされる苦痛は、想像するだけでも嫌になる。そして、その苦痛を与える行為を——原因を作ったのが自分ではないとは言え——玲菜自身が行っているという事実も、どうにもならない不愉快さを増長した。「ところで、今回の詳しい任務内容ってどうなってるんですか？」触れたくない話題を避けるように、ミーティアは質問を投げかけてきた。

玲菜にとってもそれはありがたい事だった。仕事の話と考えれば、事務的に淡々と話す事ができる。

「まず、今回が長旅になる、というのはさっきも話した通り。第四区画の外へ行くのだから、最短でも二週間は帰って来られないでしょうね。今回の場合はその程度で済むとは思えないけれど」

区画間の移動は本来、隔壁通過申請を出してから、数日から数週間かかる。もっとも、この点は連邦騎士団の力があるため、今回は例外的に時間を食われる事は無いだろう。

「ステイグマ事件のほとぼりが冷めるまでかくまってもらえるアテが出来た、というのは希望的観測になるわね。実際には連邦のお偉方から依頼を受ける、という形になるわ」

ステイグマ。死者を蘇らせる、あらゆる傷を癒すなど、数々の伝説が尾ヒレをつけて肥大化した、古代の遺物である。実際に言われているような力があるわけではないが、それは重要な事ではない。力があると信じる者がいて、その者がステイグマを狙っている、という事実。それに迫られて、ミーティアは居場所を公に知られるとマズい立場にいる。

第四区画にステイグマが存在する事は、すでに知られてしまっ

いるか、あるいは知られていなかったとしても時間の問題だろう。少なくとも、ドラゴンと生身で戦える魔法少女がいる事は知れている。

「じゃあ、私をかくまってもらう代わりに、ドレッドノートが依頼を受ける、って事になるんじゃないか」

「厳密にはそれだけではないでしょうけど、今のところは概ねその理解で問題ないでしょうね。出発は早くても明日になるから、今夜はゆっくり休んでちょうだい」

そこまで言ってから、玲菜はミーティアの表情や声色に不安の気持ちが出ているのを感じ取った。自分の身が狙われているのなら、不安を感じないはずがないだろう。

「大丈夫よ。どうせ連中もガセネタをつかまされたと思ってすぐ諦めるんだから」

「あ、いえ、そうじゃなくて……」

だが、ミーティアが感じていた不安は玲菜が思っていたものとは違った。

「その、私のせいで、ドレッドノートの皆に迷惑をかけてるんじゃないかって……」

ミーティアは素直だ。そして、優しい。自分が狙われているというのに、他人を気にかけている。

クレレやエルナと同様に、この少女も玲菜の保護欲をかきたてる要素を兼ね備えているのだ。

「なーに言ってるの。ミーティアちゃんも私達ドレッドノートの家族なんだから、変な遠慮はしない!」

おでこを軽く小突いて、不意打ちを受けて目を丸くしているミーティアに向かって微笑む。守るべき人、守りたい人を前にすると、自然と優しい気持ちになれた。

そして、その微笑みを少しずつ悪戯っぽいものへと変質させながら、両手を怪しく動かして言う。

「ふふふ、これでもまだ遠慮するようなら、ベッドの上で夜通しお

説教でも良いのよ？」

「ひっ、え、遠慮しておきます……ってあつ」

「遠慮する、って言ったわね？」

「いやそれはお説教を遠慮するという意味であって……！」

程よくミーティアの緊張がほぐれてきたところで、二人はドレツドノートのブリッチの扉を開いた。

月の光を浴びて、ドレツドノートの装甲が淡く輝く。

宇宙航行艦は過酷な宇宙の環境から内部を守るため、分厚い装甲に覆われている。

内部の装置は最低限の知識で操作が行えるようになっていたが、装甲部分だけは違う。

流線型の屋根の上に登って、二重三重になっているフタを一つずつ取り外す。

その一つ一つが頑強に締められており、人の力では到底開けられないようになっていた。

給湯ポットのような形をした自立型お手伝いロボット「スタイリッシュジョージ」の活躍により、分厚いフタが数枚取り外され、手頃な場所に積み上げられた。

作業着タイプの長袖の青いYシャツと長ズボン姿の青年は、普段なら目にする機会のない原始的な――故に強力で丈夫なタイプの――端子部分を観察し、必要な工具と工程を頭に思い浮かべた。

区画間の移動は連邦政府から許可を受けた場合のみ可能で、必要となるユニットの入手経路は政府が管理しているし、取り付けにはそれなりの知識と技術が必要不可欠になる。

彼は学生時代に一通りの技術を身につけてしまっていたし準備も怠らなかつたから、この装置の取り付けは一晚で終わる予定である。工具を使う順番に並び変えてから、一つずつ持って装甲の窪み部

分へ降りて作業する。

工具の一つ一つがそれなりの重さを持っているため、今の彼が一度に持ち運ぶのは難しい。面倒ではあっても、一つ使って次のモノが必要になるたびに工具箱の場所まで戻らなければならぬ。

最後のボルトを取りに戻ろうとしたところで、月の光が遮られた。
「精が出るね。はい、これだろ？」

「ああ。これだな」

一瞬だけ警戒するものの、彼はその影の正体を知るとすぐに肩の力を抜いた。

慣れた手つきで、重厚なボルトをきつちりと締める。最後にジョージが仕上げをすれば、作業は完了する。

「早いね、もう終わったのか。君の事だから、昨日の晩に準備はしておいたんだろ？」

「連中が来るって事は、ステイグマに関する問題だろうからな」

今回の件でステイグマは——正確には、ステイグマを扱う少女が——有名になりすぎた。まだ開発の進んだ地域の狭い第四区画にいては、彼女や彼女を研修生として受け入れている状態のギルドが狙われるであろう事は明白。アーティファクトを目の届く範囲に置いておきたい連邦がこの事態を放置するはずがない。

木を隠すには森の中。最も効率良く穩便に彼女を第四区画の外に連れ出し、他のギルドから隠すには、ギルドごと外の区画へ連れ出せばいい。となれば、区画間移動用のユニットを装備する準備が必要になる。

月の光を遮った影、ノクスは、ここまで見越していたドレッドノートの技術部門担当、白柳 天に向かって手を差し出し、窪みから装甲に引き上げた。

ジョージに必要な指示を出して彼の作業が一段落したのを確認してから、ノクスはわざと聞こえるようにため息をついた。

「一番大きな理由はステイグマだろうけど、これは君の問題でもあるんだぞ？」

「ああ？」

興味の対象外の事となるとまるで鈍くなってしまうのは問題だ。
ノクスは頭を抱えた。

天がヘルテイトを撃退した事で、彼自身も有名になってしまったのだ。スペースタイムズによる、人心の乱れを防ぐための報道と、それによってドレッドノートに降りかかる恐れのある厄介事を嫌味を込めて説明してやると、ようやく理解したらしかった。

理解はしても、この男はそれに興味を示さない。装甲のフタを閉じる作業を終えたジョージを持ち上げて、工具セットの中にあつた小さなドライバーで背中の中から部品を組み変え始めた。また何か、面白い事を思いついたのだろう。

たまにぶつぶつと漏れてくる独り言からして、動作の高速化と内部部品の配置に対する彼なりの美学が関係する事だろう。ノクスには機械の事はさっぱりわからないが、この男、ネジを回す時は普段の無気力さが嘘のように活き活きとしている。

「しかし君は何かを組み立てたり作ったりしている時は本当に楽しそうだな」

「実際楽しいからな」

皮肉も通じやしない。天才とバカは紙一重と言うが、目の前にいる機械狂はたまに恐ろしくバカに見える。

このマイペースさを壊してやりたくて、触れてほしくないであろう話題に言及する。

「これが終わったら次は剣の稽古かい？」

機械を見つめていた眉が動いた。

「……まあな」

苦い物を噛むような肯定。剣が嫌いなのか、それとも好きで仕方が無いのか。家柄として幼い頃から剣術を仕込まれていたのは確かだろうが、天の剣に対する態度にはただならぬ何かを感じる。

天が毎晩、誰もが寝静まった時間に剣の稽古に励んでいる事は、ノクスも知っている。決してそれを人に見せようとしらない事も、か

なり激しい実戦訓練を行っている事も。

「兄さんの見栄つてのも楽じゃないね」

理由は定かではない。千香に関する事だろうと勝手に想像して力マをかけてみたが、どうやら図星らしかった。

苦い顔をして黙って去っていったからだ。

何かにとりつかれているような印象さえ与える剣の振り方では、いつか痛い目を見る事になってしまいかねない。それは彼自身も理解しているのだろう。

（僕も人の事は言えないか……）

ドラゴンとの戦いの事を思い出し、ノクスは一人、月の光を浴びる装甲の上でため息をついた。

ブリッヂのすぐ真下にある、ほぼ同じ構造のフロアは、オープンなダイニングキッチンになっている。クルーが食事を取るのはだいたい、ここかブリッヂである。

彼女は瞬間レンジからマグカップを取り出して、テーブルの上に置き、その前に座った。

もう何度温めなおしただろう。味は完全に飛んでしまっているに違いない。

紺色の寝巻姿で、肩の辺りで切り揃えてある茶色がかった髪を指先でくるくる弄りながら、ミーティアはもう膜も張らなくなった白い水面をぼーっと眺めた。

決して気温が低いわけではないのに、嫌な寒気がする。すっかり味の抜けてしまった温かいミルクの中に、小さいスプーンを突っ込んでぐるぐるかき回す。

もうあと一度だけ。もうあと一度だけ温めたら、これを飲み干そう。飲み干して、眠ろう。

だけど、これが冷めるまでは。冷めるまではこうして、待ってい

たい。

普段は快活な彼女らしからぬ、消極的な思考。一人で眠るのが寂しくて、けれど、自分から甘えに行きたくはないという変な意地と板挟みになっている。

どれだけそうしていたのか。もう一度立ち上がって、瞬間レンジへと向かう。

「あれ、ミーティア？」

来た。来てくれた。想像した通りに。期待した通りに。

ミーティアが着ているものと同じ色のジャージ姿、ミーティアよりも少し低い背丈、ミーティアよりも少し短いサラサラの髪、見ただけでは判断の付かない中性的な顔立ち。

「眠れないの？」

「うん、なんか、緊張しちゃって」

返ってくる答えもミーティアの想像通り。

「やっぱりねー。剣の人探しに行くって目標の第一歩だもんね」

平静を装いながら、エルナの分のミルクも一緒に温める。エルナの目標は、小さい頃から何度も聞かされていた。夢をまっすぐ見つめる瞳が、普段の彼には無い少年らしさを持っていた事を思い出した。

温め終わったミルクを手渡して、隣に座る。「ありがとう」と言っ
て柔らかに微笑んでくれるのを見ると、胸が締め付けられるようだった。

「なんだか、不思議だね」

動揺を抑えるために飲んだ、味の抜けたホットミルクの想像した通りの不味さに渋い顔をしていると、エルナが静かに口を開いた。

「さっきまで、ドキドキして、不安で仕方なかったのに、こうしてミーティアの隣にいと落ち着くんだった」

マグカップをつかむ手に力が入った。一口飲んでからマグカップを置くエルナは、今のミーティアの心の中とは対称的に穏やかな表情をしている。

幼い頃と変わらない純粋なエルナの瞳が眩しかった。ざわつく心を鎮めるために、不味くなったホットミルクを飲み干す。

「あ」

隣を見ると、エルナも同じようにホットミルクを飲み干していた。合わせてくれたのかもしれない。

自動洗浄機に二人分のマグカップを入れて、キッチンを後にする。ブリッジへ上がる途中に、エルナが階段につまずいた。

「大丈夫？ 緊張が抜けすぎちゃったんじゃない？」

「あ、あはは……そう、かも……」

足取りのおぼつかないエルナを支えて、部屋まで送っていった。

「こんなに、すぐ効くんだ……」

ベッドに寝かせたエルナの穏やかな寝顔を見つめて、ミーティアはつぶやいた。体が小さい分、薬が回るのも早いのもかもしれない。いけないと頭では理解していても、止まらなかった。もそもそとベッドに潜り込む。心地良い温度が全身に伝わってきた。

綺麗に揃ったまつ毛、かすかに開いた瑞々しく小さな唇から見える真っ白な歯、吐息に時折混ざる、鼻にかかった色っぽい声。その全てがジグソーパズルを崩すように、正常な思考を解体していく。

吸い込まれるように顔が近づいて

（エルナも、したんだし、……良い、よね？）

わずかに残る思考で自らの行為を正統化して、距離を縮めていく。互いの吐息が絡まって、最後の理性は消え去った。

重ねた唇から伝わる冷たく甘美な感覚が、胸を締め付ける。ミルクに混ぜた薬のせいかな、エルナが起きる気配は全く無い。

嬉しいという気持ちは無いし、満たされもしなかった。一方的な感情の押し付けは、自分の気持ちを伝えたという実感を与えず、心はかえって空虚さを増した。

「う、わ……」

眠ったままのエルナの腕が、ミーティアの背中に回される。少し

苦しいくらいに抱きしめられて、顔が再び近づいた。

加速する胸の鼓動で起こしてしまわないか心配だった。けれど、エルナが目覚める事は無かった。彼が起きるのは早くとも、薬が切れる数時間後になるはずだ。

そう考えると、心の中の孤独感が急に強くなって、瞼から熱い雫となつて溢れた。

「ごめん、なさい……」

後悔に押し潰されそうな気持ちを、優しい鼓動と呼吸が包み込んでいく。

涙さえも心地良い暖かさに変わって、彼女も深い眠りに落ちていった。

16：深蒼の大洞窟

銀髪に眼鏡をかけた魔法学園の制服姿の少年は、ギルドの長に連れられて第四区画中央惑星の未開発地区へと足を踏み入れていた。

彼の前を歩くのは、二本の刀を携えた背の高い男、ガリユー。ギルド『マジエスティック』の艦長であり、数あるギルドの中でも飛び抜けた実力の持ち主であり、その鷹のように鋭い目はあらゆる真実を見抜く。

睨まれただけですみあがって動けなくなるほどの眼光の持ち主は、しかし恐るべき方法でこの事件現場に立ち入る許可をもぎ取った。

（まさか、本当にお役所の女性を口説き落とすなんて……）

まだ、第四区画に到着してから二日目だ。役所の女性が惚れっぽかったのか、あるいはガリユーの口説き方が相当にうまかったのか。あの鋭い目はひょっとしたら口説きやすい女性を見抜くためのものなのではないかと、少年、リックは疑い始めてしまった。

ともあれ、現在は真面目な現場である。ガリユー自身は常に真面目だと言いつけるのだが、それについてリックは考えるのをやめていた。

ヘルテイト・バーレイグが根城にしていたという、岩肌を掘って作られた人工洞窟。狭い道を抜けた先にあるドーム状の空間は、すでに防衛師団が入ったのか、綺麗さっぱり片づけられていて塵一つ落ちていなかった。

「なるほど、この辺りは流石にぬかりないということか」

何もない空間を見回して、ガリユーは納得した様子で振り向いた。「では、再調査と行こうか。リック、君の研究が生きる日が来たぞ」リックは学園で、魔法の痕跡に関して特に力を入れて学んでいた。戦闘自体は得意ではない。

どのような魔術が行使されたのか、という痕跡はその空間に存在

する魔力その変質を分析する事で可能となる。リックは学園の上級クラスで学んだ事実を活かして独自にその分野での研究を重ね、魔術を行使した人物のおおまかな特定まで行えるように理論を発展させた。

この場所で誰が魔術を行使したのか、という事を調査するために連れて来られたのだが、リックにはその目的がわからない。わからないが、彼は自分の専門分野が役立つという事に喜びを抑えられなかったため、ガリユーの思惑はどうでも良かった。

彼が空間状態の保存を行うための円盤状のビットを取り出そうとしたところで、鋭い声に遮られた。

「その必要はない」

狭い通路から現れたのは、白い装束に身を包んだ女性。佇まいや鋭い眼光からして、タダモノではない。腰には白銀の輝きを放つ刺突剣が提げられていて、白く華奢な右手はいつでもその剣を抜けるよう、柄にかけられている。

「広大な宇宙の末端で起きた事件に、わざわざ中央政府直属の戦闘部隊が駆り出されるものかな」

突然のイレギュラーの登場にも関わらず、ガリユーは不敵に笑った。

「安穩を願うならば余計な詮索はしないことだ」

敵意をむき出しにする女性を前にして、ガリユーはリックを巻き込まぬよう、遠ざけた。遠ざけて、白い女性と対峙したは良いが、剣に手をかける様子は無い。ガリユーにはまるで戦う意思がない。

「ふふ、その貞淑さに惚れてしまいそうだ」

この緊迫した状況で何を言い出すんだと、リックは気が気ではなかった。確かに、ガリユーは強い。今までの任務でそれは十分にわかっていくつもりだ。だが、相手はおそらくあの連邦騎士団の一員。全宇宙で最強の武装集団の一人が、今にも剣を引き抜かんとしているのを前に、ガリユーの姿勢はあまりにも無防備すぎる。

軽く顎をさすって、目を閉じて笑うガリユー。下手をすればその

隙に一突きされてしまいかねないが、そう言った心配は無用のものだった。目を開いたガリユーの空気が、先ほどまでと打って変わって、鋭利な刃のように冷たく張り詰めたものになったからだ。

「人工遺物を操るだけの力を持つ少女。ここで葬れるならそれで良し。そうでなければ……」

刹那。ドームに金属の激突する甲高い音が響いた。

鋭いレイピアの一撃がガリユーの首を狙って放たれたのだが、ガリユーは先ほどの位置から全く動いていない。

ガリユーと白き騎士の間に立ちふさがっていたのは、ガリユーと同じくらい背の高い三白眼の男。深く刻み込まれた皺と、露出された逞しい筋肉にいくつも見当たる刀傷が、彼が歴戦の勇士である事を示していた。

タゲン。『マジエスティック』のクルーの一人であり、単独での任務を主にこなす一匹狼。逆手に握った短刀の先端で、リックが全く視認できなかった刺突の一撃を受け止めている。

「言ったはずだ。余計な詮索はするなと」

白き騎士はその乱入者を相手に、動じなかった。この程度は想定範囲内だということだろうか。

威圧するような低い声で、女性はずごんだ。

「私は退屈な安穩よりも、焦がれる愛を求めているね。美しくも強いレディとあれば、その心をかき乱したくなってしまうものさ」

ガリユーは全く懲りていなかった。あろうことか、自分に対して刃を向けた相手に、ウインクまでし始めた。

「……何を企んでいる」

「まず第一に、君の美しさが私の心をとらえた。連邦騎士団の謀^{はかりごと}はその次かな？」

齒の浮くようなセリフを、恥ずかしげも無くすらすらと並べ立てる。

全く以ってつかめない相手に、白い女性は忌々しそうに息をついて、剣をおさめた。

「……。気分が悪い。出直す」

「また君と会えるのを楽しみにしているよ」

お願いだからこんな寿命が縮むような相手との再会を楽しみにしないでほしいと、リックは切に願った。

「いつもすまないね。タゲン」

「……。気にするな。荒事は俺の役目だ」

短刀をおさめたタゲンは、低い声でそう言うとき狭い通路の壁に背中を預けて目を閉じた。

（た、タゲンさんが喋った！）

リックにとって最も驚くべきことはそれだった。

「朝からひどい目にあつたよ……」

「あはは、ごめんごめん」

ブリツチに続く通路を歩きながら、エルナはようやく落ち着いた事態に安堵のため息をついた。

とにかく、今朝は大変だった。目が覚めると目の前に見慣れた顔が寝ていて、何が起こったのか把握する前に、部屋に血相を変えたクレレが飛び込んできた。

クレレもエルナも、その場で硬直した。どうしてミーティアが隣で寝ていたのか、エルナには全くわからなかったが、次第に、実に良くない状況である事を理解していった。

緊急事態に部屋のドアを開けてみれば、ベッドの上には一組の男女。しかも、エルナがミーティアの背中に手を回してしっかりと抱き寄せている格好になって寝ているというもの。クレレからすれば――勿論、エルナにとってもそうだが――、この状況は色々とタダ事ではない。

「あああ、あのあのあの」

とにかくひどい混乱状態にあつて言葉が紡げそうにないクレレを
落着かせようとエルナが声をかけようとした時、もっと良くない
状況がやってきた。

先ほどのクレレと同じく、緊迫した状態の千香がやってきてしま
ったのである。更に、ミーティアの寝言が誤解を決定的なものに
してしまった。

「ごめん、なさい」

エルナにとっては全く覚えのない謝罪。寝言ながらも涙でかすれ
た声で、ミーティアにとって何か深刻な事件があつたらしい事が、
その場にいる全員に知れ渡った。

何だかとても良くない状況である事はわかつたのだが、それがわ
かつたところでどう反応したらいいのかわからないまま、エルナが
おろおろしていると、すさまじい殺気が飛んできた。

恐る恐るその主の方に目をやると、今にも鯉口を切らんと刀の柄
に手をかけていた。

「ミーティアに何をしたんですか」

何もしていない、などと答えられるほど、穏やかな声ではない。
ドラゴンの硬い皮膚を切り裂いた風の刃を思い出して、エルナは血
の気が引いていくを感じた。

事の顛末はこうだ。クレレが朝、ミーティアを起こしに行ったら
部屋にいなかった。ミーティアはこの間誘拐されたばかりなのでク
レレはその場で大慌て。千香に事情を話して、エルナにも伝えよう
と部屋まで来たところ、エルナがミーティアを抱き締めるようにし
て寝ていたのだ。

クレレが必死で千香をなだめている間にミーティアが目覚めてく
れなかったら、エルナの首と胴体は劇的な別れを遂げていただろう。
ミーティアが特に込み入った事情が無い事を説明してくれたおかげ
で、命の危機からは脱する事ができた。

それにしても、ミーティアは本当にややこしい事ばかりする。確

かに昨夜はホットミルクを飲んだ後の記憶が曖昧で、ミーティアに肩を貸してもらったような気もするのだが、だからと言って何故ミーティアがエルナのベッドにもぐりこんで寝ていたのかははっきりしなかった。

泣いて謝っていたのは、昔怒られた時の夢を思い出していただけだと言う。昨日の夜はミーティアの隣にいと落ち着くとか言ったのに、今朝はミーティアの隣にいたせいで落ち着かない事態になった。

突飛な行動も彼女らしいと言えば聞こえはいいが、寿命を縮めるほど過激な冗談はやめてほしい。ミーティアも今回ばかりは流石に反省しているようだったのでエルナもあまりしつこく追及はしなかった。

ブリッチではすでに天以外のドレッドノートのメンバーと、三人の白い騎士が会議用の長テーブルについていた。

そこは到底、気の休まる空間ではなかった。居心地の悪さは先ほどの危機的状況とは違うものの、クルーの溜まり場は抑圧された不安と不満が充満する息苦しい場所となっていた。

常に真面目な千香は普段とあまり変わりが無いが、ノクスはコーヒーを淹れようとせず鋭い目で半ば騎士たちを睨みつけているし、クレレは蒼白になりながら、誰とも目を合わせないように下を向いている。この中では最も落ち着いている玲菜の表情にも普段の穏やかさは微塵も感じられず、人としての感情を捨てたような冷たい目をしていた。

「す、すみません。お待たせしました」

玲菜に促されて二人が席に着く事を確認して、白い騎士のうちの一人、両目を包帯でぐるぐる巻きにした若い男が立ちあがった。

三人の中では最も背が高く、唯一の男性である。彼らの内部にどのような序列があるのかはわからないが、どうやら目隠しの男は背の低い少女を常に監視しているらしかった。金髪で水色の澄んだ瞳

をした女性はごく普通に腕を組んで視線を目隠し男のほうへやるのだが、その隣の少女は目を閉じたまま、まるで眠っているかのような表情で頭をゆっくり左右に揺らしている。

「概ね揃ったようだな」

目隠し男は低く落ち着いた声で作戦の説明を始めた。真っ先に行われた簡単な――本当に簡単な、名乗るだけの――自己紹介で、目隠し男がアエル、金髪の女性がシャンテ、頭をゆらゆらと揺らしている少女が燐という名である事がわかった。

宇宙航行艦ドレッドノートは現在、第四区画から第三区画へ向かう、三四隔壁を通過するところだという。連邦騎士団からの召集命令という事で、彼らの本部がある第一区画へ直接向かうのかとエルナは思っていたのだが、それはどうやら思い違いだったらしい。

意外にもアエルの説明は丁寧で、質疑応答の時間まで設けてくれた。エルナがどうして直接に第一区画へ向かわないのかと尋ねたところ、その理由も詳しく説明してくれた。

「一四隔壁には他のギルドが集中すると予想される。マジエスティックが真っ先に一四隔壁を通過した事で、他の連中は慌てて通過許可申請を出してきているからな。それに、第二区画は現在、宗教抗争の沈静化という名目で二、三隔壁を共に遮断している」

つまり、ミーティアを、あるいはスティグマを狙ったギルドが第四区画へ大挙して移動している、という事だった。更に、普段は通過許可審査の厳しい一四隔壁だが、その審査をわざと一時的に緩めているのだという。

一足早く第四区画入りしたマジエスティックに先を越されまいと腕に覚えのあるギルドは次々に通過許可の取得申請を始めた。この状態で一四隔壁へ向かえば、通過の際に一隻だけ逆走するドレッドノートが目立ってしまう。

だが、これを利用して、一四隔壁に意識を集中させる事で、その隙に第三区画へと抜け出すという狙いがあるのだという。第三区画ならばそこまで力のあるギルドも多くは無いし、第一区画の猛者達

を相手にするよりはずっと安全だ。

加えて、第三区画には連邦騎士団が間接的に影響力を持てる状態にあるらしい。ミーティアが狙われる事に関してはほぼ心配しなくても良いということだった。

「第三区画では我々と共にある任務についてもらう事になっている。任務後、様子を見てその後の動きを決定する」

封鎖された状態の第二区画や、大量のギルドが流れ込む第四区画の動向を見ながら、その後どう動くかを決定するということらしい。ノクスから説明された通り、今回の遠征任務はかなり長丁場になりそうな雰囲気だった。

肝心の第三区画における任務は、シャンテから説明があるということ、アエルは燐を連れてとっと部屋へ引っ込んでしまった。燐はふらふらしていたし、体調でも崩しているのだろうか。

「すまないな。あの男、仕事はできるが愛想が無いんだ」

アエル達がブリッヂから出た事を確認して、金の長い髪を後ろで結わえた女性、シャンテが深く息をついた。この任務に連邦騎士団から派遣された三人は団長からの指名らしいが、団員のシャンテでさえ、アエルと燐が選ばれた理由はわかっていないらしかった。

とにかく、人当たり難のあったアエルと違い、シャンテの説明は非常に砕けたもので、先ほどまでブリッヂに充満していた緊張が少しずつほぐれていく事を感じさせた。

「という事で、今回の任務は大海洞最深部に向かう王女の護衛、それから三区を騒がせているある事件の調査だ。彼らとの関係はちょっぴりデリケートだから、建前上でもそう強くない人物が望ましい」

「あら、適任がいるじゃない。寝てるけど」

「ああ、いますね。寝てますけど」

玲菜と千香の空気も、先ほどまでの張り詰めたものではなくなっていた。

彼女達が言う適任はおそらく、いつものように一人マイペースに寝ている天の事だろう。

建前上は非戦闘員だが、実質的に戦闘員にカウントされている。
あれ以上の適任はいない。

「でも、一応病みあがりなのよね」

「それなら、その研修生も一緒に来てくれればいいだろう」

シャンテのその言葉に、玲菜の眉が動いた。元々がミーティアをかくまうという名目で来た彼らのことだ。建前上であつても戦闘能力の-highな人物を要求する任務に対して彼女を寄越せ、という命令となれば、警戒せずにはいられない。

「うつむ、あまり脅すようなことは言いたくないが、アエルや燐はこの艦に置いていく。彼らを見張るためには相応の実力の持ち主でなければ務まらないぞ。特に燐のほうは、な」

玲菜は渋々ながら了承したが、エルナが口をはさんだ。

「あ、あの、その任務にボクがついていくのって、アリですか？」

「うん？ キミがか？ 戦えるのか？」

その研修生、という言い方はミーティア一人を指したものだっ
たらしい。エルナは今の今まで、シャンテの眼中になかったという
ことか。

しかし、エルナはそれなりに戦う事ができ、研修生という肩書も
あつて名目上、強力すぎる戦力とは言えない。

「そうだな。そういうことであれば、艦長殿の許可さえあれば私は
構わんよ」

ミーティアを守るためにできる最善の方法は、強大すぎる力を拒
む彼らの任務に対して可能な限り戦力を注ぎ込むことだった。玲菜
はすぐに決断を下した。

大海洞への王女護衛任務には、エルナとミーティア、そして天が
同行する事になった。

第三区画は四つの連邦領区画の中では比較的新しいほうだが、そ

れでも気の遠くなるような歴史を持っている。

この地に移住した人々が優れた指導者を求めたために、古い時代から王制を敷くこととなった。

今回、大海洞へ王女を護衛する任務が任されたのは、王家の人間と彼らの古の盟約により、この地に立ち入るためには王家の血筋が必要だからである。

大海洞はその名の通り、海底に存在する大洞窟であり、大渦に守られたその洞窟へ立ち入るためには特殊な転移陣を使う必要がある。その転移陣を起動するためのキーが、王家の血筋なのだ。

肝心の、王女が大海洞の最深部へ向かう目的については、あまり広く知られない事情ではないらしいのだが、第三区画にここ十年の間に出没するようになったある怪物の話が関係しているという。

ディガンマ。生きた人工遺物とも呼ばれるそれは夜な夜な現れて見つけた者を片っ端から切り裂いて殺すという、物騒な化け物だ。それを退治してしまえば話は終わるのだが、事はそう簡単ではない。噂が流れているだけで、その確固たる正体はまだつかめていないのだ。幾度となく王宮の調査隊が出向いても、何の手がかりもつかめずに終わるか、あるいは全滅させられてしまうだけだった。

三年前の調査隊の派遣で、それは起きた。大海洞内部で、調査隊がほぼ全滅。立ち入りのために同行していた第二王女が重傷を負ったのだ。

王宮はこの事態に混乱した。議会では、ディガンマの正体は古よりこの地に住む彼らではないかという声上がり、太古の盟約に違反したとして、彼らへの制裁を求める過激派まで現れた。

あわや即時開戦という一触即発の状況にまで発展したが、王宮内での支持も篤い第二王女の懸命の説得により、なんとか過激派も矛を収める形となった。

だが、それも一時的な物である。早々にディガンマの正体を明らかにしなければ、王宮と彼らの間で戦争が起こってしまう事は避けられない。

王宮内では開戦を叫ぶ声こそ鎮まったが、彼らに対する不信は消えておらず、そこで今回、第三者であるドレッドノートに調査のための護衛を依頼してきた、ということである。

「よくわかんないけど、カレラさんが怪しいから王宮で調査隊が派遣できなくなったの？」

「カレラさんって……。まあ、そう言うことだと思っよ。そう何度も全滅されてちゃあ損害もひどいだろうし」

エルナ、ミーティア、天の三人は、大海洞の入り口である転移陣の前まで来ていた。海辺の洞窟の中であり、夕刻となって入り口のほうにわずかな西日が射しこんでいる以外は、転移陣から漏れる青白い明りしか存在しないため薄暗い。

シャンテは人を迎えに行くと言っていた。おそらく、王女様とやらを連れてくるのだろう。エルナが退屈そうなミーティアをなだめていると、洞窟に一組の男女が入ってきた。

少年のほうは赤い髪のぼさばさ頭で、白いマントを羽織り、腰には両手で扱う騎士剣が提げられている。もう一人は赤い髪のショートヘアで、金属の肩パッドと胸当て、そして動きを制限しないスカートと、腰には細い紫色の帯を巻いている。背中に背負っているのは、彼女の華奢な腕で扱えるのかと思うほどの大槌で、見るからに少年よりも重装備だった。

おそらく、二人ともエルナ達と同年代である。どちらも傾向こそ異なれど、おとぎ話に出てくるような騎士の格好をしていた。王宮というものの存在からして、第三区画外ではあまり身近に感じられないものであるため、第三区画にはそれを中心とした独特の古風な文化が栄えているらしい。

「あなたが王女様？」

「えっ？」

ミーティアが突拍子もない事を言い始めた。重装備をして身を守る可能性はあるが、王女があんなゴツイハンマーを背負ってきたりはしないだろう。

ミーティアの言葉が全くの的外れであることを裏付けるように、言われた少女は面喰らってどう反応していいかわからない様子だし、少年のほうは必死に笑いをこらえていた。

やがて気を取り直して、ハンマー少女が自己紹介も兼ねて、事情を説明してくれた。彼女達は王宮から派遣された騎士見習いで、今回の王女護衛任務に同行するよう命じられてきたのだそうだ。

ハンマーを背負った少女はソア。マントの少年はグライヴという名らしい。騎士と言うからにはお堅い性格なのかと思ったら、どうやらそんな事はないらしく、二人とも気さくに話しかけてきてくれた。

エルナがいつものように女の子に間違われて凹んでいると、今回の任務の依頼者がやってきた。

「すまん、待たせたな」

シャンテともう一人、縁のないメガネをかけた女性がいた。白く透き通るような首から黒く細長いベルトでつながれた大きなカメラと、半そでの白いブラウスに、膝まで隠れる黒いスカート。

「おや、お久しぶりですね。生ドラゴンと戦った生勇者様じゃないですか！」

龍見 マヤ。新聞雑誌スペースタイムズの記者で、エルナにとってはあまり良い思い出のある人物ではなかった。

しかし、シャンテの口ぶりではこれで全員揃ったかのような言い方である。まさか、この新聞記者が王女とでも言うのだろうか。

どうやら、そういうわけではないしかった。マントの少年とハンマー少女が敬礼した先には、照れくさそうに頬をかいている白いワンピース姿の金髪碧眼の女性の姿があった。

「シャルフランテ姫、無事のご帰還、お待ち申しあげておりました」ハンマー少女の格式張った発言に、シャンテは慌てた様子で背筋を伸ばし、姿勢を正した。

それから「楽にしてくれ」と敬礼する二人に言ってからエルナ達のほうを振り向くと、ばつが悪そうに自らの正体を明かした。

「いや、その、自分から王族を名乗るのはどうにも気恥しくて、な」
シャントは転移陣の前に立って、岩の地面に描かれたそれに手をかざす。

「早速出発するとうるか。ここからはそれなりに長い距離を歩くことになる。我々と彼らの関係についても、その道中で説明しよう」
起動した転移陣の上へ、先導のグライヴから順番に乗って大海洞内部へ転移する。

天やミーティアに続いてエルナも光る魔法陣の上に乗り、転移魔法の眩しい光に目を閉じた。

大海洞はこの地に人間が移住してくる前から存在した、天然の大海洞だ。長い年月をかけて海水で削られた岩肌は魔力素を多分に含み、それを養分とする特殊なコケが岩壁に茂って澄んだ青の魔力光を放っている。

海の底に存在する洞窟でありながらそこは先ほどの海辺の洞窟よりもずっと明るく、転移してしばらくは眩しくて目を開けてもらえないほどだった。

幻想的な光景。思わずため息すら出るような、透き通る水晶にも似た輝き。青空に星が瞬くとしたら、きっとこんな光景になるだろう。エルナも、ミーティアも、三区の見習い騎士達も、シャントに声をかけられるまでその美しさに見とれていた。

エルナ、ミーティア、天、ソア、グライヴ、マヤ、シャントの七人が揃っている事を確認して、唯一大海洞の道のりを知るシャントが先頭を歩き始めた。

一つ歩みを進めるたびに、足場の表面に張った薄い水の膜がはじけて音を立てる。幼い頃にはしゃいだ雨の日を思い出しながら、エルナはシャントの説明に耳を傾けた。

「彼らとは、魔族のことだ。一般的に言われる魔獣と違い、優れた

知性を持っている」

魔族は、人と異なる生物であり、その姿かたちは様々だが、総じて強い魔力を持つ。

この第三区画には人よりも以前に彼ら魔族が住んでおり、第三区画に人間が移住してきた際には様々な問題が起こったという。

移民と先住民との争いの歴史は人がまだ広大な宇宙へ飛び出す以前からも存在していたため、第三区画の指導者たる王が魔族の長と交渉。これにより、互いが同じ星で生きるために守られるべき、古の盟約が誕生した。

互いの領域には特別な場合を除いて立ち入ることが許されず、また、干渉もしてはならないという内容の盟約である。争うくらいならば完全に住み分けてしまおうと考えたのだ。

積極的な交流を拒む一方で、同じ星に住む以上、関わりを全く断つてしまふわけにはいかない。盟約の確認は数年に一度という短いスパンで行われるし、互いにとって脅威となる存在の出現も、古の盟約の時代から想定はされていた。

そういった目的もあり、王家の人間が魔族の長達と会談するため、この地を訪れる事は、頻繁ではないにせよ稀でもなかった。当然、この地を正当な理由で、正式な手段で訪れた人間を害してはならないという事は、古の盟約に含まれていた。

三年前の調査隊惨殺事件がもしも魔族の仕業であつたとしたら、それは古の盟約に反するものである。王宮内で魔族に対する反発が強くなっている事もあって、シャンテは「彼らとの関係はデリケート」だと言ったのだ。

一方で、魔族側にもディガンマの被害が出ているという話もあり、彼らの側から王宮側への不信も募っている。結果、大海洞へ赴く際に王家の人間を護衛しなくてはならないにも関わらず、あまり強大な戦力を持ち込んでしまうと魔族側を刺激してしまいかねないという、板挟みの状態になった。

今回、シャンテを含む七人はそれぞれ、戦闘を本職とする人間で

はないか、そうであつたとしても見習いの段階にいる者だけで構成されている。

「本来なら王宮からの護衛は無しにしたかつたのだが、どうにも頭の固い人間が多くてな」

言いながら、シャンテは深くため息をついて、話を本題へと戻した。

「とにかく、彼らと我々は調査隊事件以来、ほとんど交流断絶状態にある。今回、彼らの長に会う目的は盟約の確認と、ディガンマ事件解決のための知恵を借りる事だ」

「うん？ 三年前、だつたよね。その間、王様がここに来たりとか、しなかつたの？」

ミーティアの疑問はもつともな事だ。だが、エルナは慌てた。相手は仮にも王女。口の利き方には十分に注意しなければならないというのに、まさかのタメ口である。

王宮に仕える騎士の見習いであるソアは表情を歪めていた。グライヴのほうも、まさか王女に向かってタメ口を利くとは思っていなかったのか、信じられないと言つた様子でミーティアのほうを見ていた。

（ま、マズいつて！）

エルナはこの状況をなんとかできないかと助けを求めるように天のほうを見るが、彼はどうやらこのやり取りそのものに興味を持っていないらしかった。ただ黙々と、青いコケの光を見ながら歩いている。

肝心のシャンテはというと、ミーティアの無礼な言葉遣いには全く触れずに、彼女の質問に答えてくれた。

「調査隊事件でこの場所の安全性が揺らいだからな。指導者を失う事を恐れた議会は王をここへ寄越したがらない」

その説明を聞いても、ミーティアはいまいち釈然としない様子だった。

「シャンテさんが王女様つてことは、王様はシャンテさんのお父さ

んって事になる、んだよね？」

「まあ、そうだな」

ミーティアはシャンテが王女だと言う事を理解しておきながら、言葉遣いを改めようとしない。シャンテは複雑そうな表情をしているが、ミーティアを咎めるような事はなかった。

「て、天さん、あれ止めなくていいんですか」

偉い人に対してタメ口を貫き通すのは非常にマズい。ミーティアが王族の怒りを買った場合、同じドレッドノートのクルー達もばつちりを食らってしまう可能性がある。

その不安に耐えきれず、エルナは天に対して小声で助けを求めた。天は相変わらず落ち着いた様子で、しかしエルナの苦悩を瞬時に見抜いてくれた。

「お前はもう少し落ち着いてろ。あの女は俺達にとって王族じゃない。依頼者クライアントの一人だ」

言われて、エルナもようやく理屈は理解した。理解はしたが、それでも相手は王族である。あの女呼ばわりもあまりよろしくない物言いだ。天は本音と建前の使い分けが大事なのだというが、エルナはどうにもすっきりしなかった。

（ボクが気にしすぎなのかなあ……）

「私は長らく連邦騎士団に身を置き、王宮との関わりを避けてきたからな。頭の固い議会を納得させるには、三区の政治にとって必要不可欠な父上よりも、連中から距離を置いた私が出向く方が都合が良かった」

エルナが悩んでいる間にシャンテとミーティアの質疑応答は進んでいた。シャンテの答えを聞いてミーティアは先ほどのエルナのように納得し切れていない様子で、しかしなんとかその事情を飲み込もうとしているらしかった。

誰かがここへ来なければならなかったなら、娘に任せたりしないで王が自らここへ来るべきだったのではないか、という問いだったようだ。

「そつか、いろんな事情があるんだ……。何も知らずに変なこと言
ってごめんなさい」

「いや、構わんよ。至ってまともな反応だ」

大海洞の青いトンネルは入り組んでおり、途中にいくつも分かれ
道が存在していた。迷宮のようなその道のりを、シャンテは正しく
記憶しているようで、特に迷うことなく進むべき道を選んでいた。

ミーティアとシャンテの会話が終わると、誰も言葉を発しようと
しなくなった。

七人分の足音が空洞に響いて、なんとなく口を開きづらい沈黙に
重石を載せる。

エルナは気持ちを落ち着けるために、そつとそれぞれの表情をこ
っそり覗き見る事にした。

ミーティアはさっきの会話の内容を飲み込もうとしているのか、
いつになく真剣な表情である。

天は時折あくびを噛みしめながら、眠そうな目をしていた。昨晚
のうちに区画間移動のための装備を取り付ける作業をしていたらし
いので、それが長引いたのだろう。

ソアはうつむきがちで、表情を曇らせていた。先ほどのミーティ
アの言葉遣いが気に障ってしまったのかもしれない。

グライヴはやや過剰に周囲を警戒しているように見えた。視線が
あちこちに行つて、分かれ道では進まない道の奥をしきりに気にし
ていた。何かを警戒しているというより、何かを探しているようでも
あった。

シャンテの足が止まった。エルナがグライヴの落ち着かない様子
を不思議に思っているうちに、どうやら目的地に到達したらしい。

そこはただっ広い、平らな空間だった。先ほどまでは天井の存在
を意識できたトンネル道が開けて、何か特別な用途のために作られ
たようにさえ感じる、何もない場所だった。

上を見上げると天井は見えず、暗闇が広がっている。それでもこ
の場所が暗くないのは、この大広間の奥半分が先ほどまでのトンネ

ル道と同じく、青い光を放つ泉になっているからだった。

「相も変わらず、不用心なことだ」

「それはお前も同じことだろう」

シャンテの声に呼応するように、低い声が大広間全体に響き渡った。直後、泉から激しい水しぶきが上がって、雨のようにエルナ達に降りかかった。

しぶきが収まってから目を保護していた腕をどかして、エルナはあまりに突拍子もない光景に驚いて尻餅をついてしまった。

深い蒼のウロコを持つ大蛇が、泉から顔を出していた。真紅の双眸には一睨みされただけでその偉大さを思い知らされ、一人どころかこの七人全員が丸ごと飲み込まれてしまいそうな大きな口には、一本一本が名匠の業物の如く鋭い牙がズラリと並んでいる。

王女の護衛である以上、ここは武器を構えなければならないはずだが、生身で戦おうなどと思える範囲をはるかに凌駕していた。何隻もの宇宙艦で魔導砲をぶつけでもしない限り、この大いなる存在には太刀打ちできないだろう。

護衛達はその圧倒的迫力に息もできないほど気圧されているにも関わらず、シャンテとマヤだけは平然としていた。

「話には聞いてましたが、デカいですねー」

マヤはいつもの平然とした調子だが、珍しくカメラを構えようとしなかった。

「竜族の娘か。人間に従うとは、堕ちたものだな」

「私は人間だの魔族だのって話には興味がないんです。ただ、真実が知りたい。白黒はつきりさせたいんですよ」

その怪物は、どうやって喋っているのかは全くわからなかったが、しっかりと人語で会話できるらしい。

強大な存在と、マヤは対等に会話していた。シャンテも同じで、相手に敬意を払ってはいても、恐れを抱いているという事はなさそうだった。

「まあ、なんだ。彼らも十分に驚いた事だし、そろそろいつもの姿

に戻ってほぐれないか」

「フン、つまらん」

言葉ではつまらないと言っているけど、口調はやや楽しんでいるように聞こえた。泉の大蛇はその体を青く光る水滴にして弾けさせ、エルナ達の前から姿を消した。

あっけに取られているエルナ達の前に、深い蒼のローブを身にまとった、長い髪の女性が降り立った。大蛇の身が弾けた直後に宙に現れ、そのままゆっくりと降下して、泉の水上に足をつけて立ったのだ。

そのまま水上を滑らかな足取りで歩き、長身な女性はシャンテの前に立った。

「大きくなったものだ。間違えたぞ、シャンテ」

「久しいな、レヴィ。会えて嬉しいよ」

レヴィと呼ばれた女性とシャンテは互いに穏やかな笑顔と硬い握手を交わして、シャンテがエルナ達のほうへ振り向いた。

「彼女が魔族の長、リヴァイアサンだ」

あまりにも突拍子が無い事だったので、エルナ達全員が事態を把握するまで、三十秒程度の時間を要した。

17：仮初の終息

魔族の長、リヴァイアサンとの話が終わった後、エルナ達は、男女別に客室に通された。岩壁をくり抜いて作られた空間にベッド等の必要な家具と、ノブを回して押し引きするタイプの古典的なドアが設置されただけの簡素なものであったが、生活に必要な物資は揃っており、数週間程度ならば問題無く滞在できそうだった。

こんな洞窟に人が滞在できるような部屋が存在するというのには驚いたが、調査隊や王族が訪れたりしたと言う事を考えれば納得できない事ではなかった。

長命な魔族の長ならば何か有力な情報を掴んでいるかもしれない、と言うことだったが、シャンテが期待したような情報は得られなかったらしい。

この地に住む他の魔族達は人間を恐れて出てこないが、リヴァイアサンはおおらかな気質の持ち主であり、ディガンマ事件の調査への協力を快く引き受けてくれた。

肝心の調査は明朝から行う事になっている。と言っても、日の光が届かない海底洞窟の中では時間の感覚が狂ってしまい、朝だの夜だのと言われてもあまりピンと来ないのだが。

壁に掛けられた時計を見ると、午後六時だった。早めに休んでおかなければ、この広い大洞窟を歩き回るのは辛くなってしまうが、区画間移動の時差のせいかな昨日ぐっすり眠ったからか、エルナはあまり眠くならなかった。

「うー、デカかったなー」

溜まった疲労を詰め込んで吐き出すように深く息をつきながら、グライヴがベッドに身を投げた。ぼふん、と柔らかい音がした。

彼はマントと剣をすでに外していて、紺色の厚手のシャツと長ズボンという軽装になっていた。鎧や胸当ては動きを妨げるため、身につけない主義らしい。

「うん、すごい迫力だったね。あんなの初めてだったよ」

エルナも大剣を壁に立てかけて、隣のベッドに腰掛けた。リヴァイアサンの大蛇としての姿は、対峙するだけで心臓が押し潰されてしまうかと思うほどに巨大で、偉大で、迫力があつた。

それが、人の姿になってみれば単純に茶目っ気のある女性にしか見えなかったのだから驚きだ。

「なあ、エルナって言ったっけ？」

「あ、うん……」

自己紹介の際にさらりとエルナという呼び名をバラされてしまったため、グライヴやソアにもそう呼ばれるようになってしまった。確かに、本名よりは呼びやすいと思うし、そのおかげで気さくに接して貰えるのは嬉しいのだが、エルナにとってはなんとなく複雑な気持ちだった。

そんなエルナの胸中を知るはずもないグライヴは、容赦なく「お前って女の子っぽいよな」とか言ってくる。齒に衣着せぬ言い方で、ここまでストレートに言われるといっそ清々しい気分になえる。

「お前、ギルドのケンシューサーだっけ？　どうしてそれになろうと思ったんだ？」

「あ、それはね」

学園ではリックを始め数人の友人がいたが、ドレッドノートに配属されてから周囲に同年代・同性の人物が存在しなかったと言う事もあって、エルナもグライヴを相手にすると話し易かった。

ノクスと話す時は何となくあの優雅な雰囲気に含まれてしまいそうになるし、天は終始マイペースで、今も既に一人寝息を立てている。

ギルドに研修生として入った目的。元々は、研修期間が終わったら再び学園に戻って勉強して、再び次の研修を待つつもりだった。ドレッドノートは外の区画へ出られないギルドだったから、エルナの目標である、LEONARDという人物を捜すには適していなかったのだ。

広大な宇宙から、名前だけを頼りに一人の人物を捜す。途方も無い目標であり、本当に見つけられるかどうか分からない。

「自分でも、気の長い話だとは思うけどね」

エルナはそう言つて苦笑したが、グライヴは真剣に聞いてくれた。「レナード、か。剣を託してくれたくらいだから武人なんだろうけど、王宮騎士団にそういう名前の人がいるって話は聞かないし、俺が知ってる範囲にはいないなあ。でも、いつか見つかるの良いな。頑張れよ、応援してるぜ」

「うん、ありがとう」

自分の事は一通り話し終えたので、次はグライヴの話が聞きたい。そう思ったエルナは、まずグライヴが騎士になろうと思った理由から聞いてみる事にした。

これまでエルナが関わってきた騎士は連邦騎士団という、ちょっぴりおっかない連中だけだったので、それ以外の騎士がどんなものが純粹に気になった、というのものもある。

「あー……笑わないでくれよ？」

気恥しそうにはにかんで、グライヴは過去を話し始めた。

「俺さ、幼馴染がいるんだ。あいつが父親みたいな強い騎士になるって言つて頑張つてて、それで、なんか俺も負けてられないなと思つてさ。始まりはたぶん、その時だったと思う」

エルナにとつて、幼馴染と聞いて真つ先に思い浮かぶのはミーティアである。彼女も騎士を志すくらいに真面目だったらしいのに、と思いつながら、グライヴの続きに耳を傾ける。

「あいつが騎士見習いになりたての頃に腕試しのつもりでさ、あいつと一対一の模擬戦したんだよ。相手に一撃入れたら勝ちってルールで。そしたらもうコテンパンにやられちゃって……。相手は女だぜ？　それが悔しくて、じゃあ俺も真面目に騎士目指してやるつて、そう思つたんだ」

「なんかそついうの、いいなあ。お互い切磋琢磨してるつていうか、憧れちゃうよ」

「よせよ、俺が意地張ってるだけなんだって」

エルナの率直な感想に対して、グライヴは照れ隠しのように笑った。笑ってから、すぐに表情を曇らせた。

何かマズい事を言ってしまっただろうか。そう不安になっていると、グライヴのほうからその理由を説明してくれた。

「あいつ、三年前の調査隊事件に巻き込まれたんだ」

エルナは言葉を詰まらせた。三年前の調査隊事件は、調査隊がほぼ全滅。王女が重傷を負ったという痛ましい出来事だ。

デイガンマに遭遇したとされていて、グライヴが今回の任務に自ら名乗りを挙げたのはそういった理由もあると言う事だった。

「じゃあ、その子は、もう……」

「いや、生きてるよ。王女様と、あいつだけが生き残ったんだ」
彼は己の無力さを呪うように、拳を強く握りしめていた。

「一緒だった親父さんも死んで、そのショックからか、あいつは記憶を失った。今でこそ元気にしてるけど、それでも、俺は」

最後の方は小声で聞き取れなかった。グライヴはベッドから立ち上がった。

ベッドの脇にたてかけた剣を取り、壁にかけたマントを羽織る。

「つまらない話しちまったな。ちよつと散歩してくる。すぐに戻るよ」

エルナはその背中に向かって、声をかける事ができなかった。

「それでエルナったらね、ひゃあって言いながら飛び上がったちゃって」

「あはは、グライヴにもそのくらいの可愛げがあれば良かったのに」
女部屋では、ミーティアとソアが隣同士のベッドに座って会話をしていた。

シャンテとマヤはリヴァイアサンと話するために外に出ている。広

い部屋に二人だけという開放感もあつてか、二人の会話は弾んだ。

一通り口をついて出てくる話題を話し終えて、ソアが躊躇いがちに口を開いた。

「その、ミーティアのお父さんって、どんな人？」

「えっと……なんで？」

触れてほしくない話題だったので、ミーティアは表情を曇らせた。
「さつき、シャルフランテ様と話してる時、『父親はいつも勝手だ』
みたいに言ってたから」

ソアが慌てて「嫌な事だったらごめん。今の質問は忘れて」と言うものだから、ミーティアは小さくため息をついて、ベッドに寝転んだ。

「うちのお父さんは、ちょっと過保護すぎるんだよ」

一つ話し始めると、あとは雪崩のようだった。ギルドからの召集命令があつたにも関わらず、令状を突き付けられるまで娘を軟禁状態にしていた事から遡って、それより前の——特に、エルネストが死んでからの——話を思いつく端から話した。

話すにつれて、話し始めに感じていた怒りが徐々に冷めていくのがわかって、語気も弱くなっていた。

「なんか、言ってる事ヘンだね、私」

ソアは優しく微笑んで首を横に振った。

「ミーティアは、お父さんの優しさをちゃんとわかってたってことだよ」

触れてほしくない領域に踏み込んでくるといふのは見方によっては無遠慮とも取れるが、そのおかげで初めて客観的に、冷静に人の気持ちを考える事ができた。

例えば、これはシャンテの父——つまり、第三区画の王——の話聞いた事から始まった。それまでは父親というものの話を聞く事が無かつたし、自分からあえてその話題を振る事も無かつたのだ。

ミーティアに根付いていた、父親は常に娘を心配する物だという認識が、王自ら大海洞へ赴くのではなく娘であるシャンテを向かわ

せるといふ身勝手な――実際には相応の事情がある――態度を通して表層化した。

父が令状を突き付けられるまで家から出してくれなかったのは、自分を思つての事だとわかつてはいたのだ。ただ、それに反発する気持ちが強くて、相手の心がよく見えていなかったただけであつて、本当は、心の底では氣付いていた。

「ソアのお父さんは、どういう人なの？」

ミーティアがこれまで見てきた世界は狭かつた。自分の視点で見てきた世界が全てだと思つて物事を考えると、全く理解できない事柄ばかりだつた。王が大海洞へ来られない事情もそうだつたし、父の優しさも別の視点から見てくれるソアがいた事で、初めて氣付いた。

自分の視点が絶対に正しいとは限らない。ステイグマの暴走の時に、未来を諦めていた自分を励ましてくれたエルナも、知られたくない秘密を黙つて受け入れ、共有してくれた千香も、それぞれが違ふ視点を持っていた。

いろんな事情があつて、いろんな視点があつて、いろんな正義がある。ソアはどういう視点を持っているんだろう。自分と同じように、父親に関して何かしらの事情があるのだろうか。

ソアは少し寂しそうにうつむきながら、口を開いた。

「私、お父さんのこと、覚えてないんだ」

「そうなんだ」

ミーティアはたいして不憫だとは思わなかつた。ミーティアも元々は孤児で、十年前に今の父親に引き取られたからだ。

不憫だと思ふよりも、興味が湧いた。実の父を覚えていないという点ではミーティアも同じだし、だとすると、どこで父親に対する認識の違いが生まれたのか、氣になつた。

「すごく強い人で、私もお父さんにあこがれて騎士を目指してた……らしいんだけど」

ミーティアの頭に疑問符が浮かんた。物心つく前に離別した父の

事を覚えていないならわかるが、自分があこがれて騎士を目指していた、という事すらあいまいだと言うのだ。

「お父さんが死んじゃったのがよっぽどショックだったのか、それ以前の記憶が全部消し飛んじゃってるんだよね。あこがれてたのに忘れちゃうなんて、薄情な娘」

ソアは苦笑しながら、自重気味に言った。

ミーティアにはよくわからなかった。記憶を失った経験なんて無いし、実際に死別した事を覚えているのどちらが悲しいかもわからないからだ。

「ミーティアって不思議だね。正直って言うか、考えてる事がわかりやすいっていうか……。素直に反応してくれるから、何でも話せちやいそう」

「うーん、不思議って言われたのはこれで二回目だけど、そんなにわかりやすい？」

心を開いてくれるのは嬉しいけれど、自分の単純さに自覚は無かった。

なんだか照れくさくなって、視線を時計のほうへ移す。既に二時間以上話し込んでいたらしい。

すぐにドアをノックする音が鳴った。わざわざノックしてくると言う事は、男性陣の誰かだろうか。

ミーティアがドアを開けると、そこにいたのはエルナだった。

青い草原。膝丈まである背の高い青い草が大海洞を循環する湿った風に揺られてこすれる。

刃の先端がかすただけの左腕に、赤い筋が走る。歯を食いしばり、痛みをこらえて彼は剣を握った。

白いマントは切り裂かれ、額から冷たい嫌な汗が頬を伝って流れ落ちた。

動悸がした。心臓が耳元で鼓動しているかのような、極限にも近い緊張が神経を蝕んでいく。

だが、立ち止まっているわけにはいかない。目の前にいるのは、幼馴染の父親を殺し、記憶を奪い去った悪魔。二足で立ち、左右の手に刃の細い曲刀を一本ずつ握り、首から上には何もない、人に似て人でない怪物。

それに向けて疾駆し、力を込めて斬撃を放つ。袈裟がけに振り下ろす一撃が左の刃に弾かれ、逆の手から心臓を狙った突きが放たれる。とつさに横へ跳躍し、草をクッションにしながら受け身、地面を蹴って距離を取る。

一度斬り結ぶだけで、残っていた体力がほとんど持っていられるようだった。太刀筋が徐々に読まれてきている。このまま消耗戦が続けば、敗北も時間の問題だ。

だが、それでも、こいつを野放しにしてはおけない。

グライヴはトドメの一撃を放つつもりで、青眼に構えて駆け出す……はずだった。

対峙していた怪物がグライヴとは全く別の方向に向かって剣を振り上げ、身動きの取れない状態の少女に向かって振り下ろさんとしている。

刃が肉を裂き、短い呻きの後に水音がして、青い草原がそこだけ赤く染まった。

誰かの悲鳴が、大海洞に響き渡った。

ミーティアの悲鳴を聞きつけて、大海洞の青い草原に駆け付けたエルナが見た物は、惨劇だった。

草の上に仰向けに倒れた赤い髪の少年は、まるで眠っているように動かなかった。全身にいくつも刀傷があり、肩から腰にかけて、袈裟がけに斬られた大きな傷があった。

彼の周りだけ青い草原が赤く染まっただけで、その傍らに身動き一つ取れずに放心しているソアが座り込んでいた。

「あーあ、持ち場を勝手に離れて怪我してたんじゃない、同情もできませんね」

凍りつくような世界で第一声を発したのは、マヤだった。驚くほど冷徹な声で、目の前に人がいるというのに辺りの様子を写真に収めている。

その様子にミーティアが激昂して掴みかかるようにするが、エルナはそれを手で制した。

「とにかく、彼を治療できる場所まで運ぼう」

人命がかかっている。その事実を冷静に認識できたのは、代わりにミーティアが取り乱してくれたからかもしれない。

シャンテの指示に従い、エルナがグライヴを背負ってリヴァイアサンの下へたどり着くと、シャンテはその場にいる全員に離れていくように言って、グライヴを寝かせた周りの地面を細い指でなぞった。

「レヴィ、すまない。触媒を使わせてもらう」

「仕方が無いな」

リヴァイアサンから小瓶を受け取り、その中に入っている水を少しずつ、指で描いた魔法陣の上へと垂らしていく。

治癒魔術の効き目は驚くほど早く表れた。本来ならば一晩はかかるはずが、グライヴの傷は見る見るうちにふさがっていった。

「まったく、何事だ？」

今の今まで寝ていたのか、天が起き出してきた。ちょうど良いからとグライヴをベッドに寝かせるのを手伝わされて、その後で天にも事情の説明があった。

グライヴが散歩に行くと偽って行方をくらまし、グライヴの帰りが遅いのを心配したエルナがミーティアやソアに相談して、グライヴを搜索。ソアがグライヴを見つけた時、彼は何者かと交戦していて、突如狙われたソアをかばってグライヴが負傷した、という事で

ある。

話を聞いて、天は忌々しげにため息をついた。

「研修生の監督、なつてないんじゃないですかー？」

マヤの嫌味に、天は何も言い返さなかった。シャンテ自身の許可があつたとは言え、一人でずつと眠っていたのだ。エルナやミーティアが持ち場を離れた事への監督不行き届きを咎められても仕方が無いと言う事なのかもしれない。

遠回しに自分が非難されているようで、エルナは悔しかった。ミィティアもたぶん、同じ気持ちだっただろう。口をきゅつと結んで怒りに耐えているようだった。

「グライヴ！ 気が付いたの？」

目を開けたグライヴを見て、ソアが安堵の表情を浮かべる。

しかし、次のグライヴの言葉を聞いて、彼女は信じられないものを見るような目になった。

「……誰だ？」

グライヴ・イルアンは記憶を失った。

治癒魔術の副作用としてこのような症状は前例が無く、激痛のショックで失ったものだとなれば治癒魔術の効果の適用と同時に回復するはずだった。

つまり、彼は何らかの魔術的攻撃を受けた可能性がある。

天による説明はそれだけの簡単なものだった。その正体について考え得る可能性はいくつかあるが、結局のところ術者を見つけ出さない事には対処できないものだと言う事がわかった。

「おおい、だした」

ポツリと、つぶやくように言ったソアの言葉に、その場にいた全員が意識を傾けた。

彼女が失っていた記憶が、あの青い草原を目の当たりにする事で

蘇ったのだと言う。

「グライヴを傷つけたのも、お父さんを殺した奴と同じ、両手に剣を持ってて、首から上がなかった」

ディガンマの唯一の目撃証言が、この場で得られた事は大きい。調査隊を壊滅させ、第二王女を傷つけた犯人がようやく判明したのだ。

「ソア、大丈夫？」

「うん。私は大丈夫。早く、そいつを倒しに行こう」

ソアの目は強くまっすぐだった。決意を秘めていて、先ほどのように記憶が戻ったショックで動けなくなるという事は無さそうだ。

ミーティアが頷き、エルナもそれに同意した。だが、リヴァイアサンがそれを止めた。

「待て。魔族の中にそのような者はいない。人間がそれを持ち込んだ可能性が高い。これ以上、この大海洞で妙な真似をされては困る」

先ほどのマヤと同じ、冷徹な言い方だった。

「そんな！ だって、さっきすぐ近くに事件の犯人が」

「黙ってる」

天に短く言い切られて、ミーティアは泣きそうな顔になって後ろを向いてしまった。

「大方、私を人質に置いていけ、とでも言うのだろうか？」

「シャンテは物わかりが良くて助かる」

おおらかな性格をしているとは言え、リヴァイアサンもこの大海洞に住む魔族達の長である。建前上、緊急時に人間に対して譲歩しすぎる姿勢は取れないのだろう。

王女であるシャンテが人質としてリヴァイアサンの下に残るという条件で、エルナ達の大海洞内での自由な移動を認めてくれた。

そして、リヴァイアサンからエルナ達に振り向いたシャンテは、王女として、ドレッドノートの依頼人として一つの命令を出した。

「ソア・ステインソール及びギルド『ドレッドノート』の精鋭達よ、どうか、第三区画の民を脅かす悪魔を討伐してほしい」

ソアは敬礼を以って、エルナやミーティアも一つ頷いて答えた。
「戦闘に関する指揮は白柳 天に任せる。討伐が不可能だと判断した場合、ただちに帰還せよ」

「了解した」

エルナ、ミーティア、天、ソアの四人は勇んで大洞窟を歩き始めた。まずは先ほどグライヴが負傷した青い草原を目指す必要がある道中で、戦闘指揮を執る天から作戦の指示があった。

曰く、ディガンマと思しき相手はかなり消耗している。マヤが撮った写真の中にも、彼の武器であった剣が存在しなかったのだ。

また、グライヴ以外のものと考えられる血痕が青い草原の奥に向かっていくつも点在しており、そこから相手は消耗した体力を回復すべく退却したものと推測されるということだった。

マヤが写真を撮っていたのは、現場の状況を正しく把握するためだったのである。けが人のいる前で不謹慎だと思っていたが、しっかりとした目的を持った行為だったのだ。

今回、討伐作戦に参加するメンバーは四人。うち、前衛がエルナとソアの二人、後衛がミーティアと天の二人だ。

まず、天はソアが魔術を使えるかどうか確認した。作戦の幅がどれほどかを見極めるためだろう。答えはNOだった。

ソアは記憶を失った時に魔術を使えなくなっている。それも、ディガンマによる何かしらの魔術的攻撃が原因だろうと天は推測した。その上で、前衛二人に対しては狙われた方は防御に徹し、そうでない方は積極的に手足を狙う事を指示した。移動手段や攻撃手段を封じる事で、戦いは格段に有利になる。

また、ミーティアに対しては奴の視界から反れるように動く事を指示した。近接戦闘が得意でないミーティアにとっては、剣を持った相手の視界にとらえられる事は命に関わる。

青い草原の前でソアが決意を新たにするように一つ深く呼吸して、大槌を構えた。どこに潜伏しているかもわからない相手を警戒しながら、一歩ずつ慎重に進んでいく。

そいつはすぐに訪れた。金属の激突する甲高い悲鳴が鳴り響き、瞬間、刃を受け止めたエルナ以外の三人が音の発生源から距離を取る。

刃の太いエルナの大剣は、攻撃を防ぐ盾としても優秀だった。が、それ以上に、相手の動きが鈍っており、片腕が全く動いていないというのも四人にとつて有利に働いた。

二本の足で立ち、二本の腕を持つ人のようで人でない怪物。本来頭部があるべき首から上には何も存在せず、赤黒い肉体は時折脈打って左肩の傷口から同色の液体を零した。

ディガンマの左肩には鋭い剣が突き刺さっている。グライヴが持っていたものだ。

「はああッ！」

繊維を無理やり引きちぎるような嫌な音がして、ディガンマの右腕がその場に落ちた。背後から飛びかかったソアの大槌がディガンマの右肩を潰したのだ。

勝負はもうついたも同然だった。両腕を扱えない怪物は足だけでなんとかその場から逃げ出そうとし、しかしミーティアが振り抜いた杖に足を取られて転倒、全く身動きの取れない状態になってしまった。

「早くそいつにトドメを刺せ！」

怒号にも近い天の叫び。完全に有利な状況なのに、妙に切迫した声だった。

ソアが打ち下ろした大槌がディガンマの心臓部を再起不能なまでに潰し、そいつの正体に誰もが驚いた。

「機械……？」

落ちていた右腕の肉は、よく見ると生き物のそれではなく、肉に似たゼリー状の何かだった。

潰した心臓部からは灰色の部品がいくつもばらまかれた。大槌に潰されて原型はとどめていないが、おそらく元々はネジだったであろう部分やLP内部に見られる駆動部のような個所もあった。

その正体の意外さにしばらくエルナは動けずにいた。ディガンマは何者かによって作られた機械人形だったのだ。

「グライヴ……」

トドメを刺したソアの口から洩れる小さな言葉が、エルナを我に返らせた。

「そうだ。グライヴの記憶はどうなったんだろう」

何らかの魔術的攻撃を受けたために記憶が無くなってしまっていたグライヴだが、後先考えずにディガンマを粉々に粉碎してしまつて大丈夫だったのだろうか。

エルナの心配は杞憂だった事が、天によって知らされた。

「あれが記憶を奪つたわけじゃない。記憶を抑え込んでただけだ」
機械人形の残骸に近づいて、天はそれらの細かい破片を観察し始めた。

あまりにあつけなかったが、ひとまずディガンマは倒された。その残骸を分析する天を置いて、他の三人はシャンテの下へ報告に戻った。

ディガンマという脅威が一つ取り除かれた事で、シャンテはリヴアイアサンから解放された。グライヴの記憶も無事、元通りになった。

王宮では大臣が大海洞から戻った面々を労い、宴の準備を申し出てくれたが、シャンテはそれを取り下げた。

グライヴとソアが命令から外れた行動を取った事で、彼らに処罰を与えなければならなかったからだ。事件が完全に解決するまでの謹慎。その後、シャンテ直々に特別な任務で汚名返上の機会を与えられるのと言う。

軍の命令違反に対する処罰としては軽すぎるが、これはシャンテのおおらかな性格によるものだろう。

一方で、エルナとミーティアも依頼者^{クライアント}の意向を無視したと言う事で、玲菜からしばらく謹慎を命じられていた。謹慎とは言っても、ドレッドノートの艦の中は自由に行き来できるため、特別に不自由する事は無いのだが。

任務から一夜が明け、エルナとミーティアはドレッドノートのクレレの部屋に戻って来ていた。

クレレはこの任務の前から体調を崩していて、見かねた玲菜が部屋で休ませていたのだという。

「そう、ダイカイドーってすごい綺麗だったんだよ！　一面青い寶石で埋め尽くされてるんじゃないかっていうくらい」

クレレはもうだいたい回復したらしく、ミーティアの土産話に聞き入っていた。

ミーティアも任務で自分が活躍したからか、その事が話したくて仕方が無い様子だった。

「謹慎中って事、完全に忘れてますね……」

土産話を聞きに来た千香にさえこう言われてしまうほど嬉しそうに話している。

確かに今回の任務は、途中仲間が負傷したりはしたものの、結果として特に損害無く終える事ができた。後味が悪くなる要素が欠片も無かったのだ。

「まあ、機械人形が剣を振りまわしても高が知れてるって事なんだろうね」

四人がかりで倒したのに、ミーティアはとても得意げだ。

「二刀流の首なし機械人形、ですか……」

剣士として単純に興味があるのか、千香は何か考え込んでいる様子だった。

「ダイカイドーは綺麗だったなあ！　事件解決まではドレッドノートにも立ち入りを許可してくれたし、もう一度見に行きたいんだけどなあ……」

ミーティアは肩を落とした。一応、自分が謹慎処分中であるとい

う自覚はあるらしい。

事件が解決するまでの間、王宮騎士団やドレッドノートのメンバーに対して大海洞の入り口が解放される事になった。それを、ただ見物のために出入りするというのは不謹慎な気もするが、でも確かに、ミーティアが言う通り、大海洞は綺麗な場所だった。

事件は完全には解決していない。エルナ達によってディガンマは破壊されたが、肝心のそれを放った犯人が明かされていない。

もっとも、その捜査自体はドレッドノートが積極的に関わる方針ではなく、エルナ達にとってはしばらく退屈な——言いかえれば、平和な——時間が戻ってくるという事になる。

千香が立ち上がった。外の空気を吸ってくるらしい。

「わたしの分まで吸ってきてえー」

相変わらず、ミーティアはわけのわからない事を口走っていた。

道着の身頃を整え直して、腰帯を締める。すこしキツいくらいが、気も引き締まる。

結った髪が乱れていないか、軽く撫でて確認してから、千香は兄の部屋のドアを開けた。

胸騒ぎがする。考えたくない可能性が頭の中を巡った。

部屋は整然としていた。整然としすぎていた。魔導工学の専門書とよくわからない機器、そして工具で埋め尽くされた部屋では無くなっていた。

専門書は綺麗に棚に並べられ、機器は自動掃除機と作業手伝いロボット以外すべてどこかへ消えていた。工具も、いくつかの工具箱に分けてしまっておりある。

生活の痕跡が見当たらないほどに、白柳 天の部屋は片付きすぎている。

千香の脳裏をかすめるのはミーティアに聞いた機械人形の話。首

が無く、二本の剣を持った、機械仕掛けの怪物。

『まあ、機械人形が剣を振りまわしても高が知れてるって事なんだろうね』

家の方針に反発して剣の稽古をしようとしなかった天を叱った祖父の言葉が、重なる。

機械に剣が扱えるものか。あの時の天の目はまっすぐに祖父を見返して、彼に迷いの欠片すらも無かった事を物語っていた。その目は、本当にまっすぐだった。まっすぐすぎて狂っていた。

魔導工学というものに絶対性すら見出していた天は、あの日、何らかの原因で魔力を失った。

今でこそ錬金系の術式を中心に精巧な魔術を行使できるが、威力のある破壊系や四元系を扱う事はできないでいる。

それは魔術師としては致命的な欠陥であり、故に彼は剣術を捨て去る事ができなかったのだ。

天が誰にも剣を振るっているところを見せようとしなかったのは、自らを束縛し続ける剣に対する底知れぬ感情のせいだ。

そんな彼が、剣を捨てる術を見つけたのだとしたら。剣という呪縛から解き放たれる術を見つけたのだとしたら。剣客機械人形ディガンマの完成を求めているとしたら。

三区王宮は間違いなく、今回の事件の犯人を確保した上で、危険なディガンマの設計情報を抹消するだろう。天がその情報を求めているとするならば、王宮と真っ向から対立する事になる。それだけでは済まないかもしれない。

千香はその場から駆け出した。ドレッドノートを飛び出して、大海洞へと向かった。

道のりは停泊場所からそう遠くなく、海辺の洞窟に大海洞内部へ通じる転移陣がある事もミーティアから聞いている。

薄暗い洞窟に淡く青白く輝く転移陣に、一步。草履で踏み入れる。瞬時に景色が色を変え、青空に星をちりばめたようなまばゆい世界が広がった。

だが、今の千香に、それに見とれている余裕はない。入り組んだ迷宮のような道を片っ端から走り回って、兄の姿を捜す。

ここに天が来ているかどうかはわからない。が、来ている可能性は十分に考えられる。つぶれてしまったディガンマの残骸を調べるよりも、それを作った犯人を捜すほうが手っ取り早いからだ。

大海洞の奥、膝丈ほどの青い草が生い茂る草原にたどり着いた時、千香は心臓が止まるかと思った。

はらわたを切り裂かれ、無残な死体となった大臣を見下ろす作業着姿の青年がいたからだ。

寒気のような冷たい目で振り返って、白柳 天はこう言った。「ディガンマを追うのはやめろ」

草原の草を鳴らす湿った風が、兄妹の間を隔てた。

18：交わる事のない線

「なにを、してるんですか」

青い草原の中に立つ青年に問いかけても、答えは返ってこなかった。

感情が死んだような冷徹な眼差しを向けてくるだけだ。

彼は右手でいつも使っている杖型のLPを担いで、左手を腰に提げた刀の柄にかけていた。

放たれるのは無言の威圧。ここから立ち去らなければ、間違いなく戦いになるだろう。

「力ずくで止めるってことですか……！」

千香の心に、ふつふつと怒りが湧いてきた。大臣を殺し、三区王宮を敵に回すという行為はドレッドノートに対する裏切りである。

それを兄である天が行ったという事実は千香にとって衝撃的なものだったが、同時に憤慨させられるものでもあった。

天は以前から興味の対象外の事に関しては無頓着だった。彼が身勝手な振る舞いをしても許されてきたのは、身勝手の程度をわきまえているからでもあり、与えられた仕事はしっかりこなしてきたからだ。

だが、今は己の欲望を満たすために一人で暴走している。これは赦しがたい事だった。

全ての時間を剣に捧げてきた千香がうらやむだけの素質、実力を持っておきながら。魔導工学に関しても卓越した知識と技術を誇っておきながら。どうしてこの男は、それを自分勝手な空想を実現するために使おうとするのか。

目標だったのに。超えたい背中だったのに。ずっと、追いかけてきたのに。

強く在り続けてくれるという信頼を、常に一步先で涼しい顔をしていてくれるという期待を、くだらない機械人形のために裏切って、

幻滅させるのか。

鞘から刃を抜き放って、青眼に構える。天も同じように抜刀し、しかし右手には杖を持ったまま、左手で剣を構えた。

本気の戦いになる。これは稽古ではない。剣だけの戦いではない。

最初の剣戟。斬り結んだ刃を押してつばぜり合いへ。右手に握った別の武器も密接すれば無力化できる。だが、それは読まれていた。力を横へ受け流され、頭部を狙った杖による殴打が放たれる。それを鞘で弾いて、千香は一度転がって距離を取った。

立ち上がり際に切っ先を左へ向け、横一文字に構える。追撃は草原の大地から生える異質な鋼の刃だった。

天の足元、杖でなぞられた場所から銀の輝きが奔り、錬金系の術式によって構成された鋼の剣が飛び出す。

まっすぐに千香を狙って飛来するそれを素早く下段払いで弾き飛ばし、深い踏み込みから返す刃で左斜め上へ一閃。金属の激突が甲高い音を奏で、杖が宙を舞った。

呼吸を研ぎ澄ませた渾身の一撃は片手で受け切れるものではなく、杖を手放した天は地を蹴って後退する。千香も同じように距離を取り、遠間へ。二人から遠く離れた場所に杖が落下して突き刺さった。これで、現実的に使用に耐えうる魔術は封じたとっても良い。だが、天が諦める気配は無かった。左に持っていた剣を右に持ちかえ、鞘に納めて低い姿勢で構える。

千香も納刀し、柄に右手をかけた。抜刀術の構え。先の先の読み合いを制した方が勝つ、極限の緊張状態。

神経を張り巡らせ、一筋の光の線を手繰り寄せるように、深い呼吸を大気に溶かす。

風が止み、風の状態となっても二人の距離は分かたれたまま。真剣を用いない稽古試合では到底経験し得ない、高揚感さえもたらず程の切迫が、次の一陣の風と同時に臨界を迎える。

刹那。交わる事のない一对の光の線が奔り、剣を振り抜いた二人

は互いに背を向ける格好になった。

膝について、両手を地面についたのは千香。

何も考える事ができなかった。全身が震えて、目の前の青い草原の光景が歪んで見えた。

背後から鈍い音がした。

「ああ、クソ……」

氣息奄々の呼吸の合間に、せき込みながら絞り出す声は弱々しい。振り返ることが恐ろしかった。けれど、千香はそうせざるを得なかった。

剣を握った手に確かに感じた手ごたえが、嘘であって欲しいと思っていたから。

いつものように悠然と、涼しげな顔で立っていてくれる事を期待していたから。

現実は無情で、冷たい。

大の字に倒れた青年の、腰から胸を通り過ぎて肩にかけて、逆袈裟に走る赤く深い傷。今にも消えてしまいそうな浅い呼吸と、力の抜けた手から転がり落ちる剣が戦いの終わりを告げた。

立ち上がり、血振りを終えてゆっくり納刀する。今まで何も考えずに行ってきたその動作を、こんな状況でも冷静に行えてしまえる自分が恐ろしかった。

ふらふらと——自分が歩いている感覚さえわからなかったけれど——近づいて、顔を覗く。血の気が引いて、目もまともに開けていられない状態の痛々しい姿が、千香の心を抉った。

「俺の剣はナマクラだ」

己の無力を呪うように。天は齒を食いしばって拳を握った。

「迷いの一つも、斬れやしねえ」

意識をつなぎとめる最後の糸が切れたかのように、天の体から力が抜けた。

草原を撫でる湿った風が、千香の目尻から零れる透明なものをさらっていった。

昼間だというのに、大海洞の近辺には誰もいなかった。

血塗れの天を背負ってドレッドノートにたどり着くまで、千香は誰にも会わなかった。

大事なものが全て抜け落ちてしまったかのように、兄の体は軽かった。

艦に戻るとエルナが出迎えてくれた。千香とその背中であぐらしたりしている天を見て驚いていたが、艦長を呼んでくるように頼むと慌ててブリッジのほうへ走っていった。

医務室のベッドに天を寝かせる。彼の来ていた青い作業着はすでにかかなりの面積が赤黒く染め上げられ、それとは対照的に肌が蒼ざめていた。

エルナに呼ばれて駆け付けた玲菜によって、治癒魔術が行使される。今回の任務の報酬として手に入れていた、治癒魔術の能力を飛躍的に向上させる大海洞の聖水を使用したため、彼の傷は驚くべき速さでふさがった。

「何があつたか、教えてくれる？」

一通り可能な治療が終了した後、玲菜は千香の方に振り向いて聞いた。

「私が、斬りました」

頭の中を巡るその事実だけを、言葉にした。それ以上の説明はできなかった。

玲菜は小さく息をついて、しばらく部屋で休むように言ってくれた。

きつと、自分は今、さぞ余裕のない表情をしているのだろう。千香は玲菜の心遣いに甘えて、部屋に戻る事にした。

帯から鞘ごと刀を抜いて、ベッドの脇に置いた刀掛けに託す。

何も考えられなかった。血に濡れた背中が冷たくなった。同じく

くりの予備の衣に着替えても、寒気は消えなかった。

紺の道着に血痕は目立たないが、そのままにしておくわけにもいかない。脱いだそれを洗濯用のカゴに放り込んでしまうと、もう何もする事が無くなった。

普段なら、刀を持って訓練室へ向かうのだが、今、千香は剣を握りたくなかった。

いまだ手に残る、人の肉を斬るおぞましい感覚。これまでも、魔獣やならず者を斬り捨てた事はあった。今回の手ごたえも、それと同じ。

同じだからこそ、恐ろしかった。刃の前には善悪も貴賤も無く、切っ先が描いた線にとっては全てが等しく剣の錆びとなる。

ベッドに座って、剣を見る。今握ってしまえば、何か別の物を斬ってしまえば、この手の感覚が消えてしまう。新しい手ごたえに上書きされて、忘れてしまう。

ずっと目標にしてきた、超えたいと思っていた相手だったのに。この戦いで超えたはずなのに、得られた感情は求めていたものと、違う。

「千香さん？ もしもーし」

すぐ傍から声を掛けられて、千香ははっとした。ノックの音にも、部屋に入ってきたミーティアの気配にも気付いていなかったらしい。

「大丈夫？ 顔色悪いけど……」

「私は、平気です」

目を合わせる自信はなかった。うつむいていると、ミーティアは無遠慮に千香の横に座った。

「でも、千香さん泣いてる」

言われて、初めて頬を伝う熱いものに気が付いた。

気が付いたら止まらなかった。今、自分は後悔している。悲しんでいる。それに気付いた時、溢れる涙はもう止めようがなかった。

背中に手が回されて、暖かい感覚に包まれる。

「つらかったね」

抱き寄せられ、降ってきた言葉の意味を理解して、千香は声を上げて泣いた。

「斬っちゃった……。わたし、にいさんを、きっちゃった……」

たった一人の兄、超えたいと思っていた存在、心の支えですらあった相手を刃で斬り裂いた事に対する後悔。その感情の激流が声と涙となつてとめどなく溢れた。

兄の裏切りを知った時の失望と怒り、戦いの最中に感じてしまった昂り、ずっと目標であつて欲しかったという身勝手な願い。渦巻くすべての感情を懺悔しても、ミーティアは黙って受け止めてくれた。

やがて激情が落ち着いて、もう大丈夫だと軽く胸を押すと、ミーティアはすぐに解放してくれた。

「また、情けないところ見せちゃいましたね」

思えば、ステイグマ事件の時もそうだった。何もできない自分の無力さを嘆く千香を、ミーティアが励ましてくれた。

「千香さんだって、私の秘密を黙って胸にしまっておいてくれたよ」
ミーティアは首を横に振ってから、「だからおあいこ」と言つて微笑んだ。

一人で抱え込んでいた先ほどまでより、心はずっと軽くなった。
一つ深く呼吸して、立ち上がる。

「艦長にも事情を説明しないと。それから……兄さんからも、話を聞かないと」

消えない不安も、それを共有してくれる相手が一人いるだけでだいぶ楽になった。

日が落ちて夜が辺りを覆う頃。医務室のベッドで眠る天を見つめながら、エルナは今回の事件について考えていた。

どうして、こんな悲劇が起きてしまったんだろう。実の兄を斬つ

たという千香の言葉は、寒気がする程に震えていた。

その後で報告を受けた天の行動も気になる。どうして彼は大海洞へ一人で向かったのか。どうして、大臣を殺さなければならなかったのか。

否、大臣を殺したかどうかはまだ確定した情報ではない。千香が目撃したのは殺す瞬間ではなく、大臣の死体を見下ろす彼だったのだから。

「夜、か」

「気が付いたんですか」

うつすらと目を開けて、呟くように言った天の言葉の中には、底知れぬ深い感情が渦巻いていた。

「面倒かけたな」

「その言葉は、千香さんにかけてあげてください」

エルナは苛立っていた。白柳 天という青年はどうも自分の事を話したがない。それはそれで構わないのだが、何も話さないまま周囲の人間に迷惑をかけるような行動をするのはやめてほしい。

ヘルテイトの事件の時は玲菜達と事前に意思の疎通が済んでいたらしいが、今回は誰も彼の行動の真意を知らない。せめて何か相談してくれば、こんな事態にはならずに済んだかもしれないのに。

「何があつたんですか」

天は口を噤んだ。エルナは質問を変えた。

「本当に、天さんが大臣を殺したんですか」

天の眉が動いた。しばらくして何かを振り払うように深くため息をついてから、ベッドに寝たままの青年は話し始めた。

「俺だよ。俺が作った魔導機械人形、ディガンマが殺したんだ」

エルナは己の耳を疑った。ディガンマは昨日、四人で破壊したばかりだからだ。

その時は、天も一緒にいた。ソアが大槌でディガンマを再起不能な状態にまで潰し、天はその後ディガンマを調べていたはずなのに。「あれはただの劣化コピーだ。別にオリジナルのディガンマがいる」

天の話は驚くべき内容だった。かつて彼が作り上げたという、自立魔導人形。それがディガンマのオリジナルだと言うのだ。

その人形は危険すぎたため、第四区画から追放された。それをどんな経緯でか知らないが、第三区画の大臣が手に入れてコピーを生成していたらしい。

大臣が本当にそのような事をしていたのかはわからないが、裏付けはある。彼は魔族との開戦を望む過激派寄りだったし、ディガンマのコピーを倒したエルナ達が帰ってきた時に宴の準備を申し出たのは、第三者——特に、ドレッドノート——が大海洞へ来る前にディガンマ・コピーの残骸を回収したかったからだと言うのだ。

大海洞周辺に見張りがおらず、大臣が一人で死んでいたのも彼が人払いを済ませたため。

では何故、天は誰にも告げずに一人で大海洞へ行っただのか。

「夜が恐ろしいと思ったことはあるか」

不意の問いにエルナが言葉を詰まらせている間に、天は続けた。かつて、魔導工学の全能性を固く信じていた少年がいた。

少年は家柄上、剣の稽古を強制される身だったが、剣は好きではなかった。

そんな物騒なもの、人間が振るう必要はない。そんな野蛮な事をするよりも、ずっと何かを作っていたい。

そう考えた少年は、魔導の力で動く機械の人形を作った。

人形は剣を振るう事ができた。少年が思い描いていたよりも、ずっと鋭い剣閃だった。

人形は魔法を使う事ができた。少年が思い描いていたよりも、ずっと強い魔力だった。

その両方を以って、少年は自慢しようとした。機械に剣が振るえるものかとバカにした祖父を見返したかった。

夜になって、人形はひとりで動き出した。

人形は少年の歪んだ願いを具現化したものだった。壊せば、また作れる。純粹で、純粹すぎて狂った願いは、取り返しのつかない結

末を呼んだ。

少年は魔力を奪われた。人形が動くためにはその動力として、多大な魔力が必要だった。

祖父は片目を奪われた。人形が示した剣の腕は、達人と称されていた少年の祖父の片目を潰す程のものだった。

少年は夜に眠る事を恐れた。

「でも、それがどうして一人で行く事につながったんですか」

「あのジジイが遅れを取ったんだ。達人でもない奴がアレに勝とうと思うなら、刺し違える覚悟が無くちゃならねえ」

何を言っているのかわからなかった。わかりたくなかった。エルナは奥歯を噛みしめた。

「それだけで、千香さんと戦ったんですか……！」

悔しかった。自分だけではなく、ドレッドノートの全員が見くびられていると思った。

握った拳が白くなるくらいに力が入って、腹の底からわき上がって来る憤りを喉元で抑える事で精一杯だった。

「少し怪我させる程度で済ませて、それからディガンマを壊すつもりだった。お前の言う通り、見くびってたんだろうな」

天は上体を起こした。傷はすっかりふさがっているが、まだ痛みが残っているのか、表情を歪めて胸を抑えた。

無理に起き上がらないように言おうとして、エルナは異変に気が付いた。突然の頭痛に、頭を抑えていると、布摺れの音がして、ベッドから天が立ちあがった。

彼を止めようと立ち上がろうとするが、頭痛が激しくなってしまう。ベッドに向かって倒れ込む形になってしまう。

少し逡巡してからサイドテーブルの上に置かれた新しい作業着を着て、天は意味深なため息をついた。

「なに、を……」

「ったく、艦長も人が好すぎだ。こういう救えねえ頑固者は縛りつけとかなきゃ、また何かやらかすんだって」

自重気味な声が聞こえる。頭痛が徐々に収まっていくが、それと同時に急激な眠気がエルナを襲った。

背中から掛け布団をかけられ、穏やかな声が降ってきた。

「じゃあな、新入り。元気でやれよ」

「天さん、ダメだ……」

去っていく足音を聞きながら、エルナの意識は闇に飲み込まれた。

「どこへ行くんですか」

医務室を出た天を待ちかまえていたのは、千香だった。どうやら、先ほど催眠術式発動の時間稼ぎのためにエルナにした話は全て聞かれていたらしい。

「ちよつと風に当たりに出てくるだけだ」

「杖と刀を持ってですか」

睨みつけてくる目は険しい。先ほどの会話を全て聞かれていたなら、当然だ。

これ以上誤魔化す事に、意味はない。天は千香をまつすぐに見返した。

「甘く見ていたんですね」

「ああ、その通りだ」

言った直後に、千香の動きが止まった。いや、止まるように仕向けた。

催眠術式を発動させるだけの時間は無かった。無ければ、作ればいい。

強引に重ねた唇から伝わるのは全身が痺れる程の甘い痛み。震えるまつ毛、驚愕に見開かれた瞳の中に光が揺れて。

時が止まったような錯覚、眩暈のする瞬間が互いの動きを全て封じ込め、脳髓を甘美な背徳という名の毒が侵食していく。

やがて、抱き寄せた体から力が抜けて、千香は倒れ込んだ。

「甘く見すぎてたんだよ。お前への想いを」

抱き止めた相手の重みと苦しそうな寝顔は、刃で受けた傷よりもずっと痛かった。

もう戻るまいと思っていた自分の部屋のベッドに寝かせて、艦を後にする。

やはり、大海洞に至るまでは誰も見当たらなかった。ディガンマを利用しようとして逆に殺されてしまった大臣だが、やはり彼の亡き骸はまだこの洞窟に放置されているらしい。

青い景色の中に入っすぐに、天は抜刀した。右手の杖に増幅回路をセットして、いつでも戦える体勢を取る。

冴える銀の刃が断ち切れなかった迷いを呼び起こす。ずっと彼女の目標でありたかった。ずっと、自分だけを見ていてほしかった。

なんて甘く、傲慢で、独りよがりな願望。相手の気持ちを考えもせずに、自分の感情だけを押し付けて、それを続けていたいだなんて。結局、その弱さが抜刀居合いでの敗北につながったのだろう。

「くだらねえ」

呟く最後の魔法。全てを捨てて大洞窟を駆ける。青い草原には大臣の亡き骸が放置されていた。

その脇に隠していた魔王石の欠片に向かって杖をかざす。奴が好むのは魔術の匂い。魔王石から力を溢れさせる事で、おびき出す。

赤黒い肉体を鼓動させながら、二本の剣を握った機械人形がその場にやってくる。ゆっくりと、確実に獲物を射程にとらえるために構えを待つつもりなどなかった。杖を地面に突き刺し、草原に大量の銀の刃を発生させる。ディガンマは避ける素振りも見せなかった。天を中心に、同心円状に次々と発生していく銀の刃は、その機械人形の周りだけ避けていた。

魔術が通用しない。

この機械人形に魔力を奪われ、LPと増幅回路に頼った術でなければ実用性が低い彼の魔術は、せいぜい小細工程度にしかない。勿論、小細工が通用するような相手ではない。

「上等だ……ッ！」

刺突の一撃が弾かれ、甲高い金属音と同時に次の一撃が飛ぶ。

天の髪が舞い、額に赤い筋が入って、しかしその隙に杖による強烈な殴打が機械人形の肩を襲う。

衝撃波が視認できる程の打撃。身体強化系の術式ならば、相手に影響を及ぼす事が無いため、ディガンマの周囲でも無効化はされない。天の腕への反動も尋常ではないが、構ってなどいられない。

転がって衝撃を緩和させようとする機械人形に更なる追い打ちをかけるべく、剣で薙ぎ払う。刃の激突から、その反動を利用して立ち上がるという無茶な芸当を成し遂げたのは、機械だからこそだろう。

しかし、そこに隙が出来る。振りかぶった杖はもう一度、今度こそ左肩を再起不能にしようと打ち下ろされる。

花が咲くように、一際大きな音がして、杖の先端に存在する駆動部が砕け散る。もう、魔術にしても何にしても使い物にはならないだろう。天はそれを投げ捨てた。

「結局、最後はこれしか残らねえのか」

ディガンマの肩も、一對のうち左側が粉々に砕け散る。激しい衝撃を与え続けた結果だろう。あとは一撃。奴の心臓部に刃を突き刺せばそれでいい。

体力も腕の筋肉も限界が近い。これが、最後の一撃になる。腰に引きつけて切っ先を前に向け、駆ける。奴の右腕が刃を振り下ろす軌道は、天にとって間違いなく致命的なものだった。それでも、避ける事は考えない。考えていたら、こいつを壊す事はできない。

時間の流れが泥の中にいるように遅い。心臓部を貫かんとする刺突と、斜めに斬りつけてくる斬撃。先に届いたのは刺突。だが、

貫けない。赤黒い躯体に突き立てた刃は、しかし強固な鎧に阻まれたかのように、それ以上奥へ突き進む事はない。ディガンマの動きは止まらない。吐き気を催す程緩やかに流れる時間の中で、突き付けられた決定的な敗北と振り下ろされる刃。

激しい衝撃によつて、天の意識は暗転した。

襟首を掴まれ、無理やり起こされる。抵抗する気力は残されていなかった。

再び訪れる激しい衝撃。今度は顔面に対して。先ほどのものよりもっと直接的で、脳がシェイクされるようだった。視界が回って、天は草原を転がった。

「少しは目が覚めたかい？」

痛みに耐えながら声の主を見上げる。紺色のダブルジャケットを着こなした長身の青年だ。腕につけたクロスボウがその形状を変えてプレスレットに戻る。周囲にディガンマの姿がないので、彼が追いつたのだらう。一度目の衝撃はどうもそういうことらしかった。二度目の衝撃は、彼の握った拳が物語っていた。見下ろしてくる冷たい視線が痛くて、天は目を反らした。

「君は恐れなき者の意味も忘れてしまったのか」

「俺が、何を恐れたつて言うんだ」

恐れるものは全て捨てたはずだった。けれど、鋭いノクスの目は天に残されたあらゆる迷いを見透かしているように揺るがない。

「恐れてばかりじゃないか。だから、自分を犠牲にして逃げる事しか考えられないんだ」

天は奥歯を噛みしめた。心の中では必死に否定したが、ついても、筋の通った理屈が出てこなかった。吐き出したい怒りは、生き長らえてしまった事で生まれたわずかな冷静さが押し込めた。

誰にも、ディガンマと戦わせたくなかった。その行動原理からして、そもそも矛盾しているのだ。ディガンマに仲間が斬り殺される事を、恐れていた。天の行動は、その恐怖から逃れるために、自分一人で突っ走っていただけに過ぎない。

「全く腹立たしいね。僕は怒ってるんだ」

ノクスのため息と強く握った拳から、やり場のない怒りが伝わってくるようだった。

これだけ身勝手な裏切り者を前にしたのだから、怒って当然だ。突き付けられる苦い痛みに耐えるように、天は目を閉じた。けれど、次のノクスの言葉ではっと目を開いた。

「君が僕らを信じてくれなかった事も。君の信頼を勝ち取れなかった僕らに対しても。彼女もきつと同じ気持ちだ」

そう言ってノクスが視線をやった方向には、天が最も守りたかった少女が立っていた。

紺の道着と袴、武術に携わる者の正装に身を包み、長い髪を首の後ろで一本に結わえた少女は、倒れたままの青年に駆け寄って、抱き起こした。

「大丈夫ですか？」

「どういう、事だよ……」

天には、信じられなかった。裏切り、傷付けた相手がどうして自分を心配しているのか。

どうしてこんなに、声を聞いただけでほっとした表情をしているのか。

全く以って、理解できなかった。偽りのない「良かった」という言葉。それをかけてもらえるだけの信用が、残っているはずはないのに。

抱き締めてくる力は強く、少し苦しい以上に暖かい感覚が伝わってきた。目頭が熱くなつて、視界が霞んだ。

「ああ、クソ……」

あれだけの事をしたのに。こんなに心配される資格などないはずなのに。

いつそ刃で貫いてくれたらどれだけ楽だったか。けれど、背中に回された手は柔らかく、優しく心を決る。

誰より守りたかった確かな温度は震えていて、天が抱え込んでいた意地や決意を簡単に粉碎してしまった。

「君の剣はナマクラなんだろう？　だつたら」

ノクスの視線の先にいたのは、天が眠らせたはずの研修生。

彼は両手に大釜を抱えていて、その横にはそれを支える王女の姿があった。

「どんな名剣よりも切れる頭で戦えばいい」

ずしりと。心に重く響く信頼の言葉。

「やれやれ、王女にこんな重い物を運ばせるとはな。相応の結果を期待しているぞ？」

「謹慎を破ってここまで来ちゃったんです。ボクにも戦わせてください」

エルナとシャンテが持つて来てくれた鍊金釜の中には、両手で握る程の太い攪拌棒といくつかの金属片。鍊金系の術式——天に残された魔導工学の可能性——を使えば、これであらゆる武器を作り出す事ができるだろう。

戦いに必要な道具はここから作ればいい。戦略を構築するためのカードは多い方がよいというノクスの判断らしかった。

「兄さん、私達の力、まだ信じられませんか？」

各々がまっすぐに見つめてくる。それぞれの瞳に輝くのは信頼と期待。おおよそ、裏切り者に対する目ではない。

「バカにしゃがって……。ここまでされて信じられない奴がいるかよ」

両目を強く閉じて、視界を妨害する透明な液体を払う。

涙が心の不純物を押し流したかのように、澄んだ気持ちだった。

後ろめたさを決る信頼の重ささえも、戦う力に変わってくれる気がした。

開いた目で全員を見渡して、全ての信頼に応えるべく、宣言する。
「後悔すんなよ。お前ら全員、巻き込んだからな」

全員が頷いた。

ディガンマを倒し、全員で生還するため。
交わる事のない線は、一つに束ねられた。

青い草原での作戦会議は情報の整理から始まった。

いつデイガンマが再来するかわからないので、エルナとノクスが見張りについた。

彼らにも話している内容は聞こえるし、必要ならば意見を述べる事もできる。

まず、デイガンマは今、自己学習した機能として最低でも二つの防御層に覆われている。これは実際に戦った天が言うのだから、間違いないだろう。

外側の層は対魔法結界。外部からの魔術による影響を最小限に抑えるものであり、従って魔術攻撃は威嚇程度の効果しか期待できず、威嚇にしても確実性が無いため頼れるものではない。ノクスが先ほど放った魔力の矢に対しても、おそらく自己学習機能で対策が施されているはずだった。

内側の層は硬化術式。魔術以外の、物理的な攻撃に対する対策だろう。天が放った渾身の刺突が完全に弾かれたというから、相当な強度を誇るものであるらしい。

また、あくまで可能性としてではないが、再生層がその内側に存在した場合、厄介な事になる。心臓部を潰さない限り、あの赤黒い肉体は何度でも再生してしまうのだ。

以上を踏まえると、強烈な武器攻撃で一撃の下に心臓部を破壊しなければならぬ、という事だった。

的確に一か所を狙える強力な攻撃が可能なのは千香だった。エルナでは狙いが反れるし、ノクスの武器では同じように狙いが反れるか、硬化術式を貫くだけの威力が期待できない。

鋼をも両断する千香の抜刀居合いが、この場合最も適した攻撃方法なのだという。

問題は、隙の大きさだった。納刀状態から狙いを定め、最大の威

力で斬撃を放つためには、どうしても無防備になる時間が発生する。かと言って誰かがディガンマを足止めするにも、振り抜く刃の範囲に巻き込まれてしまう。

対魔法結界層を無視でき、接近せずに動きを止める方法が求められた。

その方法として天はある物の使用を提唱した。

「トラバサミ？」

「ベアトラップのことさ。古典的だが、確かに動きを止めるくらいはできるだろう」

エルナにとっては聞き慣れない単語だったが、ノクスが言い直してくれたおかげですぐにわかった。円形の金属にのこぎり状の歯がついた設置型トラップだ。

踏まれる事で作動し、円形部分が半分に折れて半円上に合わさり、獲物の足を強く挟み込む古典的な狩猟用の罠である。古典的だが威力に関しては申し分なく、硬化術式を貫いて苦痛を与える事は十分に可能だと言う。

その根拠は、天が拾った棒だった。元々は彼のLPであったものだが、駆動部が砕けてしまつて使い物にならなくなっている。その中身の部品を取り出して使いまわすらしい。

鍊金釜の中で形を整えてトラバサミを作っている間に、設置場所とディガンマの誘導に関する話になった。

草原の草に隠れてしまう為、トラバサミは見えにくくなる。相手を誘導する段階で味方が引つかかってしまつては意味がない。

「目印が要るのだろう？ この男を使つてやつてくれ」

そう言ったシャンテの傍らには、青い草原を赤く染める大臣の亡き骸があった。

「それが、ディガンマを利用しようとしたこの男ができる唯一の償いというものだろう」

「そう簡単に信じていいのかよ」

確かに、ディガンマを利用しようとしたのは大臣だ。だが、それ

を確認したのは天であり、本当に信頼できる情報かどうかは客観的に見て疑わしいもののはず。

「こちらでも色々あってな。とにかく、お前達を信じる材料がある。それだけわかれば今は十分だろう」

シャンテはそう言うのと、赤く染まった草の近くに小さな設置用スペースを作った。

エルナも手伝って、驚くべき速さで完成したトラバサミの設置を行う。地面は大海洞の他の場所に比べて柔らかく、罾の設置には適した場所だった。

土の下に鉤爪状の固定具をしっかりと埋め込み、準備が出来たところでそれぞれが配置につき、ノクスがその傍においた魔王石から魔力を抽出して滲ませる。

エルナは青い草原の端にある岩陰で天とシャンテの二人を護衛する役割だ。万が一デイガンマが狙いをこちらに定めてきた場合、強烈な大剣の一撃で相手を吹き飛ばす事で距離を取り、その後罾のほうへ誘導する。

千香はデイガンマがやって来るであろう方角をいち早く察知して立ち回れるよう、トラバサミの近くに立っている。

「見てるだけつてのがこんなに落ち着かないとはな」

「あなたが一人で出て行った時のボク達の気持ち、わかってくれましたか？」

「ああ、痛いほど噛みしめるとこだ」

軽いやり取りの直後、青い草原に鯉口を斬る音が響いた。ノクスが罾の脇を抜けて、後方へ下がる。それを真横の方向から見ているエルナも臨戦態勢に入った。

デイガンマと罾をはさんだ反対側へ、無駄のない足捌きで千香が瞬時に移動する。

現れた機械人形は天の想像通り、叩きつぶしたはずの左腕を再生させていた。両手に握った刃で前方の標的を斬り裂こうと距離を詰めてくる。

千香は身体強化の増幅回路を刀の柄の窪みにセットして、低く構えた。目を閉じて神経を研ぎ澄ませ、至高の一撃を放つために時を見計らう。

残り三步、二歩、一步。怪物が金属の罨を踏みつけて足を取られた瞬間、一筋の光の線が迸り、剣を振り抜いた少女は敵の後方へ抜けていた。

斬鋼の剣閃はその場にいた全員の目に焼き付いた。鮮やかで無駄の無い剣の軌跡は全くぶれることなく機械人形の心臓部を通過した。血振りを終え、刃の感覚を確かめるように指でなぞって、鞘に納める。青い草原を鳴らす湿った風が彼女の長い髪を撫でて、戦いの終わりを告げた。

一刀の下に両断された機械人形が動く事は、もう無かった。

大臣の訃報は三区王宮に大きな動揺をもたらした。

しかしながら第一王女シャルフランテは彼の死をディガンマ事件の真の解決のための名誉あるものとした上で、あらかじめ応酬しておいた彼の日誌を公開した。

三年前の調査隊事件で第二王女を傷つけた事件の張本人も彼であり、その事についての懺悔が日誌に綴られていたという。

反魔族派であった彼は国政の円滑性を求めるあまり、過激な思考に陥っていた。ディガンマのコピーを作り出したという話もあり、彼の狂気が日に日に強くなっていく様が生々しく書かれていた。

そういった事情もあって、白柳 天は表面上としては無罪という扱いになった。彼は納得していないようだったが、「仲間を裏切ったのだからこのくらいの罪は背負っていけ」というシャンテの言葉に渋々了解した。

玲菜にはドレッドノートに対する裏切りの罰として強烈なデコピーンを食らい、三区王宮からの特別任務に出向く事を命じられた。こ

れもやはり天としてははじめをつけるような罰を望んでいたのか、不服そうだった。

「揃いも揃って、罰の意味わかってんのかよ……」

終始マイペースだった彼も今回ばかりは精神的に堪えたのか、千香の隣を歩きながら深いため息をついていた。

「兄さんにとつて不服じゃないと罰になりませんかね」

「なるほど、違いねえ」

罪を犯しながら許されるというのは、ある意味では精神的な責苦だろう。

千香はずっと心の片隅に居座って離れないあの事柄についても問い詰めたかったが、しばらくこうして隣で居心地悪そうにしている横顔を眺めているのも悪くないと思った。

やがて、ドレッドノートの彼の部屋であつた場所にたどり着く。

これから先も天の部屋として扱う事になるのだが、彼が一人で暴走する際に種々の機器を処分してしまったらしく、以前からは考えられないくらいに整然としていた。

「まさかこんなにあっさり戻って来れるとは思わなかったからな…

…」

「後先考えずに処分しちゃうからですよ。どうするんですか？」

広い部屋の真ん中まで歩いて、天は一つ息をついた。

そこにもう自嘲の色は無く、恐れも無く、振り返る彼の目はどこかふっきれたようなものだった。

「また作るだけだ」

今度はもう厄介な代物を作らないでほしい。千香は心の底からそう願った。

ドレッドノートへようこそ 第二章―完―

19：王女エルナ

「どういう、ことなの……」

エルナは鏡に映った自分の姿を見て、愕然とした。

蒼穹の如き澄んだ青のドレスに身を包み、両手には無垢な白の長手袋をはめ、頭の上には純金にこれまた青い宝石のあしらわれた、コーム付きのティアラを付けている。

腰の大きなリボンも、肘まで覆う長い手袋も、所々に金の刺繍が入った煌びやかなドレスも、全てがシルクの光沢を放っており、さわり心地もきめ細かく柔らか。

背筋を伸ばして両手を行儀よく腿の上に置き、少し緊張した硬い表情で鏡の中から見つめて来る。これはいったい、誰なのだろう。

軽く化粧の乗った頬は羞恥心と諸々のむずがゆい感覚のせいか、上気して程良く赤くなっている。それが余計に鏡の中の誰かを色っぽく見せていて、嬉しいんだか悲しいんだかわからない。虚像の世界からこちらを見ている人物はあまりに可憐で、彼は一つため息をもらした。

「か、かわいい……」

いつもお気楽でふざけた調子の幼馴染も、こちらを見つめてうつとりしていた。目が本気だし、よだれでも垂らしそうである。褒められているのだろうが、素直に喜んでしまっではいけないような気がした。

とにかく、これは色々とシャレになっていない。おそらくこの場にいる人物の中で最も良心的だと思われる第二王女に助けを求めるように、顔をそちらへ向ける。

「とてもお似合いですわ。流石はお姉様の見込んだお方」

思わずお礼を言ってしまうようになるほど素直な感想が飛んできた。助け舟は期待できそうにない。

諸悪の根源である第一王女、シャンテもエルナの見事なドレスア

ツプに、満足げに頷いていた。

事の発端は先日、ディガンマ事件が解決した後の帰り道だった。

『妹の影武者になつてくれ』

シャンテが何を言っているのかわからなかった。その場で王女の影武者が務まるのは千香だけだと思っていたのだが、シャンテはしっかりとエルナの目を見ていた。

事情の説明はドレッドノートに戻ってから行われ、何故かミーティアがノリノリで承諾。第二区画、第四区画の様子見も続行という事で、特にギルドや連邦騎士団の立場からの異論も無く、トントン拍子でここまで連れて来られてしまった。

それにしても、ドレス姿が様になりすぎていて嫌になる。今すぐここから逃げ出したい気持ちに駆られるが、かかとの高い、足の痛くなるような窮屈な靴のせいでそれも叶わない。

確かに、第二王女と自分はそれなりに似ていると思う。背は低いし髪の長さだって近い。声も高いから、誰も何も言わなければバレーにパーティをやり過ごすこともできるだろう。

けれど、何かが違う。何か納得してしまつてはいけな部分があるような気がして、エルナはもう一つ嘆息をもらした。

端から端まで見渡せないほど広大な大広間には、色とりどりのドレスやスーツで着飾った民衆が集まっていた。ディガンマ事件解決の正式な告知と、第二王女の回復祝いをかねた大規模なパーティだ。会場は三区王宮の大広間。高い天井からつるされた巨大シャンデリアによって散乱する橙の光が、広い空間を不均一に照らす。

正面入り口に近い後方にはいくつもの丸テーブルの上に豪華な料理とワインが並べられ、それを囲んで談笑する人々で賑わっている。前方、広間の奥へ行けば行くほどテーブルの数は少なくなっている。見通しを良くするためだろう。

最奥には王族のための席が用意されているが、王は冒頭のあいさつを終えると早々に引っ込んでしまった。ディガンマ事件の実行犯であったとは言え、有能な大臣を失ったショックが大きいのだろう。グライヴ・イルアンはいつもとは違う黒いスーツ姿で、その会場のやや奥、右端の出入り口に立っていた。と言っても彼はパーティの参加者ではない。彼がここにいるのは、このパーティの主催者から与えられた特別な任務の最中だからだ。

隣には同じ任務についている幼馴染がいる。彼女もいつもの胸当てなどはしておらず、グライヴと同じ黒いスーツを着ている。ただ、グライヴの剣と違って彼女が背負っている大槌はこの会場では目立つのだが。

彼らとちょうど反対側には、ディガンマ事件の任務で同行した青年と、もう一人別の少女の姿が見える。青年は確か杖を使用していたはずだが、今はただの長い棒になっていた。何か事情があるのだろうか、任務以降謹慎していたグライヴにとっては知る由も無い。視線を幼馴染に戻すと、彼女はホールの最奥のほうを見て恍惚としていた。王女殿下がようやくお出ましになったのだ。

第一王女もこういった公的な場では、連邦騎士団として活動する際の白いワンピースではなく、深い蒼と白のコレットドレスを着こなしている。肘まで覆うロングタイプのドレスグローブは無垢な白さの中に青い刺繍が施されている。

青系の配色が目立つのは大海洞と王宮の友好の証として魔族側から送られたドレスが始まりだと言われているが、実際のところはよくわかっていない。学者によっては、白と青が混ざらないのは人と魔族の完全な住み分けを象徴しているのだという説を唱える者もいる。

そんな昔の話はどうでもよくなるくらいに、会場が湧いた。調査隊事件で重傷を負って以来、過激派への説得を除いて沈黙を守り続けてきた第二王女が、久々に公の場に姿を現したのである。

有力者達の間では勿論の事、民衆にも絶大な人気を誇る第二王女

だが、その保護欲をかきたてられるかわいらしさは健在だった。表情は少しぎこちないが、久しぶりのパーティーで緊張しているのだろう。

グライヴの隣ではソアが頬に手を当ててうつとりしていた。小動物を思わせる小柄で可憐な少女が気恥しげにはにかむ様は、男でなくとも魅了されるものらしい。

ほどなくして、裏方で緩やかなクラシックが鳴り始め、軽やかなピアノとそれを柔らかく包むストリングス、ウィンドブラスの音に合わせてダンスが始まった。有力者達はこぞって第二王女と踊ろうとした。

熱に浮かされたように手を取り合って、曲の緩急に合わせたステップを踏む参列者の様を傍から眺めて、グライヴはため息をついた。「いい気なもんだぜ。こっちは何時間も棒立ちだったのによ」

「文句言わないの。任務中でしょ」

ソアはそう言いながらも、ちらちらとダンスパーティーの様子を気にしている。

グライヴとソア、そして反対側の出入り口にいる男女はパーティーの会場警備を任されていた。警備とは言っても、特に何も起こらなければ棒立ちしているだけである。有事の際に素早く動けるようにしておけとは言われているが、楽しそうに踊る参列者達を見ているだけでは退屈な任務だ。

「どーせなら、俺も踊りたかったぜ」

「そんな相手いないでしょ」

気のない返事をしつつも、ハンマーを背負った少女はダンスから目が離せないでいるようだった。視線の先を追いかけると、ぎこちないながらも徐々に感覚を思い出してきたのか、滑らかな動きで踊る第二王女の姿があった。その手を取るのは、長身のすらっとした優しげな青年。優雅な佇まいから、さぞ良い家柄なのだろうと思ったら、どうも違うらしかった。

どうやって広まったのか、他の区画からやってきたギルドの人間

らしいという噂が耳に入ってくる。確かに、見覚えのない制服を着ている。

噂話の主が言うには、「旅の方とは今しか踊れませんが、他の皆さまとはこれからいつでも踊る機会が訪れますわ」という王女の氣遣いにますます惚れたのだそう。踊りながら噂話とは、器用なまねをするものだ、グライヴは感心した。

視線と視線が絡み合い、はにかむ王女に対して微笑む青年。曲のリズムが速くなって、二人のステップも加速する。足をもつれさせて転びそうになった王女を抱き止めて、青年はもう一度曲に合わせて踊り出すために優しくリードする。

ソアがため息をつく。美男美女の踊りを見ているだけでそんなに面白いのか。グライヴはなんだか面白くなくて、彼女とは別の意味でため息をついた。

「目の前にいるじゃねーか」

「えっ？ 何が？」

「踊る相手だよ」

ポカンとしているソアを見ているとなんだか妙に胸がざわついて、ついぶっきらぼうな言い方になってしまった。

しばらくソアはそうしてグライヴの言葉の真意が理解できない様子だったが、やがて

「え、わたし？ だめだめだめ！ ドレスなんか似合いっこないんだから」

と顔を赤くして首を振った。その様子が可愛くてもっとからかってやりたくなって、グライヴは真顔でソアをまっすぐ見つめた。

「ソア……」

「グライヴ……？」

不安と期待の入り混じった表情で見つめ返してくるソア。

時の流れが止まったように息苦しくて、けれどこれ以上進むのも怖いような板挟みの苦悩。

やがて、グライヴはゆっくりと口を開いて……。

「馬子にも衣装って言葉、知ってるか？」
直後、強烈なアップercutが彼のアゴをとらえた。

「付け焼刃のレッスンでこんなにうまくなるんだ……」

ホールの奥にあるカーテンの裏側から、ミーティアはダンスパーティの様子を覗き見ていた。

今、第二王女として踊っているのは影武者のエルナである。特に何の騒ぎも起きていないところを見ると、本当に誰にも気付かれていないらしかった。

念のため、ダンスの相手として事情を知っているノクスが選ばれたのだが、実際にドレスアップしたエルナを間近で見た感覚では、それ也不需要なような気がした。それほどエルナの変装が似ているというもあるし、踊りも上達している。

ペア・ダンスなんてしたこともないようなエルナが、ノクスにエスコートされる形とは言え華麗なステップを踏めるようになっているのを見ると、なんだか複雑な気持ちになった。

「ダンスなんて、踊ってるうちにうまくなるものですわ」

数えきれないほど踊ってきた王女が言うのだから間違いはないのだろう。だが、ミーティアは別に踊れるようになりたいわけではない。

エルナがなんだか楽しげにエスコートされている姿を見るとなんとなく言えない気分になるのだ。

「ぐぬぬ、なんだかエルナが取られちゃったような気分……」

しかし、ノクスは男だ。別に何かを心配しなくてはならない相手というわけではない。心配ないはずなのだが、それでも胸の奥がもやもやする。

エルナが本当に女の子になってしまふような気がして不安なのだ

ろうか。そういうわけではない。エルナが女の子になったところで、エルナに対する気持ちが変わったりはしない。これは断言できる。

そんな事を考えていると、独り言に対して、よくわからない返答が飛んできた。

「はい？ 私わたくしはここにいますけれど」

「えっ」

「えっ」

どうもかみ合っていない。

そういえばこの第二王女、ときどき奇妙な反応を見せる。エルナに関する話題の時に集中しているが、それは何故だろう。

思い当たる理由は一つだけある。それを確かめるために、半信半疑でミーティアは尋ねてみた。

「あなたのお名前は？」

「はい。私、エルナ・C・ヴァイセローゼと申します」
クロイツ

王女とエルナは、名前まで同じだった。

「ちっ、窮屈な服だ」

「我慢してください。依頼人クライアントの要望なんですから」

グライヴ達とは反対側の出入り口に、白柳兄妹は立っていた。服装は会場で目立たないような黒いスーツ。家柄上、こういった公的な場に出る正装としては羽織袴や振袖などを着る事が多いのだが、今回は依頼者であるシャンテの要望により、この服装となった。

千香も反対側にいるソアも、万が一の時に動きを制限しないためか、タイトスカートではなくズボンタイプのものをはいている。王女の権限を使ってオーダーメイドで作らせたもので、サイズはぴったりだった。

「とは言っても、窮屈なのは確かですね……」

天も千香もこういった服装やパーティ会場には慣れていない。確

かに大理石のホール、煌びやかなシャンデリアの下に二人だけ和装の人間が紛れていたなら不自然極まりないが、そんな事は千香が刀を提げている時点で言いっこなしだろう。

もつとも、警護がいる事それ自体は全く違和感なく受け入れられているようで、第三区画に住む人間のおおらかな気質がこんなところにも表れていた。王女があれなら、民衆も似たようなものらしい。「第二王女と踊ってるの、副艦長じゃないですか？」

「ああ、本当だ。あいつも護衛か」

シャンテはどうも妹に対して過保護というか、心配性らしい。天も人の事は全く言えないが。

言いながら天は、会場を見回した。なんだか奇妙な違和感がある。あるべきものが欠けている。

「妙だな」

「妙ですね」

千香も気付いているらしかった。

この会場、誰もカメラやマイクを持っていない。

大海洞任務の際にマヤが同行した事を考えると、彼女はいの一番に第二王女にインタビューしに行くはずなのだが、そもそもマヤの姿も見当たらない。

第二王女が公の場に姿を現すのは実に三年ぶりと言うから、彼女でなくてもマスメディアがこのパーティの取材に来ていないというのは実に奇妙な事だ。

大方、これもシャンテが手を回したのだろうが、このパーティには何か作為を感じる。

しばらく警戒していても何も起きる気配は無い。あまり神経質になっただけなので、警戒のレベルを下げて様子を見る事にした。

二人の間に沈黙が流れる。軽やかなピアノの旋律が何か言わなくてはいけないような気にさせて、それでも話すべき適当な話題が見つかからない。いつか話さなければならぬあの事ばかりが頭の中で

首をもたげる。

喉元まで出かかって、しかしそれは聞こえないため息になって消えるという事を何度か繰り返した。自分でもこんなに話しくいとは思わなかった。心の中に留めておいたほうが良いという気持ちと、あそこまでやったのだから話さなければならぬという気持ちとがせめぎ合う。

結局、沈黙に負けて後者の気持ちが勝った。

「千香」

「兄さん」

二人が口を開いたのは同時。出鼻を挫かれたようだがつかりする気持ちが半分。話す事を先送りにできてほっとしている気持ちが半分だった。

まっすぐな視線がぶつかって、天は鼓動が高く跳ねるのを感じた。覚悟を決めたような緊張の入り混じった表情に見つめられて、たじろいでしまう。

「兄さんからお先にどうぞ」

「い、いや、悪い。今ので話す内容忘れちゃった」

ウソだ。罰が悪くなって目を反らして、頭の後ろをかく。頭にはてなマークを浮かべて首をかしげる純粋な疑問の眼差しが痛い。

やがて、千香は小さく息をついて話し始めた。

「その……あの時の、キスは……本気、ですか？」

上目遣いの瞳の中に光が揺れる。上気した頬はそのまま手で優しく触れてかすかな熱を味わいたくなるほど魅惑的で、きゅっと結ばれた唇に心臓まで締めつけられるようだった。

もう、目を反らす事はできなかった。一つ深く息をついて、心の中にある答えを、言葉を選びながら伝える。

「悪い。もっと早くにはつきりさせておくべきだったな。俺は……」
伝えようとしたところで、会場内に悲鳴が響き渡った。千香は刀の柄に手をかけて臨戦態勢に入る。天も、新しく作った、床から腰くらいまでの長さを持つ棒状のLPを肩に担いだ。

パーティの参加者達が逃げまどう波をかきわけて、開けた場所に出る。左右の入り口からは遠い、正面入り口の方に黒い魔獣が三体いずれも低級のヘルハウンドだ。

鯉口を切る音の後、光の線が奔って三匹の狂犬はその全てが肉体を両断され、その場に落ちて溶ける。しかし、突然の襲撃はこの程度では終わらなかった。

「第二陣来るぞ！」

天が叫んだ直後に響く金属音。彼は長い棒で振り下ろされた剣を受け止めていた。

剣の主は、鎧のように硬いうろこを持ち、背の高い大人ほどの体長を持つ二足歩行のトカゲ戦士——リザードマン。左手に鉋のような刃の広い剣を持ち、右手には盾まで持っている。

盾を蹴飛ばしてその反動で後退、天はリザードマンとの距離を取った。眼前の敵への警戒を維持しつつ、周囲の状況を把握しようと視線を動かす。

人工の召喚核を操り、この場に魔獣を呼び出した犯人が正面入り口のと真ん前に立っていた。黒いローブに身を包み、フードで顔を隠した臆病者だ。そいつを止めなければ、魔獣は倒しても倒しても湧いてくる。だが、

「ああ、クソ！ 空気読めってんだよ！」

もう一度金属が激突して、天は足止めを食らった。大事な話に割り込んできた相手にガンを飛ばしながらも、とりあえずは目の前のトカゲ戦士を潰す事を優先。刃を横へ受け流し、素早い足捌きで背後へ回る。

長い棒の先端から少し離れた場所を掴んで引き抜く。仕込み杖の要領で隠された刃が現れ、振り向いたリザードマンの首を一刀の下に斬り捨てる。

鞘の部分で次のリザードマンの一撃を弾いて、更に首を狙って右手の刃で一閃。ここまでやってもまだわらわらと湧いてくる。千香も次々と襲いかかって来るリザードマンを斬り伏せるだけで精一杯

だ。

多勢に無勢になるかと思ったところで、床が大きく揺れて、立っていられずに天と千香は膝をついた。勿論、強烈な揺れのせいで立ってられないのはリザードマン達も同じ。

揺れが収まる前に、リザードマン達の頭上から紫色の光の弾が現れる。次の強烈な揺れと同時に、その光からジグザグに進む雷がリザードマン達を貫き、焼いた。

「さあ、観念しなさい」

打ち下ろした大槌を担ぎ直して、その雷の魔法の主が犯人を威圧する。ソアはどうやらディガンマ事件が解決した事で魔術を取り戻したらしい。

その威圧に耐えきれず、犯人は正面入り口のほうへと逃げ出そうとする。

だが、彼は空の下に出る前に全身から地面へとダイブする事になった。

「足元には気を付けたほうがいいよ」

ブレスレット型のLPを剣に変形させ、犯人の顔の真横に突き立てて言ったノクスの言葉で、犯人は完全に降伏。外から駆け付けた王宮騎士団によって連行された。

しかし、事件が終わったわけではなかった。参列者が全て逃げ出してがらんとしたホールを歩きながら、シャンテが一つ息をついた。「ふむ、やられてしまったな」

落ち着いたシャンテの態度が奇妙だったが、次の彼女の一言でその場にいた全員が凍りついた。

「第二王女がさらわれた」

「クソ、意外と重かったな……」

そう言われて、ようやくエルナは地面に足を付ける事ができた。

なんだかよくわからないうちに目隠しをされて後ろ手に縛られ、王宮からどこか別の場所へ連れて来られたらしい。

目隠しが解かれ、目の前には見覚えのある転移陣。海辺の洞窟の最深部、大海洞の入り口だ。

「へへ、お姫様よ。命が惜しくなかったらそこの転移陣を起動してもらおうか」

どうも、反魔族の過激派グループにさらわれてきたらしい。シャンテが任務前に言っていた事が正しいとすれば、彼らが大臣にディガンマ・コピーを作るための技術を提供した集団という事だろう。

ディガンマ事件は一応解決という形で表側に公表してはいるが、大臣の遺品からはディガンマ・コピーを作り出すだけの機材が見つからなかった。大臣の日記にそれとなく記されていた過激派グループの連中が、パーティで気の緩んだ王宮に対して襲撃をかけてくる事まで見越しての影武者である。

エルナに短刀を突き付けて大海洞への転移陣の前に立たせる男は、茶色のスーツを着た大男だった。スキンヘッドでいかつい顔をしていて、腕も足もがっしりと太い。

もつとも、戦いに関しては素人同然のようだが。

「いッ！ てめえ、何しやがっ……」

短刀を持つ手首を軽くひねってやると、簡単に解放してくれた。

男が落とした短刀を蹴飛ばして、その手首を掴んだまま、今度はエルナ自らが懐に潜り込んで逆の手で襟首をつかむ。足捌きと体重を移動して腰に乗せるように持ち上げ、そのまま背中から地面へと叩き付けた。

護身程度の体術だが、硬い岩の地面に背中を打ち付けた男はその場で海老反りになりながら悶え苦しんでいる。見た目に反してこの男、拍子抜けするほど、弱い。

「情けねえ！ 小娘一人に何手こずってやがる！」

二人目が来た。白いスーツに葉巻をくわえた、これまた大男。彼がグループの元締めらしく、その後ろからはわらわらと子分達が集

まってきている。全員が何かしらの武器を持っていて、流石に素手で、しかも動きにくいドレス姿でこの集団と渡り合うには危険さを感じさせる。

背筋を冷や汗が伝う。個々の力は強くないだろうが、取り囲まれてしまえば勝ち目はない。親分とその取り巻きが、動けずにいるエルナに対して金歯を見せながら下卑た笑いを浮かべてくる。エルナは一步後ずさるうとして、先ほど倒した男につまづいて尻餅をついてしまった。

抵抗を封じるためか、連中の親玉が銃を構える。一步ずつ、動けないエルナに対して距離を詰めてくる。親玉が大きな口でしゃがれた声を出す前に、子分達の後方から妙な音が聞こえた。

「あ？」

だんだんと、近づいてくる。短い呻きと、何かが倒れる鈍い音。断続的に続くそれがすぐ近くにまで迫って、

「お、親分、おたすけヒッ」

最後の子分が血を吹き出しながら白目を剥いて倒れ、駆け付けたスーツ姿の少年は剣を青眼に構えて叫んだ。

「殿下、ご無事ですか！」

シャンテが言っていた、すぐに応援を寄越すというのはこの事だったのだろう。大海洞の任務でも同行した赤髪の少年は、今のエルナにとって頼もしい事この上なかった。

元締め風の男が忌々しそうに舌打ちして、しかし、すぐに鼻で笑った。

「小僧一人が粹がるな」

「あぐっ」

助けが来た事で、エルナは油断してしまった。先ほど倒したはずの男が起き上がり、エルナの首を絞めてくる。身動きが取れない。

「剣を捨てろ。ほら、早くしないと王女に傷がついてしまうぞ？」

グライヴは剣を捨てなかった。男の持っていた銃を素早く剣で叩き落とし、首元に切っ先を突き付ける。

「グ、貴様……！　おい、何してやが……！」

言い終わる前に、首から上だけで後ろを向いた元締めが引きつった。加えていた葉巻が足元に落ちた。エルナが解放され、その後ろに茶色スーツの大男がノビていたからだ。

エルナは絞められて痛い首をさすりながらせき込んだ。

「何、心配するな。肩をはずしてやっただけだ」

後ろから降ってきた声は落ち着き払った低いものだった。

「ククツ、なるほど、シャンテもなかなか面白い事を考えるじゃないか」

見上げると、深い蒼のローブを身にまとった長い髪の女性がエルナを見て笑いをこらえていた。

過激派グループは後から来た応援に引き渡され、連行された。それを確認して、グライヴがエルナに駆け寄り、跪く。

「殿下、お怪我はありませんか」

尻餅をついた形のエルナは、覗き込んでくるグライヴに対して、苦笑いするしかなかった。

「あ、あはは……やあ」

「……あれ？　あれ？　お前、あれ？」

第二王女だと思っていた相手の正体が意外すぎたのか、グライヴは混乱しているようだった。

とつとつこらえきれなくなって、傍にいたリヴァイアサンが大声で笑い始めた。

第三区画で起きた一連の事件は、今度こそ解決を迎えた。

エルナの女装は事件の関係者全員に知れ渡ってしまった。

それに対する反応は様々だった。千香は要らぬ心配をさせられたとため息をついたし、天は腹を抱えて笑ってくれた。

ソアは王女を見分けられなかった事に対してショックを受け、そ

の場にいなかった玲菜やクレレは女装姿が見てみたいと言ってきた。予め彼の女装を知っていたのはミーティア、ノクス、シャンテ、そして第二王女エルナの四人だけである。

良く似合っていたからとドレスをプレゼントされてしまった。エルナは丁重にお断りしようとしたのだが、ギルドの代表として玲菜が受け取ってしまったのだ。

「あんなの、絶対に仕事以外じゃ着ませんからね！」

「あら、お気に召されませんか？」

エルナのセリフを聞いた第二王女は本気で残念そうにしていた。三年も公の場に出なかったからか、第二王女はどうも浮世離れたところがある。

「い、いえ。素敵なおドレスだと、思います……」

「はっはっは！ 泣いて喜んでくれるとは、贈り甲斐があるというものだ」

エルナの複雑すぎる気持ちを知ってか知らずか、シャンテは豪快に笑っていた。

ともあれ、シャンテが企画した、これを機に第三区画の膿を出してしまうという作戦はおおむね計画通りに進み、後の処理は王宮騎士団と議会でなんとかするという事になったらしい。

ドレッドノートは連邦騎士団からの次の依頼が決まったため、第三区画の王宮を後にした。シャンテは父である王と妹の強い要請により——元々彼女がそうするつもりでもあったようだが——、三区の王宮に残る事になった。

次の依頼の説明を受けるため、ブリッジに向かうエルナとミーティア。ミーティアは何だかご機嫌斜めらしく、話しかけても上の空で時折ため息をついていた。

「どうしたの？ ミーティア。変な物拾って食べた？」

「エルナがモテモテだった……」

全くわけのわからない答えが返ってきた。彼女の言動が常識的理解の斜め上を全速力で突っ走っているのはいつもの事だが。

「ドレス着てカッコイイ人と踊って、さらわれて騎士様に助けられてた……。これじゃあ完全にお姫様じゃない！」

「い、いや、そんなこと言われても……」

確かにそういう風に見れば、おとぎ話のお姫様そのものだった。おとり捜査とは言え、めったに経験できる事ではない。

経験したからと言って嬉しい事も無いのだが。

「ずるい！ 私にもお姫様抱っこさせて！」

「はいはい。あとでね」

いい加減にわけのわからない話は聞き流す事にしたのだが、この安請け合いが後で大変な結果を生む事になってしまうのだった。

エルナは早速、仕事以外では絶対に着ないという誓いを破らされてしまった。

20：第二章覚書

第二章覚書

■人物

（：第一章から継続して登場　：第二章からの登場）

エルレナード・フィンブルツール（エルナ）　十六歳

ギルド『ドレッドノート』の研修生。剣を託してくれたLEONARDという人物を捜している。

研修の早期終了によって暇を持て余していた彼は、毎日の鍛錬で基礎体力を増強していた。

新しい任務のために呼び戻され、再び研修生となった。

女の子に間違えられる事が多い。ガリユーに間違えられ、グライヴには女の子っぽいと言われている。

また、第三区画の第二王女に似ている事から、女装して影武者になった。

王女に変装した姿はあまりに可愛らしかったため、誰もエルナだと気付かなかった。

ミーティア・エンシスハイム　十六歳

ギルド『ドレッドノート』の研修生。

インテリジェンス・ウェポン「ステイグマ」の持ち主であり、その呪いによって魔物と化してしまうところだったが、エルナに助けられた。

ドラゴンと生身で張り合える魔法少女として、その筋の人間にとって一躍有名人になってしまい、多くのギルドにその力を狙われる身となる。

研修の早期終了によって暇になっていた彼女は、エルナの鍛錬に付き合うようになっていた。

が、父によつて軟禁されて外出を禁じられてしまう。

そんな父の過保護さに反発するが、ソアとの会話でそれが父の優しさ故であつたと気付く。

根はとても寂しがり屋。

白柳^{しろやなぎ} 天^{てん} 二十歳

ギルド『ドレッドノート』の魔導技師。

バーレイグを大した傷もなく撃退する人物として外部のギルドに目をつけられる。

が、実際にはヘルテイトとの戦いで腕の筋肉が大幅に損傷しており、治療のために入院していた。

夜眠る事を恐れていた。

興味の対象外の事に関しては無頓着。

何かを作つたり組み立てたりする事が大好き。

祖父に反発して剣を振るう機械人形ディガンマを作り出した。

ディガンマを破壊するために一人で大海洞へ向かうが、一度目は千香に敗れて連れ戻された。

二度目はディガンマを破壊しきれず、かけつけたノクス達によつて仲間を信じる事を知つた。

使つていた杖型のLPがディガンマ戦で壊れてしまったため、新しい武器を作つた。

白柳 千香^{ちか} 十七歳

ギルド『ドレッドノート』の戦闘員の一人。天の妹。

一人で暴走する天を止めるべく、一対一で戦い、勝利した。

兄を斬つた事に対してショックを受けていたが、ミーティアに支えられて立ち直つた。

ノクス・アージエンタイム 二十二歳

ギルド『ドレッドノート』の副艦長。

ドラゴンとの戦いで何本か肋骨がやられてしまっていたが、一週間かけて元通りになった。

マヤを雇った事で財布にも打撃を受けており、質の悪いコーヒーしか飲めない状態を憂えていた。

クレレ・ヴェリタス 十四歳

ギルド『ドレッドノート』の最年少乗組員。艦長補佐。体調を崩しがちだった。

本川 玲菜 二十五歳？

ギルド『ドレッドノート』の艦長。

本名は「レイナ・バーレイグ」

ドレッドノートを家族同然に思っており、ミーティアを強引に連れ出さなければならぬ事に心を痛めていた。

フォルラムル・サン・エーテリ

連邦騎士団 銀雷のフォルラムル。

第四区画に残り、ギルド『マジエスティック』を監視している。

龍見 マヤ 二十四歳？

スペースタイムズの記者。大海洞の王女護衛任務に同行した。リヴァイアサンに「竜族の娘」と呼ばれている。

ルーク・アージエンタイム

ノクスの姉。足が不自由であり、車椅子で生活している。

ノクスと同じく長身で、髪は栗色のショートボブ。目は細く常に笑っているように見える。

シャルフランテ・ヴァイセローゼ（シャント）

連邦騎士団 宣託のシャント。

後ろを結い上げた長い金髪と澄んだ空のような水色の瞳が印象的な、少女の面影を残した女性。

第三区画の王女でもある。

ドレッドノートを第一区画へ連行するためにやってきた三人のうちの一。

おらかな性格。お茶目な悪戯好きであり、リヴァイアサンとは気が合う。

エルナの女装を企画したのも彼女。

アエル

連邦騎士団 ドールマスター 人形師アエル。

白い包帯をぐるぐる巻きにして両目を隠した男。しっかりと前は見えているらしい。

精悍な顔立ちの若い男。

燐の保護者的存在。暴れる燐も彼が首を掴むだけでおとなしくなる。

ドレッドノートを第一区画へ連行するためにやってきた三人のうちの一。

シャンテ曰く「仕事はできるが愛想が無い」

燐^{りん}

連邦騎士団 苦輪の燐。

スクレラと虹彩の境目がわからないほどに、不気味なまでに白い瞳を持つ少女。

危険人物。ドレッドノートにいち早く遊び^{あそび}に来た際には天を襲撃し、その圧倒的な魔力を見せつけた。

ドレッドノートを第一区画へ連行するためにやってきた三人のうちの一。

リック 十六歳

魔法学校の生徒であり、エルナの友人。

眼鏡をかけている。銀髪。

ギルド『マジエスティック』の研修生として第一区画へ行っていたが、マジエスティックの仕事の関係で第四区画へ戻ってきた。

何かに強く興味を持った時、あるいはそれについて言及する時、悪戯っぽい笑みを浮かべながら眼鏡を上げ直す癖がある。

真面目そうに見えて、意外とゴシップネタによく食い付く。

学校では「魔法の痕跡」の研究に力を入れていた。戦闘自体は得意ではない。

ガリユー

ギルド『マジエスティック』の艦長。玲菜の旧友。

二本の刀を携えた背の高い若い男で、暗い茶色の長い髪を頭の後ろで結っている。

服装は千香が普段来ているのと似た和装だが、下はネズミ色のズボンタイプをはいて、上はえんじ色の長い外套を羽織っている。

鷹のように鋭い目を持つ。

常に余裕を絶やさないポーカーフェイスで、しかしそれでいて気障なセリフを呼吸するように使いこなす。

それが不快にならないだけのルックスもあるし、言い方やタイミングなども完璧に心得ている。

第四区画に到着してわずか二日目で、役所の女性を口説き落とし、ステイグマ事件でヘルテイトが使用していたアジトへの立ち入り許可を得た。

タゲン

ギルド『マジエスティック』の戦闘員。単独での任務を主にこなす一匹狼。

ガリユーと同じくらい背の高い三白眼の男。

深く刻み込まれた皺と、露出された逞しい筋肉にいくつも見当た

る刀傷は彼が歴戦の勇士である事を示している。

短刀を使用する。フォルラムルが放つ銀雷の一撃を短刀の先端で受け止める程の実力の持ち主。

めったに喋らないため、彼のセリフは第二章では一つだけ。

喋った事をリックに驚かれている。

スタイリッシュジョージ

天が作った自立型お手伝いロボット。主に技術的な作業をサポートしてくれる。

やっぱり特に深い意味無く付けられた名前らしい。

ソア・ステインソール

第三区画の騎士見習い。大海洞への王女護衛任務に同行した。

赤髪。

三年前の調査隊事件に巻き込まれ、父と記憶と魔力を失ったが、青い草原を見て記憶を取り戻す。

ディガンマ・コピーにトドメを刺した。

大槌を使う。魔力もディガンマ事件の解決と共に取り戻したらしく、王宮のダンスパーティ襲撃事件の際には強力な雷の魔法でリザードマン達を一掃している。

グライヴ・イルアン

第三区画の騎士見習い。大海洞への王女護衛任務に同行した。

赤髪。ソアの幼馴染。彼が騎士になろうとしたきっかけはソアとの勝負に負けた事。

ソアの記憶を取り戻すために一人でディガンマに挑み、傷を負わせるがソアをかばって負傷。記憶を失った。

しかし、ソア達がディガンマ・コピーを倒した事で記憶が戻った。剣を使う。

リヴァイアサン（レヴィ）

深い蒼のウロコを持つ大蛇。大海洞に住む、魔族達の長。

人の姿は、深い蒼のローブを身にまとった、長い髪の女性。こちらが普段の姿らしい。

お茶目であり、人を驚かせて楽しむ事が大好き。

王家の人間のおおらかさに惹かれ、古の時代に彼らと盟約を結んだ。

今でも王家の人間とは良好な関係を築いている。特にシャンテとは気が合う。

大臣

第三区画の大臣。

ディガンマを召喚してコピーを作り、王宮議会が反魔族に傾くよう仕向けていた。

ディガンマによって殺害された。

エルナ・C・ヴァイセローゼ クロイツ

第三区画の第二王女。シャンテの腹違いの妹。調査隊惨殺事件の生き残りの一人。

王宮を飛び出した姉と違い、王宮内での支持は篤い。

細かい事を気にしないおおらかさは王家の血筋によるものか。天然。

■用語

□魔法の痕跡

どのような魔法が行使されたのか、という痕跡はその空間に存在する魔力素の変質を分析する事で可能となる。

□第二区画

太陽系を含む第一区画の次に人が訪れた区画。

宗教抗争が起きており、一二、二三隔壁が封鎖されて実質的に隔離されていた。

□第三区画

四つの連邦領区画の中では比較的新しい方だが、それでも気の遠くなるような歴史を持っている。

この地に移住した人々が優れた指導者を求めたために、古い時代から王制を敷くこととなった。

王宮の古風な文化が栄えている。

人の住む居住区と、魔族の住む大海洞はほぼ完全に住み分けがなされており、人間が行き来するためには王家の血筋が特別な許可が必要。

人と魔族は古の盟約によって互いに不干渉を貫く形で共存している。

ディガンマ事件によって王宮と魔族の間には緊張状態が続いていた。

□大海洞

第三区画に存在する、魔族達の楽園。青い岩壁のトンネルになっている。

□魔族

人と異なる生物であり、その姿かたちは様々だが、総じて強い魔力を持つ。

一般的に言われる魔獣と違い、優れた知性を持っており、人と話す事もできる。

種族毎に分類が細分化される。

リヴァイアサンほどの力の持ち主でなければ人間を恐れて出てこない。

□ 調査隊惨殺事件

調査隊事件とも。三年前に大海洞へ赴いた調査隊が惨殺された事件。

ほとんど全滅してしまい、生き残ったのは第二王女とソアのみだった。

王宮と魔族の間の交流が途絶える原因になってしまった。

□ 触媒

大海洞の聖水。治癒魔法の効果を増強する。

□ デイガンマ

二刀流の首なし機械人形。天が作り出した凶悪な兵器。

白柳兄妹の祖父の片目を奪い、天の魔力を奪った。

第三区画の大臣によって召喚され、コピーを生成された。

大臣を殺害したが、ドレッドノートのメンバーによって破壊された。

□ リザードマン

鎧のように硬いうろこを持ち、背の高い大人ほどの体長を持つ二足歩行のトカゲの戦士。

左手に鉈のような刃の広い剣を持ち、右手には盾まで持っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0199i/>

ドレッドノートへようこそ

2011年3月25日14時10分発行